
Another Masked Rider DECADE

大和シュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Another Masked Rider DECADE

【Nコード】

N7245T

【作者名】

大和シュウ

【あらすじ】

数多く存在するパラレルワールド、そして世界の破壊者デイケイドもパラレルワールドがある数だけ存在していた……この物語はデイケイドの力を手に入れた青年が大ショッカーと戦っていく物語である……、

誤字脱字が多かったり、文章力がない小説ですがよろしくお願

します。

始まり（前書き）

はじめまして大和シュウです、今更ながらディケイドものを書いてみました。楽しんでくれるとうれしいです。

始まり

荒野の中を歩いている一人の青年がいた、その青年は茶色い布をかぶり、マントのようにして吹き付けてくる風や砂ほこりを防ぎながら歩いていった。

しばらく進んでいると、先ほどまで茶色い岩が支配していた大地が消え、青年の目の前には大きな砂の海が広がった。

「……砂漠か……」

青年はつぶやくように言うと、着ている布についてあるフードを被ると砂漠に足を踏み入れた、その時！！

「っ！」

突然、青年の周りを囲むように灰色のオーロラが出現、それと同時そのオーロラからマントを羽織った9人の男や女が現れた。

「どこへ行く気だ、タイプLよ。」

「さあな。」

青年は右側にいた体がガツシリとした体形の男に対して素気なく言った。

「困るんだよねえ、一人だけに勝手な行動取られたら……」

「その通りだ、我々の秩序が乱れる……」

青年の正面にいた一番、背が高く細い子供のような男が言ったあと、その隣にいた、他とは違う白いマントを羽織った男が言った。

「俺には関係ないね……………」

「あなたには関係なくても……………」

「私たちには関係ある!!」

青年の後ろにいた女性は怒ったような口調で青年に一本の刀を向けた。

「よせ二人とも、私たちの目的は彼を捕獲することであって倒すことではない!!」

青年に刀を向けた二人を窘めるように青年の左隣にいた、男が言った。

「あんたは黙りなっ!!首領を裏切ったこの坊やは倒す!!」

「俺も同じだ、こいつを生かせばわれらの最大の敵になるやもしれん。」

「……………賛成だね。」

「仕方ないな……………」

「悪く思っなよ……………」

「首領を裏切った、お前の責任だ……。」

9人の男女は口々に言った。

「ごちゃごちゃうるせえなあ。さつさとかかってこいよ……。」

青年は欠伸をしながらつまらなそうに言った、それと同時にその場にいた全員の目が血走り、先ほど戦うことを止めた男の肩がプルプルと震えだし、

「なんだその態度は……われらを愚弄する気があっ!!小童があっ!!」

男が叫ぶと男の体が変わっていき、銀色の体に青い瞳、頭には王冠のようなものがついた、『仮面ライダーサガ』に変身した、それを歯切れに、他の8人も一斉に変身した!!

COMPLETE

OPEN UP

CHANGE BEETLE

NEGATIVE FORM

HIJACK FORM

「死ねえっ!裏切り者お!!」

青年に二番目に話しかけた男が変身した、体が金色のライダーが叫ぶとほかの全員が一斉に青年に向かって襲いかかった。

「やれやれ、破壊者の力を使いますか……………」

青年は軽く息を吐くと、懐から白くて四角い箱を取り出し、それを腰に押し当てた！すると、その箱からベルトのようなものが伸び青年の腰に巻きつき、青年はベルトに付いているケースのようなものを開けると、そこからカードを一枚取り出し、

「変身っ！！」

青年はそう叫ぶと、ベルトにそのカードを装填した！！

K A M E N R I D E D E C A D E

音声が響くと同時に青年の体の周りをまばゆい光が包み、青年を攻撃しようとしていた9人の戦士は光に弾き飛ばされ、地面を転がった。

「ぐう……………」

「なんて力だ……………」

「デイケイドおそるべし……………」

青年が変身したマゼンタ色に輝く戦士を見ながら、戦士たちは口々に言った。

「奴を倒すには一斉攻撃を仕掛けるしかない！！」

サガがそういうと全員、デイケイドを囲むように陣をとった、そして

「死ねえっ!!!」

FINAL VENT

EXCEED CHARGE

MIGHTY

RIDER BEAT

FULL CHARGE

FULL CHARGE

『ウエイク・アップ』

全員、同時に必殺技を放った!!

黒いカブトムシの怪人は飛び上がって右足を突き出し、その隣にいた体全身が緑色のライダー『アナザーアギト』も同時に飛び上がって右足を突き出し、紫色でコブラの姿をしたライダー『仮面ライダー王蛇』も飛び上がってバタ足をするようなけりをして、体が黒と白の鎧に包まれたライダー『仮面ライダーデルタ』も飛び上がると両足を突き出し、金色のライダー『仮面ライダーグレイブ』は飛び上がって光り輝く剣を振り下ろし、体が銅色に輝くカブトムシのようなライダー『仮面ライダーケタロス』もグレイブ同様飛び上がって、手に握るクナイのような武器を振り下ろし、紫色の鎧を着た『ネガ電王』は飛び上がると紫色に発光する右足を突き出し、その隣にいた黒いマスクをかぶった『仮面ライダー幽汽』は手に持った剣をケタロスやグレイブ同様縦に振り下ろし、サガは地面にいる状態で手に握る剣を突き出した!!

仮面ライダーと怪人の必殺技が一気にディケイドめがけて襲いかかった!

「……………これを使うか……………」

ディケイドはそうつぶやくと、あせりもせず、腰についてある長方形型の本のようなツール、『ライドブッカー』からカードを1枚引き抜くと、腰についてあるベルト、ディケイドライバーに装填した！！

ATTACK RIDE ILLUSION

一枚目のカードの効果でディケイドの体が三人に分身、さらに分身したディケイドは自分のライドブッカーからカードを一枚引き抜いてディケイドライバーに装填した。

FINAL ATTACK RIDE DE DE DECA DE

3人のディケイドは、ライドブッカーをブツカモードから銃のような形の、ガンモードに変形させ、9人の戦士に銃口を向けると引き金を引き、マゼンタ色に輝く極太のビーム砲を放った！！ディケイドの砲撃と9人の戦士の攻撃が同時にぶつかり、強烈な光を放ち、砂漠の砂を巻き上げながら爆発した！！

煙や砂が徐々に晴れると、そこには誰も居らず、闘っていたと思われる場所の砂が大きくえぐれてクレーターができていただけであった。

始まり（後書き）

これから剣の物語が始まります、今更デイケイドかと言うと、ライダーで冒険ものを書きたかったからです、で、冒険と言うとデイケイドかクウガかな？と思ったりして、主人公をクウガその相棒をデイケイドでもいいかな、なんて考えてたけど、それだといまいち面白くないし、主人公がクウガで世界をめぐるのは違和感があったのでデイケイドにしました。

さて、わたくし大和シユウのことを『知っている』と言う方はこれからもよろしくお願いします。『知らないよ、初めて』と言う方はこれからよろしくお願いします。別小説も書いてるのでよかったです。ちらのほうも読んでみてください。

タイトルは『仮面ライダーW&ブレイド&フィアルコン 光を与えられた戦士』です！よろしくお願いします。

第一話 『世界へ』（前書き）

この作品は連続投稿します。

第一話 『世界へ』

どこかの空間で、先ほど9人の戦士と戦った青年が仰向けに倒れていた。

「つ……………」

青年は目を覚ました…………青年が目を覚ますとそこは青や黄色に輝くオーロラに包まれている空間だった。

「目覚めましたか、宮本剣……………」

どこからか声が聞こえ、剣と呼ばれた青年は声がしたほうを見た。するとそこには金色の鎧に赤いマントをつけた仮面ライダー、仮面ライダーキバエンペラーフォームが立っていた。

「おまえは？」

剣はキバに尋ねた、それと同時に変身が解除された。

「僕の名前は紅渡。仮面ライダーキバです。」

「仮面ライダーキバ…………紅渡…………ここはどこだ？」

剣は周囲を見渡しながら渡に尋ねた。

「ここは世界と世界の間にある空間です。」

「世界の間にある空間……………」

「ええ、あなたも知っているとおり、この世には様々な世界があります。ここはそのいくつもある世界を管理する空間です。」

渡はそういつと手をかざした、すると、オーロラが突然消えて黒い空間が広がる、そして、その空間を囲むように幾つもの地球が現れた。

「こんなにも世界が……」

剣は多くの地球を見ながら渡に尋ねた。

「これはいくつもある世界のうちの半分もありません。実はこの10の世界で異常が起こっているんです。」

渡はそう言うといくつか浮いていた地球のうち10個を剣の前に集めた。

「この世界に異常が？」

「はい、あなたは大シヨッカーをご存じですね。」

「当たり前だ、俺はやつらに俺の世界を……そして俺もやつらに体を……」

剣は悲しそうな表情をして俯くと拳を握り締めて、悔しそうに言った。

「そしてあなたは彼らのアジトでディケイドのベルトを奪い取った……」

「ああ、間違いない……で、あんたは大シヨツカーの9人の戦士との戦闘中に俺を助けてくれた……。」

「ええ、そうです。あなたはご自分の力で彼らを退かせることはできましたが、ダメージの高さからあなたはその場に倒れてしまっていたんです。そこを僕が……。」

「そうだったのか……で、この10個の世界で起きている異常というのは？」

「はい、今ここに写っている世界を大シヨツカーが破壊しようとしています……あなたにはこの破壊の進行を止めていただきたいのです……。」

「大体分かった。で？まずはどの世界に行ったらいいんだ？」

「まずは……この世界に……。」

渡はそう言うと、剣に向かってほしい世界を指そうとしたその時
!!

「ぐおおおおおつ!!」

突然、剣の背後にあった世界からバッファローの姿をした怪人、
バッファロー怪人が飛び出してきた!!

「なんでこの空間に怪人があ!!」

剣は衝突される前に、バッファロー怪人の顔面めがけてひじ打ち
を喰らわした!!

「大シヨツカーの誰かが世界移動させるために送り込んだのでしよう……」

「なるほど……んじゃあ、倒すか!」

剣はそういうと、バッファロー怪人の頭について角を左腕でもって前方に放り投げた。

「渡は手を出すなよ、俺一人で倒す!」

剣はそう言うと、腰に既に付けられている、ディケイドライバーを開いて、ライドブツカーからカードを引き抜き、ディケイドドライバーに装填した!!

K A M E N R I D E D E C A D E

剣はディケイドに変身した。

「さあて、倒すか。」

ディケイドはそう言うと手をパンパンとたたきながらライドブツカーをガンモードに変形させ、銃口をバッファロー怪人に向け引き金を引いた!

「ぐおっ!」

ライドブツカーから銃弾が飛び出し、バッファロー怪人に命中、バッファロー怪人の頭から火花が飛び散り、バッファロー怪人を後退させた。

「お次はこれだな。」

デイケイドはライドツブカーから銃弾を撃ちながら、ライドブツカーを開けてカードを取り出すと、デイケイドライバーに装填した。

ATTACK RIDE BLAST

ライドツブカーからマゼンタ色の銃弾が何発も連続で放たれバツファロー怪人を吹っ飛ばした。

「とどめだ！」

デイケイドはそういうとライドツブカーをガンモードから元のブツカーモードに変形させ、腰につけると、カードを一枚引き抜いて、そのカードをデイケイドライバーに装填した。

FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DE
ECADE

「たあっ!!！」

デイケイドの前にデイケイドの顔を模した金色のマークを中央に描かれたカードが複数枚現れ、デイケイドが飛び上がるとそのカードは斜めになり、バツファロー怪人までの道となる、そして

「たあっ!!！」

デイケイドは左足を突き出して、現れたカードをくぐっていき、バツファロー怪人めがけて、必殺技の『デイメンション・キック』

を放った！！

「がはっ！！」

バッファロー怪人は後方に吹っ飛ぶと、大爆発して絶命した。

「終わったぜ。」

デイケイドは変身を解いて渡に言った。

「で、どの世界に行けばいいんだ？」

剣は渡に尋ねた。

「まずはこの世界に行ってください。この世界は世界を守る強いライダーが目覚めていません、だからいちばん、大シヨツカーに破壊される危険性の高い世界です。」

「わかった。」

渡は剣の前にひとつの地球を近づけた。

「世界に入ったら、灰色のオーロラが現れたり、ビルや家が粒子のように消えだす現象が現れるかも知れませんが、それは大シヨツカーが破壊活動に出ているという証拠です、一刻も早く世界の滅びを止めてください。」

「ああ、じゃあ、行ってくる。」

剣はそういって手を振って、自分の目の前にある地球に入った。

「お願いします、仮面ライダーディケイド。ダークディケイドがよみがえる前に世界を救ってください。」

剣が世界に入った後、渡は静かにつぶやき、自分の世界に帰って行った。

第一話 『世界へ』（後書き）

フォーゼが始まるまでに終わらせたいので、2〜3話かけたら、その度に原稿していくのでよろしくお願いします。

第二話 『ディケイドの役目』

剣は紅渡に言われたとおりの世界に入った、いや、入ったというよりはダイブしたと言ったほうが正しいかもしれないせなら

「なんで落ちてんのおお!!」

剣が世界に入るといきなり空にいて、地面に向かって落ちていたからだ……。

「なんでええええっ!!」

剣が声を出して慌てていると、どこからともなく黒い姿のカブトムシに似た仮面ライダーのような怪人が飛んできた。

「なんだあれ？」

そのカブトムシのライダーは剣を確認すると、剣に向かって手に持っていた大剣がざしてその大剣から光線を放ち剣を攻撃した!!

「っ、大シヨッカーの怪人か!!」

剣はそういつとディケイドライバーを腰につけ、

「変身っ!!」

K A M E N R I D E D E C A D E

剣は落ちながらディケイドに変身、ライドツブカーをガンモード

にして、自分に向かって飛んでくるカブトムシのライダーに銃口を向け引き金を引いた！！

「っ！」

カブトムシのライダーの腹にデイケイドの撃った弾は命中し、火花を散らした、だが効果がなく彼はそのままデイケイドに向かって接近すると大剣を振り下ろし、デイケイドの体を切り裂いた！！

「があっ！！」

デイケイドは口から血を吐き、下に向かって吹っ飛ばされた！！

「くっ、なめるなよっ！」

デイケイドはライドブッカーからカードを取り出すとデイケイドライダーに装填した！！

A T T A C K R I D E B L A S T

「くらえっ！！」

デイケイドはライドブッカーをカブトムシのライダーに向けて引き金を引いた！！ライドブッカーからはマゼンタ色の弾がいくつも撃ちだされ、カブトムシのライダーの腹に命中、火花を散らすが大はり効果はなかった。

「無駄だ！」

カブトムシのライダーはそう言ってデイケイドに一気に接近、大

剣を振り下ろそうとした、その時！！

「今だっ！！」

デイケイドは先ほどライドブツカーから抜いていたカードをデイケイドライバーに装填した！！

FINAL ATTACK
RIDE DE DE DE
ECAD E

デイケイドの前にはデイケイドの顔を模した3Dカードが現れ、デイケイドはライドブツカーを複数ある3Dカードに向けると引き金を引いた！！

ライドブツカーからはマゼンタ色に輝く太いビーム砲が打ち出され、カブトムシのライダーに命中した！！だが、カブトムシのライダーが突如姿を消した！！

「なにつ！！」

デイケイドは驚いて周囲を見渡した、すると

「はあっ！！」

カブトムシのライダーが突然デイケイドの背後から飛んできて、デイケイドめがけて右足を突き出しデイケイドの背中を蹴り飛ばした！！

「ぐはあああああっ！！！！！！」

カブトムシのライダーの蹴りが命中すると同時に爆発、デイケイドは声を上げながらそのまま地上に向かって大きく吹っ飛ばされ、地上に勢いよく叩き付けられた！！

カブトムシのライダーは、笑いながら灰色のオーロラを出現させ、この世界から消えた。

「うっ……」

剣はゆっくりと目を開け、顔を振り周囲を見渡す、どうやらベットに寝ているようだ……

「あつ、目覚めた？」

剣が起きたことに気がついたのか、剣が寝ているベットの横にいた黒髪の美しい女性がゆっくりと立ち上がると寝ている剣に近寄り、剣の額に乗っているタオルをのけると、額に手をあてた。

「うん、熱は下がったみたいだね。」

女性は笑顔で言った。

「恵……?」

剣はいま目の前にいる女性と、自分のよく知っている女性の姿が重なって名前を呟いた。

「えっ?何で私の名前を知ってるの?」

剣の目の前にいる女性、恵は目を丸くして剣に尋ねた。

「し、知ってる人に似てたから……。」

剣は起き上がりながら言った。

「ねえ、名前教えてよ、私は恵。坂本恵、君は?」

「俺は剣、宮本剣、剣^{なぐ}って書いて剣だ」

「へえ、面白い字書くんだね。そういえば、どうしてお店の前で倒れたの?」

「お店の前?」

「うん、3日くらい前かな、空で大きな音がした後、外に出たら君が傷だらけになって倒れてたの……。」

「それで俺を助けてくれたのか？」

「うん、そうだよ、だって怪我人を放っておくほど、私たち兄妹の心はせまくないわよ、で、なんで倒れてたの？」

「えつと・・・それは・・・。」

「もしかしてシヨッカーにやられちゃったの？」

「うん、実はそうなんだ、それで歩いていたら途中で気を失って・・・。」

剣は頷きながら静かに嘘をついた、まあ、嘘ではないが・・・正確には、黒い仮面ライダーに蹴り飛ばされてたまたま落ちてきたのが恵の家の前だったのだ。

「そっか、ねえ、行くあてとかあるの？」

恵は剣の顔を覗き込むようにしてみると尋ねた。

「いや、特にないけど・・・（この世界を救うまでもうしばらくここに居させてもらおう・・・）」

「じゃあさ、家に住みなよー！」

「えつ、でも・・・。」

「いいじゃん！決定ねー！」

恵はそう言つと立ち上がった。

「あつ、そつだ、これ剣君の持ち物だよね？」

恵はそう言うと剣にディケイドライバーを渡した。

「あつ、ありがとう。」

「じゃあ、早速、剣君が住む部屋とか確保しないとね!!」

恵は笑顔でそう言うと、部屋から出て行った。

「ちよつと……はあ、この世界の恵も俺の世界の恵と変わんねえな……。」

こうして剣は恵のこり押しで坂本家にお世話になることになった……。

剣が恵の家で暮らして数ヶ月後……。

恵の家は小さなバイク屋を営んでおり、剣はそこで働いていた……。

「剣くうくん。いるう」

恵がバイク屋の扉を開いて店内に入ってきた。

「お兄ちゃん、剣君は？」

恵は入口で赤いバイクを整備している男性に尋ねた。

「剣なら地下で自分のバイクを調整しているよ。」

赤いバイクを整備していた男性、隼人は、恵を見ると笑顔で言った。

「わかったありがとう。」

恵はそう言うと、店内から家の中に入って行った……。

「これでよしっ。」

剣は赤く輝くバイクを整備していた、剣が整備している車種はKAWASAKI ZX 14という機種で、パワーがあるのに、バランスがよく乗りやすいというバイクだった。

「け〜んくんっ。お疲れ様。」

恵は剣に近寄ると剣に缶コーヒーを渡した。

「おつ、サンキュー。」

剣はコーヒーを受け取った。

「ねえ、知ってた？このバイクってお兄ちゃんが乗ってたの？」

「知ってるよこのバイクはもともと隼人が乗っていた一世代前のバイクを改造したものさ。」

剣はコーヒーをそばにあつた机に置きながら言った。

「へえ〜……」

「さて、試運転でも行くかな。」

剣は手袋をはずしながら言った。

「買い物行きたいから乗せてって。」

「……仕方ないね……怪我しても大丈夫なような服に着替えてきて、俺も着替えるから。」

「はい。」

恵はそう言うのと地下室から出て行った、剣は軽く息を吐いて、地下室にあるロッカーを開いた。

「念のためこいつも持って行くか。」

剣は作業着から、黒のジーパンに赤いジャンパーを着た姿になる

と、ジャンパーの内ポケットにディケイドライダーディケイドライダーを入れた。

それから剣は、地下から外に通じる道を通ってバイクを外に出すと店の入り口にバイクを止めて隼人と話を始めた。

「剣、お前にこの店やるよ。」

「えっ、でも隼人は？」

「もともとこの店は、俺が独りで自立できるようにするまで親父から借りてた店だ、そろそろ、いい頃合いだろうからな……お前にくれてやる。」

「それは別に良いが……俺なんかでいいのか？ だいたいオヤジさんが何て言うか……。」

「これは親父の決定事項でもある、それに……。」

隼人は剣の方に腕をまわし

「おまえは俺の義弟になることがすでに決定している。」

「はあっ、ちょっと待って、っと言っことは……。」

「そう、恵と結婚しろってことだ。」

隼人はそう言って剣を解放した、その時

「何、私がどうかしたの？」

恵が隼人に話しかけた。

「いんやあゝ、なんでも無いよあゝ、ただ剣に『早く家のじゃじや馬を貰ってくれ』って言っただけ。」

隼人は笑いながら言うと、恵の肩を叩いた。

「馬鹿っ！剣君になに言ってるのよ！」

恵は顔を真っ赤にして隼人の腹をこずくと、剣の元に駆け寄った。

「じゃあね！お兄ちゃん！！！」

恵は、剣に渡されたピンク色のヘルメットをかぶると、剣の後ろにまたがって言った。

「じゃあな、行ってくるぜ、お義兄ちゃん。」

剣はヘルメットのカバーを下ろすと、隼人ではなく恵のほうを見ながら言い、バイクを走らせた……。

それからしばらく剣と恵はドライブ？デート、をし、今は町の中心部にある公園で休憩していた。

「はい、剣君、バニラアイス。」

恵はベンチに腰かけている剣に近くのある数字を英語にしたアイスクリーム店で購入したアイスを渡した。

「おっ、ありがとな。」

剣は恵からアイスを受け取った。

「ねえ、剣君。」

恵は剣の隣に腰かけながら静かに言った。

「どうした？恵。」

剣はアイスを食べるのをやめると恵を見た。

「あのさ、さっきお兄ちゃんが言っていた事って本当なの？」

恵は顔を真っ赤にして俯いて剣に尋ねた。

「よくわからん、ただ隼人は俺にあの店を継がせて自分は、オヤジさんの店を継ぐらしい……。」

「えっ、そんなのはじめて聞いたけど。」

「当たり前だ、俺も初耳だ。」

剣はそう言うとアイスを口に入れた。

「隼人や、オヤジさんたちは、俺とお前を結婚させたいみたいだがな……。」

剣はそう言ったあと、コーンをバリバリとかみだした。

「そうなんだ……。」

「最終的に決めるのはお前と俺の意志の問題だから、あの人たちは口出せないけどな……。まあ、そこはいろいろと考えていこうぜ。」

剣は恵の肩を叩くと笑顔で言った。

「さて、帰るか。」

剣はそう言うと立ち上がった。

「ちょっと待ってよ!!! 私まだ食べてないんですけど……。」

恵は、紙カップに入ったシャーベットを剣に見せながら言った。

「じゃあささっと食べ、終わったら行くぞ。」

剣はそう言っ、バイクに駆け寄った。

「もう、ジュースになってるよ……。」

恵は文句を言っ、すでにジュースになっているシャーベットを、
気に飲み干すと剣に駆け寄った、その時!!

「っ！早くこっちにこい!!」

剣は何か気がつく、恵に向っ、早く来るように言っ、その
時!!

「きゃっ!!」

恵と剣の間に灰色のオーロラが出現、恵の行く手を防いだ。

「えっ、何これっ!!」

恵はオーロラに触る、剣は移動するかもしれないと悟り、恵が触
るのをやめさせようとした、だが、恵の手はオーロラにふれて、壁
のようになっ。

「何これっ、剣君!!」

「恵？（なんで移動しないんだ）」

剣は不思議に思いながらオーロラに近寄っ、オーロラに手を伸ば

した、すると、剣の手も壁に触ったようになった。

「いったい何がどうなってるんだ？」

剣は首をかしげた、その時！

「剣君後ろお！！」

恵が大声で叫んだ、だが、その声はガラス越しで会話をしているような声になった。

「！！」

だが剣は恵の表情に気がつく、後ろを振り返らずに、少しだけ屈んで、後ろから接近している何かに向かって裏拳をくらわした！！

「イイー！！」

「イイー！！」

剣を後ろから攻撃し用としていた体全身黒いタイツに包まれた『シヨツカー戦闘員』は剣の裏拳をもらに喰らい、後方に吹っ飛ぶと、後ろにあった木にぶつかって消滅した。

「「大シヨツカー！！！！」」

剣と恵は同時に叫ぶと、剣は恵のほうを見た、するとそこには緑色の奇妙な怪物が3体ほどいてその一体が何と恵に変身した！！

「えっ、何？」

恵は何が起きたのか分からず戸惑っていると、残り二体が恵を殺そうと鋭い爪のついた腕を振り上げた！！

「！させるかっ！！」

剣はディケイドドライバーをジャンパーから取り出して腰につけた。それと同時に緑色の怪人と恵に化けた怪人、恵が一斉に剣のほうを見た。

「変身っ！！」

剣はライドブッカーからディケイドの顔が絵柄のカードを引き抜くと、ディケイドドライバーに装填してドライバーを閉じた！！

K A M E N R I D E D E C A D E !!

ドライバーの中心が輝き、剣の体を包み、剣はマゼンタ色の戦士、仮面ライダーディケイドに変身、変身後の衝撃波で剣と恵をふさいでいたオーロラが衝撃波で弾き飛ばされ、恵を除く3体の怪人が吹っ飛び恵に化けていた怪人は元の姿の緑色の『ワーム』に戻った。

「恵！さがってる！！」

ディケイドに変身した剣は恵の肩に手を置くと、自分の後ろに引っ張った。

「ワームが相手なら、このカードだな。」

ディケイドはそう言うとライドブッカーからカブトムシのような

角をもった目が青くて体が赤いライダーの絵柄のカードを引き抜くと、ドライバーに装填した！！

第二話 『ディケイドの役目』（後書き）

あした、もしくは今日の夕方頃に、第一章は終わります。

第三話 『旅立つ時!』 (前書き)

お待たせしましたっ! さあて、今日から剣君は世界をめぐる旅に出かけます!!

第三話 『旅立つ時!!』

ディケイドに変身した剣は、ライドブッカーから体が赤くて目が青い、カブトムシに似たライダーのカードを取り出すと、ディケイドライダーに装填した。

K A M E N R I D E K A B U T O

ディケイドの体の周りを緑色のひし形の光が複数覆い、ディケイドは仮面ライダーカブトに変身した。

「恵！隠れてろよ。」

Dカブトは恵のほうを振り返ると優しく言った、そして緑色の怪人ワームたちのほうを見ると、一気に走った!!

「はあっ!!」

Dカブトは目の前にいる一匹のワームを手を持ったライドブッカーソードモードで切り裂いた!

「ギョルア!!」

ワームは声を上げると緑色の炎に包まれて爆発した。

「.....」

Dカブトは無言で後ろを振り返った、すると残り2匹だったはずなのに、5匹に増えていた。

「ちっ、まとめて倒すか。」

Dカブトは軽く舌打ちをすると、ライドツブカーからカードを一枚引き抜いて、ディケイドライバーに装填した。

ATTACK RIDE CLOCK UP

「はあっ!!」

Dカブトはライドツブカーを構えて前に走った。

すると突然Dカブトが消え、少し進んだところに現れたと思ったら、背後にいたワームたちが緑色の炎とともに爆発し死んだのだ。

Dカブトが使ったカードは『クロックアップ』と呼ばれる周りよりも素早く動くことができる技で、カブト系の仮面ライダーのみならずワームも使うことができる技である。

ちなみにクロックアップが使えるワームは『成虫』状態で、先ほどDカブトが倒した緑色のはサナギ体でクロックアップは使用できない。

「ふう〜。」

Dカブトは変身を解いた、するとディケイドライバーからカブトのカードが飛び出して、カブトの絵柄が消え、灰色のカードになった。

「あれ？、消えた。」

剣はカードを見ながら首を傾げた。

「剣君……。」

剣が慌てていると恵が静かに声をかけてきた。

「ん？どうした？」

剣は恵のほうを見ながら言った。

「剣君、仮面ライダーだったんだ……。何で言ってくれなかったの……？」

「えっと、それは……。」

剣はうつむいた、どうやら答えに困っているようだ……。しばらくの間、沈黙が流れた。

「あの……。」

剣が口を開こうとした、その時！！二人は突然、灰色のオーロラに包まれた！！

「っ！恵！！」

剣は恵の腕を引っ張ると自分のほうに引き寄せた。

「なに、何が起きるの？」

「わからん……。」

剣と恵は周囲を見渡した、すると、剣たちは黒い空間でいくつもの地球が浮いている、あの『世界と世界の間』に来ていた。

「お久しぶりです、宮本剣。」

剣の後ろから茶髪の青年、紅渡が歩いてきた。

「まずはあなたに、言わなければならないことがあります。」

「なんだ？」

「あなたのこの世界で役目は終わりました、別の世界に行くください。」

渡がそう言うと、恵の表情が一瞬曇った。

「俺の役目？」

剣は渡に尋ねた。

「この世界でのあなたの役目、それは、この世界のライダーが現れるまで世界を守ることだったのです、ただ、あなたに謝らなければなりません。」

「謝る？何をだ。」

「本来、あなたはこの世界に、長く居座る必要がなかった、ですが、ダーク四天王のひとりと出会ってしまったことにより、この世

界のライダーが目覚めるのが遅くなってしまったんです、そしてあなたの力も一度しか使えなく……」

「ダークライダー？」

「ええ、この世界にあなたが初めて会った時に出会ったライダーです。」

「ああ、あの黒いライダーか。」

「ええ、そのライダーと交戦したことにより、あなたの力は一度しか使えないように、なってしまいました。先ほどカブトに変身したでしょ？、もうカブトの力は、カブトの世界でカブトと心を通わせないと使えません。」

渡は申し訳なさそうに言った。

「なるほど、ほかのライダーの力も、使ったら、そのライダーに会うまで使えないまま、ということか？」

剣の言葉に対して渡は静かにうなずいた。

「俺が今現在使えるカードは……」

剣はそう言ってライドブッカーからカードを出した。

「灰色になっているのが使用不可のカードだな？」

「ええ。」

「じゃあ、この黒いのは？」

剣はライドブツカーにいくつか入っていた黒いカードを見せた。

「そのカードは、回った世界で何が起きると手に入れられる力です。」

「なるほど。」

剣はそう言って再びカードを見た、剣が使えるカードは、ディケイド、キバ、ブレイド、ファイズ、のみであった。

「使えるカードが少ないが……まあいいか。」

剣はそう言うとカードをライドブツカーにしまった。

「さて、次の世界に行くかな。」

剣は静かに言った、その時。

「ちよつと待って！」

恵が剣の服の袖をつかんだ。

「別の世界ってどういうこと？ 剣君が何者なのかさっぱりわからないよ！ 説明して！！」

「彼については僕が説明します。」

剣が口を開こうとしたら、渡がわって入った。

それから渡は剣のことについて話した、剣はこの世界とは別の世界から来た人間で大シヨツカーに故郷の世界を壊され、大シヨツカーのアジトでディケイドの力を奪って逃走し、剣はディケイドの力を使って大シヨツカーが破壊しようとしている世界を救わなければならない……と言うことを話した。

「……………そうなんだ、じゃあ、私が剣君見た時は、何者かにやられてたんだ……………」

恵はうつむいて剣に尋ねた、剣はゆっくりとうなずいた。

「じゃあ、この世界から出ていっちゃうの？」

「ああ、お別れだ。」

剣はそう言うと、前に歩き出した、だが、恵がさらに強く剣の服の袖をつかんだ。

「じゃあ、私も付いていく、つれてって。」

「だめだ、危険すぎる。」

剣は首を横に振った、だが、恵は聞こうとせず、それから剣と恵の口論が続いた。

「彼女が行くことを僕は強く勧めます。」

その渡はその口論に割って入った。剣はなぜだという顔をし、尋ねようとした、だが

「僕はこれまでいろいろなディケイドを見てきました、仲間とともに世界を渡ることによってディケイドは、強く成長していき、仲間たちのおかげで最強の力を得た者もいます、だから、僕は彼女がいつか行くことを勧めたいです。それにあなたは口では否定していますが、本当は来てほしいと思っっているのでは？」

渡に真意を言われ剣はちょっと照れくさそうな表情をし、剣は頭をかいて、

「わかったよ。じゃあ、ついてこい！」

「うん！」

恵は笑顔でうなずいた。

「いったんあなたを元の世界に戻します、それから別の世界に行くルートを作りますから……。」

渡はそう言つと指をならし、剣と恵を元の公園に戻した。

「うちに帰るか？」

「そうだね。」

それから剣と恵はバイクに乗り、家に戻った。

剣はバイク屋に戻ると、エンジンを切り、バイク屋のドアを開けようとした、するとドアの入り口に神が挟まっていた。

「なんだこれ？」

剣はバイクのスタンドを立たせてバイクをいったん止めると、紙を見た、そこには

『剣へ、この店をお前にくれてやる、恵と仲良く暮らせ。隼人』と書かれていた。

「なんじゃこりゃ、まあいいや、恵、ドアさっさとあけてくれ。」

剣は恵にドアを開けるように促した。

「はいはい。」

恵はそう言うと店の鍵を開けて、ドアを開いて、中に入った。剣もバイクごと店内に入ると、入ったすぐにある、バイクを止める様のスタンドのような場所にバイクを止めると扉を閉めて、そばにあったソファアに腰掛けた。

「剣君、お兄ちゃんいないよ？どこ行っただら。」

恵が店から家に通じる部屋のドアを開けて剣に尋ねた。

「この店を俺にくれるってよ。」

剣はそう言うと、恵に先ほどもらった紙を渡した、その時！！剣が座っているソファアの前にあった大きな額に飾ってある風景の写真が光った。

「えっ。」

「なんだこれ？」

光がやむと、剣たちはその写真を見た、すると写真が変わっていた。……。

「なんだろ？これ。」

恵は剣に尋ねた。

「さあ？」

その写真は黒い雨が降る中、黒い鎧を着た戦士と、オオカミのような姿をした怪人が向かい合って立っている姿であった。

剣はそれを見ると何かに気がついたかのように急いで走って、窓の外を見た、すると

「えっ、景色が変わってる？」

「……どうやらこの家ごと別の世界に来ちゃったみたいだな……」

剣は静かにつぶやいた。

恵がいた世界では……

「行きましたか？あの二人は。」

隼人が高台にいる渡に尋ねた。

「ええ、彼らは旅立ちました。これから、あなたがこの世界を守っていつてください。」

渡はそう言うと、この世界から消えた。

「はあく、厄介なもん押しつけられたな……。」

隼人はため息をつくど、そばを飛んでいる、赤いカブトムシを手に取った……。

第三話 『旅立つ時!』 (後書き)

最初はやっぱりクウガの世界。クウガの世界はクライマックスヒーローズに近い話にするつもりなので、よろしくお願いします。

第一話 『変身!』 (前書き)

今日からクウガ編です、前回の終了から。時間かかって申し訳ありません。

グダグダな文です、すみません……

第一話 『変身!』

剣は紅渡に世界を渡るように言われ、恵を連れて恵の世界を出た。そして

「なんの世界なのかな……?」

恵は家の外に出ると、周囲を見渡していた……。

「さあな……。」

剣も恵につられて家の外に出る、それを見た恵は目を丸くしていた。

「剣君……?なんか服装が違っただけ……。」

恵は剣を見ながら首をかしげた、剣は何を言ってるんだ、という表情になると自分の体を見渡した、すると

「なんじゃこりゃ。」

赤いノースリーブに黒いGパンをはいていた剣の服装が、黒いスーツを着ている姿に変わっていた、剣はスーツの内ポケットに手を突っ込んだ、すると何かが手にふれ、剣はそれを出した、するとそれは何かの手帳だった。

「……剣君いつから警察官になったの?」

恵は後ろから覗き込むようにして、剣の持っている手帳を見なが

ら言った、そう、剣が持っていたのは警察手帳だった。

「知るか！（俺はもともと刑事なんだけど……。）」

剣はそう言うと手帳をしまった。と、その時、つけていたテレビから音声が流れた。

「番組の途中ですが、臨時ニュースです、F市の工場跡地で未確認生命体47、48号と警察隊が戦闘しています、市民の皆様は外出を控え、自宅で待機してください」

「……F市か……よしっ、行ってくる!!」

剣はそう言うと、部屋の中からバイクを持ってきた。

「あれ？いつの間にか白バイになってるんだけど？」

「カモフラージュの一種だろうな……よし、行ってくるぜ!!」

剣はそう言うとヘルメットを着けて、バイクを走らせた。

市内にある、もう使われていない工場、その工場では、数台のパトカーが蜘蛛と蝙蝠の姿をした怪物を取り囲んでいた。

「おい、一条、あれは一号と三号じゃねえか!!」

頭を坊主にした刑事、杉田はパトカーから外に出ると、同じタイミングで助手席から出たロングコートを着た刑事、一条に向かって行った。

「ああ、間違いない……だが、なぜだ？あれは2年前に道が倒したはず……。」

一条と杉田は二体の怪人を見て驚いた表情をしていたが、すぐに刑事が犯人を逮捕するときのような、強い表情になると二体の怪人に向かって拳銃を向けた、その時

「んっ？」

「なぜ白バイが？」

一条たちの後ろから、剣の乗る白バイが走ってきて、剣は白バイを止めた。

「ちっ、クウガは来ていないのか……。」

剣は呟きながらヘルメットを脱いだ、すると一条と杉田が駆け寄ってきて。

「君、白バイ隊は待機していると言う命令を聞いていなかったのか？」

一条は剣に向かってやや怒った口調で尋ねた。

「悪いけど俺は白バイ隊の人間じゃない。あんたらと同じ、刑事だよ」

剣はそう言って、警察手帳の証明写真の部分を見せた。

「宮本剣……まあ確かにそうだな……」

「それは失礼した。とにかく急いであいつらを……」

「ああ。」

一条たちは、二体の怪人のほうを向くと三人は銃を構えた。その時！再びバイクの音が聞こえ、今度は2体の怪人の後ろからバイクが走ってきた。

「ビートチエイサー！」

「本能寺君か!!！」

「この世界のクウガのお出ましか……」

一条と杉田はバイクの主がわかったようで、少し喜び、剣は、バイクの主が『クウガ』だと悟り、静かに呟いた。

「ぐっ！」

「むっ……」

二体の怪人はそのバイクに跳ね飛ばされると後ろに吹っ飛んだ。

「一条さん！、杉田さん！、今戻りました！！」

ビートチェイサーと呼ばれるバイクに乗っていた青年はヘルメットを脱ぐと、バイクから降りた。

その青年は、ボサボサの長い黒髪を後ろで括っついて、右目には黒い眼帯が付いている青年だった。

「道！」

「本能寺君！！」

杉田と一条は青年の名前、『本能寺道』ほんのうじやうの名前を呼びながら駆け寄った。

「お二人は離れていてください、こいつは俺が倒します！！」

道はそう言うと、腰の前に両手を持つてきた、すると、道の腰に銀色に輝くベルト『アークル』が浮かび上がる、そしてアークルの中央の宝玉の色が赤に染まり、道は右腕を左前方に突き出し、左腕はアークルの上におくと、ゆっくりと右腕を右横に移動させながら、左腕腰に持つてくると、

「変身っ！！」

叫びながら、右腕を左腰まで下ろし、左手の上に乗せると左手の甲でアークルのスイッチを押し下げ、両腕を開いた！！

すると、道の姿が足、体、腕、頭の順で変わっていき、道は、炎のように真つ赤な鎧を身にまといくわがたに似た金色の角が頭についた、超古代の戦士、仮面ライダークウガマイティフォームに変身した。

第一話 『変身!』 (後書き)

第二話 『空我』(前書き)

二話目連続更新です。

第二話 『空我』

「いくぞお〜!!」

赤い仮面ライダー、仮面ライダークウガは自分の拳を握りしめると、目の前にいる蜘蛛に似た怪人、ズ・グムン・バと、蝙蝠に似た怪人、ズ・ゴオマ・グめがけて走った!!

「たあっ!!」

クウガは飛び上がるとズ・グムン・バの腹を殴り飛ばした!!

「ぐっ!!」

ズ・グムン・バは腹を押さえて後ろに下がる、クウガは走り出そうとしたが、それをゴオマが邪魔した。

「っ、ダアッ!!」

ゴオマはズ・グムン・バめがけて走ろうとしていたクウガの前に出ると両手と翼を広げ、通せんぼした、だがクウガは構わずに、ゴオマの腹を殴ると、気を失わせ、首をつかむと後ろに放り投げると、ズ・グムン・バに向かって走り、右腕をズ・グムン・バの顔面めがけて突き出し、顔を殴ると、腹に向かってひざ蹴りを入れた

「はっ!つたっ!やあっ!!」

さらにクウガはズ・グムン・バの腹を何発も殴りつけ。

「たあっ!!」

右腕を目一杯後ろに引くと、気合いを入れながら燃え盛る拳をズ・グムン・バの顔面に向かって突き出し後ろに吹っ飛ばした!!

「止めだ!!」

クウガはそう叫ぶと変身するときと同じ右腕を左前方に伸ばし左手はアークルの上に載せる構えをとると、右足を後ろに下げて、両腕を開いた。そして

「うおりゃあっ!!」

起き上がるうとしてゐるズ・グムン・バめがけて走るといったん飛び上がって一回転、炎に包まれて燃え盛る右足を突き出し、必殺技である『マイティ・キック』を放った!!

「ぐおっ!!」

ズ・グムン・バは後方に吹っ飛び、工場の錆びた柱に激突、柱を破壊したがそのまま地面に落下、それと同時にクウガが地面に着地した。

「ぐ……。ぬっ!ぬがああああっ!!」

ズ・グムン・バはゆっくりと立ち上がるが体名に何かの異変を感じたのか腹を押さえ、苦しみだした、ズ・グムン・バの腹には赤い紋章のようなものが浮かび上がっており、その紋章からベルトに向かって亀裂が走ると、ズ・グムン・バは叫びながら爆発した。

「ラズビー！（まずい）」

ズ・グモン・バズ・グモン・バが爆発したタイミングで起き上がったゴオマは立ち上がると翼を広げて空に飛び去った！！

「逃がすか！一条さん！！」

クウガはそれを見ると、戦いを見ま追っていた刑事、一条のほうを向いた。

「道！使えっ！！」

一条はうなずくと持っていた拳銃をKUGAに無あつて放り投げた、ただ、名前を言っただけなのに相手が何を欲しているのかわかるのはやはり戦友だからであろう……。

「超変身っ！！」

クウガは一条の投げた拳銃を受け取ると、変身ポーズと同じ構えをした、するとアークルの宝玉赤から緑に輝き、クウガの赤い眼も緑になり、鎧も緑になり、右肩だけ鋭くとんがり、クウガの握る拳銃も緑色のボウガン、ペガサスボウガンに変わり、クウガは『ペガサスフォーム』へと変身した。

「くらえっ！」

クウガは前に出ると、ペガサスボウガンの背についたつまみを引くと、上空を飛んでいるゴオマに向け、ペガサスボウガンの引き金を引いた！！すると、引いていたつまみが前方に押し上げられ、ペガサスボウガンの銃口から空気が圧縮された弾が勢いよく飛び出し、

ゴオマの体を直撃！！

「ぐあああああつ！！！」

ゴオマは声を上げながら爆発した！！

「ふう〜。」

クウガは静かに息を吐くと、変身を解除して『本能寺道』ほんのうじやうの姿に戻った。

「お久しぶりです、一条さん。杉田さん。」

道は一条と杉田サムズアップしながら笑顔で言った。

「ああ。」

「久しぶり。」

一条と杉田も同様にサムズアップした。

「えっと、その方は？」

道は剣に気がつくくと、一条と杉田に尋ねた。

「ああ。彼は、先ほど俺たちの援護に来てくれた宮本剣。一応刑事だ。」

一条は軽く剣のことを紹介、剣は一步前に出た。

「宮本剣です、はじめまして。」

「こちらこそ、剣・・・だったね、歳は？」

「23歳」

「じゃあ、俺と一緒にじゃん。敬語使わなくていいよ。」

「そうかあ？、これからよろしくな。」

「ああ。」

剣と道はお互いに手を出して握手した。

「道、悪いんだが、今の状況をいろいろ説明したいんだ、それにお前の体のことも気になる・・・。」

「ええ、わかりました、だったら俺の道場で話しませんか？」

「分かった。」

一条はパトカーに乗り、杉田は現場検証やらその他があるためこの場に残り、雄介はビートチェイサーに、剣は乗ってきていた白バイにまたがって、道を先頭に、道の家がある道場に向かった・・・。

その道中で。

「!」

廃工場から少し出て、町中を走っていると、人が歩道や、道路に大量に倒れていて、皆、口から血を流し、死んでいた。

「ひどすぎる誰が……。」

剣たちはお互いの乗り物を止め、降りると、剣が静かに呟いた、すると、少し前から女性の悲鳴が聞こえた!!

「!」

三人は顔を見合せて、悲鳴がしたほうに向かって走った、するとそこにはトラに似た怪人が一人の女性の首を右腕で握り、絞め殺したところだった。

「!あいつは25号!!」

道はその怪人、メ・ガドラ・ダを見て叫んだ!!

「こいつも生き返ったのか……。」

道は呟くとアークルを出現させクウガに変身しようとした、その時!!

「ママァ!!」

剣たちの後ろから一人の小さな、女の子が走ってきた、そしてその女の子は地面に倒れてグッタリしている女性に近寄ると泣きながら体を何度もゆすった、その時

「ギベ。リント……。（死ね、人間）」

ガドラはその小さな女の子を踏みつぶそうとしていた！！

「させつかよお！」

剣は走ると、ガドラの足が女の子にふれる前に、女の子を抱き抱え、少し前方まで滑っていた。

「早い！」

「！なんて動きだ！！！」

変身しようとしていた道と、一条は目を丸くして驚いていた。

「ビガラ！ジラグゾギスバ！！（きさまじゃまをするな！！）」

ガドラは剣を見ながら叫んだ。

「ちよつと離れててな。」

剣はガドラの言葉を無視して女の子をここから離れるように優しく笑顔で言った。

「ルグゾグスバアアアアアアツ（無視をするなああああつ！！）」

ガドラは怒りをあらわにすると剣めがけて走り、体についた鎖を放り投げ、剣を鎖で絞め殺そうとした！！

「剣！」

「危ない！！！」

道と一条は剣に駆け寄ろうとした、だが

「ふんっ！！！」

剣はガドラの持つ鎖を素手で受け止めると、鎖を握りつぶして、鎖を破壊した。

「っ！！！」

ガドラは驚いた表情をし、剣から一步下がった。

「あんな幼い命まで奪おうとするとは……おまえは許さん！！！」

剣は叫ぶと、懐からデイケイドライバーを取り出して、それを腰に押し当てベルト化させるとライドブッカーからカードを一枚引き抜き、

「変身っ！！！」

K A M E N R I D E D E C A D E

デイケイドライバーが光りだし、剣の周りを黒い10体の虚像が包むと剣の体は黒くて頭がやけにさみしいデイケイドに変わった後、デイケイドドライバーから七枚のプレートのようなものが出て、それが頭に突き刺さるとデイケイドの色がマゼンタ色になり、目が輝き、額が黄色く輝いて、剣は仮面ライダーデイケイドに変身した。

「行くぞー!!」

剣はライドブッカーをソードモードにして走った!!

第三話 『激突』（前書き）

久しぶりの更新です。

第三話 『激突』

「うおおおおおっ!!」

ディケイドはライドブッカーを構えるとガドラめがけて走って行った!

「はあっ!!」

ガドラは手に持った鎖をディケイドに向かって振った、ガドラの握る鎖の先は先ほど剣に握りつぶされて欠けていた。

「効くかつ!!」

ディケイドはそう言うと、ライドブッカーから一枚のカードを取り出して、それをディケイドライバーに装填した!

ATTACK RIDE SLASH

「たあっ!!」

ディケイドは刃先が赤く輝くライドブッカーをガドラの鎖めがけて振って鎖を完全に粉碎した。

さらにライドブッカーの刃先からは衝撃波のようなものが飛び、ガドラの体を傷つけた!!

「ぐはっ!!」

ガドラは後ろに吹っ飛んで地面に倒れた。

「……すごい、彼もクウガみたいな存在だったとは。」

一条はデイケイドの戦い方を見て、驚いていた、対する、道はデイケイドを敵を見るような目で睨んでいた。

「グオオオオツ!!」

ガドラは壊れた鎖を地面に投げ捨てると、声を上げながら、デイケイドめがけて走った!!

「お次はこれだ。」

ライドブツカーからカードを取り出しドライバーに装填。

A T T A C K R I D E B L A S T

「はあっ!!」

ライドブツカーをガンモードにし、ガドラに向け引き金を引く、ライドブツカーの銃口からはマゼンタ色の弾が無数に飛び出し、ガドラの体を傷つけた!!

「があっ!!」

ガドラの体からは火花と同時に血も飛び散った。

「さあて、止めだ。」

ディケイドはそう言つとライドブツカーから縁が金色のカードを取り出しドライバーに装填した！！

FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DE
ECADEE!!

ディケイドの前に彼の顔を模した金色のカードが数枚展開され、それがガドラに向かって伸びる。ディケイドはライドブツカーをソードモードに変えて

「はあああああああつ・・・やあつ！！！」

自分の目の前にあるカードを走って潜り抜けながらガドラに接近すると赤い刃が伸びるライドブツカーをソードモードをガドラの腹めがけて右斜めから切り込むように振り下ろし、

「たあつ！！！」

すかさず、真横に向かって降りおろし、ライドブツカーで斜めに十の字を書くように、ガドラの腹を切り裂いた！！

「ぐうわああああああつ！！！」

ガドラは声をあげると爆発、絶命した。

「ふう〜、終わり。」

ディケイドは呟くと、剣に戻って一条たちのほうを向いた。

「剣、君はクウガとおなじ、 Grongi を倒すための戦士か？」

一条は剣に向かって尋ねた。

「ええつと、まあ、そんなことで……」違つー!!」

剣が何かを言おうとしたら道が割って入った。

「一条さん、こいつは Grongi を復活させた要因かもしれないですー!!」

道はそう言つと剣を指しながら叫んだ。

「何を言つてるんだ、道？」

一条は道の顔を見た、剣は道のセリフを聞いて表情が曇った。

「彼の名はディケイド、世界を破壊する人間です！お前に世界を破壊させたりはしないっ！」

道はそう言つと剣に向かって殴りかかった！！だが剣は道の拳を左手でつかんだ。

「……人の話を聞けっ!!」

「聞く耳持たんっ!!」

道はそう言つと剣の手を払って、剣に向かって左足を軸にした右回し蹴りを放った!!

「ぬっ！」

だが剣は軽々と道の足をつかむと、ズボンの裾をつかんで後方に投げ飛ばした！！

「うあっ！！！」

道は後ろに飛ばされるが途中で、反転し、バランスを整えて着地、剣をにらんだ。

「なんて人間なんだ、クウガであり、あらゆる武術を極めた本能寺家、最強の戦士と互角の戦いをするなんて……………」

一条は目を丸くして、静かに呟いた……………。

「一日で連続変身は体にこたえるが……………仕方ない変身っ！！！」

道はクウガに変身すると剣めがけて走ってきた。

「おいおい、まてまて！！！」

剣は驚いた表情をするとディケイドに変身、変身が終了するとすでにクウガは剣のそばに来ていた。ディケイドは軽く舌打ちをする

と左手を握りしめ。

「たあっ!!！」

「やあっ!!！」

ディケイドは左腕をクウガの腹にクウガも右腕をディケイドの腹に突き出した!!！」

「うっ!!！」

「ぐっ!!！」

二人の体からは血が飛び散り、距離を置いた。

「はあっ!!！」

そしてクウガは再びディケイドの腹を殴ろうとした、だが

「させるかっ!!！」

ディケイドはクウガの体重が拳に乗る前に前に出てほぼ密着した状態になりパンチの威力を殺し、クウガの腹にひざ蹴りをした!!！」

「っ!!！」

クウガは思わず距離を取った。

「やめろ、お願いだから俺の話の聞けっ!!！」

「断るっ!!」

クウガはそう言つとそばにあつた手すりを蹴り飛ばし、それをつかんで

「超変身!!」

と、叫んだ、するとクウガの姿が変わっていき体全身が青くなつた、さらに握っていた手すりも、変化し、青い棒、ドラゴンロッドに変わり、クウガはドラゴンフォームへと変身した。

「たあっ!!」

クウガは先ほどよりも早いスピードでディケイドに接近すると手に持ったドラゴンロッドをディケイドに向かって振り下ろした!!

「くっ!!」

ディケイドはギリギリかわせた、だが、頬から煙が立っていた。

「っ、スピードには、スピードで対抗するか……。」

ディケイドはライドブッカーからカードを一枚取り出した。

「変身っ!!」

ディケイドはそのカードをライドブッカーに装填した

K A M E N R I D E K I V A

ディケイドの体を波紋のようなものが包み、ディケイドの姿が黄色い瞳に赤い姿で体には重たそうな鎧を着けたライダー仮面ライダーキバに変身した。

「これで勝負だ!!」

Dキバは叫ぶとクウガに向かって走った!!

「たあっ!!」

クウガはドラゴンロッドをDキバに振り下ろす、だが彼は、華麗にその攻撃をかわすとがら空きになった脇を右足でけり飛ばした!!

「っ!!」

クウガは思ったよりも後ろに吹っ飛び、地面にひざをついた。

「(なるほど、スピードのおかげで、防御力が半減してるのか・・・チャンスだ!!)」

Dキバはそう言うと一気にクウガめがけて走った!!

「たあっ!!」

Dキバはクウガの顔を蹴り飛ばす、クウガそのまま後ろにのけぞる、Dキバは追い打ちをかけるようにクウガのボディに1・2パンチをくらわした

「止めだ!!」

Dキバはそう言うと右足をクウガの腹めがけて突き出した、その時

「たあっ!!！」

クウガは空高く跳びあがり、近くにあった歩道橋で着地した。

着地したクウガはDキバのほうを振り返る、すると青いボディーがさらに青くなり体に金色のラインが走り、ドラゴンロッドには金色の矛のようなものがついた、クウガライジングドラゴンフォームに変身した。

「強化変身か、おもしれえ!!！」

Dキバはそう言うと飛び上がり歩道橋で着地した。

「行くぞ!!！」

「はあっ!!！」

Dキバはクウガに向かって走ろうとした、だが、クウガはさつきよりも早く動きDキバが走り出そうとしたときにはすでに目の前にいて、ライジングドラゴンロッドでDキバの体を切り裂いた!!！」

「ぐっ!!！」

Dキバの体から火花が飛び散る、クウガはすかさず、ライジングドラゴンロッドを何度も振ってDキバの体を傷つけていく、そして

「たあっ」

クウガはDキバの顔を殴り飛ばし、歩道橋から突き落した！！

「なめんじゃねえ！青には青だ！！！」

FORM RIDE KIVA GARULU

Dキバは落ちながらカードを装填した、すると、Dキバの体が青くなり、青い剣をもった、キバ、ガルルフォームになると空中で一回転、体制を整え、歩道橋に戻ってきた。

「まだまだ負けないぜ？」

Dキバはそう言うとクウガとの距離を詰めて手に持った剣『ガルルセイバー』でクウガの腹を切り裂いた！！

「たあっ！！！」

クウガはライジングドラゴンロッドをDキバに向かって振り下ろす、だが、Dキバは短い剣をクウガに効率よく当てるためクウガの武器が振り下ろされる前に、クウガに一気に接近、距離を詰めた！！

「くっ！！たあっ！！！」

「ふっ！！だあっ！！！」

距離を詰められているためクウガが何度、ドラゴンロッドを振っても、Dキバには命中せず、逆に自分がダメージを受けてしまっていた。

「っ！」

クウガは距離を置こうとバックステップを踏む、だがDキバは間合いを詰めた！そして、

「はあっ！！！」

Dキバはガルルセイバーを縦に振ってクウガをふっ飛ばし、歩道橋の手すりにたたきつけた！！

「たあっ！！！」

そしてとどめを刺そうと、一気に接近、ガルルセイバーを振り下ろそうとした、だが

「超変身っ！！！」

クウガは、体全身が銀色の鎧に包まれ目が紫の、クウガ、タイタンオームに変身し、Dキバの一撃を防いだ！！

「かつてえ〜、速さの次は防御かよっ！！！」

Dキバは距離を置こうとした、だが、ガルルセイバーが刺さったままで抜けないのだ、いや刺さっているのではない。クウガがガルルセイバーの刃をつかんでいるのだ。

「（防御プラスパワーかよっ！！！」

「ふんっ！！！」

Dキバがそんなことを思っていると、クウガに突き飛ばされてしまった。

「くっ！」

Dキバは迎えの手すりに背中をぶつけてしまう、クウガはゆつくりと起き上がるとDキバの武器、ガルルセイバーを自分専用の武器『タイタンソード』に変えてしまった！！

「うっそ〜ん！！！」

Dキバは仮面の中で目を丸くして慌てた！！

「たあっ！！！」

だが、クウガはそんなことはお構いなく、タイタンソードを両手で持つとDキバめがけて振り下ろした。

「だあ〜、紫には紫だ！！！」

Dキバはそう言うとライドブッカーからカードを取り出しドライブバーにドライブバーに装填した！！

FORM RIDE KIVA DOGGA

Dキバの姿が、クウガとおなじ銀色で目が紫の形体、ドツガフォームに変身、Dキバは新しくできた武器、ドツガハンマーで、クウガの攻撃を受け止めた！！

「ぐっ、紫とおなじパワー！！！」

「そうだ、ぜ！そろそろ決めるか！！」

Dキバがそう言うと二人は距離を置いた、そしてDキバはライドブッカーから縁が金色のカードを取り出し、デイケイドライバーに装填、クウガは体全身が紫色で金色のラインが入った鎧をもった、『ライジンググタイタン』に変身するとタイタンソードの先端に金色で鋸のようなものが取り付けられた、ライジンググタイタンソードを両手で持った。

FINAL ATTACK RIDE KIKIKI
IVA

Dキバの握るドツガハンマーに雷の力がとまり、Dキバはドツガハンマーを振り下ろした！！クウガも雷が進る、タイタンソードをDキバに向かって突き出し、『ライジングガラミティ・タイタン』を放った二人の放った攻撃は同時にぶつかりあった！！

「ぐっ！！」

「うあっ！！」

二人はその衝撃で吹っ飛び、歩道橋から落ちた！！それと同時にクウガとデイケイドの変身が解け、服が切れ体から血を流している剣と道に戻った

「うっ……」

二人はゆっくりと立ち上がるが、剣の目にある情景が入ってきた、それは隠れていたのかはわからないが、突然子供たちがそこらじゆ

うに出てきた、だがそれと同時にどこかに隠れていた、ネズミに似た怪人とゴキブリに似た怪人が子供を襲おうとしていた。

「くっ!!」

道はそれを見ると走り出そうとした!!だがダメージで足が動かず膝をついてしまった!!

「やめろおお!!」

道とおなじくらいダメージを受けているはずの剣は、一気に走りだすと子供を襲うとしている、ネズミの怪人の顔面めがけてひざ蹴りを入れ、さらに、ゴキブリの怪人の顔面を殴って地面にたたきつけた。

「絶対にこの子たちには手を触れさせん!!」

剣はそう言ってデイケイドに変身、力が残っていないのにライドブッカーを握りしめると、カードを二枚出して、デイケイドライダーに装填した。

ATTACK RIDE ILLUSION

ATTACK RIDE SLASH

デイケイドの姿が二人に分身、さらにライドブッカー、ソードモードの刃が光り輝いた!!

「たあっ!!」

ディケイドは二体のグロンギに向って、ライドブツカーを振り下ろし、グロンギの体を切り裂いた！！

「ぐわああああっ！！」

「があっ！！」

二体の怪人は同時に爆発、絶命するとディケイドは膝をつき変身が解けてしまった。その場にいた5人ほどの子供は目を丸くして剣に近寄る、剣は笑顔で

「大丈夫だよっ、みんなは怪我してない？」

と言い、そのあと子供たちを安全な場所に避難させるように一条に言い、一条は警察に連絡しばらくするとほかの警察がきて、子供たちは保護された。その時一条が道に。

「子供の笑顔を守るやつが破壊者だと思うか？」

とたずね、道は、

「・・・俺の勘違いだったみたいですね。」

と言った。

第四話 『復活』 (前書き)

今回は過去編、剣は変身しません

第四話 『復活』

剣と道が戦ったあと。道は剣に謝り、剣は「気にするな」と言っ
て、道を許した、それから二人は意気投合して、それからしばらく
話を続けていた、だが、

「どこか話せるところで話をしたほうがいいんじゃないのか？」

と、一条が言い、二人は道の家に向かっていていることを思い出し、
三人はそれぞれの乗り物に乗ると、道を先頭に道の家に向かった。
・・・

「あれ？ここが俺んちのはずなんだが・・・。」

道はバイクを止めると静かに言った、剣たちが来たのは。道場で
はなく恵がいる、バイク店だった。

「まあ、いいじゃん、兎に角中に入ろうぜ。」

剣は戸惑っている道の肩を軽くたたくと、店内に入った、それに
つられて戸惑いながら、道と一条も店内に入った、すると

「それでねえ〜！」

楽しそうな会話が聞こえた。

「恵、帰ったぞ。」

剣は店の入り口にあるソファで楽しそうに話している、恵に向

かって言った。

「あつ、剣君！お帰り！！」

恵はそう言つと立ち上がつて剣に近寄つた。

「あつ、そうそう、さっきこの世界の住人の子と仲良くなつただけだね……。」

恵はそう言つと恵の後ろに座つていた、女性を呼んだ、すると

「あれ、桜？」

剣の後ろにいた道がその女性の名前を呼んだ。

「えつ、道君！帰つてきてたの！！」

桜と呼ばれた女性は道に駆け寄つた……。

「ああ、ついさっきね。」

「そうなんだ……。」

それから暫く道と桜は何かを話していたが、剣に話さなければならぬことを思い出した道はいったん話をやめ、剣に伝えたいことがあると言つた。

「わかつた、ここじゃあ、なんだから奥の部屋で。」

剣たちはそう言つと。店をいったん閉めて、店から家の中に入つ

て、入った先にあるリビングに向かった。

「まずは俺たちが何者かについてだな。」

剣は静かに言い、道たち、クウガの世界の住人はうなづく。

「まず、信じられないかもしれないが、俺たちは別の世界から来たんだ。」

剣は静かに言う、一条はポカント、としていたが、道たちは「それがどうした？」という顔をしていた。

「驚かないのか？」

剣が尋ねると道は笑いだして

「驚くも驚かないも、この世界は、多元宇宙論っていう、理論がすでに仮説ではなくちゃんとした原理のある理論ってことで認められてるんだ。」

道は笑いながら言うとテーブルに出されたお茶を飲んだ。

「なら話が早い、俺たちは、この世界を救うためにやってきたん

だ。」

「この世界を……か」

「ああ、で、聞きたいんだが、何かこの世界でおかしいことはなかったか？」

剣は啞然としている、道に尋ねた。

「おかしいこと。」

「ああ、たとえば、突然灰色のオーロラが出現したり。ビルが粒子のように消えだしたり、見たこともない怪人が出てきたり……」

「……それなら……」

それから道はこの世界で起きていると思われる、異変について話した。

道の話だと、グロンギは2年前にあらわれたが、道がそのボスであるン・ダグバ・ゼバを倒して、グロンギはすべてこのクウガの世界から消え、平和を取り戻した道は、クウガに変身する前に、旅に出たのだ。

「そう言えば、道、お前0号を倒したあと、クウガに変身できなくなっただんじゃ……」

話を黙って聞いていた一条が、道に尋ねた。

「確かに俺はダグバとの戦いのあと、戦闘時のダメージで、クウガには変身できなくなりました。そしてこっちに戻ってくる少し前、イタリアのローマに行つてたんです、そこで……。」

「やっぱり、良い景色だなあ、ローマは。」

道はそう言つと、ゆっくりと歩き出した、その時

「っ、腹が……あつい……。」

道は腹を抱えて地面に膝をついた。

「こ・この、か・感覚は……俺……が、は・初めて、クウガになつた……ときと同じ……。」

道は苦しみながら声を絞り出すように言った、すると

「うわああああああっ！」

道の腰と腹の中間ぐらいが急激に光りだし、そこからアマダムが

飛び出した。

「はあく、はあく、はあく……な、なんで、アマダムが……」

道はアマダムを触りながら、首をかしげる。

「くっ、人がいなかったのが幸いか……」

道は静かに呟くと服の袖で汗を拭って、歩き出そうとした、その時

「きゃあああああっ!!!!」

女性の声が聞こえ、道はその声のほうに向かって走った。

「!!」

道がそこに行くと、一人の女性が異型の怪物に襲われていて、その怪物の足元には、人の腕や足、首が転がっていた。

「ギベ・リント」

そこにいた、カマキリに似た怪物は女性に向かって手に持った柄の上下に刃のついたの刀を突き刺そうとした、だが

「やめろっ!!!!」

道はカマキリの怪物に向かって走ると、背中を殴りつけ、吹っ飛ばした!!!!

「早く逃げて!!」

道は女性に向かって叫んだ!!女性は何度もうなずくと、その場から離れていた。

「クウガか……」

道が殴り飛ばした、カマキリの怪人メ・ガリマ・バは道をにらみながらゆっくり、起きあがった。

「グロンギ!なぜ……(だからクウガの力が!!)」

道は驚いていたが、ガリマが飛びかかってきたので、右にかわした。

「やるしかないようだな、変身っ!!」

道は決意を決めた目になると変身ポーズをとって、仮面ライダークウガに変身した!!

「たあっ!!」

ガリマはクウガめがけて走ってくると、手に持った刀を真上から振り下ろした!!

「もうお前なんか俺の敵じゃない!!」

クウガはそう言うと、ガリマの握る刀の刃と柄のつなぎ目に向かって

「たあっ!!」

左手で手刀を放ちガリマの握る刀の上のほうについてある刃をへし折ると、へし折って宙を舞っている刃をキャッチした。

「超変身っ!!」

クウガはそう言って銀色の鎧で紫色の目をもった。タイタンフォームに変身、それと同時に右手につかんでいる刃も紫色の大剣、タイタンソードに変わっていた。

「たあっ!!」

クウガはタイタンソードを両手でつかむと、真上から真下に向かってタイタンソードを振り下ろし、ガリマの体を切り裂くと、

「オリヤアアアアッ!!」

今度はガリマの胸めがけてタイタンソードを突き刺した!!

「がっ!!」

ガリマの胸には赤い文字が浮かび上がる、そしてその文字から亀裂が走り、ベルトに到達すると。

「クウガアッ!!」

ガリマは声をあげて爆発!絶命した。

「ふう〜、それにしてもなんで、グロンギが……。」

クウガは静かに呟き変身を解こうとした。その時！

「アオオ〜ンツ！！」

オオカミの咆哮のようなものが後方から聞こえた

「っ、この感じはダグバとおなじ・・・いや、それ以上か。」

クウガは呟くと、タイタンフォームからマイティフォームに戻って声のしたほうに向かって走った！！

「はあ〜、はあ〜・・・」

クウガが走ったところは、ローマの町の中央広場のようなところだったが、そこには人が一切おらず、広場の中央には大きな血だまりと、その上にいるオオカミのような姿をした怪人がいた、そしてその怪人が再び咆哮すると、さっきまで明るかったのに急に黒い雲が空を覆って、夜みたいになった。

「！クウガ！！」

そのオオカミの怪人はクウガの方を見ると驚いたように言った。

「おまえは何者だ！！」

クウガはオオカミの怪人を指しながら叫んだ！

「我が名は、究極の闇を超える闇……ン・ガミオ・ゼダ。」

ガミオは静かに言った。

「究極の闇を超える……まさかダグバを超える存在！」

クウガはそう言うと両腕を広げた

「ダグバを知っているのか？なら貴様はダグバを倒したのか……」

「それがどうした！！超変身っ！！！」

クウガがそう叫ぶと、体全身が黒くなり、金色のラインが走り、両足には金色のアンクレットがついた『クウガ・アメイジングマイティ』へと変身した。

「別の姿か……面白い！！！」

ガミオはそう言うとクウガに向かって走ってきた！！

「はっ！！！」

ガミオはクウガの顔に向かって拳を突き出した！！

「っ！！」

あまりにも速さにクウガの体が対抗できずに、クウガは顔面を殴られた！！だが

「たあっ！」

クウガは首を後ろにひねることで衝撃を少しだけ逃し、うまく回避していた、そしてがら空きになったガミオの腹に向かって左腕を突き出した！！

「っ！」

「たあっ！！！」

クウガの一撃を貰ったことにより、ガミオの動きが一瞬鈍り、クウガはすかさずガミオの顔に右腕を突き出した！！

「ふっ！」

クウガの拳はガミオの顔に命中していたが、彼は吹っ飛ばず、そのままの状態で頬を釣り上げて軽く笑った、

「っ！」

何か危険を感じ取ったのか、クウガは距離を置いた。

「俺が知っているクウガとは力も防御も比べ物にならん、これならダグバも負けるはずだ。」

ガミオはそう言うのと手のひらをクウガにかざして手のひらから緑の光の球を放った！！

「くっ！」

クウガはその球を腕を十字に組んで耐えるが、威力があまりにも高く、腕がはじかれ、緑色の球はクウガの腹に命中し、クウガを後ろに吹っ飛ばした！！

「ぐっ！」

クウガは後ろにあったビルに背中をぶつけ、地面にゆっくりと落ちた。

「どうした？貴様にはあるだろ？何百年も前、我を戦闘不能にし、ダグバを封印するときに使った力が、究極の闇、がな。」

ガミオがそう言うと、クウガはゆっくりと起き上がった。

「あまり使いたくないんでね、アルティメットの力は……」

クウガはゆっくりと起き上がりながら言った。

「まあ、でもこの場合は背に腹は代えられん！！（頼む！俺の心よ闇に負けるな！！）」

道は心の中で願うと、両腕を広げた！！

すると、クウガの体を黒い光と電気が覆い、クウガの姿が黒い鎧をまとい、角が4本に増え、腕と膝に棘ができている、クウガの最終形態『アルティメットフォーム』になった。

「行くぞっ！！！」

クウガがそう叫ぶと、両目が赤く輝いた。

「たあっ!!」

「はあっ!!」

クウガとガミオは同時に走り出し、お互いに拳を突き出した!!

「っ!!」

「ぬっ!!」

二人の放った拳はお互いの胸に命中し、鮮血、二人は距離を取った。

「(このままじゃダグバの二の舞だ……それだけは……)」

クウガはそう心の中で思うと、右腕に炎をともし、

「たあっ!!」

右腕を突き出して、ガミオの体を燃え上がらせた!!

「今だっ!!」

クウガはガミオに急接近すると、ガミオの腹に向かって燃え盛る右腕を突き出し、後方に吹っ飛ばす!!

「ぐぬう……やるなっ、だが!!」

ガミオの左胸には封印の紋章が浮かび上がるが、消えた。

「まだまだ!!」

クウガはそう言つと何も無い空間から黒いライジンググタイタンソードとライジングドラゴンロッドを取り出し、タイタンソードは右でドラゴンロッドは左でつかむとガミオめがけて走つた!!

「はっ!!」

クウガはガミオに向かってタイタンソードを振り下ろし、体を傷つけると、すかさず、ドラゴンロッドを突き刺した!!

「ぐっ!!」

「まだまだ!!」

クウガはドラゴンロッドを引き抜くと巧みにタイタンソードとドラゴンロッドを使い分けながらガミオを攻撃していく、そして

「たあっ!!」

クウガは両手の武器を投げ捨てると、ガミオの腹に向かって右足を突き出して吹っ飛ばした!!

「があっ!!」

ガミオは大きく後ろに吹っ飛び、ビルをいくつか破壊、運よく、人がおらずガミオは地面に倒れた、だがすぐに起き上がり。

「さすがはダグバを倒した力だ……だが!!」

ガミオは気合を入れた!!すると。ガミオの体中にあつた封印の文字が一斉に消えた……。

「次は俺の番だ!!」

ガミオはそう言うと宙に浮いて、両手で大きな緑色の球を作るとクウガに向かって放り投げた!!

「たあっ!!」

クウガは急いでタイタンソードとドラゴンロッドを拾うと、その球を弾こうと両方の武器を右から左に向かって振った!!

だが

「ぐっ!!」

勢いがありすぎるのか、球を受け止めた時点でクウガの武器の先端は砕けてしまった!

「ぐわっ!!」

そして武器の日々は次第に増加し、しまいには武器が砕け、緑色の球はK U U G Aに命中、彼を吹っ飛ばした!

「ぐっ!まだまだ。」

クウガはゆっくりと立ち上がるが、連続過ぎる技の使用のせいで

体力はほとんど尽きていた、さらに一発ではあるが強力な一撃をくらったためアルティメットフォームからマイティフォームに戻っていた。

「止めだ!!」

ガミオはクウガに向かって小さな緑色の球を投げつけ、クウガの体を攻撃、クウガは吹っ飛ばされた。

「終わったか……。」

ガミオは地面に倒れているクウガを見ながら宙に浮いた、だが

「俺はまだやられてないぞ……。」

体中から血を流したマイティフォームがゆっくりと起き上がって構える、だが

「あつ。」

膝が折れ体全身が白い姿『グロージングフォーム』になると地面に倒れた。

「究極の闇を超える力を使わなければ俺は倒せんぞ……。」

ガミオはそう言って、どこかに飛び去った。

「くそっ……。」

グローイングフォームも解除され変身が解けた道は拳を握りしめ悔しそうな表情をして言った、すると

「間に合わなかったか……。」

道の目の前に灰色のオーロラが現れ、眼鏡をかけ旅行人の格好をした男が現れた。

「仮面ライダークウガだね、私の話を黙って聞いてもらいたい。」

その男は道に向かって言った、道は上体を起こし、そばにあったビルに凭れかかると静かにうなずいた。

「私の名前は鳴滝、私がここにいるのは君にお願いがあるからだ、今回、ガミオを生き返らせ、グロンギを生き返らせた存在、ディケイドが君のもとに現れる……世界の破壊者である彼を倒してほしいんだ、これ以上被害が出ないうちに、そして、ガミオを倒して君の守りたい、この世界の人々の笑顔を守るんだ……。」

鳴滝はそう言うと、この世界から出て行った。

「世界の破壊者ディケイド……。」

道はそうつぶやくとゆっくりと立ち上がって体を押さえながら、どこかに歩いて行った……。

「で、俺はその後帰国したんだ。」

道はそう言つとコップに入つたお茶を飲み干した。

第四話 『復活』 (後書き)

さあて、クウガ編もあと少し、アンケートはまだ続いているので
応募してください。お願いします……。

第五話 『不安』 (前書き)

久しぶりの更新です、クウガ編はもう少しで終わります。

第五話 『不安』

「と、言っわけなんだ……………」

道は、ガミオについてと、グロンギが蘇った理由について言った。

「ねえ、道君、そのガミオって、究極の闇を超えるもの……………
て言ってたんだよね……………」

道の隣に座っていた、桜がゆっくりと口を開いた。

「ああ、そうだけど……………どうした？」

「実はそれに関した碑文が最近見つかったの……………」

桜はそう言うと、持っていたカバンから大学ノートとおなじ大きさ、薄さのノートパソコンを取り出し、それを机の上に置くと起動させた。

「えっと、これなんだ……………」

桜はそう言って、あるファイルを開き、スクロールしていく、そのファイルには、幾つもの古代文字のようなものが並んでいて、赤、青、緑、紫、そして黒色とわかりやすいように文字に色が付いていて、一番最後までスクロールした、そこには

『白き闇、葬られしとき、王、再び蘇り、その僕を率いて地を支配せん……………』

と、書かれていた。

「白き闇って言ったら、ダグバのことだろ？」

道は桜に尋ね、桜はゆっくりとうなずく。

「でね、もう一つあるんだ……。」

桜は暗い表情をすると、別のページを開き、恐る恐る、碑文を見せた、そこには

『王蘇りしとき、黒き闇、心の力を極めし時、雷を纏い、究極の闇を超える戦士になりて、王を葬り去らん……。』

「なんだいいことじゃん。」

「よくないよ！！これはあくまでも、道君が、あのときみたいに目が赤い状態になれば、もし目が黒かったら……。」

桜はそう言うと、また別のファイルを開いて、中を見せた。

『王蘇りしとき、黒き闇、己の力を欲し究極の闇を超えし時、太陽は闇に葬り去られ、王葬り去りし時、汝、王とともに塵とならん』

「つまり、俺がダグバを倒したときみたいに、心を強く持っていれば、勝てるけど……。」

「その反対に力におぼれたら、世界を破壊したと同時に、ガミオとともに、消滅する……って訳か……。」

剣と道は静かに言った。

「……まあ、大丈夫だって、いつもみたいになんかかなるよ
!」

道は笑顔で言うと、暗い表情をしている一条と桜、そして恵にサムズアップした。

「ふっ、お前は相変わらずだな。」

「道君、変わってなさすぎ。」

道の笑顔を見た桜と一条は思わず噴き出すと、笑顔になり、笑いながら言った。

「俺はそろそろ本庁に戻る、また何かあったら連絡する。」

一条はそう言いながら立ち上がった。

「私も帰ろうかなあ〜」

桜も立ち上がった。

「桜ちゃん、ここにいなよ。道君と一緒にさ。」

と、恵は桜に笑顔で提案した。

「そっだね、じゃあ、私たちしばらくここにいるよ。」

「俺、久しぶりにこの町見てくるよ。」

道は立ち上がりながら言うと、剣も同時に立ち上がった。

「俺もこの町に来るの初めてだから、いろいろと見て回りたいんだが、道、ついて行ってもいいか？」

「もちろん、ガイドは任せろ」

道は笑顔で剣に向かってサムズアップした。

そして剣、道、一条の3人は、家の裏口から外に出た。

「じゃあ、俺はこれで。」

3人が表に回ってくると、一条はそう言ってパトカーに乗り込んで、パトカーを走らせた。

「さて、道、俺が歩くから、ガイドしてよ。」

「なんじゃそりゃ、まあ、良いけど……。」

道は笑顔で言うと、剣と一緒に歩き出した……。

二人は大きな原っぱに行くと、剣が足を止めた。

「ちょっと話したいことがあるんだ。」

剣が道に尋ねた

「別に良いぜ、なんだ？」

道は笑顔で剣に尋ねた。

「実は・・・お前、無理してないか」

剣がそう言うと道は、

「えっ、何が・・・？」

驚いた表情をすると少し視線を剣から外した。

「とぼけるなよ、それとも俺に言ってほしいのか？」

「・・・・・・・・。」

剣の言葉に対して道は笑顔を作る、だが、剣の真剣な表情を見る

とどンドン、表情がこわばった。

「答えないなら言うぜ？、お前自分が闇に落ちてしまうのが怖くないじゃないのか？」

剣は真剣な顔をして、道に尋ねる、道は剣の言葉を聞くと一瞬目を見開いた。

「な、何言ってるんだよ、大丈夫だって言ったじゃ「なぜ震えている!？」」

道は答えを濁そうとした、だが、剣がそれをさせようとせず、話をそらそうとしているが体が震えている道に向かって聞いた。

「.....」

「.....」

しばらく沈黙が続く、その間道は剣から顔をそむけて俯いていた、だが剣は、ジッと道を見ていた.....。

「剣の言う通りだ、さすがだな、今まで嘘をつくときは他人にはばれなかったんだが。」

「俺を他人と一緒にするな、西林寺がああ、古代文字を見せたときのお前の表情や、笑顔で言った時の声のトーン、ほかにもここに来る途中の息遣い.....いろいろな情報から推測できる。」

「ああ、そうだ、おれは怖いんだ、ダグバの時もガミオの時もおれは自分の心をしっかりと持てた.....でも、次はどうか.....」

「道は顔を完全に地面に向けて剣の顔を見ないようにして言った。」

「……そうか、お前は自分が暴走するのが不安なのか……」

剣は笑顔で言うと、道に背を向けた。

「ああ、だが、ダグバのときみたいなことにはさせないために、俺は変身するしかないんだ。覚悟を決めるしか。」

「……そうか、だったらお前の心の強さを試させてもらう……」

剣はそう言うとディケイドドライバーを腰に巻いて道のほうを向いた。

「け、剣！、お前！」

「お前は这个世界の中でも最強の武道家らしいな。俺も自分の世界では最強の武道家だった……来いよ、お前の覚悟を、見せる。」

剣はそう言うと、ライドブッカーからカードを取り出した。

「……分かった、やってやるよ！！」

道はそう言うとアークルを出現させた！！そして二人は。

「変身っ！！」

同時に叫び、

K A M E N R I D E D E C A D E

剣の体の周りを灰色の人影が覆い、剣は仮面ライダーディケイドに、道はアマダムから出た光に包まれ足、体、腕の順で変わっていき、最後には頭が変化し、仮面ライダークウガになった。

「行くぞおっ！！」

「たあっ！！」

ディケイドとクウガは同時に走り出した！！

そのころ恵たちはどうと、

「へえ、そんな出会いだっただ。」

桜が笑いながら恵に行った。

「うん、それからしばらく一緒に居て……そうだ、桜と道君の出会いって？」

恵はそう言っただけでコップの縁に口をつけて、中に入っているコーヒ―を口腔内に運んだ。

「うん、そうだねえ、高校の同級生だったんだよ。」

「高校の？」

恵はカップを机に置きながら言った。

「そつ、最初であったときは、いろんな特技が使えて、運鈍神経抜群の、武術習ってて、カッコいい男の子が、転校してきたって、言っ噂を聞いたんだ。」

「へえ。」

「私はそう言う男子があまり好きじゃないから係わらない様にしてただけど、3年生の時の遠足の登山のときにね、私一人道に迷っちゃって……。」

「それで、道君が助けてくれたんだ……。」

恵が笑顔で茶化すように言つと、桜は顔をその名とおり桜色に染め、小さくうなずいた。

「それで、仲良くなって、たまたま、進学先が同じ大学だったこともあって、気がついたら付き合っていた……って訳……。」

「へえ、そうなんだ……。」

「それにしても道君たち遅いね。」

「うん、どこ行ってるんだろっかね？」

恵と桜はそう言つと、窓の外を眺めた。

剣たちは……

「ふっ！」

「っ、たあっ!!！」

クウガマイティフォームは、ディケイドめがけて拳を突き出す、ディケイドは右にサツとかわして右足を軸にして、回し蹴りを決めた!!！

「ぐっ！」

ディケイドの放った蹴りは、見事クウガMマイティの腹に命中、クウガMは後ろに下がった。

「武術をやっていると言ったのは本当みたいだな、まさかもう俺の動きを見切っているとは……。」

「お前だってやるなあ、俺の攻撃をくらってはいるが、クリーンヒットしない様に攻撃を流しているからな……。」

二人は仮面の中で笑うとお互いを褒めあった。

「だが。」

「まだまだこれからだ!!」

デイケイドは左拳をクウガMは右拳を握りしめ、二人は同時に走った!!

第五話 『不安』 (後書き)

クウガ編終了まであと4話ぐらいのつもりです。次の世界がどこになるのか楽しみに！！

第六話 『覚悟』（前書き）

連続原稿です、今回はオリジナルディケイドと、クライマックス
ヒーローズのディケイドを合わせた感じの話になっています・・・
。。。

第六話 『覚悟』

「うおおおおおおおつ！！」

「たああああああつ！！」

ディケイドとクウガマイティはお互いの利き腕を握りしめると勢いよく走り出した！！

「たあつ！！」

「やあつ！！」

お互いは途中で足を止めると同じ間合いで、同じ速さで、握りしめていた、お互いの利き腕を伸ばした！！

二人の拳がぶつかり会った瞬間、衝撃波のようなものが一気に爆発したように飛び出して、周囲にあった草や木を勢いよく揺らし、小枝や、小さな木は折れて吹っ飛んだ！！

「たあつ！！」

二人はしばらく拳と拳をぶつけ合い、つばぜり合いのようになっていた。

だが、クウガMは右腕を下げると、ディケイドに向かって左腕を突き出し。ディケイドの腹を殴った！！

「ぐっ！！」

ディケイドは腹を押さえてうづくまる、クウガMはその瞬間、ディケイドに一気に接近して、頭、腹の順で1、2パンチをディケイドに放ち、

「とおりやつー!!」

ディケイドめがけて飛びあがると右足を突き出した!!

「ぐおおおつー!!」

ディケイドはそのまま後ろに吹っ飛んだ!

「ぐつ……」

ディケイドは体を反転させて地面に膝をついた形で着地するとゆつくりと起き上がった、

「やりやがったな!今度はこっちの番だ!!」

ディケイドはそう言って、ライドブッカードをガンモードに変え、左手に持つと銃口をクウガMに向けて、

「はあつー!!」

引き金を引いた!!

ライドブッカードからはマゼンタ色に輝く銃弾が撃ちだされ、クウガMの体に命中した!!

「ぐおっ！」

クウガMの体から火花が飛び散り、クウガMは地面に膝をついた。

「お次はこれだ!!!」

ディケイドはライドブツカーからカードを一枚引き抜くとディケイドライバーに装填した。

ATTACK RIDE BLAST

ディケイドはライドブツカーをクウガMに再び向けて引き金を引いた!!!ライドブツカーからは幾つものマゼンタ色に輝く銃弾が撃ちだされ、クウガMに向かって飛んで行った。

「くっ!超変身!!!」

クウガMはすぐに立ち上がると、両腕を開いて叫んだ!するとクウガMの体が、銀色の鎧をもったタイタンフォームに変わった。それと同時にディケイドの放った銃弾がクウガTタイタンに命中、だが

火花を散らすだけで、ダメージは受けていなかった。

「今度はこっちの番だ」

クウガTはそう言うそばに落ちていた、木の棒を拾う、すると木の棒がタイタンソードに変わり、クウガTはタイタンソードを右手に持ってディケイドにタイタンソードの先端を向けた。

「剣勝負か……燃えるぜ!!」

ディケイドはそう言うと、ライドブッカーをガンモードからソードモードに切り替え、クウガTめがけて走った!!

「はあっ!!」

ディケイドはクウガTに向かって、ライドブッカーを縦に振り下ろした!!

「かつてえ……。。。」

ディケイドの振り下ろしたライドブッカーはタイタンフォームの頑強な鎧に弾かれてしまった!!

「こっちの番だ……たあっ!!」

クウガTはタイタンソードを両手でつかんで、真下から突き上げるようにしてタイタンソードを振った!!

「ぐっ!!」

ディケイドは、ライドブッカーでタイタンソードを受け止めた!だが

「(重い……やっぱり、パワー系か……)」

ディケイドは今にも吹き飛ばされそうになっていた、その時!

「えっ!!」

急にディケイドの体が前のめりになった、なぜか、それは

「っ、たあっ!!！」

クウガTがディケイドに強烈な一撃を与えさせるために、力を緩めたのだ!

そのため、体重を前にかけて、力を入れていたディケイドは、急に倒れそうになったのだ、そしてクウガTは前のめりに倒れてきたディケイドめがけてタイタンソードを振り上げ、ディケイドの腹を切り裂いた!!!

「ぐはあああっ!!！」

ディケイドは体から火花を散らして後方に吹っ飛ばされた!!!

「ぐう……強えっ……」

ディケイドは地面を滑るが、すぐに起き上がると、切られた箇所を押さえていた。

「だが、剣勝負で俺に勝てると思うな!!！」

ディケイドはそう言つとライドブッカーからカードを一枚引き抜いた。

ATTACK RIDE SLASH

「うおおおおおっ!!」

ディケイドはライドブッカー、ソードモードを構えてクウガTめがけて走った!!

「たあっ!!」

クウガTはディケイドめがけてタイタンソードを突き出した!!
だが

「よつと!!」

ディケイドは飛び上がると、クウガの背後に着地して、がら空きになった背中の黒いスーツの部分に向かってライドブッカーを横に振った!!

「ぐあっ!!」

クウガTの体から火花が飛び散り、地面に倒れた。

「タイタンフォームはパワーも防御力もあるだが、その分行動が鈍くなるし、生身の部分、つまり鎧がないスーツを狙われると、弱いんだ……」

ディケイドは目の前で倒れている、クウガTを見ながら言った。

「くっ、まさか、こんなに早く弱点が見破られるとは……ちよつと悔しいぜ。」

クウガTはそう言いながら立ち上がった。

「やっぱり覚悟を決めるしかないみたいだな……。」

クウガTは呟くと、両腕を開いた、そして

「超・変・身っ!!」

クウガTがそう叫ぶと彼の体を、黒と金の雷が覆い、クウガTは黒い闇と言われる、アルティメットフォームに変身した。

「……行くぞ……剣!」

クウガアルティメットはそう言うと、空間から雷を呼び出して中央の宝玉が黒い、タイタンソードに似た大剣、ライジングタイタンソードを召還した

「来い!!」

デイケイドはライドブツカーソードモードを構え、二人は、同時に走った!!

「はあっ!!」

「やあっ!!」

デイケイドとクウガ^{アルティメット}は同時にお互いが持った剣を振り下ろした

!!

「ぐっ！」

「うっ！」

二人の握る剣はぶつかり合い、つばぜり合いになった、その時！二人の立っている空間が歪んだ！！

「あんっ？」

「はっ？」

二人はいったん、離れて周囲を見渡した、すると、二人はどこかの山の中にあるボロボロになった、お寺の前に来ていた。

「いったい何が……。」

クウガUは呟いた、その時。

「兄貴、ここにもいたよ、ライダーが。」

突然、ボロボロに錆びれた寺の影から声が聞こえ、二人は声のしたほうを見た、するとそこには、緑と茶色のバツタに似た仮面ライダーが二人立っていた。

「ああ、行くぜ？相棒。」

緑のライダー、キックホッパーは隣にいた茶色のライダー、パンチホッパーに呼びかけ二人は同時に歩き出した。

「はっ！」

そしてキックホッパーはクウガウ、パンチホッパーはデイケイドに向かって攻撃を仕掛けてきた。

「っと！邪魔すんなよっ！！」

デイケイドはそう言うと、パンチホッパーが攻撃してきた拳を、左手で受け止め、自分側にひねると、背中を数発殴った。

「ぐっ！」

「邪魔だ！ねてろおっ！！」

デイケイドはそう言うと、パンチホッパーをお寺めがけて放り投げた。

「相棒！？てめえ！！」

キックホッパーはデイケイドに向かって飛びかかろうとした、だが

「チヨイ待ち、あんたの相手はオ・レ。」

クウガウが、キックホッパーの肩を掴むと、顔面に向かって右腕を突き出して吹っ飛ばした！！

「さて、やるつか・・・？」

「ああ。」

ディケイドとクウガUはうなずくと今度は武器を持たず二人は走った!!

「はあっ!!」

クウガUはディケイドめがけて左腕を突き出した

「たあっ!!」

ディケイドは屈んでかわすと、横腹めがけて裏拳をくらわした!!

「やるな。」

「お前もな!!」

二人は距離を置いて、お互いに軽く笑った。そして走り出そうとしたら。

「お前ら今俺たちを笑ったな？」

キックホッパーが起き上がってきて、ディケイドとクウガUに尋ねた。

「しつけくぞ、お前らの相手は、あとでしてやるから、おとなしく寝てろ。」

ディケイドはキックホッパーとパンチホッパーに向かってウザそうに言いながら軽くあしらった。

「ふざけるな……」

「俺たちを馬鹿にするなあっ!!」

と、叫びながらディケイドめがけて走ってきた!!

「たあっ!!」

「はあっ!!」

二人はディケイドに接近すると、パンチホッパーは右腕を、キックホッパーは右足をディケイドに突き出した!!

「ぐおっ!!」

ディケイドは腹を押さえて後ろによろけた。

「へっ、思ったよりやるじゃねえか!!」

ディケイドは軽く笑って言った、すると

「今笑ったな？笑ったよな!!」

なぜか分からないがキックホッパーの逆鱗に触れたようで、キックホッパーは怒りながら、ディケイドに近寄った。

「はあっ!!」

キックホッパーはさっきよりも素早くディケイドに近寄るとディケイドの鳩尾みぞおちに向かってひざ蹴りを喰らわした!!

「ぐっ!!」

デイケイドは腹を押さえてうずくまった。

「行くぜ？相棒。」

「兄貴とならどこまでも。」

二人はうなずくと、ベルトの端に手をあて、

「クロックアップ!!」

といった、すると

C L O C K U P !!

クロックアップが発動、二人は超高速の世界に入った。

「まじかよ、カブト系のライダーだったのか……。」

デイケイドはそう言うと、対抗できるカードを取り出そうとした、その時!!

「ぐっ!!」

急に後ろから殴られたかのように前のめりになった。

「くそ……があっ!!」

今度は横面を殴られたように、倒れた。

「なめんじゃねえ!!」

デイケイドが立ち上がろうとすると。

「ぐはっ」

背中が突然殴りつけられ、地面に倒れこんだ。

CLOCK OVER

そしてクロックアップが解除され、デイケイドを踏みつけているキックホッパーとその横で、退屈そうにしている、パンチホッパーがいた。

「さあて、終わりだ。」

「ああ。」

キックホッパーとパンチホッパーの二人はうなずくと、二人はベルトのバックルにある、バッタのような物にふれ

「「ライダージャンプ!」」

RIDER JUMP

技の名前を叫びながら、バッタの後ろ脚を前に倒し、すると、二人の足から緑色の光が出て地面を蹴り飛ばした!!

その時、キックホッパーの下にいたディケイドはキックホッパーの強力な蹴りをくらって地面に埋まった、そして二人は空中で

「ライダーキック!!」

「ライダーパンチ!!」

二人は技の名前を言いながらバツクルについている、バツタの後ろ脚を元の状態に戻した。

R I D E R K I C K

R I D E R P U N C H

キックホッパーはディケイドめがけて両足を、パンチホッパーは右腕を振り下ろそうとした、だが

「やめろおおおおおつ!!」

クウガUが叫びながら、バイロキネシスと呼ばれる炎を操る技を使おうと、右腕を突き出した、その時!!

「ぐはっ!!」

「うあっ!!」

クウガUの手のひらからは炎と雷が同時に飛び出し、キックホッパーとパンチホッパーを吹っ飛ばした。

「剣!大丈夫か・・・?」

クウガUはディケイドに駆け寄ると上体を起こした。

「ああ、悪いな・・・」

ディケイドはゆっくりと起き上がった、するとクウガUの体から電気が迸った。

「剣は殺させない、剣が死ねば、悲しむ人がいる。俺はだれの涙を見たくない。身近な人なら尚更だ！！」

クウガUが叫ぶと、周りから出ていた雷がクウガUに吸収され、クウガUの体が黒に、金色の装飾が体中に施された形態、クウガライジングアルティメットへと変身した。

「おまえ、それは・・・?」

ディケイドが小さくつぶやくと、ライドブツカーからカードが三枚飛び出してきた。ディケイドがそれを手に取った。

「なるほど見せてもらったぜ、お前の覚悟。」

ディケイドがそう言うと、キックホッパーとパンチホッパーは「分が悪い」という顔になり、灰色のオーロラをくぐって、この世界から出た。

それと同時にディケイド達は恵と桜がいるバイク店の前に帰ってきていた。

「……………これが闇を超える力なのか……………」

クウガRUは自分の体を見ながら静かに言った。

「わからん、それよりも体に違和感はある？」

「ない、むしろなんで心がとつてもすがすがしい……………」

クウガRUはそう言つと変身を解いた、デイケイドも同時に変身を解いた、すると

「道！大変だ！！未確認生命体が町で暴れてる！！」

パトカーが走ってきて、中から血相を抱えた一条が飛び出してきた。

「わかりました、おれと剣で、倒します。」

道はそう言つと、店の外に止めていたビートチェイサーに乗った。

「ああ、兎に角、現場に行くぞ！！」

剣も店の中に止めていたバイクを出してきて言った、その時、何かの異変に気がついたのか、恵たちが出てきた。

「恵、ちよつくら、害虫駆除に行つてくる。」

剣はヘルメットをかぶるとヘルメットのカバーを下げて言った。

「うん、わかった頑張ってるね。」

恵はゆっくりとうなずいた。

「じゃあな、桜行ってくるよ。」

「うん、わかった。でも、その前をお願いを……。」

「わかってる、心を闇で閉ざさないこと、力におぼれないこと、そして」

「笑顔で帰ってくること。」

「だろ？」

道は笑顔で言った、そしてサムズアップして

「行ってくる。」

そう言って、ヘルメットのカバーを下ろし、剣と一緒に、バイクを走らせた。

第六話 『覚悟』 (後書き)

第七話 『超絶』(前書き)

クウガ編まで終了まであと少し。

第七話 『超絶』

町の中心部、そこでは突然黒い霧とともに、グロンギが現れ、人々を襲っていた。

「ギベー！リントー！！」

飛蝗に似たグロンギは、そばにいた小さな子供を襲おうとした、その時！

「たあっ！！」

剣の乗る赤いバイクが、そのグロンギを跳ね飛ばした！！

「大丈夫か？」

剣はバイクを止めると子供に駆け寄った。

「うん・・・」

子供は恐る恐るうなずくと剣は笑顔で。

「速くここから逃げる。」

と言って、子供をその場から離れた。

「やれやれ、多すぎるんだよ。いったい何体いるんだ！！」

剣は周囲を見渡した、すると、黒い霧が発生したと同時に、蜘蛛

や蝙蝠、トカゲやピラニア、などを模した様々なグロンギが現れた。

「「「ちや「ちや言ってるないで、倒そうぜ？」」」

道は剣の隣に走ってくるとバイクを止めて剣の隣に降りた。

「ああ、んじゃ、行くぜ！！」

「おう！！」

剣と道は並んで立つと、剣はディケイドドライバーを腰に、道はアークルを出現させ、

「変っ！」

「身っ！」

K A M E N R I D E D E C A D E

剣と道はディケイドとクウガに変身、剣はライドブッカーをソードモードにして、クウガMは、そばにあった木の棒を拾って、ドラゴンフォームに変身した。

「行くぞ！」

「おう！！」

ディケイドとクウガDはお互いにならずくと、グロンギの群れに向かって突っ込んだ！！

「はあああああああつ！たあつ！！」

ディケイドはライドブッカーを左から右に向かって振り、サイ、ピラニアを模したグロンギを切り裂いて、倒した。

「たありやつー！」

クウガDは、バツタと蝙蝠を模したグロンギをドラゴンロッドを二体の腹に向かって突き刺すと、前方にいる、蜘蛛やネズミを模したグロンギがいるほうに放り投げ、4体を同時に爆発させた！！

その頃、何処かの空では

「クウガ、やはり貴様は俺でないと倒せんな……今すぐ行ってやる、この世を闇に葬るために……。」

ガミオは呟くように言うと、どこかに向かって飛んで行った……。

ATTACK RIDE ILLUSION

デイケイドはアタックライド、イリュージョンを使用して5人に分身、さらにライドブツカーをガンモードにすると、

「タあつ!!」「」「」

ATTACK RIDE BLAST

5人は同時に飛び上がり、ブラストのカードを使用、ライドブツカーの銃口を何体もいる、バツタや蜘蛛、サイにピラニアのグロングに銃口を向け、引き金を引いた!!

「ぐあああああああつ!!」「」

「がああああつ!!」「」

「がはあ!!」「」

ライドブツカーから、マゼンタ色の弾がはなたれグロング達に命中、彼らは声をあげて爆発、固まっていたため、爆発に巻き込まれかなりのグロングを爆発させ、一掃した。

「どうだ!!」「」

デイケイドが地面に着地すると、もとの一人に戻った、その時!!

「がああつ!!」「」

「うおおおつ!!」「」

デイケイドの背後からトカゲとアリクイを模したグロンギが襲いかかってきた。

デイケイドはライドブツカーをソードモードにして、

「たあっ！！」

アリクイのグロンギに向かってライドブツカーを縦に振り、体を切り裂くと、そのままの勢いに任せて。右から左に向かってライドブツカーを振った。

「ぎゃあああああ！！」

「ぐああああああっ！！」

デイケイドに切られた二体のグロンギは声をあげて爆発、四散した。

その頃クウガは……

「はあっ！！」

クウガはドラゴンフォームから雷の力を追加したパワーアップフォーム、ライジングドラゴンに変身していた。

「やあっ！！」

クウガRDは両手に持った、ライジングドラゴンロッドを振りまわしながら、ピラニアやアンコウ、そして数多くいるネズミとトカゲのグロンギを倒していた。

「たあっ!!」

さらにクウガRDは、自分の左右にいたイカとシマウマのグロンギの腹にライジングドラゴンロッドを突き刺すと、持ち上げて

「うおりゃあっ!!」

自分に向かって歩いてきている、グロンギの群れに向かって投げ飛ばした!!

「があああああああああっ!!」

二体のグロンギがグロンギの群れの中に突っ込むと、二体の爆発に巻き込まれ、一気にグロンギの群れは大爆発を起こして、すべて死んだ。

「終わったか……。」

クウガRDはそう言うと、マイティフォームに戻った。

「道!!」

ディケイドがクウガMのもとに歩いてきた。

「終わったな。」

「ああ。」

ディケイドとクウガMはお互いにサムズアップした、その時！！

「さすがだなクウガ！」

空から声が聞こえ 二人は上を向いた、そこにはガミオがいた。

「俺が生み出したグロンギを倒すとは、なかなかやる、次はこれだ！！」

ガミオはそう言うのと黒い霧を発生させ、グロンギをよみがえらせた。

「！こいつらは……。」

クウガMは驚いた、なぜなら。

「こいつらはグロンギの中でも最強の戦士たちだ、貴様らに倒せるかな……。もし勝てたら、貴様がダグバを倒した場所で、待つ……。」

ガミオはそう言うと、飛び去った。

「道？こいつらは？」

ディケイドはクウガMに尋ねた。

「こいつらはグロンギの中でも最強の戦士たち、ゴの戦士たちだ、ライジングの力を使わないと勝てないぐらいの強さを持っているや

つがごろごろいる、それがまさかこんなに。」

クウガMとディケイドは、目の前を見た、するとそこにはイノシシ、サメ、ヘビ、バッタ、カメ、バッファロー、サソリ、ヤマアラシ、フクロウ、を模した、ダグバとガミオの『ン』と呼ばれる種属を除いたらグロンギで最強と言われているゴの集団のグロンギが、ざっと見て30体はいた。

「だが負けるわけにはいかない、行くぞ道!!」

「おう!剣!!」

ディケイドとクウガは拳を握りしめるとゴの一族の群れに向かって走って行った。

第七話 『超絶』（後書き）

さあて、あと少しでクウガ編、終わりです。次回もお楽しみに！！

それと、もしよろしければアンケートも答えてみてください。

第八話 『決着』（前書き）

クウガ編終了まであと一話。

第八話 『決着』

「くそっ、なかなか減らねえ……。」

剣は呟くように言った、戦闘が始まってかなり時間はたっている、だが、グロンギの数はあまり減っていない。おそらく倒せて3体ぐらいが限界だろう、

無理もない、なぜならデイケイド達が戦っているのはグロンギ族の中でガミオとダグバを除けば最強の戦士の集団と戦っているからだ、さらに唯でさえ強いのに、そんな強いのが30もいれば、時間もかかるうえ、変身も解けてしまうだろう……。

「なんか、心が折れてしまいそうだな……。」

道は静かに言った、すると

「諦めんのかよっ!!」

隣にいた剣が道の肩をどついた!!

「えっ。」

道は突然のことで訳が分からず目を丸くした。

「お前はみんなの笑顔を守るために戦ってるんだろ!!こんなところで折れるのか!!諦めんのか!!」

剣は道の胸倉をつかんで叫んだ!!

「お前言ったよなあ！ダグバのときみたいに多くの人を殺させないって！！だったら諦めてんじゃねえ！折れるな！！お前には守れる世界があるんだ！！まだ支配されていない世界なんだ！！この世界を守っていけるんだ！！」

剣はそう言うと、道を突き飛ばした！！

「命ある限り戦い続ける、それが仮面ライダーだろ！！」

剣はそう言うと、腰にディケイドライバーを巻いた。

「ふっ、そうだな、悪い、弱気になって。」

道は起き上がりながら言うと、アークルを出現させた。

「行くぞ！！」

「っしゃ！！！逆転だ！！」

「変身っ！！！！」

K A M E N R I D E D E C A D E

剣と道は、同時に叫んで、仮面ライダーディケイドと、体全身が黒いマイティフォーム、アメイジングマイティに変身した。

「道、ちょっとくすぐつたいけどいいか？」

ディケイドはクウガAMに向かってライドブッカーからカードを

出して言った。

「えっ、何が!!」

クウガAMが戸惑っている、だが、ディケイドはお構いなくカードをドライバーに装填した。

FINAL FORM RIDE KU KU KU KU
GA

「はっ。」

ディケイドはそう言ってクウガAMの背中に触れた、するとクウガAMの体が変わっていき、体全身が黒でところどころ金色のラインが通っている、巨大なクワガタムシ、アメイジングクウガゴウラムに変身した。

「ええええええっ!!ゴ、ゴウラムウウウウウウウツ!!」

クウガゴウラムはめちゃくちゃビビっていた。

「道、これが俺とお前の力だ、行けえっ!!」

ディケイドはクウガゴウラムにふれると、右腕を突き出して突っ込むように言った。

「仕方無い、うおりゃあっ!!」

クウガゴウラムはグロンギの群れに突っ込んでいくと、先ほどま

で倒すのに時間がかかっていた、ゴのグロンギを一気に倒した。だが

「まだまだ減らんか、よしっ!!」

ディケイドは何かに気がつくのと、ディケイドライバーにカードを一枚装填した。

FINAL ATTACK
RIDE KUKUK
UGA

ディケイドがカードを装填すると急にクウガゴウラムの体が輝いて、そばにいたグロンギを挟み込んだ、そして

「はあああああっ!!」

クウガゴウラムは怪人を挟み込んだままでディケイドのいる方向まで突っ込んだ、ディケイドはそれを見ると走り出して。

「たあっ!!」

飛び上がって左足を突き出して、クウガゴウラムがつかんでいたフクロウと海へびのグロンギを倒した。

「ふう〜。」

「まだ居やがるな。」

クウガゴウラムは元に戻りながら言い、剣はクウガAMの隣に行きながら言った。

「道！まとめてやるぞ！！」

「ああ、まかせろ！！」

クウガAMは大きくなずくと両腕を開いた！！するとクウガAMの周りを電気が包み、クウガはその上の段階、アルティメットフォームに変身した。

「行くぞ！！」

「おう！！」

FINAL ATTACK RIDE DE DE DE D
ECADE

ディケイドとクウガUは同時に走り出すと、同じタイミングで飛び上がった一回転、

「ダブルキック！！」

ディケイドは左足を、クウガUは右足を突き出した！それと同時にディケイドの前には彼の顔を模したカードが並んだ。そして

「たあっ！！」

「うおりゃああっ！！」

ディケイドはカードをくぐりながら相手を蹴る、『ディメンションキック』を、クウガUは炎をまとった右足で相手を蹴る『アルティメットキック』を同時に放った！！

「ぐはあああああああああつ!!」

「うわあああああああつ」

二人のダブルキックをくらったグロンギは声をあげて爆発、すべて死んだ。

「はあゝ、疲れた……。」

「同じく……。」

ディケイドとクウガはそう言つと変身を解除した。

「少し休憩……。」

「賛成……。」

剣と道はそう言つと、しばらく、休んだ……。そして

「行くんだろ？」

「ああ。」

「一条がやってきて、道は、ガミオとの決戦に行くことにした。」

「もう少し休んだほうが……。」

「一条は道に提案した、だが、」

「もう2時間も休憩しましたし仮眠もとりました、早く行かないとまたいろんな人の笑顔が……。」

道はそう言うとビートチェイサーに乗った。

「道、俺も行くぜ。」

剣はそう言うと、バイクにまたがった、そして、一条はパトカーに乗り込んだ。

「じゃあ、行きますか……。」

「ああ。」

そして剣と道、一条はお互いの車を走らせた、目指す場所はおかつてクウガとダグバが戦った場所、九郎ヶ岳に向かった……。

そして

「ここから先は俺が行く。」

道はバイクを止めた、そこは道がダグバと戦いに行くために、バイクを止めたのと同じ場所だった。

「ああ。」

「わかった。」

剣と一条はゆっくりうなずいた。

「道、がんばれ、お前ならいける。自分の正義を信じて闘え、みんなの笑顔のためにな。」

剣はそう言うとサムズアップした。

「道、決着をつけてこい。」

一条もサムズアップした。

「わかりました、じゃあ見て下さい。俺の変身……。」

道はそう言うとアークルを出現させ、無言で右腕を左前方に突き出し、左腕はアークルの上におくと、ゆっくりと右腕を右横に移動させながら。左腕腰に持つてくると右腕を左腰まで下ろし、左手の上に乗せると左手の甲でアークルのスイッチを押し下げ、両腕を開いた!!!

すると、道の体の周りを電気と黒い光が包み、道はアルティメットを、究極の闇を超えた存在、ライジングアルティメットになった。

「じゃあ行つてきます。」

クウガRUはそう言うと二人にサムズアップして、走っていた。

「最後の決着だ、われらグロンギが勝つか、貴様らリントが勝つか、のな……。」

ガミオはクウガRUが来たことを構えながら静かに言った。

「お前を倒してみんなの笑顔を守る!!」

クウガRUはそう言って、右手を握りしめ炎をともすと、ガミオめがけて走った、ガミオも右腕を握りしめ走り出し。

「たあっ!!」

「はあっ!!」

二人は同時に拳を突き出した、それと同じタイミングで、空は黒い雲に包まれ、黒い雨が降った……。

「雨だ……。」

「ああ。」

剣と一条は道が走って行った先を見てつぶやいた、すると、ものすごい爆発音が周囲にこだました。それからしばらく、怒涛の叫び声、何かが砕ける音、巨大な金属音、爆発音、地鳴りが聞こえ始めた、それと同時に雨脚が強まる……。

そして

「うおりゃあああああああつ!!」

道の、クウガRUの今までグロンギにとどめを刺してきた時の、とび蹴りをするときの叫び声が聞こえ、森の向こうでは火柱と同時に、オオカミの叫ぶ声が聞こえ、地鳴りに爆音が聞こえた!!そして音も止んで、火柱が消えると、雨が止んで、空を覆っていた、黒

い雲はきれいさっぱり消え、白い雲が浮いている青空がのぞいていた。

「道!!」

「道!!」

剣と一条は道のもとに走ると、そこには、大きなクレーターがあり、体がボロボロになった道が立っていた、道は剣たちのほうを振り向くと。

「勝った!!」

と笑顔でサムズアップし、剣たちも笑顔でサムズアップを返した。

第八話 『決着』（後書き）

久しぶりの更新です、クウガ編はあと一話で終わります。

あと、オーズ終了までに完結すると言っるのはおそらく難しいですが、オーズ終了までなんとか、コンプリートフォームは出したいと思います。

次回もよろしくお願いします。

第九話 『笑顔』（前書き）

今回で、クウガ編は終わりです。

第九話 『笑顔』

道がガミオを倒したその日の夜、剣たちは、バイク屋で、パーティーをしていた。

「これでこの世界も平和だな。」

剣は道に向かって笑顔で言った。

「ああ、そうだな。」

道はグラスに口をつけて、中に入ったお酒を飲んだ。

パーティーと言っても、来ていたのは一条と桜だけで、一条も仕事があるということですぐに帰った。

「剣、お前、この世界から旅立つんだろ？」

道は剣に尋ねた。

「ああ、この世界で俺のやるべきことは終わったからな……次の世界に行く……。」

剣は静かに言うつと目を閉じてグラスの縁に口をつけて入っていた、お酒をすべて飲み干した。

「そうか、そう言えば、ガミオを倒したとき、あいつがこんなことを言っていた。」

「どんなことだ？」

「それはな……。」

「止めだ!!！」

クウガライジングアルティメットは必殺技の態勢をとると、体がぼろぼろで今にも倒れそうになっているガミオに向かって走ると、飛びあがって空中で一回転して

「うおりゃあああああああつ!!！」

必殺技の一つである、ライジングアルティメットキックをガミオに向かって放った!!！」

「ぐはあああああああつ!!！」

ガミオは声をあげて吹っ飛んだ、そしてクウガが地面に着くと、体から火花をあげて立ち上がった。

「俺をよみがえらせたのは、鳴滝だ……うわああああああつ!!！」

ガミオはクウガにそう言うと声をあげて爆発！！絶命した。

「やっぱり、鳴滝だったか……。」

剣は苦笑いをして言った。

「なあ、剣、鳴滝のことを知っているのか？」

道は剣に尋ねた、剣はゆっくりと頷いて

「あいつはディケイドを倒すためなら、どんな世界の住人も犠牲にしてもかまわないって思っているやつだ……。」

「まじか……。」

「ああ。マジだ……。」

剣がそう言うと、しばらく二人の間に沈黙が流れ

「鳴滝のほう破壊者だな……。」

道は鼻で笑った。

「実はあいつには、もうひとつ秘密があるんだ……。」

「もうひとつの秘密?」

「ああ、実はな……」

剣は道に静かに鳴滝のもう一つの秘密を言った、すると

「じゃあ、あいつは今もいろんな世界で。」

「ああ、たぶん、俺が破壊者とか、わけのわからんことを言いふらしてるだろうな……。まあ、だが、今度会ったら、つぶす！」

剣はそう言つと拳と拳を合わせた。

「まあ、こんな暗い話はやめて、もっといろいろ楽しい話しようぜ!」

「そうだな!」

剣と道はそう言つと、お互いの彼女が作った料理がある食卓に向かった。

そして翌日……

「もう行くのね？新しい世界に。」

桜が恵と剣に尋ねた。

「うん、じゃあね、桜。楽しかったよ。」

恵は笑顔で桜に言うと、桜も笑顔で頷いた。

「じゃあな、宮本。別の世界に行ってもがんばれよ。」

見送りに一条と、少しだけだが一緒に戦った杉田が来ていた、剣は笑顔で。

「ハイ、一条さんも杉田さんもうありがとうございました。」

と言った。

「剣、また会おうぜ！」

道は剣に近寄ると笑顔で言った。

「また・・・？」

剣は首をかしげた、ここで次の世界に行ってしまうば、もう会うことはない、なのに道は『またな』という言葉を使ったのだ。

「ああ、俺もお前も旅をしている。俺は、この世界を、お前は様々な世界を、だけど、俺ももしかしたら気付かないうちに、世界を

渡り歩くかもしれない、可能性としては少ない、だが、俺達は仮面ライダーだ、世界が必要とすれば、俺達は巡り合えるかもしれない、だから、『また』なんだ。」

道は笑顔でそう言ったあと、サムズアップした。

「・・・そうだな、じゃあまたな！！また、何処かの世界で会おうぜ！！」

剣は笑顔でサムズアップして言った。道も笑顔でうなずき、剣と恵はバイク屋に入った。

「さあて、次はどこに行くのかな・・・？」

剣はそう言って、額縁の写真を見たと写真が光りだし、

「変ったね・・・。」

「ああ、次は龍騎の世界か・・・。」

剣は変わった写真を見ながらつぶやいた。

その写真は、赤い戦士と黒い戦士が、体全身が黒い甲冑を着た男と戦っているものであった。

第九話 『笑顔』（後書き）

クウガ編は終わり、次回からは龍騎編です。

剣「でも龍騎に鎧着けた黒い怪人なんていたか？」

それは見てからの楽しみだ。

恵「で、アンケートなんですけど。」

剣「龍騎編終了まで伸ばします。」

恵「あと、アンケートで出してくださったオリジナルライダーやオリジナルの人物は必ず、作品内には出すそうなので、皆さんどんどん送ってくださいね。」

剣「あと、追加でオリジナルの怪人や、オリジナルのフォームなども募集することにしたみたいだぞ。」

オリジナルライダーや怪人、人物、フォームなどは締め切りはありません、締め切りがあるのは剣たちに同行するライダーだけです。

剣、恵「それでは次回からの龍騎編もよろしくお願いします！
！」

お願いします！！

第一話 『ガラスの向こうの世界』（前書き）

今回から龍騎編突入！！

ドラゴンナイトジャナイヨリユウキノセカイダヨ

第一話 『ガラスの向こうの世界』

クウガの世界から、剣たちは旅立ち、龍騎の世界にやってきた・
・
・

「ねえ、剣君。仮面ライダー龍騎ってなんなの？」

剣たちは街の中を歩いていた、そこで恵が剣に尋ねた。

「ああ、鏡の世界、ミラーワールドで戦うライダーで、ドラグレ
ッダーっていう龍と契約した仮面ライダーだよ。」

「へえ〜。」

なぜ剣たちが街の中を歩いているか、それは、この世界のライダー、
仮面ライダー龍騎を探すためである。

そして剣たちは、何処かのビルの駐車場のようなところに、なぜ
か行った。

「なんでこんなところに来たの？」

恵は剣に尋ねた。

「こういふ場所から龍騎の敵、ミラーモンスターが出てきたりする
んだ。」

剣はそう言って歩きだした、すると二人の後ろにあったガラスか
ら何かが飛び出した！

「きゃあっ!!」

ガラスから飛び出した、赤と黒の皮膚をもった怪人、ゲルミュートは恵の体をつかんだ!!

「恵!!」

剣は後ろを振り向くと恵の腕をつかもうとした、だが

「ぎっ!!」

背中にX字型の、羽のようなものをつけたゲルミュートが、剣の行く手を阻んだ。

「剣君!!」

「恵!!」

そして恵はそのままガラスの中に引きずり込まれていった……。

それと同時に剣の行く手を阻んだゲルミュートも、ガラスの中に入った。

「っ、舐めやがって!!」

剣はそう言って、ディケイドライバーを取り出して、腰につけようとした、だが

「待てっ!!」

「ここは俺たちに任せろ!!」

剣の後ろから、ツンツン髪で黒髪の青年と、頭に青いバンダナを巻いた、青年が走ってきた。

「君はここから逃げろ!」

バンダナを巻いた青年は剣に向かって言うと、ガラスの前に立ちどくからともなく、黒いカードデッキを出した。

「彼女は俺たちに任せてくれ!!」

黒髪の男も、カードデッキを取り出した、そして

「KAMEN RIDER!」

と叫んで、腰に現れたベルトに、カードデッキを挿入、すると黒髪の青年の周りを赤い光がバンダナの青年の周りを青い光が包み、青年たちは仮面ライダーに変身した。

「龍騎とナイト!」

剣は青年たちが変身したライダーを見て驚いた。それはこの世界のライダーだったからである。

黒髪の青年は体が赤くて銀色のプロテクターを着けたライダー、ドラゴンナイトに、バンダナの青年は体全身が黒くて甲冑のようなプロテクターを着けた、ウィングナイトに変身した。

そしてドラゴンナイトとウィングナイトの二人はうなずくと、ガラスの中に入って行った。

「つと、俺も行かないと!!」

剣はディケイドライバーを腰につけて、ライドブッカーからカードを引き抜いて、

「変身っ!!」

と言いながら、カードをディケイドライバーに入れ、剣は仮面ライダーディケイドに変身、ディケイドはそのままガラスの中に入って行った。

ガラスの中の世界、ベントラ……

「ふっ！たあっ!!」

ウィングナイトとドラゴンナイトは、複数対いるゲルミュートと戦っていた。

「くっ、数が多い!!」

ウィングナイトはそう言うと、手に持っていた剣、ダークバイザーのつばの部分を開くと、カードデッキからカードを一枚取り出してそのカードをダークバイザーに装填した!

N A S T Y V E N T

どこからともなく黒い大きな蝙蝠『ダークウィング』が現れ、ダークウィングは体から超音波を発し、ゲルミュートたちを攻撃した!!

「今だグラン!!」

ウィングナイトはドラゴンナイトに向かって叫んだ、ドラゴンナイトはうなずいて、

S T R I K E V E N T!!

左腕についたドラグバイザーを前に押し上げて、開くと、カードデッキからカードを抜いてドラグバイザーにカードを装填して、ドラグバイザーを元に戻した!!

すると上空から龍の顔を模した、ドラグクローと呼ばれる武器が降ってきて、ドラゴンナイトはそれを右腕でキャッチした。

「はあああっ……」

ドラゴンナイトは、息を吐きながら右腕を引いて行き、

「たあっ!!」

一気に突き出した!!ドラグクローから炎がはなたれ、ゲルミュ
ートたちを焼き、すべて消滅させた。

「終わったな……。」

「ああ。」

「ところで、あの女性は……。」

「えっ!」

戦闘が終了したことで、ドラゴンナイトとウィングナイトは気を
抜いたが、恵がないことに気がついた。

二人は何度も周囲を見渡すが、恵はいない、と、そこに

「君たちが探しているのは、彼女かな?」

どこからともなく、声が聞こえ、2人は声のした方をにらんだ。

するとそこには、体が水色でサメに似たライダーと、体全身が黒
い鎧に身をまとった怪人、体が紫色で、コブラに似たライダーがい
た。

「ゼイビアックス!!」

「なぜおまえが!!」

ドラゴンナイトとウィングナイトは同時に叫んだ。

「この女性はこことは違う世界から来た、人物でね。ぜひ私の仲間にしたくてね。」

黒い怪人は笑いながら言った。

「別の世界……?」

「お前の隣にいる水色のライダーは誰だ!!」

ウィングナイトはゼイビアックスの言葉に首をかしげ、尋ねようとした、だが、ドラゴンナイトがゼイビアックスの隣にいたライダーを指して叫んだ。

「彼は、新しい仲間だよ。大シヨッカーという組織から調達してきた。」

「俺の名は仮面ライダーアビス、この世界を破壊するために大シヨッカーからやってきたライダーだ。」

水色のライダーは静かに言った。

「この世界を破壊するだ!!」

「そんなことはさせない!!」

ドラゴンナイトとウィングナイトは構えながら言った。

「ついでにその女性も助ける!!」

ドラゴンナイトは拳を握り締めて叫んだ!!

「できるものならやってみろ!!このライダーたちを倒すことができたらな!!」

ゼイビアックスが叫ぶと、突然、彼の後ろから、オーロラが発生、そこから体が頭に角を生やした茶色っぽいライダーと黄土色で蟹に似たライダーが出てきた。

「仮面ライダースピアー!!」

「仮面ライダーインサイザー!!」

ドラゴンナイトとウィングナイトは驚いた、なぜなら彼らは一度、ドラゴンナイトとウィングナイトの手によって倒されているからだ。

「彼らは確かに、お前達の手によって、ベントされた。だが、大シヨツカーの力で、別の世界から、呼び寄せたのだ!!」

ゼイビアックスはそう言つと、高笑いした。

「そこにいる女性を救出できるものならやってみろって言ったな、ならやってみよ!!」

どこからともなく人の声が聞こえた、するとバイクのエンジン音がゼイビアックス達の背後から聞こえ、彼らは後ろを振り返った。

すると、赤いバイクにまたがったディケイが走ってきていた。そしてディケイは仮面ライダーインペラーを跳ね飛ばした！！

「恵は返してもらおう。」

ディケイはバイクを止めると、ゼイビアックスの方を見て叫んだ！！

第一話 『ガラスの向こうの世界』（後書き）

龍騎の世界突入しました。

剣「またんかいつゴルアツー!!」

な、なんだよ……。

剣「何が龍騎の世界じゃい!ドラゴンナイトじゃねえか!」

ドラゴンナイトにはまってんだから仕方ないじゃん、それにあつちの方がライダーと言うかヒーローって感じるし……。

剣「まあ、それは認める。」

それより剣、恵、捕まっただじゃんどつする?

剣「もちろん、助ける!」

そうか、じゃあ次回!!

第二話 『スシタリ』(前書き)

第二話 『ヘンタラ』

「わるいが恵は返してもらおう。」

ディケイドはライドブッカーソードモードを構えながら、黒い鎧を着た怪人、ゼイビアックスに向かって言うと、一気に走った！！

「ふっ！」

「たあっ！！！」

ディケイドが走るのと同じタイミングでゼイビアックスの隣にいた蟹のようなライダーと、ガゼルのようなライダー、シザーズとインペラーが走ってきた。

「邪魔だあっ！！！」

ディケイドはそう言ってライドブッカーを振り、2人の仮面ライダーを吹っ飛ばした。

「なんて強さ、將軍お下がりください。」

ゼイビアックスに向かって隣にいたコブラを模したライダー、ストライクが言うと、前に出た。

「仮面ライダー王蛇か……………」

ストライクが前に出るのを見たディケイドは、足を止めた。

「この前のときみたいにつまきいくと思つなよ!!」

デイケイドはライドブツカーを左手で握ると、ストライクに向かって振り下ろした!!

「俺はストライクだ!!王蛇ではない!!それに貴様のことなど知らん!!」

ストライクは、手に持った、ベノバイザーでデイケイドの攻撃を受け止めて言った。

「はあっ!!」

さらにストライクは力を入れてデイケイドを、押した。

「っ!!」

デイケイドは後ろに飛んで距離を置いた。

「俺を攻撃したのは他の龍騎の世界の王蛇と言つことか……」

デイケイドは呟くとライドブツカーからカードを一枚引き抜いた。

「悪いが恵はさっさと返してもらおう!!」

デイケイドはそう言うと、引き抜いたカードをデイケイドライブに装填した。

ATTACK RIDE ILLUSION

デイケイドの体がマゼンタの色の光に包まれ、5人に分身した。

「行くぞ!!」

分身した5人のデイケイドは、ライドブツカーをガンモードに変えると、5人は同時に飛び上がった。

「行くぜ!!」

一人のデイケイドが4人のデイケイドに向かって叫ぶと、4人は同時にうなずいて、ライドブツカーからカードを一枚、引き抜くと、デイケイドライバーに装填した。

A T T A C K R I D E B L A S T

5人のデイケイドはライドブツカーをゼイビアックス、ストライク、鮫を模したアビスに銃口を向けて引き金を引いた!!

ライドブツカーからマゼンタ色の銃弾が連続で何発も撃ちだされる、そしてその弾はゼイビアックス、王蛇、アビスに命中、煙を巻き上げた。

「くっ、やってくれたな……。」

煙が晴れると、何らダメージを受けていない、アビス、ストライク、ゼイビアックスがいた。

「だが、私たちにはほとんど命中していない、無駄でしたね。」

アビスは、地面に降りている四人のディケイドに向かって言った。

「一人いない・・・まさか!！」

ゼビアクスは一人足りないことに気がつくのと、捕まえた恵を置いていた場所をにらんだ、するとそこには、恵を抱え、赤いバイクの後ろの席に乗せようとしている、ディケイドがいた。

「悪いな、約束通り、恵は返してもらったぜ。」

ディケイドは笑いながら言うと、バイクにまたがった。

「貴様あつ!！」

「その女をよこせ!！」

先ほどまでその光景を見ていたシザースとインペラーがディケイドめがけて走ってきた。

「悪いな、無理な相談だ!！」

ディケイドはそう言うと、ライドブッカーから金色のカードを取り出し、それをディケイドライダーに装填した。

FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DE
ECAD E

ディケイドの目の前に、ディケイドの顔を模したマークのカード

が複数枚現れ、さらに分身の四人の前にも同じカードが現れた。

「くらえっ、ディメンションショット!」

ディケイドは技の名前を叫ぶと、引き金を引き、マゼンタ色のビームで相手を打ち抜く、『ディメンションショット』を放った!!

「今だ!」

ディケイドはそう言って、バイクを走らせると、その場から去った。

「グラン、俺たちもいったん引くぞ。」

「おう。」

その光景を見ていたドラゴンナイトとウィングナイトはうなずくと、ベントラから出て行った……。そして竜気たちが出たと同時に大爆発を起こした。

「將軍、ご無事ですか?」

「ああ、問題ない。」

ストライクは爆発で生まれた、煙を払うと、自分の後ろにいたゼイビアックスに尋ねた。

「ストライク、アビス、シザース、インペラー、帰るぞ。」

ゼイビアックスがそう言つと全員うなずいた、すると灰色のオーロラが現れて彼らはベンタラから出て行った。

第三話 『龍騎の世界とドラゴンナイトの世界』 (前書き)

なかなか、良いサブタイトルが思いつかない……今回も適当なサブタイをつけてしまった。

第三話 『龍騎の世界とドラゴンナイトの世界』

剣は恵を救出後、近くにあった公園にバイクを止め、恵をそばにあつたベンチに寝かせた。

「う、うん……」

恵は目を覚ますとゆっくりと起き上がった。

「起きたか？」

剣は恵に尋ねた。

「う、うん、あれ？私、怪人にさらわれて……もしかして剣君が助けてくれたの？」

「当たり前だ。俺以外誰がお前を助ける。」

剣は笑顔で言うと、恵に先ほど買ってきた、スポーツドリンクを渡した。

「そっだよね、ありがとう。」

恵は笑顔でそれを受け取った。

「それを飲んだら、一度家に帰ろう、お前のが心配だ。」

剣は恵の横に座ると笑顔で言った。

「うん、わかった。」

恵も笑顔でうなずいた。

そしてしばらくして、恵がスポーツドリンクを飲み終わると、剣と恵は移動しようとして立ち上がった、するとそこに、

「すみません。」

黒くてツンツン髪青年と、青いバンダナを巻いた青年が剣に尋ねてきた。

「あつ、あんたら、この世界の……。」

剣はその二人がドラゴンナイトとウィングナイトに変身した人物であるということに気がついた。

「お前に話がある、どこか人の少ないところで話せないか？」

バンダナを巻いた青年が剣に尋ねた、剣は少し考え込むと。

「俺たちの家で言いか？」

剣は二人に向かって尋ねた。

「ああ。」

「別にかまわない。」

二人の青年はうなずいた。

そして剣たちはバイクに乗って剣たちの家がある場所まで向かった……

剣たちは家に着くとバイクを止めた。

「バイクは、その車庫にでも止めてくれ。」

剣はバイクから降りると、二人に向かって店の横に併設された車庫にバイクを入れるように言った、剣は二人がバイクを入れたことを確認すると店内に入れた。

そして、剣は店の入り口にクローズの看板を掛けると、店の奥にある、手続きをとったりすることができるスペースで会話を始めた。

「じゃあ、まずは自己紹介だな、俺は宮本剣、別の世界から来た、仮面ライダーだ。」

剣はそう言うと机にディケイドライバーを置いた。

「次は俺だな、俺は火炎龍グラン。ドラグレッダーをアドベントビーストに持つ、ドラゴンナイトだ。」

ツンツン髪の青年はそう言うと、机の上にカードデッキを置いた。

「今度は俺か、俺は闇月ブルース。俺のアドベントビーストはダークウイングだ、俺はウイングナイトに変身して戦う。」

バンダナを巻いた青年はバンダナをはずして、女性のように長く銀色の髪を出すと、カードデッキを机の上に置いた。

「そう言えば、君もゼイビアックスも言っていたことなんだが、別の世界と言うのは一体何なんだ？ベンタラのようなものなのか？」

ブルースは剣に尋ねた。

「まあ、そう言う解釈で問題はないと思う、だけど、ベンタラと違うのはその世界がいくつもあるということだ。」

剣はそう言うと、そばにあったペンと紙を使って、ざっと、多元宇宙論と呼ばれる幾つもの世界があるという理論について説明した。
.....

「なるほど、大体理解できた。」

「俺も」

グランとブルースは腕を組んで頷いて言った。

「一つ質問したいんだが、最近この世界で今までとは違うことは起きなかったか？」

剣は二人に尋ねた。

「ないと思う、君たちがこの世界にやってきたことぐらいだけと……。」

「俺も同じだ、しいて言うなら、今日、新しいライダーと倒したはずのライダーが蘇ったことぐらいしか……。」

「正確には、インペラーとシザースは蘇ったわけじゃないんだけど……。」

剣は頬を掻きながら言った。

「インペラー？」

「シザース？何だそれは、インサイザーとスピアーではないのか？」

ブルースは剣に尋ねた。

「さつきも話したけど、いろいろある世界の中には、この世界とおなじライダーが存在している世界があるんだ。」

剣はそれからしばらく、この世界と同じ姿のライダーが存在する世界、『龍騎』の世界について話した。

剣が話し出した内容は、龍騎の世界は、数多くあるが基本的には13人すべてのライダーが最後の一人となるまで戦い続け、勝利したら、自分が望む願いをかなえることができるということ。

その中でいろいろな人が、仮面ライダーに殺されていったこと。

世界によってはライダーバトルは、ライダーシステムを作った人間の思惑で、最後に残ったライダーの命を妹に与えるために始めたこと。

すべてのライダーも死に、ライダーシステムを作った男の妹も死んでしまい、ミラーモンスターと呼ばれる怪人が暴走し、それを倒すため、最後の2人となった龍騎とナイトが協力してミラーモンスターを倒した世界のこと。

ライダー同士の戦いを止めるため、龍騎はミラーワールドを破壊した世界のこと。

ナイトが死に龍騎になっていた人間が代わりにナイトになって戦った世界……と言った、様々な龍騎の世界について話した。

剣が話し終わると、二人の表情は曇っていた。

「いろいろ聞いて複雑だな。」

「ああ、だけど、やっぱり、人を犠牲にしようとすることを前提に作られたシステムなんだな、ほかの世界では……」

それからしばらく沈黙が流れる、だが、ある奇怪な、ガラスを爪でひっかいたようなような音が聞こえた。

「この音は！」

「ゼイビアックスの怪人か!!」

グランとブルースは立ち上がった、すると恵の悲鳴が聞こえ、剣も急いで立ち上がった、そして3人は恵がいる手前のヘルメットなど、バイクに必要な用品を置いているところに行つた、すると恵が何者かにガラスの中に引きずり込まれていた。

「恵!!」

剣は走って手を伸ばそうとした、だが、手は届かず、恵は簡単にガラスの中に入れられてしまった。

「くっ、待ってる助けに行く!!」

「俺たちも行くぜ? 剣!!」

「協力させる!!」

三人はうなずくとガラスの前に立った、そして剣はディケイドライバーを腰に、グランとブルースはカードデッキをかざして、ベルトを出現させ

「変身っ!!」

「「KAMEN RIDER!!」」

剣はディケイドライバーにディケイドのカードを装填し、グランとブルースはカードデッキを、ベルトに入れた。

KAMEN RIDER DECADE

そして剣はディケイド、グランは、ドラゴンナイト、ブルースはウイングナイトに変身、三人はガラスの中に入りベンタラに向かった。

第四話 『ライダーバトル』

鏡の向こうにある異世界、ベントラ。

その中に3台のバイクが、突入してきた。

「どこ行きやがった？」

赤いバイクに乗ったディケイドはバイクから降りると周囲を見渡した。

「さあな。」

「とにかく探そうぜ。」

カプセルのようなバイク、ライドシューターの乗った、ドラゴンナイトとウィングナイトはライドシューターから降りて言った。

そして3人はそれぞれ分かれて、恵をさらった、怪人を探すことにした。

「くそっ、どこに居やがる……。」

ディケイドは周囲を見渡しながらバイクを運転していた。

「（それにしても本当に人がいない……ブルースが言ったようにゼイビアックスに支配されたみたいだな……。）」

と、思いながらバイクを運転していた、そして町にある小さな広場を通り過ぎようとした、その時！！

「があっ！！」

どこからともなく攻撃をつけ、ディケイドはバイクから吹っ飛ばされた！！だが、

「っ！」

ディケイドは空中で一回転して体制を整えると、地面に着地して、目の前をにらんだ！！

するとそこには、

「ゲルミユートが5匹か……。」

ディケイドは静かに呟くとライドブッカーをブックモードからソードモードに変えてつぶやいた。

「っと、この世界ではレッド・ミニオンって名前だったな。」

ディケイドはそう言うと、ライドブツカーの刃を撫でて、レッド・ミニオン達めがけて走った!!

「たあっ!!」

ディケイドは、レッド・ミニオンの群れに突っ込むと、体を大きく振ると同時にライドブツカーも振って、レッド・ミニオンたちをすべて切り裂いた!!

そして、レッド・ミニオンたちは断末魔を上げながら消滅した。

「ちっ、雑魚が邪魔してんじゃねえ。」

ディケイドはそう言って変身を解こうとした、その時!

ADVENT

どこからともなく、バイザーの声が聞こえ、ディケイドは声のした方をにらんだ、するとレイヨウに似た、モンスターがディケイドに向かって走ってきていた。

「インペラーのモンスターか!!」

ディケイドはそう言うと、ライドブツカーからカードを引き抜いて、ディケイドライバーにカードを装填した。

ATTACK RIDE BLAST!!

「たあっ!!」

ディケイドは自分に向かってきている、ギガゼールにライドブツカー、ガンモードを向けると引き金を引いた！！

ライドブツカーの銃口からマゼンタの銃弾が何発も飛び出し、ギガゼールに命中、後ろに下がらせた。

「そこに隠れてないで、出てこいっ！！」

ディケイドはそばにあった木に向かってライドブツカーを向けると引き金を引いて、発砲、ディケイドの放った弾は、木に命中、後ろに隠れていたインペラーは前に出た。

「やるね、うまく隠れたつもりだったんだけど。」

「バカ、隠れるんなら殺気ぐらい消せ、サルにでもわかるくらい、殺気が出てたぞ。」

ディケイドはあきれないようにいた、すると

「俺がサル以下だと言いたいのか……俺を馬鹿にしゃがんで……死ねえっ！！」

SPIN VENT!!

突然インペラーが怒り、デッキからカードを一枚引き抜いて右足の脛に装着されているガゼルバイザーにカードを装填、すると、インペラーの右腕にギガゼールの頭を模した、ドリル状の武器、ガゼルスタップが装着され、インペラーはディケイドに向かって突撃した。

「恐ろしいぐらい短気だな!!」

デイケイドはそう言うと、ライドブツカーをガンモードからソードモードにしてインペラーの攻撃を受け止めると、

「たあっ!!」

つばぜり合いのようになった瞬間、インペラーの腹を蹴り、後ろに下がらせた。

「恵の居場所を吐いてもらう!!」

「俺を倒すことができたら、吐いてやるよっ!!」

二人はそう叫んで、前に向かって走った。

その頃ドラゴンナイトは。

「たあっ!!」

ドラゴンナイトはドラグレッダーの尻尾を模した、剣、ドラグセイバーをレッド・ミニオンに向かって振り下ろして、彼を消滅させて倒した。

「さて、さつきからそこに隠れている、奴、出てこい!!」

ドラゴンナイトはドラグセイバーをそばにあるビルに向かって向けて叫んだ、するとビルの陰から仮面ライダーアビスが笑いながら出てきた。

「龍騎は馬鹿が多いのですが、この世界の龍騎は頭が切れるようですね。」

「他の世界の龍騎、ドラゴンナイトがどんなのかは知らないが、俺を同じだと思ってると思火傷するぜ。」

「面白いですね、ならば試さしてもらいましょうか……。あなたの実力を。」

アビスはそう言うとカードを引き抜いて左手についている、コバンザメに似たアビスバイザーにカードを装填した。

SWORD VENT

どこからともなくサメの鋭い歯を模した大剣、アビススラッシュャーが現れ、アビスはそれを手に取った。

そして二人はお互いの剣を握りしめ、同時に走った!!

デイケイドと、ドラゴンナイトが戦いだした頃、ウィングナイトも別の場所で蟹を模したライダー、シザースと戦っていた。

「ふっ!!」

ウィングナイトはシザースの体に向かって、手に持ったダークバイザーを振り下ろした!!

「ぐっ!!」

ウィングナイトの握る、ダークバイザーは剣の形をしており、ダークバイザーの刃が命中したシザースは体から火花を散らした、そしてシザースはそのまま後ろに吹っ飛び、地面を転がった。

「インサイザーは弱い奴しかないのか？」

ウィングナイトは構えていたダークバイザーをおろしながら、ゆっくりと起き上がろうとしている、シザースに向かって言った。

「俺をなめるな!!」

STRIKE VENT

シザースは起き上がると、カードデッキからカードを引き抜いて、

左腕についている、鍔の形をした、シザースバイザーにカードを装填、空間から蟹の鍔を模した武器、シザースピンチが飛んできて、それを右腕につけるようにキャッチすると、それを構えてウィングナイトめがけて走った！！

「たあっ！！」

「ふんっ！！」

シザースはウィングナイトめがけてシザースピンチを振り下ろし、ウィングナイトはダークバイザーで受け止めた。

「俺はお前には負けん、俺達シザースは、すべてお前、ナイトに敗れている、今日ここでおまえを倒して同士の無念を晴らす！！」

つばぜり合いになりながら、シザースはウィングナイトに顔を近づけて叫んだ。それに対してウィングナイトは鼻で笑い。

「それがどうした、別世界がどうであろうが、俺には関係ない、俺はおまえを倒すだけだ。」

ウィングナイトはそう言うと、カードデッキからカードを一枚引き抜いて、ダークバイザーに装填した！！

SWORD VENT

上空から、ウィングナイトの契約モンスター、ダークウィングの尻尾を模した剣、ウィングランサーが降ってきた、ウィングナイトはそれを左手で握ると。

「たあっ!!」

シザースに向かってウィングランサーを突き出すと、それと同時に右手に持ったダークバイザーをシザースの腹に向かって振って後方に飛ばした。

「止めだ。」

ウィングナイトは静かに言うと、ダークバイザーを腰につけると、カードを一枚装填した。

FINAL VENT

すると、黒い大きな蝙蝠、ダークウィングが飛んできて、ダークウィングはウィングナイトの背中に止まると、マントのように変化した。

「とおっ!!」

そしてウィングナイトは空中に飛び上がると、ウィングランサーを突き出した!!すると背中のマントがウィングナイトを包んでドリル状になった!!

「はあっ!!」

ウィングナイトはそのまま、起きあがっているシザースに向かって、必殺技の『飛翔斬』を放った!!

「ぐわああああああっ!!」

ウイングナイトの飛翔斬をくらったシザースは声を上げながら爆発、そのまま死んだ。

「やはり、インサイザーは俺の敵ではないな……………」

ウイングナイトは、燃え上っている炎を見ながら静かに呟いた。

「やはりインサイザー如きでは、貴様の相手は務まらなかったか……………」

突然ウイングナイトの背後から声が聞こえ、ウイングナイトは後ろを振り返った、するとそこには紫でコブラを模したライダー、仮面ライダー王蛇、この世界では、ストライクが立っていた。

「ストライク!!」

「お前の相手はこの俺だ、感謝しろ。」

「そうか、だったら貴様をベントして、ゼイビアックスも倒す!!」

「やってみる……………貴様にできるならな!!」

SWORD VENT

ストライクはそう言うと、ベノバイザーにカードを入れ、先がドリルのようになった剣、ベノサーベルを召喚するとそれを右手に持った。

「たあっ!!」

それと同じタイミングでウィングナイトが飛びかかってきて、ウィングナイトがダークバイザーを突き出し、ストライクはベノサーベルで受け止めてつばぜり合いになった。

第五話 『それぞれの戦い』

何者かにさらわれた恵を救出するため、剣たちはそれぞれのライダーに変身して、ベントラに侵入、それぞれが分かれて、恵を探している。デイケイドの前にはインペラー、ドラゴンナイトの前にはアビス、ウィングナイトの前にはシザースが、そしてシザースをウィングナイトが倒すと、ストライクが現れ、3人はそれぞれの相手と戦うことになった。

デイケイドとインペラーは、町の小さな広場で、お互いの武器と武器をぶつけ合わせていた。だが、デイケイドの方が明らかに有利で、デイケイドは手を抜いているような戦いをしており、時折退屈そうな姿を見せていた。

「たあっ！！」

「ぎゃあっ！！」

「うりゃー！！」

「あじっ！！」

「トイヤッ！！」

「あべしっ！！」

ディケイドはライドブツカー、ソードモードを振り、インペラーの体を傷つけていた。

「ぐっ、調子に乗るなっ！！」

インペラーは手に持ったガゼルスタップをディケイドに向かって突き出した！！

「甘い！！」

ディケイドは後ろに軽くバックステップを踏んで距離を置くと、ライドブツカーをソードモードからガンモードに変形させて、インペラーに銃口を向けて、引き金を引いた。

「あがつ！！！」

ライドブツカーから放たれた、銃弾はインペラーに命中、インペラーは体から火花を散らして後ろにのけぞった。

「どうした？もう終わりか。」

ディケイドは、ライドブツカーをソードモードにして、刃を撫でながら言った。

「ふざけんな！！完全にキレた！！ぶっ壊す！」

インペラーは声を上げると、カードデッキからカードを一枚引き抜いて、脛についてある、ガゼルバイザーにカードを装填した！！

FINAL VENT

バイザーから音声が鳴るとどこからともなく、インペラーの契約モンスターである、レイヨウ型モンスター、ギガゼール、メガゼール、マガゼール、ネガゼールが複数現れた！！

そして現れたモンスター、すべてがディケイドめがけて、飛び掛かり、そのすべてがディケイドを攻撃した！！

「ぐっ！！」

「たああっ！！」

そしてインペラーがディケイドに向かって、膝蹴りをくらわし、ディケイドを後方に吹っ飛ばした！！

この技が、インペラーの必殺技、ドライブディバイダーである、地味だが、攻撃力は5000と意外と高い必殺技である。

「があっ！！」

ディケイドは後方に飛ばされ、後ろにあったビルに突っ込んでしまった！！

「人のことを雑魚だと侮っているから、負けることになるんだ。」

インペラーは笑いながらディケイドに近づいた。

「くそが、やりやがったな……。」

デイケイドは静かに呟いた、するとデイケイドの目が吊りあがって、鋭くなった。

そして

「がはっ!!」

突然、インペラーの体から火花が飛び散って、煙を噴き出しながら吹っ飛んだ。

「くそっ、調子に乗りやがって……本気出しちまった。」

デイケイドはゆっくりと起き上がった、すると鋭かった目が元に戻った。

「ちっ、面倒なことしちまった、追いかけるか。」

デイケイドはそう言つと、インペラーの吹っ飛んで行った方向に向かって走った。

ドラゴンナイトはアビスとほぼ互角の勝負をしていた。

「ふっ！」

アビスは、手に持ったサメの鋭い歯を模した大剣、アビスセイバーをドラゴンナイトめがけて振り下ろした！！

「っ！」

ドラゴンナイトは、アビスの攻撃を両肩についている、ドラグレッダーの腹を模した盾、ドラグシールドでガードすると、

「たあっ！！！」

右腕に握ったドラグセイバーを振って、アビスの腹を傷つけた。

「ぐっ、やりますね……だが！」

ADVENT

アビスは、ドラゴンナイトに切られた箇所にも触れながら後ろに下がると、カードデッキからカードを一枚ぬいて、左手に浮いているコバンザメ型のバイザー、アビスバイザーにカードを装填した！！

すると、ドラゴンナイトの背後から突然、アビスと契約しているサメ型のモンスター、アビススラッシャーが飛び出してきた！！

そして、アビススラッシャーは体を回転させて、尻尾でドラゴン

ナイトを殴ると、吹っ飛ばした!!

「ぐおあっ!!」

ドラゴンナイトはそのまま吹っ飛ばされて、ビルに激突、地面に倒れた。

「ぐう……」

ドラゴンナイトは体を押さえて立ち上がるうとした、だが

「っと、ここで終わりです。」

アビスがアビスセイバーをドラゴンナイトの首元に近づけ、動けなくした。

「サヨナラです!!」

アビスはアビスセイバーを握る右腕を一気に振り上げ、そのまま振り下ろそうとした、その時!!

「うおわあああああっ!!」

アビスとドラゴンナイトの間を裂くようにして体中から黒い煙を上げたインペラーが吹っ飛んできた。

「うおっ!!」

アビスは思わず動きを止めて後ろに下がった!!

「ぐむっ!!」

そしてインペラーはそのまま吹っ飛んで行き、地面に激突した。

「どけ!どけえっ!!」

アビスとドラゴンナイトはインペラーを唾然としながら見ていた、すると二人の後ろ、インペラーの吹っ飛ばされてきたところからデイクイドが走ってきた。

「これで終わりだ!!」

デイクイドは走りながらライドブツカーからカードを一枚引き抜くと、ライドブツカーに装填した!!

FINAL ATTACK
RIDE DE DE DE
ECADE

「たあっ!!」

デイクイドは宙に向かって飛びあがった、すると、デイクイドの顔を模したカードが複数展開され、

「はあっ!!」

デイクイドは左足を伸ばしながらカードに突っ込み、必殺技の『デイメンションキック』を放った!!

「うわああっ!!」

インペラーはゆっくりと起き上がると、腕で顔を覆いながら、
仮面ライダーとは思えない情けない声を出した、そして

「ぐあああああつ!!」

デイメンションキックが命中して、インペラーは爆発、絶命した。

「なんか、お前のピンチを助けたみたいだな、グラン。」

デイクイドはゆっくりと立ち上がると手をパンパンと、叩きながらドラゴンナイトの方に体を向けて言った。

「そうみたいだな。」

ドラゴンナイトはそう言つとゆっくりと起き上がった。

「!剣、危ない!!」

ドラゴンナイトは立ち上がつて正面を見るとデイクイドに向かって叫んだ!!

「なつ!!」

デイクイドは後ろを振り返つた、するとそこには、アビスセイバーを構えた、アビスがあり、アビスは、デイクイドの体めがけて、アビスセイバーを真下から斜めに振り上げ、デイクイドの胸のアーマーを切り裂いた!!

「ぐつ!!」

デイケイドの胸アーマーから火花が飛び散りデイケイドは後ろに下がった。

「私の邪魔をした者には、それ相応の罰を与えなければなりません。デイケイド、私の邪魔をした代償はあなたの命で払ってもらいますよ。もちろんドラゴンナイト、あなたも死んでもらいます。」

アビスはアビスセイバーの先端を向け、ドラゴンナイトとデイケイドに言った。

「やれるもんならやってみる。」

「俺たち二人を同時に相手して勝てる自信があるならな!!」

デイケイドとドラゴンナイトは武器を構えながら言った。

「ふっ、私が本気を出せば、君達如き、1人も2人も変わりません、簡単に倒してあげましょう。」

アビスはそう言って歩き出そうとした、すると

「うわあっ!!」

ウィングナイトが吹っ飛ばされてきた。

「ブルース!!」

デイケイドとドラゴンナイトは地面に倒れている、ウィングナイトに駆け寄った。

「くそっ、思っていたより強い。」

ウイングナイトはゆっくりと起き上がりながら言った。

「どうした？その程度の力では俺には勝てんぞ？」

アビスの後ろ、ウイングナイトの飛んできた方からストライクが笑いながらやってきた。

「おいおい、ストライクまで居やがるのか……。」

「結構骨が折れる、あのストライクは強い。」

ウイングナイトは、ストライクを見て驚いているドラゴンナイトに向かって言った。

「強かろうが、関係ない、あいつを倒して恵の居場所を吐かせて、この世界を救うー!!」

ディケイドはライドブッカーをソードモードにして、アビスとストライクを睨みながら、ドラゴンナイトとウイングナイトに向かって叫んだ。

「そうだな、やってやるかあっ!!」

「ああ、ゼイビアックスを倒すまでは弱音は吐けん!!」

ディケイドの一言によって、ドラゴンナイトとウイングナイトの士気が上がり、二人はお互いの武器を構えた。

「行くぜ！二人とも！！」

「おう！！」

「ああ！！」

ディケイドの言葉に2人はうなずき、3人は、目の前にいる、ライダーに向かって走って行った！！

第六話 『恵救出』（前書き）

久しぶりの原稿です。

それと今回は長いうえにグジャグジャな上にサブタイと内容がほとんどあっていません。

第六話 『惠救出』

「さあて、行くうぜ？二人とも。」

「ああ！」

「おう！！」

デイケイドの呼びかけに、ドラゴンナイトとウィングナイトはうなずくと、3人は武器を構えて、目の前にいる、鮫を模した水色のライダー、仮面ライダーアビスと、コブラを模した紫色のライダー、仮面ライダーストライクめがけて走った！！

「たあっ！！！」

デイケイドはアビスとストライクの目の前で上空に飛び上がると、空中で一回転した。

「おらっ！喰らえっ！！！」

A T T A C K R I D E B L A S T！！

ライドブツカーをガンモードに変え、アビスとストライクに銃口を向け引き金を引いた！！

ライドブツカーの銃口からはマゼンタに輝く銃弾が無数に打ち出され、アビスとストライクに命中、煙を巻き上げた！！

「今だ二人とも！！！」

ディケイドはアビスとストライクの後方に着地すると、ドラゴンナイトとウィングナイトに向かって叫んだ!!

「おらあつ!!」

「たあつ!!」

ドラゴンナイトとウィングナイトはうなずくと、アビスとストライクめがけて、ドラゴンナイトはドラグセイバーを、ウィングナイトはダークバイザーを右から左に向かって一気に振った!!

だが……

「甘い……」

「その程度の攻撃は効きません。」

ウィングナイトのダークセイバーはストライクのベノサーベル受け止められ、ドラゴンナイトのドラグセイバーはアビスのアビスセイバーで受け止められていた。

「くっ。」

「ちっ。」

ドラゴンナイトとウィングナイトは後ろに軽く跳んで、後退した。

「まだまだこれから!!」

FORM RIDE KUUGA RISINGTITAN!
!

ディケイドはライドブツカーから、クウガライジングタイタンフォームの絵柄がかかれたカードを引き抜くと、ディケイドライバーに装填、ディケイドはクウガ、ライジングタイタンフォームに変身した。

「姿を変える能力か……。」

「面白い、ですが私を倒せますか？」

ストライクとアビスはディケイドクウガライジングタイタンフォーム（以下DクウガRT）の方を振り向くと、DクウガRTに向かって走った。

「行くぞ……。」

DクウガRTが静かに言うと、ライドブツカーがライジングタイタンソードへと変わった。

「たあっ!!」

「ふんっ!!」

ストライクとアビスはDクウガRTに接近するとお互いの手に握る剣を振り下ろした!!

二人の振り下ろした剣はDクウガRTに命中、火花が散った!!
だが

「効くかあっ!!」

DクウガRTは叫ぶと、ライジンググティタンソードを振りまわし、剣圧だけで二人を後ろに吹っ飛ばした。

「すさまじい、防御力……。」

「これならどうです!!」

STRIKE VENT!!

アビスは左腕のコバンザメ型のバイザーにカードを装填、するとサメの顔を模した『アビスクロー』が右腕に張り付いた。

「たあっ!!」

アビスはアビスクローをDクウガRTめがけて突き出した!!すると、アビスクローからサメの形を模した、水が飛び出しDクウガRTに向かって突撃した!!

だが

「おらあっ!!」

DクウガRTはライジンググティタンソードを振り下ろし、アビスの繰り出した必殺技、アビススマッシュを切り裂いた!!

「パワーまで化け物並ですか!!」

「先に倒させてもらっぞ、デイケイド!!」

アビスとストライクは武器を構えて、DクウガRTめがけて走っ
た!!

「たあっ!!」

「ふんっ!!」

アビスとストライクはDクウガRTめがけて狭み込むようにお互いのサーベルを振った、DクウガRTは右腕でアビスのアビスセイバーの刃を受け止め、ライジングタイタンソードをストライクめがけて振り下ろし、アビスの腹を右足で蹴った。

「がっ!!」

「うがっ!!」

ストライクの体からは火花が散り、地面にあおむけに倒れ、アビスは後ろに飛ばされ、腹を押さえたまま地面に膝をついた。

「どうした?もう終わりか?」

DクウガRTは二人の方を交互に見ながら言った。

「なめるなああっ!!」

「あなたに死刑を言い渡す!!」

ストライクとアビスは立ち上がると一気にDクウガRTめがけて

走った。

「すげえ……。」

「ああ、あの二人相手に、あそこまで……。」

ドラゴンナイトとウィングナイトはただ茫然と、DクウガRTの戦いを見ていた。

「つて、俺らの世界は俺らが救わないと……！」

「そうだった……！」

ドラゴンナイトとウィングナイトは武器を握りしめると、DクウガRTのところに向かって走った。

「はあっ……！」

「ふんっ……！」

DクウガRTはライジングタイタンソードをストライクはベノサベルを振り下ろし、つばぜり合いになった……！！

「うおりゃあっ!!」

つばぜり合いになったところを見計らって、アビスがDクウガRTめがけて、アビスサーベルを振り下ろした!!

「させんっ!」

N A S T Y V E N T

それを見たウィングナイトはダークバイザーにカードを一枚装填した。すると上空からダークウィングが現れ、ダークウィングは超音波を発生させ、ストライクとアビスの動きを止めた。

「!たあっ!!」

DクウガRTはベノセイバーを払うと、そばにいたアビスの腹を殴った。

「すまん、ブルース。」

DクウガRTはウィングナイトの方を振り返りながら言った。

「剣、お前一人で戦ってんじゃねえ、俺も混ぜろ……。」

ドラゴンナイトが走ってきて、DクウガRTの頭を小突いた。

「つと、悪かったな。じゃあ、3人で戦いますか。」

DクウガRTがそう言うのとドラゴンナイトとウィングナイトは並んで立った。

「行くぞ。」

DクウガRTが二人に向かって言った、その時!!

FREEZE VENT

上空から、バイザーの音が聞こえた。

「っ!二人とも離れる!」

DクウガRTは何か気がつく、側にいたドラゴンナイトとウイングナイトの体を手のひらで押して突き飛ばした。

「ぐあっ!!」

それと同時にDクウガRTの足もとが凍りついた!!

「ぐっ……。」

「この技……まさか!!」

DクウガRTは体を動かさそうとするが動かない、ウイングナイトはこの技に心当たりがあるのか、立ち上がると周囲を見渡した。

FINAL VENT

再びバイザーの音がして、どこからともなく、熊のような姿をした白と青い縞模様のモンスターが現れ、凍りついて動かなくなっ

いるDクウガRTの顔面をつかんで、後頭部を地面にたたきつける
と、そのままDクウガRTを引きずった！！

「ぐわあああああつ！！」

DクウガRTの背中から火花が散り、DクウガRTはそのまま引
きずられていく、そして、引きずられていく先には巨大な詰めを構
えた、トラに似た白と青の縞模様のライダーだった。

「ふんっ！！」

「っ！！」

そのライダーは、モンスターが引きずってくる、DクウガRTの
ベルトめがけて、鋭い爪を振り下ろした！！

「があっ！！」

DクウガRTの体から火花が散って、DクウガRTは吹っ飛び、
ビルに背中をぶつけ、変身が解けてしまった。

「ほお、体をずらしてベルトへの攻撃を防いだのか・・・。」

トラに似たライダーは地面に倒れたままの剣に言った。

「剣！！」

「大丈夫か！！」

ドラゴンナイトとウィングナイトが走ってきて、剣の体を起こし

た。

「まさかお前まで、この戦いに参加していたとはな……仮面ライダーアックス。」

ドラゴンナイトは、白と青の縞模様のライダー、仮面ライダーアックス、龍騎の世界ではタイガを見ながら言った。

「さすがの、ライジンググタイタンもファイナルベントの攻撃力は耐えられなかったみたいだな……。」

剣は口から流れ出ている血を服の袖で拭くと、そばに転がっていたディケイドライバーを拾った。

「丁度相手は3人ずつ、いい数じゃねえか。行こうぜ二人とも。」

「そうだな。」

「ああ。」

剣は立ち上がってディケイドライバーを腰に巻こうとした、その時……

「まで！仮面ライダーディケイド……！」

どこからともなく声が聞こえた、剣たちは周囲を見渡す、するとそばにあった、公園に灰色のオーロラが出現し、そこから恵をしばらくつけ、首に剣を突き立てているゼイビアックスが現れた。

「動くところの女を殺す……降参しろ……！」

ゼイビアックスは剣たちに向かって叫ぶ、剣はディケイドライバ
ーを地面に落した。

「ゼイビアックス！」

「貴様っ！！」

ドラゴンナイトとウィングナイトは武器を構えて今にも襲いかか
りそうな声で、ゼイビアックスに向かって言った。

「おっと、二人とも動くんじゃない。お前たちが動いてもこの女
は殺す。」

ゼイビアックスはドラゴンナイトとウィングナイトに向かって言
った。

「くっ……。」

「卑怯者め……。」

ドラゴンナイトとウィングナイトは静かに武器を下ろした。

「剣君！！私のことはいいから戦って！！！」

意識を戻した恵は剣に向かって叫んだ。

「恵！くっ！！」

剣はデイケイドライバーを腰につけた。

「すまん！へんし」本当に殺すぞ！！」

ゼイビアックスはそう言って、恵の頬に剣の先を突きつけた、すると、恵の頬から血が流れ出た。

「っ、くっそっ……。」

剣はそう言ってデイケイドのカードを地面に捨てた、と、その時。

ADVENT

どこからかバイザーの音が聞こえ、ゼイビアックスの真下に、水のようなものが現れ、そこから一気に白鳥が現れ、ゼイビアックスを上空にふっ飛ばし、恵と引き離れた。

「はっ！！」

そして恵を白い姿のどこかウィングナイトに似た白鳥の姿をしたライダー、仮面ライダーセイレーンがキャッチした。

「あんた相変わらずせこいわね、ゼイビアックス！！」

セイレーンは手に持ったレイピアのような武器、ブランバイザーの刃先をゼイビアックスに向けて言った。

「ナイス！七海ななみ」

ドラゴンナイトはセイレーンに向かって叫んだ。

「まったく、人質取られて何やってんだか……。」

セイレーンはあきれたように言って、恵を縛っていたロープを切った。

「大丈夫でしたか？」

「ええ、ありがとうございます……。」

恵はセイレーンに頭を下げた。

「ぐう……セイレーン、その女をよこせえっ……！」

ゼイビアックスは叫びながら、セイレーンに近寄った、その時……！！

「たあっ……！！」

マゼンタ色の銃弾と赤い炎がゼイビアックスに命中、彼を吹っ飛ばした。

「恵に……。」

「七海に……。」

「「触れるな……！！」」

ゼイビアックスは声をした方を睨んだ、するとそこには、いつの間にかディケイドに変身し、ライドブツカー、ガンモードを構えたディケイドと、ドラグクローを装着したドラゴンナイトがいた。

「くっ、こいつはまずい……………」

「ゼイビアックスはそう言つと、灰色のオーロラを出現させ、その場から消えた。」

「くっ、逃がしたか、まあいい……………恵、大丈夫か？」

ディケイドは恵のところへ駆け寄りながら恵に尋ねた。

「うん、大丈夫だよ……………この人が助けてくれたから。」

「そっか、よかった……………ところであなたは？」

ディケイドはセイレーンに尋ねた、すると

「こいつは仮面ライダーセイレーン、俺の恋人……………」

ドラゴンナイトが、答えた。

「七海、その女性をベントラから逃がせ。それから、なるべくガラスのないところに、彼女は狙われて……………」

ドラゴンナイトはセイレーンに向かって言った。

「わかったわ、じゃあ、行きましょう。」

セイレーンは、ドラゴンナイトの言葉につなずくと、恵の手を引いてどこかに行った、その時恵は後ろを振り返って……

「剣君！頑張ってね！！」

と言い、その場から離れた。

デイケイドはそれを見ると後ろを振り返り、

「待たせたな。今からが本番だ……」

デイケイドは歩きながら言った。

「こちも3人、そっちも3人、丁度いい数だな……」

「そうだな……」

そしてドラゴンナイトとデイケイドの二人はウィングナイトがいる位置まで歩いてきた。

「俺はストライクをやる。」

「じゃあ、俺はあのサメ……アビスをやらせてもらおう……」

「じゃあ、俺は白熊……いや、ホワイトタイガーとやらせてもらおうか。」

三人はそれぞれ、狙う相手を決めると、武器を構えた。

「面白い、ウィングナイト貴様を倒す。」

「私はドラゴンナイトですか・・・いいでしょう、私の世界で負けた恨み晴らさせてもらいます。」

「僕は誰でもいいよ、楽しめたら・・・。」

アックス以外は、自分を相手するライダーのことをにらみながら、武器を構えた・・・そして

「だあっ!!！」

「ああっ!!！」

3人のライダーは同時に走り出した・・・。

第六話 『恵救出』（後書き）

サブタイをつけるのが苦手だ……。

ちなみにアックスの契約モンスターはトラですが、詳しくない人が読むと、4足のネコ科の動物を思い浮かべる人がいるかもしれないので、熊にしました（少し熊に似ていますし……。）

第七話 『英雄』（前書き）

ネクサスじゃないですよ。

第七話 『英雄』

鏡の向こうの世界ベントラ、その中にある街の中で、二人の仮面ライダーが戦っていた。

「たあっ!!」

マゼンタ色の戦士、仮面ライダーディケイドは、手に持ったライドブツカー、ソードモードを縦にまっすぐ振って、銀色と青の縞模様で、トラを模したライダー、仮面ライダーアックスの体を切りつけた!!

「あがっ!!」

アックスの体からは火花が飛び散り、アックスは後ろに下がった。

「くっ!!」

アックスは手に持った斧のようなバイザー、デストバイザーにベルトのバックルについたカードデッキからカードを一枚取り出すと、装填した。

STRIKE VENT

バイザーから音声が鳴りだすと、アックスの腕に大きな虎の爪、デストクロウが装着された、そしてアックスはディケイドめがけて走った。

「たあっ!!」

アックスは、両腕を同時に突き出し、デイケイドの腹に爪を突き立てた！！

「うごっ！！」

デイケイドの体からは火花が散って、後ろにのけぞった。

「くっ！！くらえっ！！」

デイケイドは腹を押さえると、ライドブッカーをソードモードからガンモードに切り替えて、銃口をアックスに向けて引き金を引いた！！

「効かん！」

ライドブッカーから放たれた銃弾はアックスの体に命中、火花を散らす、防御力が高いため大したダメージがないのか、そのままデイケイドに向かって走ってきてデイケイドの顔面をつかむと地面にたたきつけた！！

「がはっ！！」

「止め！！」

デイケイドは仰向けに地面に叩きつけられた、さらにアックスはデイケイドのベルトに向かって、デストクローを突き刺そうと右腕を振り上げた。

「くっ、させるか！！」

ATTACK RIDE BLAST

ディケイドはライドブッカードからカードを抜いてドライバーに装填すると、銃口を、アックスに向け、鎧とスーツの間を狙い、引き金を引いた！！

「ぐっ！！」

ライドブッカードからマゼンタ色の弾が無数に撃ちだされアックスに命中、防御が薄い部分を狙ったため、火花が散ると同時にアックスは後ろに下がった。

「まだまだ行くぜ！！」

ディケイドはライドブッカードをソードモードにして、アックスめがけて走った。

「やあっ！！」

ディケイドはライドブッカードを両手で握ると、まっすぐ縦に振りおろし、そのあと右から左に向かって振り、アックスの体を十字に切りつけ、最後に丁度、鳩尾がある場所を左足でけって後方にふっ飛ばした。

「ぐ、これでもくらえっ！！」

ADVENT

吹っ飛ばされたアックスは倒れるが、すぐに起き上がるとディケ

イドをにらんで、デストバイザーにカードを装填、バイザーから音が鳴り響いた。

「甘いぜ!!」

ディケイドはそう言うと宙返りした、それと同じタイミングでディケイドの後ろから、デストワイルダーが走ってきた。

「まずはお前からつぶす!!」

ディケイドはそう言うとデストワイルダーの後ろに着地して、ライドブッカーからカードを引き抜き、ドライバーに装填した。

ATTACK RIDE SLASH

「たあああああつ!!」

ライドブッカーがソードモードに変形して、刀身が赤く輝き、ディケイドは両手でつかんで、十の字にデストワイルダーを切り裂いた!!

「ぐあああああつ!!」

デストワイルダーは声をあげて爆発、消滅した。

「ぐがああああつ・・・」

それと同時に、アックスが苦しみだし、アックスは体を押さえて地面に膝をついた、するとアックスの体に変化、銀色と青の縞模様の体が黒と焦げた灰色のような銀になり、ベルトのカードデッキに

描かれていた金色のトラの顔がなくなり、アックスは、ブランク体になってしまった。

「まだだ、僕は英雄になるんだ……こんなところで負けられるかぁ!!」

STRIKE VENT

アックスは立ち上がるとカードデッキからカードを一枚引き抜いて、色もなにも付いてないただの斧と化したライドバイザーアックスにカードを装填、アックスの両腕が光り、黒いデストクローとは比べ物にならないくらい貧相なライドクローがついた。

「うおおおおっ!!」

アックスはそのままディケイドに向かって突っ込むと、ディケイドを殴るようにしてライドクローを振った!!

「ぐっ!!」

アックスが変身したブランク体は、契約モンスターがいないため能力が著しく低下している、そのためアックスが振った、ライドクローはディケイドに命中したが、ディケイドの防御力の前ではダメージを与えるまでには至らず、逆に自分の爪が粉碎した。

「まだだ、僕は英雄になるんだ!!」

アックスはそう言うとディケイドの体を連続で殴りつけた、爪が我、もはや武器として機能しない、ライドクローを鈍器のようにディケイドにたたきつけた。

アックスはデイケイドを連続で殴っていく、今のアックスは、壊れたおもちゃのように何度か『英雄になる』と叫びながらデイケイドを殴って行く、連続で殴り続けていた為、とうとうライドクローが完全に粉砕してしまった、だがそれでもなおアックスはデイケイドを殴る、そしてついに、アックス自身の拳から血が出た……。

「いい加減にしろおおおっ!!」

デイケイドはそう叫ぶとアックスの顔面を勢いよく殴って地面にたたきつけた、その際ゴリュツツと言う音が響き、アックスはそのまま地面に倒れた。

「まだだ、まだだ、僕は英雄になるんだああああ、もう負けたくないんだああああっ!!」

アックスは叫びながら立ち上がると、カードを一枚ライドバイザーに装填した。

FINAL VENT

アックスはファイナルベントを放とうとした、だが、契約モンスターが存在しないアックスのファイナルベントなど、ただの攻撃に少し力がついた程度、おまけに彼は今ボロボロの状態、デイケイドには命中しても倒すことなどは無理だろう……。

「うおおおおおっ!!」

アックスは叫びながら飛び上がった、契約モンスターのないアックスのファイナルベント、それはライダーの代名詞と言える必殺技、

ライダーキックであった。

「……これでおまえを倒す!!」

K A M E N R I D E K U U G A

F I N A L A T T A C K R I D E K U K U K U K
U U G A!!

ディケイドはクウガのライダーカードを使ってクウガに変身すると一気に必殺技の、ファイナルアタックライドのカードを使って飛びあがると燃え盛る、左足を突き出した!!

そして二人の必殺の蹴りがぶつかる、だが、差は歴然、アックスの蹴りはディケイドの蹴りに押し負けただけでなく、右足が粉々に砕け、足の先から脛まで、完全に砕け、足を構成したと思われる銀色の棒が一本あるだけの状態になった

「たありやつ!!」

そしてディケイドはアックスのベルトにあるカードデッキに向かって左足を突き出し、カードデッキを粉々に粉碎、それと同時に地面に着地した。

「があっ。」

アックスも地面にうつぶせの状態で落下し、ゆっくりと起き上がった。

「僕は英雄になりたかったんだああああああっ!!」

アックスはそう叫ぶと、爆発、体が消滅し、この世界から消え去った。

「お前の強さでは、本当の英雄ヒーローにはなれないさ、“仮面ライダータイガ”……。」

ディケイドはそう言うところを払って、ドラゴンナイトたちが戦っている方向に向かって走った。

第七話 『英雄』 (後書き)

アンケート待ってます。

第八話 『ダークウィングナイト』 (前書き)

今回はオリジナルのFFRが登場。

第八話 『ダークウイングナイト』

デイケイドが仮面ライダータイガと戦っている頃、別の場所では蝙蝠を模した漆黒のライダー、仮面ライダーウイングナイトと、コブラを模した紫色のライダー、仮面ライダーストライクが戦っていた。

SWORD VENT

ウイングナイトは手に握るレイピアの形をした召喚機、『ダークバイザー』にカードを装填した、すると上空から彼の契約モンスターである、黒い大きな蝙蝠『ダークウイング』が飛んできて、ダークウイングは自分の尻尾を模した武器、『ダークランサー』をウイングナイトに向かって渡す、ウイングナイトはダークランサーをつかむと、ダークバイザーを左腰の鞘のような場所に収め、ストライクめがけて走った!!

「はっ!!」

ウイングナイトはダークランサーをストライクめがけて振り下ろした!!

「つと!!」

ストライクは手に握る、刃全体がドリルのように渦を巻いている剣、『ベノサーベル』でウイングナイトのダークランサーの刃を受け止めた、それと同時に甲高い金属音が鳴り火花が散り、つばぜり合いとなった!!

「っしや!!」

ストライクは左手に持った、コブラの形をした杖状の召喚機、
『ベノバイザー』をウイングナイトの腹めがけて突き出した!!

「とわっ!!」

それを見たウイングナイトは、左手をダークバイザーに伸ばして、
ダークバイザーを引き抜くと力いっぱいベノバイザー目掛けて振り、
ベノバイザーをストライクの手から弾き飛ばした。

「っ!!」

「今だ!!」

ストライクは弾き飛ばされたベノバイザの方を見た、その瞬間、
ウイングナイトはダークランサーを振って、ストライクの握るベノ
サーベルを払うと、ダークバイザーを左から右に向かって振り、体
のアーマーを傷つけると右足を突き出して腹を蹴って後ろに吹っ飛
ばした!!

「がっ……………」

ストライクはアスファルトの地面を2、3度バウンドすると地面
を滑って行き、

「強くなったようだな……だが甘い!!」

ストライクはそばに落ちていた、ベノバイザーを拾うと、ベルト
についてあるカードデッキからカードを一枚引き抜き、ベノバイザ

ーに装填した。

A D V E N T

バイザーから音声が鳴つたと同時にウイングナイトの後方から、^{ストライク}彼の契約モンスターの巨大な紫色のコブラ『ベノスニーカー』が地面を這うように走りながら現れると、口から黄色い液体を吐きだしウイングナイトを攻撃した!!

「っ!!」

ウイングナイトはその攻撃を横に回転して回避、ウイングナイトはストライクをにらんだ、すると

「お前の断末魔を聞いてみたい!!」

F I N A L V E N T

ベノスニーカーはすでにストライクの背後に移動していた、さらにストライクはベノバイザーにカードを装填、両腕を広げて走りだした!!

「さあ！祭りの時間だ!!」

ストライクはウイングナイトめがけて走っていき、そしてその後ろをベノスニーカーが追いかけるように走っていた。

「くんっ!!」

ストライクは足を曲げてジャンプ、それと同時にベノスニーカー

が口から液体を吐きだし、ストライクはその吐きだされた液体の勢いに乗りながらバタ足のような連続蹴りで相手を倒す技『ベノクラツシユ』をウイングナイトに放った！！

「くっ！！」

ウイングナイトは腕を十字に組んで防御、ストライクの一発目の足がウイングナイトに命中しようとした、その時！！

「がっ！！」

突然、白い光がストライクに命中、ストライクは弾き飛ばされ、必殺技はウイングナイトに命中せず失敗に終わった。

「くっ、誰だ！！」

ストライクは立ち上がると光の飛んできた方を睨んだ、するとそこには、ペガサスポウガンを構えて立っている、仮面ライダーデイケイドクウガペガサスフォームが、いた。

「大丈夫か！！」

デイケイドクウガ、ペガサスフォームはデイケイドに戻りながらウイングナイトに駆け寄った。

「大丈夫か？ブルース……。」

デイケイドはウイングナイトに尋ねた。

「すまん、助かった……。」

ウィングナイトは軽く頭を下げた。

「デイケイド……よくも俺の邪魔をしゃがったな……
許さん……絶対に許さん!!」

ストライクはそう言って、一枚のカードをデッキから引き抜くと、
ベノバイザーに装填した!!

U N I T E V E N T

バイザーから音声が鳴ると、ストライクの後ろにいるベノスネーカーの左右にサイとエイのモンスターが現れ、その三体は合体、体がサイのモンスターで、その背中に背骨を思わせるようにベノスネーカーが張り付いて、コブラの頭がサイのモンスターのものになり、ベノスネーカーの背中にエイのモンスターが張り付いて、4枚の翼のようになった、3体のモンスターが融合したキメラモンスター『獣帝ジェノサイダー』に変わった。

「合体しやがった……。」

「くっ、一気に決める……。」

ウィングナイトは驚くデイケイドの前に出ると、ダークバイザーにカードを一枚装填し用とした、その時。

「だったら、このカード使ってみようぜ?」

デイケイドはウィングナイトの肩に手を当てると、一枚の真っ黒なカードを見せた。

「なんだこれは？」

「まあみてな……。」

ディケイドがそう言うと、突然ディケイドの握るカードが光って、金色の縁で、ウィングナイトとその下にダークウィングが描かれているカードに変わった。

「これが俺とお前の力だ、いけるな？」

「何が何だか分からないが、こいつを倒せるなら、やってくれ！」

ウィングナイトの言葉にディケイドはうなずくとディケイドドライブを開いて、先ほど変化したカードを装填した。

FINAL FORM RIDE W W W WING KN
IGHT

という音声とともに、ウィングナイトの背中にダークウィングが張り付いた。

「これで終わりだ！！」

FINAL VENT

ストライクはそう言うと、ディケイド達の後ろに回り、カードをベノバイザーに装填、すると、ジェノサイダーの腹が開いて、小さなブラックホールが生成された。

「はっ！！」

ストライクは走ると、そのブラックホールめがけてウイングナイトとディケイドを蹴り飛ばそうとした、その時！！突然ウイングナイトが、ダークウイングへと変わりディケイドの背中に張り付いて宙に浮いた。

「つと、危なかった！！ナイスブルース！！」

ディケイドは地面を見ながらウイングナイトに向かって言った。

「何が何だか分からないが、兎に角決めようぜ！！」

「ああ、そうさせてもらっつ！！」

FINAL ATTACK
RIDE W W W WING
KNIGHT

ディケイドはウイングナイトの言葉にうなずくと、ライドブツカ―をソードモードにして、ストライクに無あつて急降下！すると、ディケイドの後ろにいたウイングナイト、もとい、ウイングナイトダークウイング、もしくはナイトダークウイングの翼がディケイドに巻きつきドリルのようになった。そして

「「たあっ！！」」

ディケイド達は同時に叫び、ウイングナイトに必殺技の『ディケイド飛翔斬』を放った！！

「ぐあっ!!」

ディケイド達の放った必殺技は、ストライクに命中!!爆発した。

「ぐう……やってくれたな……ここは撤退だ……」

だがストライクはまだ生きており、ストライクはオーロラを作って、ベンタラから飛び出した。

「ちつ、逃がしたか……」

変身が解け、ディケイドの横に立つウィングナイトは静かに言った。

「ああ、だが、あいつも大事だが、今はグランの応援だ。」

ディケイドがそう言うとディケイドの体が突然マゼンタ色の光に包まれ、消えた……このディケイドはアタックライドイリユージョンで分身したディケイドだったのだ。

「……分身だったのか……俺も援護に行くか……」

ウィングナイトに静かに呟くと、どこかに走って行った。

第八話 『ダークウイングナイト』（後書き）

はい、ウイングナイト、もとい仮面ライダーナイトをFFRにしちやいました……。

龍騎ができるならできるだろう……という考えでしました。

さて、次回で終わりです、アンケートはまだまだやってるので、よければ答えてみてください。

今の段階では、オリジナルライダーが一票、ディエンドが3票になっています。

第九話 『ドラゴンに変われ!』 (前書き)

久しぶりの更新です。

第九話 『ドラゴンに変われ!!』

「うおおおおおおつ!!」

仮面ライダードラゴンナイトは、ドラグセイバー構えて、目の前にいる水色でサメを模したライダー、仮面ライダーアビスに向かって突っ込んだ!!

「ふんっ!!」

アビスは手に持ったサメの顔を模した、アビスクローをドラゴンナイトに向かって突き出した、アビスの握るアビスクローからはサメの姿をした高圧水流、『アビススマッシュ』が放たれた!!

アビススマッシュハドラゴンナイトに向かって突っ込んでいく、ドラゴンナイトはそれでも動きを止めず、ドラグセイバーを握りしめて飛び上がった!!

「だああああああつ!!」

飛び上がったドラゴンナイトは声を上げながら手に握るドラグセイバーをまっすぐ振り下ろし、アビススマッシュを切り裂く、さらに、ドラグセイバーから、赤い斬撃が飛び出し、アビスの体に命中、アビスの体から火花が散って、アビスは後ろに吹っ飛んだ!!

「くっ……やはり私の知っている龍騎とは、一味も二味も違う……」

アビスはそう言うと、切られたアーマーにふれて立ち上がった。

「俺をほかの世界の龍騎ドラゴンナイトと同じだと思つなよ……。」

ドラゴンナイトは低い声で静かに言うと、ドラグセイバーを両手で握った。

「行くぜ!!」

ドラゴンナイトはそのままアビスに向かって走る、アビスは軽く舌打ちをして右腕のアビスクローを消すとカードをバイザーに装填した!!

SWORD VENT

音声が鳴ると、どこからともなくサメの歯を模した鋭い刃の剣、アビスサーベルが飛んできて、アビスはそれを握った、と、その時!!

「たああああつ!!」

そばに来ていたドラゴンナイトが声を上げながら、手に持ったドラグセイバーを振り下ろした!!

「つ!!」

アビスはドラゴンナイトの振り下ろしたドラグセイバーをアビスセイバーで防御、つばぜり合いになった。

「く、スピードも、パワーも、桁違いの強さだ!貴様何者だ!!」

自分の知っている龍騎ドラゴンナイトと今自分が目の前で戦っているドラゴンナイトの力が違うため、彼はドラゴンナイトに尋ねた。

「ただの、人間で仮面ライダーな青年さ!!」

ドラゴンナイトはそう言って、アビスの腹をけて、後ろに吹っ飛ばした!!

「ぐっ……これでどうだ!!」

アビスは腹を押さえつつも、地面に着地、声を上げるとカードデツキからカードを引き抜いて、腕のコバンザメ型の召喚機、アビスバイザーにカードを装填した。

A D V E N T

すると、ドラゴンナイトの後ろにできていた水たまりから突然、サメの姿をしたモンスター、アビスラッシャーが飛び出して来た!!そしてアビスラッシャーはドラゴンナイトに向かって体のひれでドラゴンナイトを攻撃した!!

「なめるな!!」

A D V E N T!!

ドラゴンナイトは屈んでアビスラッシャーの攻撃をかわすと、ドラグバイザーに、ドラグレッダーが描かれたカードを装填した!!

「ギヤオオオオオンッ!!」

そして竜の方向とともに上空から、赤い竜、ドラグレッダーが飛んできてアビスラッシュャーを弾き飛ばした！！

「頼んだぞ！」

ドラゴンナイトはドラグレッダーに向かって言い、ドラグレッダーは静かにうなずくと、アビスラッシュャーに向かって突っ込んだ！！

それと同時に、ドラゴンナイトもアビスに向かって走り、ドラゴンナイトはドラグセイバーを、ドラグレッダーは腕の爪を、同時に振り下ろした！！

「くっ……」

アビスはアビスセイバーでドラグセイバーを受け止め、アビスラッシュャーは鱗で、ドラグレッダーの爪を防いだ。

「甘いつ！たあつ！！」

ドラゴンナイトは一気に力を入れ、ドラグセイバーを振って、アビスセイバーを弾く、それと同じタイミングで、ドラグレッダーも体を振って、尻尾をアビスラッシュャーめがけて振り、背中にぶつけると地面にたたきつけた！！

「くっ……やるな……だが！！」

アビスはそう言って、カードを一枚ベルトのカードデッキから引き抜いた！

ADVENT

アビスはそのまま、カードをアビスバイザーに装填した！

「！アドベントだと！！！」

ドラゴンナイトは周囲を見渡した、すると、水たまりからシュモクザメを模したモンスターが飛び出した！！

「！もう一体と契約していやがったのか！！！」

ドラゴンナイトはシュモクザメ型のモンスター、アビスハンマーを見て驚いていた、それと同時にアビスハンマーの胸部にある砲門からミサイルのようなものが飛び出した！！

「ぐはっ！！！」

「ギヤオオオンツ！！！」

アビスハンマーの放ったミサイルは、ドラゴンナイトとドラグレッダーに命中、両者の体から火花が散って二人は吹っ飛ばされた！！

「あぐっ！！！」

ドラゴンナイトは勢いよく吹っ飛ばされ、そばにあった木に背中を殴打、変身が解除され、それと同時にドラグレッダーも消えた。

「まったくもって、残念だ。この世界では、ライダーを倒しても殺したことはない、別の異空間に飛ばすことができるだけだ……。」

アビスは笑いながら言うと、地面に転がっているアビスセイバーを拾った。

「く……なに勝った気で居やがる……俺はまだ倒れてない！！」

グランはそう言うと、カードデッキを拾った。

「KA・KAMEN「させんよっ！！」」

グランはカードデッキをベルトに差し込もうとした、だが、アビスは一瞬でグランに近寄って、腹を殴り、変身をさせるのを防いだ。

「ごはっ！」

「これで、最後だ！！」

アビスはそう言って、グランの胸倉をつかむとビルめがけて放り投げた！！

グランはそのままビルめがけて飛んでいくが、途中でどこからともなく走ってきたバイクのライダーにつかまれ、難を逃れた。

「大丈夫か！グラン！！」

グランを助けたのは、赤いバイクに乗ったライダー、デイケイドだった。デイケイドはグランを地面に下ろし、自分もバイクから降りると、尋ねた。

「ああ、悪いな、助けてもらって。」

「気にするな……それより、いけるか？」

「ああ!?!」

デイケイドの言葉にグランは頷くと、カードデッキを取り出した。

「行くな、KAMEN……」と叫んだ!?!

STRIKE VENT

アビスはそう言って、デイケイドとグランに向かって、アビスクローから放たれる、アビススマッシュを放った!?!

「ちっ!?!」

FORM RIDE KUUGA RISING TITAN

デイケイドは、仮面ライダークウガライジングタイタンに変身すると、ライドブッカーが変わった、ライジングタイタンソードを両手で握って、まっすぐ振り下ろした!?!

ライジングタイタンソードの刃はアビスの放った、アビススマッシュは真っ二つに切り裂かれ、技は無効に終わった。

「俺が、アビスと戦うから、お前は邪魔されないうちに、さっさと変身しろ!?!」

クウガからデイケイドに戻ると、デイケイドはグランに向かって言い、デイケイドはライドブッカーを構えて、アビスに向かって走

った。

「変身なんぞはやらせん!!」

アビスはそう叫ぶと、アビスハンマーからミサイルがはなたれた!!

「ちっ!何があっても変身させる気はないみたいだな!!」

デイケイドはそう言ってライドブッカーをガンモードに切り替え、5発ほどあるミサイルのほぼ中央のミサイルに銃口を向け引き金を引いた!!

デイケイドの握るライドブッカーからマゼンタ色の銃弾が飛び出し、アビスハンマーが放った、5発のミサイルの中央に命中、銃弾が命中したミサイルは爆発、それと同時に周りにあつた4発のミサイルも爆発した。

「!今だ!KAMEN RIDER!!」

隙を見つけたグランは、叫ぶと、カードデッキをベルトに入れ、赤い光とともに仮面ライダードラゴンナイトに変身した。

「さあて、ライダーの変身の邪魔をするような悪い子にはお仕置きしないとな!!」

ドラゴンナイトは、デイケイドの隣に走ってくると、アビスを指して叫んだ。

「そうだな・・・行くぜ!グラン!!」

「ああ!!」

SWORD VENT

ドラゴンナイトはディケイドの言葉にうなずくと、カードデッキからカードを引き抜いて、ドラグバイザーに装填し、ドラグレットの尻尾を模した剣、ドラグセイバーを握り、ディケイドはライドブッカーソードモード構え、アビスにめがけて走った!!

「ちっ、二人まとめて相手をするのは面倒ですね、これで決めます!!」

アビスはそう言うと、カードデッキからカードを二枚引き抜いた。

「まずはこれ!!」

UNITE VENT

アビスがカードを挿入すると、二体のサメのモンスターが合体、ホオジロサメ型のモンスター、アビゾドンへ変わった。

「お次はこれだ!!」

FINAL VENT

アビスは、サメの顔をかたどった金色の絵柄が書かれたカードを装填、すると、アビゾドンが、ディケイドとドラゴンナイトめがけて宙を泳ぐようにして接近、体を勢いよく振って、二人を、吹き飛ばした!!

「がっ！」

「うっ！」

ディケイドとドラゴンナイトは、そのまま吹っ飛んで、地面に背中を殴打、アビスはすかさず右腕に装着された、アビスクローを二人に突き出し、必殺技の『アビスダイブ』を放ち、二人に向かって、巨大な水が飛び出し、命中、大爆発した！！

「ディケイドも大したことがなかったですね。」

アビスはそう言うと、高笑いしだした、だが

「悪かったな！！大したことなくって！！」

どこからともなくディケイドの声が聞こえ、アビスは周囲を見渡す、そして上空を見ると、そこには、ウイングナイトをファイナルフォームライドFFRさせた、ダークウイングナイトを背中につけ、ドラゴンナイトの首元をつかんでいるディケイドがいた。

「ふゝ、危なかった・・・サンキュー、ブルース。」

ディケイドは、地面に着地しながら言った。

「気にするな、それより早く片付けるぞ！！」

ダークウイングナイトから元に戻った、ウイングナイトはディケイドに向かって言った。

「ああ、グラン！ちよつとくすぐつたいぞー！！」

「えっ！！」

ディケイドは叫ぶと、ライドブッカーからカードを一枚取り出してディケイドライダーに装填した！！

FINAL FORM RIDE D D D DRAGON
KNIGHT

ディケイドがカードを装填すると、ドラゴンナイトの両肩にドラグレッダーの腹を模した、ガードベントが取り付けられ、ディケイドがドラゴンナイトの背中を押すと、ドラゴンナイトの体が変形し、ドラゴンナイトレッダーもしくはドラゴンナイトドラグレッダーに変身した。

「なんじゃこりゃあ〜！！！！」

ドラゴンナイトドラグレッダーは自分を見て驚いた。

「そのようなこけおどし、私には通用しません！！！！」

「こけおどしかどうか、これで試してやる！！！！」

アビスはそう言って、カードを装填、ディケイドも手をパンパンと鳴らすと、カードを装填した！！！！

STRIKE VENT！！！！

FINAL ATTACK RIDE D D D DRAG

ONKNIGHT!!

アビスは腕の装着された、アビスクローを突き出して、今まではなったのよりも大きいアビススマッシュがはなたれ、それと同時にアビゾドンが突っ込んだ。

対するデイケイドは、ドラゴンナイトドラグレッダーがデイケイドの周りを飛び、デイケイドはジャンプ！空中で一回転すると、ドラゴンナイトドラグレッダーがデイケイド向かって口から炎を吐いた！！デイケイドはその炎の推進力で一気に加速し、ドラゴンナイトの必殺技である『ドラゴンライダーキック』のデイケイドバージョン『デイケイドラグーン』を放った！！

「はあっ！！」

デイケイドの左足はアビスのアビススマッシュを打ち消し、さらにアビゾドンも貫くと、アビスのベルトめがけて突き刺さって吹き飛び、アビスは空中でそのまま爆発、消滅した。

「ふう〜、終わったな……。」

「ああ。」

そう言ってライダーたちは変身を解除、そばにあったビルの窓ガラスを潜って、ベントラから出た。

第九話 『ドラゴンに変われ!』 (後書き)

前の話で、この話でドラゴンナイトで終わりといったけど、次回で終わりです。

アンケートはまだまだ募集中ですのでよろしくお願いします。

第十話 『次の世界へ』（前書き）

これでドラゴンナイト編は終わりです。

第十話 『次の世界へ』

剣たちは仮面ライダーアビスとの戦闘を終了して、ベントラから外に出た……。

「そう言えば、気になったんだけど、恵を助けてくれた、あの仮面ライダーは？」

剣はベントラ、ビルのガラスから出ながらグランに尋ねた。

「七海か？ちょっと待ってる連絡してみる……。」

グランはそう言って、携帯を取り出すと、何処かに連絡を入れた。

「あつ、七海か？」

グランはそれからしばらく電話で話をはじめ、剣とブルースは少し離れて話を始めた。

それから数分後……

「なんか、すぐ近くのコンビニいるから、この辺で待っていてくれるってさ。」

グランは剣たちに駆け寄りながら言った。

「そうか……じゃあ、この辺で待とう……。」

「そうだな……。」

剣たちは暫く話をしていた、すると、恵ともう一人、恵に似た、髪の色が栗色の女性が走ってきた。

「おっ、来たな。」

グランはそれに気がつくどゆっくりと歩き、剣とブルースもそのあとを追うように歩いて行った。

「やあ、私は、七海、白鳥七海、はじめましてだね、宮本剣君。」

恵の隣にいた女性はそう言って、剣に向かって手を差し出した。

「あのときは、恵を助けてくれてありがとう。」

剣は七海が、仮面ライダーセイレーンだと言っことに感じ、お礼を言って手を伸ばし握手した。

「さて、これからどうするんだ？」

ブルースが剣に尋ねた。

「ああ、もうこの世界から出て行くよ……。」

「もう、行つちまうのか？もうちょっといたらいいのに。」

グランは剣に向かって笑いながら言った。

「そう言つわけにはいかないさ、俺がこの世界にいたら何が起きるか分からない……。」

剣は視線を落として言った。

「それってどういう意味なの？」

「俺の、デイケイドの力は破壊されかけている世界の破壊を止めることもできる、だがそれと同時に新たな脅威をその世界に作ってしまう可能性があるんだ……。」

「……つまり、お前がこの世界居るということは、この世界に異常が起きる可能性がある、だからこの世界を去る。そう言うことか？」

「グランの言う通りだ、だから俺は、これからもデイケイドの力が必要としている世界に行かなくちゃならないんだ……。」

剣は静かに言った、その時！

「っ！何なんだ、この音!!!」

ガラスを爪で引つ掻いたような音が聞こえた！！

「ゼイビアックスのモンスターか！！」

グランはそう叫ぶと、カードデッキを取り出し、周囲を見渡した。

「さあて、此処からはお前達ドラゴンナイトの物語だ、俺たちはこの世界から消える。」

剣はグランたちに向かって言った。

「そうか、もしよかったらまた会おうぜ。」

「ああ、またいつか！」

剣の言葉にグランとブルースはうなずくと、お互いに腕を合わせた。

「じゃあね、恵。」

「うん、またね七海！！」

恵と七海も笑顔で、握手した。

そして、グラン、ブルース、七海の三人はビルのガラスに近寄って。

「「「KAMEN RIDER！！」」」

と、叫んで、カードデッキをベルトに入れ、グランは赤、ブルーは青、七海は白の光に包まれ、ドラゴンナイト、ウィングナイト、セイレーンに変身、ウィングナイトとセイレーンはガラスの中に入り、ドラゴンナイトは剣にサムズアップするとガラスをくぐって、ベントラに向かった。

「さあて、俺たちも帰るかな……………」

「うん！」

剣がそう言うと思は大きくうなずいた、そして二人は歩きだした。

バイクショップに戻ってきた剣と恵はバイクショップの入り口から家に入った、すると、部屋の額に飾ってある写真が急に輝きだした！！

「次の世界だね。」

「ああ、今度の世界は……………」

剣は、額の中の絵を見て、

「カブトの世界か……。」

と言った。

額の写真は、何処かのビルの屋上で太陽を背にして天を指している、体全身が赤くカブトムシに似たライダー、仮面ライダーカブトが立っている写真であった。

第十話 『次の世界へ』（後書き）

付添いキャラのアンケートは次回の更新までですのでよろしくお願ひします。

第一話 『カブトの世界?』 (前書き)

今回からカブト編だああっ!!

第一話 『カプトの世界?』

「ここが新しい世界なのね……。」

ドラゴンナイトの世界から去り、新しい世界、カプトの世界にきた剣と恵はバイクショップから外に出て、恵は世界を見渡しながら言った。

「あれ?この世界どこかで見たとような気が……。」

恵は外の景色を見渡しながら静かに言った。

「本当か?」

「うん、でもどこで見たのかが思い出せない……。」

恵は額を押さえ、考えるようになしぐさをとりながら言った。

「もう少し、散策してみよう、もしかしたら何かわかるかもしれない……。」

「そうだね。」

恵がうなずくと、剣はバイクショップの方に戻って鍵をかけた。

「歩いていこう、その方が細かいところに目が行くから……。」

「うん。」

剣は恵がうなずくのを確認した後、歩き出した。

「やっぱり来たことあるような気がするよ、この世界……。」

「でも、お前には世界を渡る能力がないからな……おまえの世界に似たような景色があるからそんな風に思うんじゃないのか？」

「うん……そう言われると、そんな気もする……。」

「まあ、今のところ滅びの現象は起きてないみたいだから、細かい点を見ながらゆっくり散策しようぜ。」

剣と恵は街路樹の中を歩きながら話していた、その時！突然女性の悲鳴がどこからともなく聞こえ、そのあと、巨大な爆発音がこだました！！

「！あつちか！！」

剣はその声に反応すると、声のした方に向かって走った。

「ちよっと待ってよお！！」

恵もそのあとを追うようにして走った。

二人がしばらく走ってくると、小さな広場に出た、その小さな広場には、一人の女性と少年が複数の緑色の怪物に襲われているところであった。

「ワーム……そう言えばこの世界はカブトの世界だったな……」

剣は静かに言うと、一匹のワームを蹴り飛ばした！

「恵！この子供と、この女性をここから逃がせ！！」

剣は、少年と女性に駆け寄ると恵に向かって叫びながら2人を恵の立っている方に向かって、突き飛ばすように押した。

「わかった、剣君も気をつけて！！」

恵は軽くうなずくと、子供たちを連れてその場から離れた。

「さあて、お片づけしますか、変身っ！」

剣はデイケイドライバーを腰に巻いて、デイケイドのカードをドライバーに装填した！！

KAMEN RIDE DECADE

剣の体がまばゆい光に包まれ、光が晴れると、体全身がマゼンタで目が緑のライダー。ディケイドが立っていた。

「さあて、いくか!!」

ディケイドはそう言うと、腰のライドブッカーをブッカモードからソードモードにして、左手で握るとワームに向かって走った!!

「たあつ!!」

ディケイドは一番前にいた、緑色の甲羅をつけた、ワームのサナギ態を切り裂き、その後ろにいたワームを右手で殴って吹っ飛ばした!!

「ぎゅるっ……」

ディケイドに体を切られたワームと殴り飛ばされたワームは同時に立ち上がった、そしてその場にいた5匹のワームは顔を見合わせると頷いた、そして、彼らの体が赤く変色し始めた。

「脱皮はさせないぜ!!」

A T T A C K R I D E B L A S T

ワームたちが何をするのか理解したディケイドはディケイドライダーにライドブッカーから引き抜いたカードを装填、ライドブッカーをガンモードに変形させ、飛びあがるとアームたちにライドブッカーを構えた。

「くらえっ!!」

ディケイドはそう言うと、ライドブッカーの引き金を引いた! ライドブッカーの銃口からはマゼンタ色の玉が複数飛び出し、ワームたちに命中、脱皮中だったため、よけることも防ぐこともできなかつたワームたちはディケイドの攻撃をもろに喰らい、緑色の炎を上げながら爆発した。

「ふう〜、終わったか……。」

ディケイドは地面に着地した。

「だが、手ごたえがなさすぎる……。」

ディケイドは何か考えるようになしぐさを取って呟いた……。

「女性の悲鳴……爆発音、子供と女性を襲っていたワーム……まさか!!」

何かに気がついたディケイドは、マスクの中で目を丸くして恵の走り出した方を見ると拳を強く握って、恵の走って行った方に向かって走り出した。

恵は……。

「ここまで来れば大丈夫ですよ……。お怪我はありませんか？」

恵は一緒に逃げていた女性に尋ねた。

「ええ、大丈夫です……。助けにいただいたお礼をさせて貰ってよろしいでしょうか？」

その女性は恵に向かって尋ねた。

「そんな、気にしないでください……。私はただ、言われた通りにさせていただけですから……。」

「そんなわけにはいきません……。そうだわ、あなたも私たちの仲間にしてあげる。」

女性はそう言いながら手を挙げた、するとどこからともなく3匹のワームが現れ、女性と少年もワームに変わった。

「うそ……。ワームだったの……。」

恵は驚いた表情をして、後ろに後退した。

「そうよ、じゃあ、早速死になさい!!」

女性に変身していたワームはそう言うと右腕を振り下ろそうとした!!

「やっぱり、思った通りだ!!」

デイケイドが叫ぶと、女性がワームへと姿を変えた。

「新しい力を試すか！KAMEN RIDER!!」

デイケイドはそう言って、ライドブッカーからカードを引き抜いてドライバーに装填した!!

KAMEN RIDE DRAGONKNIGHT!!

デイケイドの体の周りを赤い光が多い、デイケイドは、体全身が赤い竜を模したライダー、仮面ライダー龍騎ことドラゴンナイトに変身した!!

「次はこれだ!!」

ATTACK RIDE ADVENT!!

Dドラゴンナイトは、ライドブッカーのカードをドライバーに装填した、すると、近くにあったガラスから赤き竜、ドラグレッダーが飛び出して、恵を攻撃しようとしていたワームを吹っ飛ばした!!

「があっ!!」

ワームたちは勢いよく吹き飛ばされ、強制的に恵から離された。

「えっ、何が起きて……………」

恵は何が起きたか分からずに周囲を見渡した、すると恵の前からDドラゴンナイトが走ってきた。

「剣君!」

「恵、離れてろ、この虫どもを焼却する……………」

Dドラゴンナイトはそうつぶやくと、カードを一枚ドライバーに装填した。

ATTACK RIDE STRIKE VENT!!

Dドラゴンナイトがカードを装填すると上空から、ドラグレツダの顔をした、ドラグクローが降ってきてDドラゴンナイトはそれを右腕に装着した。

「はあああっ……………」

Dドラゴンナイトは静かに息を吐きながら右腕を引き、一気にワームたちめがけて右腕を突き出し、ドラグクローから強烈な火炎弾を放つ、ドラグクローファイヤーを放った!!

「ぎゃあああつ!!」

ドラグクローファイヤーをくらったワームたちは声をあげて、緑色の炎とともに爆発、消滅した。

「ふう〜、終わったか……。」

ドラグクローファイヤーを放った事によりドラゴンナイトの変身が消え、Dドラゴンナイトはディケイドに戻って、変身を解除しようとした、その時!!

「剣君!後ろ!一匹生きている!!」

恵がディケイドに向かって叫んだ!!ディケイドはその声に反応すると刃後ろを振り返ろうとした、だが!!

「がつ!!」

蝉に似たワームに体を切りつけられ、そばにあった木まで吹っ飛んでしまい、背中を木にぶつけた。

「くそが、図に乗りやがって!!」

ディケイドは呟いて立ち上がった、その時!!

「！もうここまで！！」

蟬のワームはすでにデイケイドのすぐそばに来ており、デイケイドを倒そうとしていた。その時！！どこからともなくデイケイドと蟬のワームの間に赤い閃光が走ってきたと思ったら、そのワームは後ろに飛ばされ、空中で浮いたまま緑色の炎に包まれて爆発した。

CLOCKOVER

そして、どこからともなく音声が聞こえるとデイケイドの前には体全身が赤く瞳が青い、カブトムシのような角をもった、仮面ライダーカブトが立っていた。

「大丈夫か？剣、それと恵……。」

カブトはうれしそうな声で、デイケイドと恵に言っているとデイケイドに手を差し伸べた。

「えっ？」

「なんで私の名前を……？」

デイケイドは困惑しながらカブトの手を取り、恵は首をかしげた。

「久し振りだなあ、二人とも……。」

カブトはそう言って、変身を解除、剣も変身を解除し、恵は剣に近寄った。

「よっ！！」

カブトに変身していた青年は笑顔で軽く手を挙げた……その瞬間……

「ええ〜!!」

「お、お兄ちゃん!!」

剣と恵は驚いた、なぜならカブトに変身していたのは、恵の兄であり、恵の世界の住人の坂本隼人だったからである……。

第一話 『カブトの世界?』 (後書き)

カブトの世界は長いです、それと今回でアンケートは閉め切りに
.....。

第二話 『変わった世界』 (前書き)

久しぶりの更新です。

第二話 『変わった世界』

「よっ、久しぶりだな、二人とも。」

剣の目の前にいた、体が赤く目が青くてカブトムシのような角をもった、ライダー『仮面ライダーカブト』は剣と恵を見ると、ベルトについてあるカブトムシ型の機械『カブトゼクター』をはずし、変身を解除、そこには、恵の兄である『坂本隼人』が立っていた。

「隼人お！」

「おにいちゃん!!」

二人を声を上げ、目を丸くして驚いた、無理もない、今いるところは『カブトの世界』と想像していたのに、目の前には『恵の世界』にいるはずの隼人が立っているからだ。

「まあ、二人ともに話したいことがあるから……バイク屋で話そうぜ。」

隼人は剣と恵に向かって笑顔で言った。

「ああ……。」

「うん……。」

剣と恵の二人はゆっくりと頷き、隼人とともにバイク屋に向かって帰って行った。

「デイケイドよ、遂にこの世界にやってきたな……だが、この世界で貴様の旅は終わる……この世界のライダーは貴様の敵だ!!」

3人の姿を遠くで見っていた鳴滝は高笑いした、そして鳴滝の後ろには青髪で短髪の青年が立っていて、青年の手には銃が握られていた。

剣たちはバイク屋に帰ってくると、隼人がすぐに座らせて、この世界のことについての内容を話した。

「つまり、この世界は、恵の世界なんだな……。」

剣は隼人に尋ねた。

「ああ、お前らが世界を出る前に、紅渡から、この世界を守れとカプトゼクターとこのベルトを渡されたんだ。」

隼人はそう言って、ベルトとカプトゼクターを見せた。

「カブトはゼクターに選ばれた人間しか変身できないはず……
無作為に紅さんは選んだのか……。」

剣は呟くように言った。

「いや、あの人がわく、この世界のライダーを、カブトになり得る人物を探していたところ、俺に行きついたらしい……。」

「なるほど……他にもライダーがいるんだろ？」

「まあな、だが、みんな俺の敵だよ、いや、今日から敵になるな……。」

隼人は静かに言うと立ち上がった。

「剣、この世界のライダーは、俺以外敵だと思え、ザビーも、ドレイクも、サソードもな……。」

「ちよつと待て、なんでだ！なんで俺の……。」

剣は隼人の言葉に対して驚いて立ち上がった、だが“ある事”に気がつくど額に手を置いて椅子に座った。

「鳴滝、だな……。」

剣は静かに言うと、隼人はゆっくりと頷いた。

「鳴滝のバカたれが、俺が『世界の破壊者だから、これを使って
ディケイドを倒せ。』とか言ったんだろ？」

「そつだ、だが俺は鳴滝の言うことは信じる気はない……。
だいたい、仮にそつであるなら、お前が初めて来たときに壊れてい
るはずだ……。」

隼人はそつ言うと、椅子に座った。

「でも、その鳴滝とかつて言う人も迷惑よね、勝手に剣君を破壊
者って言つてさ。」

恵がそつ言いながら、給湯室から出てきて、剣と隼人にコーヒー
を渡した。

「迷惑極まりないぜ、まあ、俺はあいつの正体を知っているが、
あつちは俺の正体知らないんだけど……。」

剣は静かに言うと、コーヒーカップを持ち、縁を唇に近づけた。

「そつ言えば、隼人。ガタツクやWホッパーは？」

剣はカプトの世界にいるはずのライダーについて尋ねた、因みに、
ほかにもコーカサス、ヘラクレス、ケタロスと言うライダーが存在し
ているが、剣はこの世界にはいないだろうと考え名前を出さなかつ
た。

「ガタツクは変身者がいるんだが、消息不明、キックホッパーと
パンチホッパーは別の世界に鳴滝とともに移動したきり帰ってきて
いない……。」

「そつか……。」

「それにしても懐かしいな、この部屋は、あの頃と何も変わっていない。」

隼人はそう言うと立ち上がって、部屋を見渡した。

「何言ってるの、私たちが旅に出てから、1週間ほどしか経ってないのよ。」

恵は隼人に向かって言った。

「残念、この世界はお前たちがいなくなってから、半年経ってるんだ。」

隼人は笑みを浮かべて言った。

「なるほど、この部屋の時間と外の世界の時間は過ぎる時間が違うって訳か。」

「そう言うことだ。」

「でもこれで謎が解けた。」

恵はそう言うと、剣の横に座った。

「何の?」

「この世界の風景は見たことがあるって言ったけど、私の世界だから当たり前なんだ。」

「そうだな……それにしてもお前ら仲いいよなあ。」

隼人はニヤニヤしながら椅子に座った、と、その時、窓ガラスをたたく何かがあった。

「ん？」

剣はそれに気づくと立ち上がり、窓に近寄った、するとそこにはカブトゼクターがあり、カブトゼクターはその角で窓をたたいていたのだ。

「なんだ？」

気になった剣は、窓をあけカブトゼクターを中に入れた、すると隼人のもとに飛んで行った。

「どうやらワームだな……剣、ワームだ行くぞ!!」

隼人はカブトゼクターをつかむと立ち上がった。

「ああ、だがお前はどっやって行くんだ、バイクないだろ。」

剣は隼人に向かって尋ねた。

「ふっ、ついてこい。」

隼人はそう言うと剣を連れ、バイク屋から、家に続く道を通ると、家の中からいける、車庫に向かって歩いていき、車庫に通じるドアを開けた、するとそこには、剣専用のバイクと、恵専用のバイク、そして見たことのない赤くカブトムシに似たバイクが置かれていた。

「なんで、エクステンダーが……」

剣は、見たことのないバイクを見ながら言った。

「さすがは剣だな、よくカブト専用のマシンの名前を知ってる。」

「あのなあ……なんでお前が……」

剣は頭を掻きながら何かを言おうとしたが、諦め、自分のバイクにまたがった。

「恵、お前はここにいろ、今回はチョイと危険なことになりそうだ……」

剣はヘルメットをかぶって言った。

「いやだ、私も付いて行く。」

恵はそう言うとヘルメットをかぶって自分用のバイクに乗った。

「つたく、恵、これを持ってろ。」

剣はそう言うとバイクから降りて、懐からカードと拳銃を取り出すと恵に渡した。

「いいか？対怪人用の光線銃だ。そのカードは、光線の威力を変えるものだ。『レッド』がパワーを上げ、『ブルー』は弾速を上げ、『グリーン』がバリアを張る、丁寧に使えよ。」

「うん、わかった。」

恵は大きくうなずいた、剣はそれを確認するとバイクにまたがった。

「よしっ、行くぜ、二人とも。」

隼人は2人の準備が整ったのを確認すると、壁にあるスイッチを押してシャッターを開けた。

「この車庫から俺たちが出た後は、すべての鍵をロックしろ！」

隼人は大きく叫んだ、すると、

「了解シマシタ、イッテラッシャイマセ。」

と音声が聞こえた。

「……………、こんなの付いてたんだ……………」

「知らなかった……………」

剣と恵は口をポカンと開けて静かに言った。

「何やってんだ！行くぞ！！」

「ああ、そうだった！！」

「ボーっとしてた！！」

二人は隼人の声で、意識を戻すと、バイクにエンジンをかけた、
そして隼人、剣、恵の順番で車庫から飛び出した！！

第三話 『謎のライダー現る。』

ワームが暴れていたのは、町にある大きな広場だった、この広場は待ち合わせなどに使われ、近くにはバスの停留所や、コンビニ、ショッピングモールなどがあり、さらに許可がとりやすく、ドラマなどのロケ地にもよく使われる場所で地元の間には有名な場所だった。

「お前らの好きにさせるか!!」

隼人は、周囲の建物を壊している蜘蛛に似た、体が赤と青の縞模様のワームと黒と黄色の縞模様のワームに向かって走って行くと突撃した。

「行くぞ、剣! 恵!!」

隼人は、バイクを止めてヘルメットを脱ぐと、カブトゼクターを手握り、後ろにいる剣と恵に向かって叫んだ。

「ああ!!」

剣は隼人の呼びかけに大きく頷くと、バイクから降りて腰にデイケイドライバーを押し当て、ベルト状にした。

「恵! あいつらに近づきすぎるなよ。」

剣は、恵に向かって言うと隼人と一緒にワームに向かって歩いて行き、

「変身!!」

二人は同時に叫ぶと、隼人はカブトゼクターをベルトの中央に入れ、剣はデイクイドライバーにカードを装填した。

H E N S H N

K A M E N R I D E D E C A D E !!

そして二人は、カブトマスクドフォームと、仮面ライダーデイクイドに変身、二人はお互いの顔を見合わせて頷くと一気に走りだした!!

「キャストオフ!!」

C A S T O F F

C H A N G E B E E T L E

カブトは走りながら、カブトゼクターの角を右側に倒した、するとカブトの体を覆っていた銀色の鎧が弾け飛んで、体が赤い鎧に包まれた、『ライダーフォーム』に変身した。

「たあっ!!」

「ふんっ!!」

デイクイドはライドブツカーをブツカモードからソードモードに変えて、黄色と黒の縞模様の蜘蛛のワームを切り裂き、カブトは、刃先の黄色いクナイ状の武器、カブトクナイガン、クナイモードで

赤と青の縞模様の蜘蛛のワームの体を切り、後ろに下がらせた。

「一気に決めるぞ！」

「ああ！」

カブトはデイケイドに向かって言うと、ベルトのカブトゼクターに手をかざし、デイケイドはライドブツカーからカードを一枚引き抜いて、デイケイドライバーに装填した。

FINAL ATTACK RIDE DE DE DE
ECAD E

デイケイドがファイナルアタックライドのカードを装填するとデイケイドの前にデイケイドの顔を模した複数枚のカードが並べられ、カブトはカブトゼクターの足についている、スイッチのようなものを、順番に押しに行った。

1、2、3

「ライダーキック!!」

カブトは叫ぶとカブトゼクターの角を、マスクドフォームのときの状態に戻し、再び、ライダーフォームの状態にした。

RIDER KICK

カブトゼクターから音声が発せられ、カブトの体に電流のようなものが走った、これで必殺技の準備は完了、カブトとデイケイドは顔を見合わせると、二体の蜘蛛のワームめがけて走った!!

「うおおおおつ!!」

「はっ!!」

デイケイドは、ライドブツカーを構えてカードをくぐつていき、カブトは上空に飛び上がるととび蹴りの態勢を作った、そして

「やあああああつ!!」

「とりやあああつ!!」

デイケイドは、黒と黄色の縞模様の蜘蛛のワームの目の前で足を止めると、刃先が赤く輝くライドブツカーソードモードを両手で握り、ワームの体めがけて縦にまっすぐ振り下ろし、そのままの状態です、右から左に向かって薙ぎ払うように振り、ワームの体を十字に切り裂き、必殺技のデイメンションスラッシュを放った!!

カブトは赤と青の縞模様の蜘蛛のワームに向かって青い閃光に包まれた右足を勢いよく突き出し、数多くあるライダーキックのバリエーションのうち、とび蹴りのライダーキックを放った!!

「ぐああああああああつ!!」

2体のワームは声を上げ、緑色の炎とともに爆発した。

「ふう〜……」

「片付いたな……」

カブトとデイケイドはそう言って変身を解こうとした、その時!

「剣くん危ない!!」

恵が突然叫んだ!!

「っ!」

剣が後ろを振り返ると、小型の黄色い蜂のようなものが連続で飛んできて、すべてディケイドに命中した!!

「がはっ!!」

ディケイドは体から火花を散らしながら吹っ飛び、そばにあった木に背中をぶつけた。

「剣!大丈夫か!!」

「剣君!!」

カブトと恵はディケイドに駆け寄った。

「ああ、大丈夫だ、ちょっとダメージ受けたけどな……。」

ディケイドはそう言うつとゆっくりと立ち上がった。

「これはゼクトマイザー……蜂の形と言うことは……
おまえだな、影島……。」

カブトはディケイドに先ほど命中した弾のような物を拾うと、目の前をにらんで言った。

「さすがだな、坂本……………」

カブトの睨んだ方には、ミツバチのような姿と色をし、蜂を模したライダー、ザビーと、紫色で頭にサソリの尻尾をつけたマスクをかぶった、サソード、体全身が青くトンボを模したライダー、ドレイクがカブトに睨んでいる方から歩いてきていた。

「お前がデイケイドだな……………この世界のために死んでもらう……………」

サソードは左の大腿部にある刀状の武器、サソードヤイバーを引き抜きながら言った。

「さて、早瀬。デイケイドは俺が倒す……………」

サソードに向かってザビーは静かに言った。

「ちっ、仕方無いな……………好きにしろ……………」

サソードは悔しそうな声をする。サソードヤイバーを下ろした。

「さて、どうする？坂本。俺たちに協力するか？」

ドレイクは、カブトに向かって言った。

「寝言は寝て言え、俺はお前らに協力しない。俺は元から鳴滝が嫌いなんだ!!」

カブトはザビーを指しながら叫んだ!!

「……なるほど……仕方無いな……なら貴様も死ね……」

ザビーが静かに言うと、ほかの2体のライダーは一気にカブトに向かって走り出した。

「たっ！」

「やあっ!!」

サソードはカブトに向かってサソードヤイバーを振り下ろした！
！だが……

「どうしたその程度では俺には勝てんぞ？」

カブトはクナイガンでサソードヤイバーの先端を受け止め、カブトは静かに言った。

「甘い！もう一人いるぞ!!」

ドレイクはそう言って手に握った、トンボ型のドレイクゼクターとそれをつけるためのドレイクグリップを合わせ銃と化した、ドレイクゼクターの銃口をカブトに向けると引き金を引いた！！
ドレイクゼクターの銃口からは無数の銃弾が飛び出した！！

「甘いな……クロックアップ。」

CLOCK UP!!

カブトは静かに呟いて、ベルトの右側を叩き、クロックアップを発動させ、ドレイクの放った銃弾をかわすと、一瞬で、サソードの後方に回ると背中を蹴り、サソードを銃弾のそばに近づけ、銃弾に命中させた。

「ぐおおああああっ！」

「サソードは声を上げると地面に膝をついた。

「くそっ……味な真似しやがって……殺すっ！」

「サソードはそう言うと、立ち上がった。

「おらっ、ぼさっとすんな行くぜっ！」

「言われなくてもわかっていますよ。」

「サソードはドレイクに向かって叫びドレイクは頷くとベルトに手を置いて

「クロックアップ!!」

CLOCK UP!!

二人は同時に叫ぶとクロックアップを発動させ、目の前にいるカブトめがけて走った!!

その頃、ディケイドとザビーは。

「ふんっ！」

ザビーは目の前にいる、体全身が赤いボディに包まれ目も同じく赤く、二本に輝く黄金の角をもった、ベルトがディケイドライバの、ディケイドが変身したディケイドクウガ（以下Dクウガ）に向かって右腕を突き出した！！

「よっつ。」

だが、その攻撃はあっさりと屈んでかわされてしまった。

「たあっ！」

さらにDクウガは屈んだ体制のまま右腕を引いて、ザビーの腹に向かって右腕を突き出して後ろに大きく下がらせた！！

「どうした。クロックアップをしないのか？」

Dクウガはクロックアップを使わないザビーに向かって言った。

「ふっ、今君が変身しているのは仮面ライダークウガだろ？クウガには相手の動きを見切ることのできる姿があると聞く……それに变身されるとせっかくのクロックアップも無駄になるのね……保険さー！！」

ザビーはそう叫んで、Dクウガめがけて走った！！

「なるほど、慎重に行動したいわけか!!」

Dクウガもそう言って一気に走り、ザビーは右腕を目一杯引き、Dクウガは左腕を目一杯引いた、そして

「たあっ!!」

「あつたっ!!」

ザビーとDクウガは同じタイミングでお互いが引いた腕を突き出した!! Dクウガの突き出した左腕はザビーの左胸をとらえ、ザビーの突き出した右腕はDクウガの右胸をとらえた。

「ぐうっ……。」

ザビーは後ろに軽く跳んで左胸を手で支えながら後ろに下がった、と、その時!

「もらった好きヤリッ!!」

Dクウガはそう言うと、金色のカードをライドブッカー、ブッカモードから取り出して、ディケイドライバーに装填した!!

FINAL ATTACK
RIDE KUKUK
UGA

「なっ!!」

Dクウガはカードを装填した後、ザビーに向かって走った、ザビ

ーはそれを見て驚いた、ザビーはディケイドも自分と同じくらいのダメージを受け、次の攻撃には移れないだろうと考えていたからだ。だが、ディケイドはその予想を大きく上回ってザビーに向かって必殺技を仕掛けようとしていた!!

「たああああああつ!!」

Dクウガはザビーの前で飛び上がると空中で一回転、燃え盛る左足を突き出し、必殺技の『マイティキック』でザビーの腹を蹴り、後方に勢いよく吹っ飛ばした!!

カブトの方では……。

「くっ!!」

「当たらない!!」

サソードとドレイクは、先ほどからカブトに攻撃を繰り返しているが、カブトには一切命中しなかった。

「……………そろそろいいかな……………」

カブトは静かに言うと、二人の足元に向かって、カブトクナイガン、ガンモードを撃ち、砂ぼこりを立たせ、目を眩ませた！！

「くっ！」

「小癩な！！」

二人は腕を振って煙を払った！二人の前にはカブトはおらず、二人は恐る恐る、右側を見た。するとそこには、既にライダーキックの準備を終えたカブトがいて、右足には電流が走っていた。

「ライダーキック……たあっ！！」

カブトはそう言うと、右足を二人に向かって突き出した！！

「ぐはっ」

「ぼがっ！！」

カブトの放った右足は二人の腹をとらえ、二人の体は大きく吹っ飛んだ、そしてDクウガが蹴り飛ばしたザビーと激突、三人はぶつかって地面に倒れた。

「ぐう……。。。」

「馬鹿な俺たちじゃ、かなわないだど……。。。」

「ぐう……」

三人のライダーは攻撃され、傷ついた場所を触りながらゆっくりと立ち上がった。

「どうする、このまま負けを認めるか？」

ディケイドに近寄ったカブトは、三人のライダーを見ながら言った。

「やはり、お前たち3人では、ディケイドには敵わなかったか……」

突然、ディケイド達の背後に、灰色のオーロラのようなものが現れ、その中から茶色いコートと同じような帽子をかぶり、眼鏡をかけた中年の男が現れた。

「！鳴滝い！！」

カブトが叫ぶよりも前にディケイドが鳴滝の名前を叫んだ。

「ディケイド、今日は君に面白いものを持ってきた。」

鳴滝が言い終わると、背後のオーロラから、青と黒のジャケットを着た短髪で青髪の青年が現れた。

「！翔！！」

ディケイドはその青年のことを知っているようで、青年の名前を

叫んだ。

「やはり知っていたか……彼はディケイドを倒すべく、大シヨッカーから盗み出した、『ディエンドライダー』で世界を渡っていた。その道中、私と出会って、この世界まで導いたのさ。」

鳴滝が言い終わると、翔と呼ばれた青年は、鳴滝の前に出た。その時彼は懐から青い銃のようなものを取り出した。

「久し振りだな……剣。俺はお前に会うためだけに、ずっと世界を旅してきた……だから鳴滝には感謝している。俺とおまえを合わせてくれたことにな。」

翔はそう言う一枚のカードを手に持った銃、『ディエンドライダー』に挿入した。

KAMEN RIDE

「剣、お前に俺の力を見せてやる……変身っ!!」

翔はそう言うディエンドライダーを握った右腕を上には伸ばし、引き金を引いた!!

DIEND

電子音とともにディエンドライダーからは、シアン色の四角形の光が撃ちだされると同時に、同じくシアンの光が、翔を包む、そして四角形の光が翔の体に突き刺さり、翔は体がシアンと黒のライダー仮面ライダーディエンドに変身した。

「デイエンドだと、おい！あれもお前とおなじライダーなのか！
！」

カブトはデイケイドに尋ね、デイケイドはゆっくりと頷いた。

「行くぞ、剣！」

デイエンドはそう言うと、デイエンドライバーの銃口を剣に向けた。

「ちっ、やるしかないのか……。」

デイケイドもそう言ってライドブツカーをガンモードにして銃口をデイエンドに向け、二人は、カードを取り出した。

ATTACK RIDE BLAST

二人は同じカードを装填し、しっかりと目標に銃口を向けると引き金を引いた！！デイケイドの握るライドブツカーからはマゼンタの銃弾が、デイエンドの握るデイエンドライバーからはシアン銃弾が無数に放たれた！！

第四話 『戦いの神現る』（前書き）

サブタイトルと中身は、いまいち関係ありません。

あと、今回は長いです。

第四話 『戦いの神現る』

お互い向かい合い、武器を構えているマゼンタ色の戦士、仮面ライダーデイケイドと、シアン色の戦士、仮面ライダーディエンドは、手に持った銃の引き金を引いた！！

A T T A C K R I D E B L A S T

デイケイドの握るライドブッカー、ガンモードからはマゼンタ色の銃弾がいくつも放たれ、ディエンドの握るシアンの銃、ディエンドライバーからはシアン色の銃弾がいくつも放たれ、二人の放った弾はお互いが狙っていた、目標に命中した。

「ぐあっ！」

「うおおっ！！」「」

デイケイドの放ったデイケイドブラストはディエンドの背後にいた、茶色いコートを着た中年の男、鳴滝に命中、急所は外して撃つため、鳴滝のコートの襟の部分をかすめただけであったが、鳴滝はデイケイドを睨んだ。

ディエンドの放ったディエンドブラストはデイケイドとカブトの後ろにいた、ミツバチを模したザビー、サソリを模したサソード、トンボを模した、ドレイクに命中、3人は体から火花を散らして後ろに下がった。

「ナイス、翔。」

「いやいや、大したことじゃないよ。」

デイケイドとディエンドはマスクの中で笑みを浮かべて言った。

「ディエンド、貴様、何のつもりだ!!」

鳴滝はディエンドを睨むと大声で叫んだ!!

「ごっごっごっごっ。」

ディエンドはそう言つと、飛びあがつて、デイケイドの隣に着地した。

「まさか、貴様、私をだましたのか!!」

鳴滝は目を見開いてディエンドに向かって叫んだ。

「そうだ、だから言つたら、デイケイドに合わせてくれたお前には感謝してゐるって。」

ディエンドはそう言つてデイケイドの肩に左腕を乗せて言った。

「鳴滝、俺がデイケイドということを知つていて、翔が変身するディエンドを送り込んだのが失敗だったな。」

デイケイドはそう言つとライドブッカーをソードモードにして構えた。

「終わりだ……ゾル大佐……。」

デイケイドは周りに聞こえないような声で静かに呟いた、だが、なぜか鳴滝には聞こえていた。

「貴様なぜそのことを!!」

「お前は俺たちのことを知らないが俺たちはお前のことを知っている、ということさ!!」

デイエンドはそう言ってデイエンドライバーを鳴滝に向けた発砲した!!

「くっ!!」

鳴滝はオーロラを発生させて、その場から逃げた。

「逃げたか・・・まあいい・・・」

デイエンドはそう言ってデイエンドライバーを下ろし、ザビー達の方を見た、それにつられて、デイケイドとカプト、そして恵も振り返った。

「こいつらをまずはどうするか、だな・・・」

カプトは二人に尋ねた。

「俺たちの力だったら倒すのは簡単だが・・・隼人も翔の正体知りたいたろっし・・・ここは撤退と行きますか・・・」

「そうだな、俺も坂本とカプトには俺のことを知ってもらいたい・・・」

ディエンドが言い終わると、3人はうなずいた。

「それでは、撤退する前にプレゼントを。」

ディエンドはそう言って、腰のカードホルダーからカードを3枚引き抜いてディエンドライバーに装填、ディエンドライバーの砲身をポンプのようにスライドさせ、ザビー達の方に銃口を向け、引き金を引いた。

K A M E N R I D E C A U C A S U S H E R C U S
K E T A R O S

そうすると、3人の目の前に、金、銀、銅のカブトムシに似たライダーが現れた。

「お前は、ほかのライダーを召喚できるのか……。」

カブトはディエンドのほうを見るとディエンドに尋ねた。

「そうだよ、この世界はカブトの世界ということで、ライダーシステムが存在していない、カブトと同じルーツのライダーを出してみただ。」

ディエンドはカブトに向かって言った。

「んじゃ、頼んだ。」

ディエンドは自分が出した3人のライダーに向かって言い、三人のライダーは静かにうなずいてザビー達に向かって走ると、ザビー

達と戦闘を始めた。

「よし、あいつらが戦ってくれている間に、俺たちは退くぞ。」

デイケイドはそう言つと、自分のバイクに近寄つた。

「ああ……。」

「分かつた。」

カブトと恵は頷いてバイクに近寄つた。

「翔、お前はどつする?」

「君たちの居場所は見当が付いているから先に行つてるよ。」

デイエンドはそう言つて、デイエンドライダーにカードを挿入した。

「じゃあね。」

ATTACK RIDE ILLUSION

デイエンドはデイエンドライダーの引き金を引くと、姿を消した。

「さて俺たちも行きますか……。」

デイケイドは静かに呟くとバイクを走らせた。

デイクイド達は、バイクショップに戻る途中で変身を解除した、そしてバイクショップをガレージの中に入れ、店の方ではなく、生活している居宅の方に戻った。

「やあ、意外と速かったね。」

リビングに続く、扉を開けるとそこには、仮面ライダーディエンドこと、佐々木翔がいて、彼はコーヒーの入ったコップを机の上に置いていた。

「お前……何やってんだよ……。」

剣は翔を見ながら言った。

「ん？君たちが帰ってくるまで暇だったから、一応、話の準備と
思ってたね……。」

翔はそう言うと、椅子に座った。

「なんで、ここに居るのかというのを聞いたんだが……。」

「

隼人はそう言うと、翔の目の前に座った。

「そいつは、俺たちのことをあらかた知っていて、ここが世界を移動できる場所と分かったから先回りしていたんだろうぜ。」

剣はそう言うと、翔の隣に座り、恵も剣につられるようにして、隼人の隣に座った。

「さて、君たちは俺たちのことについて、何が知りたい？」

翔は静かに二人に尋ねた。

「そうだな・・・まずはお前たちはなんでそんなに親しいのか、それを教える。」

隼人は考えるしぐさを取って、暫く黙り、質問を考え、考えがまとまったため、目を開けて、剣と翔に尋ねると同時に二人の顔を見た。

「俺と翔は同じ世界の出身で、仲間・・・友人関係だったんだ・・・。」

「剣の言うとおり、俺たちは自分の世界で仮面ライダーとして大シヨツカーと戦っていたんだ。」

剣と翔は、目を閉じ、静かに言った。

「じゃあ、なんでディケイドとディエンドに？」

恵が尋ねると二人の表情がゆがんだ。

「あれ？何かまずいこと聞いちゃった……？」

恵は不味い。という表情になると静かに言い、うつむいた。

「今は言えない……いつの日か、俺たちの世界に行く日が来る、その時まで待っていてくれ。」

剣は恵の手を握ると言った。

「うん、わかった……じゃあ、その時まで待ってる……」

恵は顔を真っ赤にして静かに言った。

「よし、最後、鳴滝との関係は？」

隼人は、コーヒーの入ったマグカップを口につけ、コーヒーを口に含み、ニヤニヤしながら剣と恵のやり取りを見ると、机の上にマグカップをそつと置き、表情を戻して二人に尋ねた。

「俺たちは知っているがあいつは知らないっていう関係だよな？」

「ああ、あいつは俺たちがなぜディケイドやディエンドの力を持っているのかも分からなければ、自分の正体がばれていることさえも知らないはずだ……。」

「正体だと……？」

「そつ、あまり言えないけど鳴滝は世界の破壊者……ってと

ころだな、その目的のために俺がディケイドが邪魔なだけだ……
」

剣はそう言ってマグカップを口に近づけると、コーヒーを一気に飲み干した。

「くそっ！雑魚が舐めやがって。」

ザビーは静かに呟いた、すると目の前でうつ伏せに倒れていた、体全身が銀でヘラクレスオオカブトを模した、仮面ライダーヘラクレスは消滅した。

「ええ、ですがディエンドが召還したのは、そのライダーの一定のスペックを持っているだけです、彼らは撤退のためだけに召喚されたライダーということですね。」

「そうだな……それより、影島。どうする？あいつら逃げちまっただぜ？」

ドレイクとサソードも、ケタロスとコーカサスを倒し、消滅したことを確認すると、ザビーに近寄った。

「あいつらも仮面ライダーだ、怪人が出たと分かれば、すぐに飛び出してくる……………」

ザビーは変身を解き、眼鏡をかけ、茶髪の青年に戻ると静かに笑った。その時その青年『影島ソウ』の目が緑色に輝いた。

場所は戻って剣たちのいる場所……………」

「ディエンドの能力はライダーを召還することなんだ。」

隼人の質問で、質問タイムは終わったはずだが、今度はディエンドとディエンドのことについて興味を持った二人は、ライダーのことについて話し始めていた、すると、窓をカブトゼクターが叩いた。

「またワームか……………」

「そうみたいだな……………」

「人気者はつらいな……………」

剣、翔、隼人の三人は、口々に言うと立ち上がった。

「行くぜ、隼人、翔、恵！」

剣が言うと三人はうなずき、三人はガレージに向かい、剣、隼人、恵は自分専用のバイク、翔は専用のバイクはないが、剣が予備で作っていた青色のVTR1200を渡し、翔はそれに乗り、4人はワームの現れた現場に向かった。

4人が向かった先は、都内の地下にある、雨水などをためておける大型の貯水場だった。

「ちつ、ワームはガセ……もしくはこいつらが倒したのか……」

剣は目の前にいる、影島、その隣にいる紳士服を着た男、さらにギターケースのようなものを肩にかけ、帽子を深くかぶった男をにらんで言った。

「まあ、どつちでもいい、倒そう……。」

隼人はそう言うとカブトゼクターを握った。

「そうだな……隼人の言う通りだ……。」

剣もそう言ってデイケイドライバーを腰に巻き、翔もデイエンドライバーを握った。

「……恵、翔から女のライダーカード貰ったけ、なにかあったときに使えるし、ワームが来る可能性もある。」

剣が恵に言うと恵は静かにうなずいた、そして翔は恵にカードを二枚渡した。

「よし、行け。」

剣の声に、3人はうなずくと4人は前に出た、それと同時に目の前にいた3人も前に出て。

「変身っ!!！」

と、計6人の戦士は叫んで変身した。

K A M E N R I D E D E C A D E

K A M E N R I D E D I E N D

H E N S H I N

CAST OFF

CHANGE BEETLE

CHANGE WASP

CHANGE SCORPION

CHANGE DRAGONFLY

ディケイド、ディエンド、カブト、ザビー、サソード、ドレイクの6人は同時に走り出した。

「ディケイドは俺にやらせる!!」

ザビーはそう言ってディケイドに飛び掛かった、それを見たサソードはカブトに、ドレイクはディエンドに向かって走った。

「くらえっ!ディケイド!!」

ザビーは叫ぶとディケイドに向かって右腕を突き出した!!

「くっ!!」

ディケイドはライドブッカーをソードモードにして防ぐが、思ったよりも力が強く、ディケイドは後ろに飛ばされ、柱に激突した!!

「剣!!」

「剣君!!」

デイエンドとカブトはドレイクとサソードと戦いながら、デイケイドの吹っ飛ばされた先を見て、恵はデイケイドの吹っ飛ばされた方を見ると大声で剣の名前を呼んだ。

「大丈夫だ……」

柱に激突した際にできた煙からデイケイドの声が聞こえた、そして煙が晴れると、そこにはザビーの拳をライドブッカー、ソードモードの刃の腹で受け止めている、デイケイドの姿があった。

「よかった……」

恵はほっとして、地面に膝をついた、すると、柱の影や貯水場の入り口などからワームが飛び出してきた。

「やっぱり来てやがったかっ!!」

デイケイドはザビーの拳を押し返して言った。

「恵いつ! 脱皮する前に倒せるかあっ!?!」

デイケイドは、ザビーにライドブッカー、ガンモードの銃口を向け、引き金を引き、ザビーにダメージを与えながら言った。

「やってみる!!」

恵はそう言うと、すでに攻撃しようとしていたワームサナギ態の

攻撃を屈んでかわすと、がら空きになった体に光線銃の銃口を押し付け引き金を引いた！！

「ぎゃあっ！」

恵の握る光線銃からは、一筋の黄色い光がはなたれワームに命中、ワームの体を貫通し、そのワームは緑色の炎をあげて消滅した。

「いい使い心地、じゃあ、早速、援軍を呼びますか！！！」

恵はそう言って先ほど翔より渡された、カードを二枚、光線銃のマガジンのそこにあるくぼみ目掛けてカードを通した。

K A M E N R I D E F E M M E

K A M E N R I D E L A L U K U

光線銃から音声が聞こえると、恵は引き金を引いた、すると光線銃の銃口から体全身が白い、仮面ライダーファムと、体全身が赤い、仮面ライダーラルクが現れた。

「お願い！手伝って。」

恵がそう言うと2人は、軽くうなずき、お互いの武器を構えワームめがけて走って行った。

「やるなあ、恵のやつ……………」

カブトは恵の戦い方を見て、感心しながら、サソードの振り下ろすサソードヤイバーをかわしていた。

「っ、よそ見をするなっ!！」

カブトの戦い方に怒ったサソードは、扇状の武器、ゼクトマイザーを取り出すとカブトに向けて引き金のようなものを引き、ゼクトマイザーから小型のサソリのような機械を一斉に放った!！」

「っ!！」

カブトも瞬時に、ゼクトマイザーを取り出し、ゼクトマイザーから小型の赤いカブトムシを発射、カブトとサソードの放ったゼクトマイザーがぶつかり合い、二つの弾は激突、爆発した。

「くっ、こいつで止めだ!！」

「やれるものならな……………」

サソードは、サソードヤイバーを構えると鎧についているサソードゼクターの尻尾を押し倒し、カブトはカブトゼクターの足のスイッチを順番に押しに行った。

「ライダースラッシュ!！」

R I D E R S L A S H

「ライダーキック!!」

R I D E R K I C K

サソードは紫色の光に包まれたサソードヤイバーをカブトに向かって振り下ろし、カブトは体を大きく振り遠心力をつけた回し蹴りをサソードに向かって放った!!

二人の放った攻撃は同時にぶつかりあうと勢いよく爆発した!!

「はあっ!」

「ぬっ!!」

ディエンドとドレイクは、貯水場の中を走りながら、銃撃戦を繰り広げていた。

「くっ、銃撃戦で俺が押されるとは……………」

ドレイクはディエンドの放つ銃弾をかわしながら静かに言った。

「そろそろ終わらせる……………」

ディエンドはそう言って、腰のカードホルダーから緑が金色のカードを取り出し、ディエンドライバーに装填した。

「こつちも決めてやる……。」

ドレイクもそう言うと、ドレイクゼクターの後ろにあるつまみを後ろに引いた。

「行くぞ！ライダーシューティング！」

「くらえっ！デイメンションシュート！……！」

R I D E R S H O O T I N G ! !

F I N A L A T T A C K R I D E D I D I D I D
I E N D

二人は同時に引き金を引いた、するとドレイクゼクターからは青く球体の光線が、デイエンドライダーからは化仮面ライダーの絵が描かれたシアン色のカードの束が照準のように現れ、その照準の中を撃ち抜くように同じようなシアン色の光線が撃ちだされた！！

ドレイクの放った、ライダーシューティングとデイエンドの放ったデイメンションシュートはぶつかり合うと、爆発した！！

「ふっ！はっ！やあっ！！」

ザビーはディケイドに向かって拳を連続で突き出していた、だがディケイドはその攻撃を最小限かつ無駄のない動きでかわしていた。

「さすがは、ディケイドだな……だがクロックアップのできない貴様に勝ち目などない！！」

ザビーはそう言って、ステップを踏んだ。

「どうかな。」

ディケイドは鼻で軽く笑うとライドブッカーからカードを一枚取り出した。

「変身。」

ディケイドはそう言って、ライドブッカーから出したカードをドライダーに装填した。

KAMEN RIDE FAIZ

ディケイドライダーから赤い光が発せられ、ディケイドの姿は目が黄色く、黒いスーツを身にまとい、銀のアーマーが付き、体全身には赤いラインが入っている仮面ライダー『仮面ライダーファイズ』に変身した。

「さらに。」

ディケイドファイズ（以下、Dファイズ）はそう言うともう一枚

カードをドライバーに装填した。

FORM RIDE FAIZ AXEL

COMPLETE

Dファイズの胸のアーマーが肩にスライドするように上がり、赤いラインが銀、黄色い瞳が赤に変わり、Dファイズは、Dファイズアクセルフォームへと変身した。

「そんなこけおどし、通用するか！！クロックアップ！！」

ザビーは叫ぶとベルトの右腰にふれた。

CLOCK UP

「さあて、俺も行くかあっ！！」

Dファイズはそう言うと、右腕にある、時計のような物のスイッチを押した。

START UP

二人は静かに構えると、一気に走りだし、超高速の世界に入り戦闘を始めた！！

「やあっ！！」

「はっ！！」

Dファイズは左腕を、ザビーは右腕を突き出す。二人の突き出した拳はお互いの胸に命中、二人は後ろにのけぞるがすかさず前に走り出した！！

「うおりゃー！！」

「ぬんっ！！」

二人は足を止めると、Dファイズは右足を軸にして左足で回し蹴りをし、ザビーは左足を軸にして右足で回し蹴りをした！！

「ぐっ！！」

「っ！！」

二人の突き出した蹴りは、脛と脛が同時にぶつかりあい、二人はバランスを崩すがすぐに体制を整えて再び向かい合うと、一気に走りだした。

それから二人は高速の世界の中で殴りあっていた、姿こそ見えないうが、柱にはひびが入り、床は砕け煙が立っていた、そして

「そろそろ、時間も終わりだ……これで決める！！」

Dファイズは叫ぶと、ライドブッカーから縁が金色のカードを取り出してディケイドライバーに装填した！！

「それはこちらも同じだ……この勝負貰った！！」

ザビーはそう言って、左腕のザビーゼクターのスイッチを押した。

FINAL ATTACK RIDE FAFAF
AIZ

RIDER STING

Dファイズの左腕に、ファイズショットと呼ばれるアイテムが装備され、マゼンタ色に輝き、ザビーの左腕についてあるザビーゼクターにも、緑色のエネルギーが集まって行った、そして。

「あつたあつー!!」

「おうらっー!!」

二人は同時に走り出し、お互いの左腕を突き出した!!

お互いの突き出した左腕は拳と拳がぶつかり合い、爆発、さらに、貯水場の三か所で爆発が同時に起こり煙がたつた!!

「くそっ……。」

「くっ……なかなかやる……。」

煙が晴れてくると、カブトとソードは静かに言った、カブトの右足からは血が流れており、ソードの握るソードヤイバーの刃は、カブトのライダーキックが命中したと思われる場所のみ欠けて

いた。

「ばかな、私のライダーシューティングが破られるなんて……
……。」

「威力を弱めたとはいえ、相殺されるなんてね……。」

デイエンドとドレイクは、静かに煙の向こうにいる相手を見て言った、この二人は大したダメージはないが二人の間にある床が勢いよく陥没しておりクレーターを作り出していた。

「つて……なんてパワーだ……。」

Dファイズから元に戻ったデイケイドは左腕をさすりながら言った、すると後方にできている煙が突然何かに巻き上げられた！！

「っ！」

デイケイドはとつさに、右に体をずらした、それと同じタイミングで煙から、数発の銀色の針が飛び出した！！

「あたるかよ。」

デイケイドは飛んで行く、針を見ながら言った、だが

「っ！何てことしやがった！！」

デイケイドは仮面の中で目を丸くし、一気に走った、それはなぜか、後ろから飛んできた針がまつすぐ恵に向かって飛んで行ったからだ。

「恵！逃げろ！！」

デイケイドが叫ぶとカブトとデイエンド、さらにサソード達も気がつく、だが、デイケイド以外は距離が遠くともじゃないが、届かない。

「くっ！間に合え！！」

デイケイドがそう言い終わると。

「あがつー！」

肩に先ほどの針が命中し、そのまま破裂し、デイケイドは右肩を押さえて、地面に膝と突くと後ろを睨んだ。

「最初はよけたみたいだが、次はよけきれなかったみたいだな
.....」

ザビーはザビーゼクターを見ながら言った。

「っ！」

ディケイドはザビーを睨んでいたがすぐに恵の方を見た、するとザビーの放った針が既に恵のそばまで来ていた。

「油断した!!」

すべてのワームを倒したことでホツとしていた恵は一瞬反応が遅れ、回避できなかった、さらにファムとラルクも消えていたため、恵は無防備である、カブト、ディエンド、ディケイドは急ぐが間に合わず、その針は恵に命中………することなく、突然弾かれた。

CLOCKOVER

ゼクターから音声が発せられると、恵の前には体全身が青く目が赤で、クワガタを模し、手には青い刀をもったライダー仮面ライダーガタックが立っていた。

第五話 『ガタツク』（前書き）

久々の原稿、そして今回はガタツクの正体が!!!!!!

第五話 『ガタツク』

「当たるかよ！」

ディケイドはそう言って、爆発で発生した煙の向こうにいるザビの放った、銀色の針、『ゼクターニードル』を回避した、だが

「っ！しまった！！」

ディケイドは仮面の中で目を丸くし、一気に走った、それはなぜか、自分がゼクターニードルをかわしたため、ゼクターニードルがまっすぐ後ろにいた、恵に向かって飛んで行ったからだ。

「恵！逃げろ！！」

ディケイドが叫ぶとカブトとディエンド、さらにサソード達も気がつく、だが、ディケイド以外は距離が遠くともじゃないが、届かない。

(くっ！間に合え！！)

ディケイドは心の中で背かびながら足に力を入れた、その時！

「あがつ！」

右肩にゼクターニードルが命中し、火花を散らす、ディケイドは右肩を押さえて、地面に膝と突くと後ろを睨んだ。

「最初はよくれたみたいだが、次はよけきれなかったみたいだな・

「……………」

ザビーはザビーゼクターを見ながら言った。

「っ！」

デイケイドはザビーを睨んでいたがすぐに恵の方を見た、するとゼクターニードルが既に恵のそばまで来ていた。

「えっ！うそっ！！」

すべてのワームを倒したことでホツとしていた恵は一瞬反応が遅れ、回避できなかった、さらにファムとラルクも消えていたため、恵は無防備である、カプト、デイエンド、デイケイドは急ぐが間に合わず、ゼクターニードルは恵に命中……………することなく、突然弾かれた。

CLOCKOVER

ゼクターから音声が発せられると、恵の前には体全身が青く目が赤で、クワガタを模し、手には青い刀をもったライダー仮面ライダーガタックが立っていた。

「仮面ライダーガタック！！」

ザビーはガタックを見ると、目を丸くした、もちろん、カプトやドレイク、サソードも驚いていた、なぜなら、この世界の仮面ライダーガタックは現在行方不明だったからである。

「……………大丈夫か……………恵。」

ガタツクは、恵の方を見ながら静かに呟いた。

「えっ！なんで私のことを……………」

恵は、自分の名前を呼ばれたため、驚いていた、と、その時！

「グワアッタアアアック！！」

ザビーがガタツク向かって走ってきていた。

「っ！！」

ガタツクは手に持っている二本の武器、ガタツクダブルカリバーをザビーに向かって振りおろし、ザビーの腹を切り裂いた！！

「ぐう……………」

切り裂かれたザビーの腹からは歩花と同時に血が飛び散り、ザビーは切られた箇所を押せ、地面に膝をついた。

「どうした？もう終わりか？」

ガタツクは地面に膝をついて、傷を押さえているザビーに向かって右手に持った、ガタツクダブルカリバーの先端を向けて静かに言った。

「く…………貴様なんぞに負けるか！！」

ザビーは叫ぶと一気に立ち上がった！！

「くらえっ！！ライダーステイング！！」

RIDER STING

ザビーはザビーゼクターについてある、スイッチのようなものを押し、エネルギーを集めると、ガタツクに接近、ガタツクに向かって左腕を突き出した！！だが

「ライダー・・・キック」

RIDER KICK

ガタツクは静かに言うと、ガタツクゼクターの角を前方に押し倒したあと、もう一度元の状態に戻し、向かってくるザビーに向かって跳び回し蹴りを放った！！

「ぐはあっ！！」

ザビーは勢いよく後ろに吹っ飛び、壁に激突した！！

「ぐっ・・・何てパワーなんだ・・・・・・・・。。。」

ザビーは蹴られた腹を押さえながらゆっくりと立ち上がるが、ダメージの高さで膝が折れてしまい、地面に膝をついた。

「撤退するぞ・・・・・・・・。。。」

ザビーの元にサソードが走ってきて、サソードはザビーの体を抱えて言った。

「仕方無い……そうするか……。」

ザビーはそう言うとゼクトマイザーをサソードに渡し、それと同時にドレイクも走ってきた。

「これを使って逃げるわけか。」

サソードはそつつぶやくと、デイケイド達にゼクトマイザーを向け、発砲、煙をまき散らした瞬間にクロックアップを発動して、その場から逃げた。

「ちっ、逃げたか……。」

デイケイドは静かに呟くと変身を解き、恵に駆け寄った、それと同時にデイエンドとカプトも変身を解除して、恵に近寄った。

「……あの……助けてくれて……ありがとう。」

恵はガタツクに向かってお礼を言った。

「……気にするな……。」

ガタツクはそう言ってクロックアップを発動しようとした、だが

「あの……顔をみてください……私は、あなたのことどこかで会ったことがある気がするんです、あなたが守ってくれた時、何処かでああなたの姿を、後姿を見たような気が……。」

「

恵がそう言うとガタツクは、恵の方を振り返った。

「……………分かった、だけど、俺の姿を見たらすぐに俺のことは忘れる。」

ガタツクはそう言うと、ベルトについてあるガタツクゼクターを外した。ガタツクがガタツクゼクターをはずすと体の周りを六角形の光が包み、光が晴れると、そこには、黒いシャツに青のジャケットを着た黒髪の青年が立っていた。

「えっ、う……………そ……………」

「はあっ!?!」

「なにい!!」

「……………」

恵、剣、翔はガタツクの正体に目を丸くして驚き、隼人は悲しそうな顔した。なぜなら、ガタツクに変身していたのは、剣だったからである。

第六話 『カブトの世界の剣』（前書き）

2連続原稿、夏休みが終わるまでにはコンプリートを出したい。

第六話 『カブトの世界の剣』

「えっ！うそ……………」

「はあっ！！」

「なに！」

「……………」

ガタツクは、剣たちの目の前で変身を解いた、だが、ガタツクの変身者を見たたん、隼人を除く、剣、恵、翔の3人は目を丸くして、ガタツクの変身者に驚いていた、なぜか、それは着ている服や髪の色こそ違うが、彼は剣そのものだったからである。

「恵、久しぶりだな。」

ガタツクに変身していた、剣は恵の方を見ると笑顔で言った。

「剣君……………？」

「そうか……………そう言うことが……………」

ディケイドに変身している剣は静かに呟くと、恵ともう一人の自分から少し距離を置いた、それを見た隼人と翔は剣を追いかけた。

「剣君……………会いたかった……………死んだと思っていたのに……………」

恵はガタツクに変身している髪が黒が強い藍色で、瞳が少しだけ赤い、剣、G剣ガタツクに抱きつく、G剣の胸元で涙を流した。

「……………恵……………すまん……………俺のことは忘れてくれ。」

G剣は静かな声で言うと、恵の肩を掴んで引き離すと、懐からサングラスを取り出した。

「剣君……………どうして？やっと会えたのに……………ずっと会いたかったのに!!」

恵はそう言うと、G剣の背中に飛びつき、両腕を体まで持つてくと強く抱きしめた。

「……………ごめん、でも俺は君と一緒になれない……………君を幸せにできない……………だから俺のことは忘れてくれ……………」

「いやだ！もう剣君と離れたくない!!私ずっとさみしかったんだから……………。」

恵はそう叫ぶと、さらに両腕に力を入れG剣を抱きしめた。

「恵……………俺は……………ぐがっ!!」

G剣は何かを言おうとした、だが途中で頭を両手で抱え苦しみだした。

「ぐっ……………恵……………俺から離れる……………」

G 剣はそう言って、恵から離れた、様子がおかしいことに気がついた隼人、翔の2人は恵に近寄り、剣はG 剣に近寄った。

「どうしたんだ!!」

剣はG 剣の肩を掴んだ、すると

「俺から離れる・・・別世界の俺・・・恵を俺から守れええええつ!!」

G 剣は、剣を睨むと何かに耐えるような、苦しそうな声で叫んで、剣の腹を左手で思い切り押し、突き飛ばした!!

「剣君！何があつたの!!」

恵はG 剣に駆け寄ろうとした、だが

「来るな！来ないでくれ・・・俺のこの姿を見るなああああああああつ!!」

G 剣は大声で叫んだ!!すると、G 剣の周囲を青い光が包み、それは衝撃波のようになって、恵や剣を突き飛ばした!!

「ぐがあああああああつ!!」

青い光の中でG 剣は声を上げた、すると彼の姿がどんどん変わっていき、光がはじけると、そこには、体全身が青く、瞳は赤で、左腕には、刃物のようなものがついた、クワガタムシのような鋭い顎をもったワームが立っていた。

「うそ……剣君が……ワーム……」

G 剣がアームに変わったのを見た恵は脱力、急に力が抜けたように地面に膝をついた。

「ぐう……俺のことは忘れる……。そしてもう一人の俺、いつか俺を倒せ……。俺が俺でいられるうちに……」

G 剣が変身したワーム、スタッグビートルワームは恵と剣に向かって言うと、ガタツクゼクターを握り、腰にあるくぼみのようなところにガタツクゼクターを装着した。

CHANGE STAG BEETLE

すると、スタッグビートルワームの体がガタツクのような物に変わった、スタッグビートルワームが変身したガタツクは、目が鋭くとがり、頭に生える顎は、本来の姿よりも大きくなっていて、ガタツクカリバーは両方が合わさった状態で、右腕に取り付けられ、手のひらや足の指先などからは、怪物のような爪が生えている、ワームとライダーを足したような姿であった。

「ぐっ！」

ガタツクワームはうねり声のような物を出すとクロックアップを使って一瞬で消え、その場から離れた。

「剣君！待って！！」

恵は消え去った後手を伸ばして言ったが、時すでに遅く、恵の声

は、反響するだけであった。

「めぐ……………」

「恵、いったん帰るぞ。」

剣は恵に声をかけようとしたが、踏みとどまり、その代りに隼人が恵に近寄り、恵の肩に手を置いた。

「私、あとで帰るよ…………先に帰っててお兄ちゃん。」

恵はそう言うと、ゆっくりと立ち上がり、袖で顔についた涙をぬぐうと、自分が止めているバイクに向かって走って行くと、ヘルメットをかぶってすぐにその場から離れた。

「…………俺たちも帰ろう…………あの剣について話しておきたい。」

「…………ああ、わかった。」

「わかってる…………。」

翔と剣は隼人の言葉にうなずくと、お3人はバイクを止めている場所に向かって走って行った。

第七話 『悲しき二人』

剣たちは、バイクショップに帰ってきており、そこで話をしていた。

剣たちは先ほどの戦闘で行方不明だった、この世界のライダー、仮面ライダーガタックと接触。仮面ライダーガタックに変身していたのは、来ている服や髪の色は若干違うが、剣であった。

だが、ガタックに変身していた剣は、突然ワームに変身、剣たちから逃げるように姿を消した、そして、ガタックに変身していた剣は何者なのかと言うのを理解できていない剣と翔に事情を話すため、帰ってきたのだ。

「剣、どんなことがあっても、絶対に逃げ出すな。それが条件だ。」

隼人は椅子に座りながら剣に向かって言った。

「ああ。逃げる気はない。」

剣はそう言うと、隼人はゆっくりと目を閉じた。

「じゃあ、話す。あの剣は、この世界の宮本剣だ。」

「やっぱり。」

「それぐらいは理解できる、もう少し詳しく……この世界の俺と、恵、そしてあんたの関係などその辺を……。」

剣がそう言うと隼人は目をあげ、そばに置いていた湯呑を口に近づけると、中に入っていたお茶をすべて飲んだ。

「わかった・・・・・・・・・・。」

隼人は静かに言うと、湯呑をそっと、テーブルの上に置き口を開いた。

この世界の宮本剣と恵は付き合っていて婚約者同志だった・・・・・・だがある日、この世界のお前はいなくなった。恵や俺たちの前から姿を消した・・・・・・『俺はお前たちのそばにはいられない・・・・・・』と言う手紙を残して、それから、しばらくしてお前が現れた。俺達は、剣に似ている人物が帰ってきただけ、もしくは最近灰色のオーロラを通して現れる異型の生物を、大シヨツカーを追ってきた別の世界の剣だ。と考えた、だが、恵はお前を見るなり抱きついて『剣君が帰ってきてくれた・・・・・・私の大好きだった剣君が・・・・・・』そう言った言葉を聞いて、心を打たれた、恵もお前が宮本剣ではないというのはわかっていた、だが、頭では理解できても心では理解できなかったんだ・・・・・・

「お前には悪いことをした、お前はお前であるのに、別のお前を・・・・・・この世界のお前をお前に照らし合わせ、俺たちは、自分たちの心が壊れないように、そして恵も壊れてしまわない様に・・・・・・おまえをこの世界のお前にしていた・・・・・・自己満足だがな・・・・・・。」

隼人はそう言って、湯呑にお茶を注いだ。

「別に気にしていない、俺はもう、誰かを愛せないから……
。それに俺も恵に悪いことをしていたし……。」

剣は静かに言うと軽く、だが悲しそうな笑みをこぼした。

「どういう意味だ……。」

「俺の世界にも恵がいた……だが、恵は死んだ……
初めてこの世界で恵を見た時、『どの世界にいても恵は恵だ』と思
ったんだ、俺も恵は恵じゃない、別の恵だ。そう思っていた、だが、
思えば思うほど心が苦しくなっていく……だから俺も恵や隼
人たちを責めれない……。」

「話を変えよう、隼人、なんでお前、この世界の剣が、仮面ライ
ダーガタックだって知っていた？ 差し支えなければ教えてくれ……
……。」

翔はこのままいくと、重い空気がもつと重くなると考え話の話題
をほんの少しだけずらした。

「ああ、俺がカブトになって、戦っていると、鳴滝が新しい仲間
として、ザビー、ドレイク、サソードを連れてきたんだ。そして、
その時に鳴滝に言われた、『まずはガタックを探すんだ、そして危
険な力を持っているガタックを倒せ。』そう言われ、俺たちはワー
ムと戦いながらガタックを探していた……。」

「ふっ！はあっ！！」

この世界から剣と恵がいなくなって、数日後……俺は一人でワームと戦っていた。

「こいつで決める。」

カブトはそう言うと目の前にいる、ホタルに似たランペリスワームの腹を殴り飛ばし、後ろに下がらせ、カブトゼクターの足についたスロットルを1から順番に押しながら、ランペリスワームに向かって歩いて行った。

「ライダーキック！」

カブトは静かに叫ぶと、ゼクターホーンをマスクドフォームの位置に倒したあと、ライダーフォームの位置戻した！！

R I D E R K I C K

「はあっ！！」

カブトは左足を軸にして、ランペリスワームに向かって青い閃光が迸る右足で回し蹴りを放った！！

「ぐわああああっ!!」

カブトのライダーキックをくらったランペリスワームは断末魔を上げ、緑色の炎に包まれ大爆発を起こした。

「ふう〜、これで終わりか……」

カブトはそうつぶやくと変身を解き、歩き出した、だが!!

「くっ!!」

突然、物陰からスズムシを模したベルクリケタスワームが隼人に向かって飛びかかってきた!!

隼人は、身をひねって、ベルクリケタスワームの攻撃をかわすと、カブトゼクターを右手に握り、変身しようとした、だが

「ぎゃあっ!!」

突然、ベルクリケタスワームが爆発し、煙が晴れると、隼人の前にはガタツクが立っていた。

「ガタツク!!」

隼人はガタツクを見ると、カブトに変身しようとした、だが

「……」

ガタツクは無言で隼人の方を見ると、ベルトにつけている青いクワガタムシのガタツクゼクターをはずした。

「なっ！」

「久し振りだな……隼人……。」

ガタツクに変身していた剣は隼人の方を見るとサングラスを外した、その時！！

「ぐあっ！！」

隼人は剣に向かって走って行って、剣の顔面を殴り、剣を吹っ飛ばした！！

「何すんだ……。」

剣は地面に倒れたまま隼人の方を向くと、尻餅をついた状態で、口から流れ出る血を服の袖で拭った。

「何するんだとお……おまえのせい……恵がどんな気持ちだったか、わかってるのか！！」

隼人は、剣の胸倉を両手でつかむと、力いっぱい無理やり剣を立て、剣の腹に膝蹴りを喰らわると、再び地面にたたきつけた。

「今の恵は、別の世界のお前にお前の面影を重ねている……これがどういう意味かお前に分かるか？」

隼人は再び、剣の胸倉をつかむと無理やり立ちあがらせ、自分の額を勢いよく、剣の額にぶつけて叫んだ！！

「・・・・・・・・・・」

「なんで答えないんだ!!!」

隼人はそう言うと、剣を後ろに向かってほうり投げた!!

「くっ!!」

剣は空中で一回転すると地面に着地、後ろを振り返り隼人をみた。

「隼人・・・俺は・・・もう恵のそばにはいられない・・・
こんな姿じゃ・・・俺は・・・。」

剣が静かに言うと剣の姿が変わり始め、クワガタを模したワームへと変わった。

「お前・・・何なんだ・・・その姿・・・。」

「すまん、俺は元に戻れないんだ・・・隼人、詳しいことは聞かないでくれ・・・ただ、別の世界の俺が、ディケイドが来たら、これを渡してくれ・・・そして俺を倒すように伝えてくれ。」

剣はそう言って人間の姿に戻ると、隼人にUSBメモリと、ペンダントを渡し、ガタツクに変身、クロックアップを使い、どこかに走り去った。

「そう言う理由で、俺はこの世界の剣がガタツクであるということを知った、それから俺はあいつと一緒に戦うようになった、だが。」

「だが？」

「人間態でいられるサイクルがどんどん短くなっていったんだ、最初のころは自分の意志で変身ができていたんだが、それが徐々に不可能になっていき、今の状態に至る、と言うわけだ。」

隼人はそう言うと、上着の内ポケットからペンダントとUSBメモリを出すと剣に渡した。

「これが、話に出てた、この世界の俺が俺に渡してほしいって言ったものか。」

剣は隼人からペンダントと、USBメモリを受け取ると、ペンダントのふたを開けた、するとそこには、この世界の剣が恵と楽しそうに映っているプリクラで撮った写真が貼られており、ふたの縁には、12月24日と書かれていた。

「……恵の本当の笑顔はこんな風な感じなんだ。」

剣は、ペンダントの中の写真の恵を見ながら、笑顔で呟くと、ふたを閉じて隼人に渡した。

「わるい、隼人。これを俺が持つことはできない……俺には重すぎる……。」

「剣・・・・・・・・・・。」

「さて、ちよつと気分転換に外に行くか、翔！つきあえ。」

剣はそう言って立ち上がると、翔はゆっくりと立ち上がった。

「ちよつと、散歩にでも行くか。」

「ああ。」

剣と翔はうなずくと、部屋から出て行った。

そのころ恵は・・・・・・・・

「剣君が・・・・・・・・ワーム・・・・・・・・嘘だよね・・・・・・・・嘘よ・・・・・・・・」

恵は町のはずれにある、河原のそばにバイクを止め、一人泣いていた・・・・・・・・。

「剣君がワーム……でもなんで……」

恵が呟いていると、突然、灰色のオーロラが出現そこから鳴滝が現れた。

「鳴滝！」

恵は、剣からもらった銃を構えると鳴滝を睨んだ。

「落ち着くんだ、私は君と話がしたい。」

「話？何ですか！！」

恵は鳴滝に銃口を向けて力強く言った。

「君の彼氏、この世界の宮本剣のことだ。」

鳴滝が静かに言うと恵はゆっくりと銃を下ろした。

「剣君のことを知っているの！！」

「ああ、彼がワームになった原因をね。」

鳴滝がそう言うと恵は銃をしまい鳴滝に近寄った。

「なに！なんなの！！教えて！！」

「ディケイドのせいだよ、ディケイドがこの世界に来たことで君の彼氏のガタツクの力が暴走、彼をワームに変えてしまった、だから」

らデイケイドを倒せば、滅びの力は消え、彼は元に戻る、少なくとも暴走は止まる。」

鳴滝が静かに言うと、恵は大笑いした。

「何いつてんの？、デイケイドに変身している剣君は、この世界の剣君がいなくなって何日もしてからこの世界に来たのよ？つまり、剣君がこの世界に来たのが原因じゃない！！それとも私が、剣君のことを思うあまり冷静な判断ができなくなってデイケイドの剣君を倒すとも思った？残念、私はそんな人間じゃない。」

恵は笑いながら鳴滝を馬鹿にするように言うと、銃を鳴滝に向けた。

「私はあなたのことを信用していない……あなたでしょ？クウガの世界でガミオをよみがえらせ、それを剣君のせいにしてクウガとデイケイドを戦わせ、デイケイドを倒そうとしたのは？」

「な、何の証拠があるんだ！！」

鳴滝はあわてながら言うと。

「ガミオが死ぬ間際、クウガに、道君に伝えたそうよ……正直に答えなさい！！鳴滝、剣君をワームにしたのはあなたじゃないの……！！」

恵は力強く言い放つと、鳴滝のコートに向かって発砲した！！

「くっ！分かった、教えよう……確かに私だ、彼をワームにしたのは……。」

「なんのために！！何が目的で！！」

「彼にデイケイドを倒させるためだ！！ガタツクの力では彼を倒せない！だからこそ、彼をワームとおなじ力を持つネイティブと言う種類の怪人に改造したんだ！！彼がこの世界を去ったのは、ネイティブになった自分を嫌い、君たちの前から消えたんだ。」

鳴滝がそう言い放った瞬間、鳴滝の被っている帽子のつばを切り裂くように銃弾が飛んできた。

「だったら、剣君を元に戻しなさい！！」

恵は涙に目を溜めながら鳴滝に銃口を向け、叫んだ。

「私を殺すか？それでもいい、だが私を殺しても宮本剣は元に戻らない！！宮本剣を元に戻すにはデイケイドを倒すしかない！！」

「！！」

「さあ、どうする、貴様はデイケイドを倒すか、ガタツクを救うか・・・選ぶんだ！！念のために言っておくが、デイケイドはガタツクを倒すぞ・・・必ずな！！」

鳴滝は、恵に向かって目を大きく見開いて叫んだ。

「そ、そうやってして、私の心が揺らぐのを待っているのは目に見えてるわよ・・・私は、あなたの口車には乗らない！！」

恵は鳴滝に向かって強く叫ぶ、だが言っているセリフとは裏腹に

手がカタカタと震え、鳴滝に向けている銃口は、鳴滝をとらえていなかった。

「まあ、君が何をどう選択しようと、この世界のライダーがディケイドを倒す、ただ、君もディケイドが死ねば、心が安らぐのではないのかい？」

鳴滝はそう言って、恵に急接近、銃身を押さえ、銃口を地面に向けさせた。

「君は今辛いはずだ、君の心はディケイドの宮本剣に対して罪悪感でいっぱいだ……。」

鳴滝は優しく恵に向かって言った、すると恵の手から力が抜けて銃は地面に落ちた。

「君の心を救ってあげよう、これを使いたまえ。」

鳴滝はそう言うとライダーブレスのようなものを恵に渡した、それと同時に空から、黒い蝶のようなものが出てきた。

「……これは？」

「君が変身するライダーの力だ……どう使うかは君の自由だ……だが、君が本気でガタックを元に戻したいのであればそれを使ってディケイドを倒しなさい。」

鳴滝が静かに言うと、突然鳴滝の目が光った。

「では、さようなら。」

鳴滝はそう言って、オーロラをくぐりその場から消えた。そしてしばらく、その場には恵一人が取り残された。

「…………私は剣君を助きたい…………でも剣君も倒したくない…………でも剣君を助きたい…………でも…………。」

恵は何度も同じことを、『剣を助きたい、でも倒したくない』と何度もつぶやいていた、すると先ほどまで晴れていたはずなのに、突然、黒い雲が空を覆い雨が降り始めた。

「…………決めた…………。」

恵は静かに言うつとゆっくりと立ち上がった。

「どつちも無理、だったら私はデイケイドを倒す…………それで剣君と一緒に暮らす…………ごめんね、デイケイドの剣君。」

恵は静かに呟くと、右腕にライダーブレスと呼ばれるブレスレットを巻いた、すると先ほど宙に浮いていた、蝶のようなものが、ライダーブレスに張り付いた。

HENSHIN、CHANGEBUTTERFLY

ライダーブレスに張り付いた、黒い蝶、ダークバタフライゼクターから電子音が聞こえると、恵の姿は体が黒や紫で統一された一人のライダーになった、そのライダーは黒い蝶をかたどったような姿で、マスクは長を模しており、金色に輝く触覚が伸び、複眼は赤、体全身に金色のラインが走っていて、左腰にはレイピアのような武器があった。

「…………これが私の力…………。」

恵は静かに呟くと、後方にある自分のバイクにまたがりどこかに走らせた。

第七話 『悲しき二人』（後書き）

第八話 『ディケイド対アゲハ』

「……いやな天気だな……。」

剣は町の中を歩きながら空を見上げてつぶやいた。

「ああ、一降りきそうな天気だ。」

翔も剣の隣を歩きながらつぶやくと、剣と翔は少し動きを止めた。

「面倒なのがついてきてるな……。」

「それがわかってて、外に出たんだろ？」

剣と翔は歩き出しながら、自分たちの背後を横目で見ると、剣はディケイドライバーを腰に巻き、翔はディエンドライバーにカードを装填し、二人はゆっくりと、公園の木が生い茂っている場所に向かって歩いて行った。

「くっ！どこに行った！！」

剣たちの後をつけていた、ザビー、ドレイク、サソードは剣たち

が入って行った木々が生い茂った林の中で、周囲を見渡した、すると

「がはっ!!」

突然、影から、マゼンタの銃弾とシアンの銃弾が飛んできて、マゼンタの銃弾はザビーに、シアンの銃弾はドレイクに命中、二人は体から火花を散らして後ろに吹っ飛んだ。

「人のことをこそそそとつけまわしやがって。」

「お前らは変態か?」

木の陰からライドブッカーガンモードを構えたディケイドと、ディエンドライバーを構えたディエンドが出てきた。

「俺が隼人から渡されたメモリのデータを見ようとしたら乱入するつもりだったんだろ?」

ディケイドはそう言うつとライドブッカーをソードモードにした。

「やはりばれていたが、だがどうする?こっちは3人、そっちは二人、おっと、ディエンドの力で人数を増やせるか・・・だが、数に入れれる戦力ではないはず、どうやって戦う?」

ザビーはゆっくりと立ち上がると、軽くステップを踏んで言った。

「どう戦うか、だと、そんなの同じ人数になればいいだろう。」

突然、どこからともなく声が聞こえ、強烈な風が吹いたと思ったらサソードが吹き飛ばされた。

CLOCKOVER

「貴様も気づいていたのか！坂本おっ！！」

ザビーは、ディケイドとディエンドの前に立っているカブトを見ると叫んだ。

「ああ、俺達3人が気がつかないとも思っただのか？」

カブトはそう言うと、カブトクナイガン、クナイモードを構えた。

「さあて、行こうぜ、隼人。翔。」

ディケイドはカブトとディエンドに向かって言い、二人はうなずくと武器を握った。

「さっきみたいにくまうくと思うな……………」

ザビーはディケイドを睨むと、両手をしっかりと握り、ディケイドに向かって走った！！

「今度は負けない、どちらが上か、決着をつける！！」

「楽しみだな…………俺を本気にできるかい？」

ドレイクとディエンドは同時に走り出し、ディケイドとザビーから離れた。

「くっ…………やってくれたな…………坂本……………」

「どうした？ほかの二人は戦いを始めたぞ。お前はどつする？」

「当然おまえを倒す！クロックアップ！」

C L O C K U P

「ぶっ、やれるものならやってみろ。クロックアップ……」

「

C L O C K U P

カブトとサソードはクロックアップを発動、超高速の世界に入り、闘い始めた。

6人が戦いを始めると青空を覆っていた、黒い雲から雨が、力強い雨が降り始めた。だが6人はそんな雨にも構うことなく戦いを繰り広げていた。

そして時間がたてばたつほど、雨足も強まっていき、戦いも激しさを増していく、そして戦いもそろそろ最高潮を迎えたその時！！

「っ！！」

「くっ！！」

ディケイドとザビーの間に一台のバイクが突っ込んできた！！デ

イケイドとザビーは後ろに跳んで距離を置くと、そのバイクにまたがっているライダーを強く睨んだ。

「鳴滝様が言っていた、俺たちの仲間か……。」

ザビーはバイクに跨っているライダーを見ながら、誰にも聞こえないような声で静かに言った、だがカブトとイケイド、そしてデイエンドは鳴滝を様付で呼んだことを聞き逃さなかった、だが3人にとってはどうでもよかつたし、気にも留めていなかった、なぜなら今現れた謎のライダーのことが気になるためである。

「お前誰だ？」

イケイドは突然現れたライダーに向かって尋ねた。

「……私の名は、アゲハ。」

アゲハと名乗るライダーはバイクから降りると、イケイドに向かって静かに言った。

「仮面ライダーアゲハ？（バイクに乗っているときは分からなかったが、こいつ女のライダーだな……。）」

「（アゲハだと、知らないぞそんなライダー、新しいライダー……大シヨツカーが作ったライダーか……。）」

イケイドとデイエンドは心の中で、静かに言った。

「イケイドは私が倒します。あなた達は他のライダーをお願いします。」

アゲハは静かに呟くと、左腰からレイピアのような武器を引き抜いてディケイドめがけて走った!!

「たあつ！」

アゲハはディケイドのそばで足を止めるとアゲハレイピアを振り下ろした!!

「っ！」

ディケイドは、ライドブッカーソードモードでアゲハレイピアの刃を受け止めた。

「こいつはどうやら俺と戦いたいみたいだ……翔と隼人は、残りの相手をしてくれ!!」

ディケイドはそう言うと、後ろに下がると、その場から少しだけ離れた。

「!逃がさない!!」

アゲハはアゲハレイピアを構えて、ディケイドを追いかけた。

「お前たちの相手は俺たちみたいだな。」

ディエンドはディエンドライバーを構えて、3人に言った。

「お前らは2人だけだ、本気を出した俺たちに勝てるのか？」

ザビーはディエンドに向かって言うと、カブトが軽く笑い、

「笑わせる、一人でも俺たちを倒せない奴らが、3人になっても倒せるものか。」

カブトは静かに、馬鹿にするように言うと、ザビーの拳が震えだし。

「なめるなあああああっ!!！」

ザビーが声を上げながらカブトに向かって突撃してきた!!

「弱い奴ほど、安い挑発に乗るもんだぜ？」

ディエンドはそう言うとカードをディエンドライバーに装填した。

A T T A C K R I D E B L A S T

ディエンドはディエンドライバーの銃口をザビーやドレイク、サソードに向けて引き金を引いた!

ディエンドライバーからはシアン色に輝く銃弾がいくつも撃ちだされ、その銃弾は、ザビー、ドレイク、サソードに命中、三人は体から火花を散らせ、後ろに下がった。

「さらに、おまけだ。」

ザビー、ドレイク、サソードの背後から声が聞こえ、三人は後ろ

を振り返った、するとそこにはゼクトマイザーを構えたカブトが立っており、カブトはそのままゼクトマイザーの引き金を引き、ゼクトマイザーから銃弾を放った!!

「なっ!!」

「がはっ!!」

「っ!!」

ザビー、ドレイク、サソードの三人は急な攻撃に反応できず、そのまま諸にゼクトマイザーの銃弾をくらってしまい背中化から火花を散らし、前のめりに倒れた。

「どうした？本気を出せば俺たちを倒せるんじゃないのか？」

カブトは地面に倒れている、サソード達にカブトクナイガン、クナイモードの先端を向けて言った。

「今回はアゲハとディケイドを戦わせるのが目的だ……」

「我々は撤退させてもらう。」

ザビーとドレイクはゆっくりと立ち上がると、それぞれのベルトの右端に手を置いた。

「クロックアップ!!」

CLOCK UP!!

二人はほぼ同時にクロックアップを発動させた、それと同時に降っていた雨の動きが遅くなりまるで空から複数のしずくが一粒一粒、落下しているようになった。

「さらじ」

「こいつだ。」

ザビーとドレイクはお互いのゼクターに触れると必殺技を発動！！

RIDER STING

RIDER SHOOTING

二人は動きを止めている雨に向かって必殺技を放った！！、二人の放った必殺技は、きれいに目の前にあった、雨に命中、それと同時に雨は綺麗に割れた。

「今だ！！」

ザビーはそばにいるサソードを抱えると、どこかに走り去り、ドレイクも走り去った！！

「くっ！」

「しまった！！」

クロックアップを発動していない、カブトとディエンドの目には、突然雨が割れはじめ、それが蒸気となり、目くらましをしたように見えた。

「逃がしたか……。」

「ああ、それよりもアゲハと剣を戦わせるという目的が気になる……。」

カブトとディエンドは頷くと、ディケイドとアゲハが戦っているところに向かって走って行った！！

その頃、ディケイドとアゲハは、お互いの武器を互いに振り、刃と刃をぶつけ合わせていた。

「たあっ！！」

アゲハは声をあげて、ディケイドに向かってアゲハレイピアを左から右に向かつて振り、ディケイドはライドブッカーソードモードの刃で、アゲハレイピアの刃を受け止めると、アゲハの腹に向かっ

て右腕を突き出した！！

「あうっ！」

アゲハは腹を押さえて後ろに下がると、デイケイドを睨み、再びデイケイドに向かって走り、デイケイドめがけて、アゲハレイピアを振り下ろした！！

「（単純な攻撃だ・・・）」

デイケイドは心の中で静かに呟くと、体を右にひねって、アゲハの攻撃をかわした。

「くう、ふっ！！はっ！！」

アゲハは、何度もデイケイドに向かってアゲハレイピアを振り下ろした、デイケイドは、アゲハの攻撃を最小限の動きで丁寧にかわしていた。

「（・・・動きが単純すぎる・・・何かの戦法か？）」

デイケイドは、アゲハの攻撃があまりにも単純なため、何か裏があるのではないかと思いつながらかわしていた、だが、近くには敵の気配もなく、カブトやデイエンドが戦っている場所から遠ざけている様子もない、ただ単純にアゲハはデイケイドに攻撃しているだけであった。

「・・・・・・・・」

デイケイドは、動きを止めたそしてアゲハが突っ込んでくるのを

待った。

「はあっ!!」

アゲハはアゲハレイピアをディケイドの、喉元めがけて突き出した!!

「(思っていたとおりの動き……)」

ディケイドは、そう思うとアゲハレイピアの刃を右手の甲で払うと、アゲハの腹に向かって右足を突き出し、吹っ飛ばした!!

「ああっ!!」

アゲハは悲鳴をあげ後ろに吹っ飛ぶと、木々を倒してうつぶせに倒れた。

「どうした?もう終わりか?」

ディケイドは、アゲハに近寄りながら尋ねた。

「(くう……強い……やっぱり剣君には勝てない……でも私はこの世界の剣君を元に……)」

アゲハはこの世界の剣を思い浮かべながら、こぶしを作り、

「負けられない!!」

アゲハはそう言うとアゲハレイピアを強く握って立ち上がり、レイピアの鏢の部分についた、アゲハ蝶のような物の羽を展開させた。

R I D E R S P E A R

「ライダースピアー……たああああっ!!」

するとアゲハレイピアの刃先が、紫色に輝いた!!そして、アゲハはデイケイドに向かって走ると、紫色に輝く、アゲハレイピアをデイケイドの腹に向かって突き出した!!

「あまい!!」

A T T A C K R I D E S L A S H!!

デイケイドはデイケイドライバーにカードを装填、ライドブッカーソードモードの先端がマゼンタ色に輝き、デイケイドはライドブッカーソードモードを右下から左上に向かって振り、アゲハレイピアを弾き飛ばした!!

「きやあっ!!」

アゲハの握るアゲハレイピアは、簡単に弾かれ宙を舞うと、アゲハの背後に突き刺さった。

「すきやり!!」

デイケイドはそう言って、ライドブッカーソードモードを十の字を描くように振って、アゲハの体を切り裂くと後方に吹っ飛ばした!!

「きやあっ!!」

ディケイドに切り裂かれ後方に吹っ飛ばされたアゲハは、背中を地面に殴打、それと同時に変身が解けた。

「さあて、なんでこんなことをしたのか聞かせてもらおうか？」

ディケイドはアゲハに近寄りながら言う、そしてアゲハの変身者、恵と、ディケイドの目があつた瞬間、彼は、動きを止めてしまった。

「なっ！！」

「恵！！」

「うそだろ……………」

ディケイド、カブト、ディエンドの3人は恵を見て驚き、ディケイドは後ずさりしてしまった。

「恵……………なぜ?。」

ディケイドは声を震わせながら恵に尋ねた。

「ごめんなさい。私は……………この世界の剣君に元に戻ってほしいの……………そのためには……………剣君を、あなたを倒すしかない……………」

恵は涙を流しながら言うと、アゲハゼクターを右腕のライダーブレスに取り付けた。

H E N S H I N

恵は再びアゲ八に変身、アゲ八はアゲ八ゼクターに手を置くと、ゼクターの中心部にあるスイッチを押した。

R I D E R P U N C H

ゼクターから電子音が鳴り、紫の光がアゲ八の右腕を包んだ！！

「剣君、ごめん！！」

アゲ八はそう言うと、ディケイドに向かって走った！！

「大体分かった……。」

ディケイドは静かに言うと、ライドブッカーをガンモードにして、銃口をアゲ八に向けた。

「ライダーパンチ！！」

アゲ八は技の名前を叫ぶと、ディケイドの目の前で両足を揃えて上空に飛び上がると、空中で一回転、ディケイドの胸めがけて右腕を突き出した！！

ディケイドはアゲ八が飛び上がったと同時に、ライドブッカーの引き金を引き、銃弾を放った！！だが

「があっ！！」

突然、ディケイドの体から火花が飛び散り、ディケイドの体は前のめりになってしまふ、そしてその瞬間、アゲ八の放ったライダーパンチがディケイドの胸に突き刺さり、ディケイドは体から火花を

散らしつつ、後方に勢いよく吹っ飛び、地面を二転三転、転がっていき、一本の峰が太い木に激突、変身が解除された。

「剣!!」

ディエンドとカブトは、剣に駆け寄ると剣の上体を起こした。

「恵!なぜ剣を……なぜ剣を攻撃したあ!!」

カブトはアゲハに近づくと、アゲハの手首をつかんで叫んだ。

「剣君を倒さないと……剣君を倒せば、この世界の剣君は元に戻るって、言われたの!!だから、剣君をディケイドを倒すの!!」

アゲハが叫ぶと突然、カブトとアゲハの間を裂くようにして何かの光が割って入ってきた。

「くっ!!」

カブトは後ろに下がって、光の飛んできた方を睨んだ、するとそこには目が黄色で体が黒いカブトが立っていた。

「ダークカブト!!」

「やつ、やつぱり……あのときのライダーは、お前だったのか……」

ディエンドは、目の前居る黒いカブト、ダークカブトの名前を叫び、意識を戻した剣は言葉を詰まらせながら言った。

「まずいな・・・ここは退いた方が正解だよな。」

「デイエンドは剣とカブトに向かって言い、二人はゆっくりと頷いた。」

「・・・逃げれると思っているのか・・・。」

「ダークカブトはデイエンドに向かって尋ねた。」

「君とまともに戦っても勝てる保証はないし、逃げきれるとも思っていない!! だけど!!」

「デイエンドはそう言ってカードをデイエンドライバーに入れ、デイエンドライバーをそれに向かって掲げると引き金を引いた!!」

ATTACK RIDE ILLUSION

「デイエンドライバーからダークカブトとアゲハを囲むように5つの銃弾がはなたれ、その銃弾は地面に着弾するとデイエンドに変わった。」

「さらにこれでどうだ!!」

FINAL ATTACK RIDE D I D I D I D I D I D

「デイエンドライバーで召還したデイエンドたちは、ダークカブトとアゲハに銃口を向けると、複数展開されたシアン色の照準に向かって引き金を引いた!!」

するとディエンドライバーからビーム砲がはなたれ、アゲハとダイクカブトに命中!! そのすきにディエンド達は、その場から撤退した。

第九話 『剣対恵』（前書き）

今回はディケイド剣の過去と、ダークカブトの正体が明らかに！

第九話 『剣対恵』

「大丈夫か？剣」

「しつかりしろ……。」

隼人と翔は、剣を自分達の間挟み、肩と腰に腕を回して、二人で剣を抱くような形で剣をバイクシヨップと併設して建てられている、居宅スペースにある、剣の部屋のベットまで連れてくると、そこに剣を寝かした。

「大丈夫……思ったより効いてないから……。」

剣はそう言うと上体を起こした、だが

「っ！」

腹に激痛が走り剣は、うずくまった。

「しばらく休んでろ、目が覚めたら、詳しいことは聞く。」

「詳しいことと言っても、俺は状況がよく分らんのだが……
・まあいいだろ、じゃっ、お休み。」

剣はそう言って、ベットに横になった。

「じゃ、俺たちは下にも行くか。」

「ああ。」

隼人と翔は、剣の部屋から出た、すると目を閉じていた剣は目を開いた。

「俺はまたお前と戦わなくちゃいけないのか？ 恵……。」

剣は天井を見ながら悲しそうな瞳で静かに呟いた。

そのころ恵は……。

「あなた、いったい何者なの？ 何で私を助けてくれたの？」

変身を解いた恵は、ダークカブトに向かって尋ねた。

「別にお前を助けたわけじゃない、ただ、兄貴が妹を殺すところは誰も見たくないだろ？」

ダークカブトは恵を見ると変身を解除、するとそこには、隼人に似ているが、髪の色は黒ではなく茶色で、若干肌の色が黒く、目が二重ではなく一重で、少し目元がきつい、青年が現れた。

「！明真お兄ちゃん……」

「久し振りだな、恵……」

明真は笑いながら、恵に向かって言った。

「お兄ちゃんがなんで仮面ライダーの力を持つてるの!!」

「この力は大ショツカーからもらった、最強の力だ……」

明真はダークカブトゼクターを恵に見せて言った。

「お前だつてそうだろ？この世界の剣を元に戻すために、俺が折角、恋人の関係になるように仕組んでやった剣を倒すために、鳴滝のおっさんからアゲハゼクターを貰ったんだろ？」

明真は笑いながらそばにあつた椅子に座った。

「そうだよ……ってちょっと待って!!剣君と私が出会うように仕組んだつて、どういうこと!!」

「どうせ、この世界の剣は元に戻らない、それにこの世界はどのみち崩壊する……それがわかっていたから、俺はこの力を使ってディケイドが来る日にちをあらかじめ知り、ディケイドの力を持っている剣がこの世界に来た瞬間、あいつを襲って家のバイクショップの前までたたき落してやったのさ。」

明真は笑いながら話し、恵はそれを目を丸くして聞いていた。

「お前はいつまでもこの世界の剣のことを思っている、日が経てば経つほどお前の心は壊れていくのが分かった、だから俺は大シヨツカーに入ったのと同じで、お前が忘れられるようにしてやったのさ。」

明真が言い終わると、恵は、視線を落とし、明真に向けて銃を撃った!!

「うおっ!!」

明真は立ち上がって、銃弾をかわした。

「何すんだよ!!」

明真は恵に向かって叫んだ。

「なんで、勝手にそんなことするの・・・お兄ちゃんはいつもいつも、こっちの気持ちや他人のことを考えないで、自分の良かれと思う気持ちだけで行動するの!!」

「それが俺だからだよ!!俺は俺のやりたいように生きる、やりたいようにする!!大シヨツカーに入ったのもそのためだ!!大シヨツカーに入れば、やりたいことを自由にできる、人を、物を壊そうが自由なんだよ!!」

明真は大笑いしながら恵に向かって言い放った。

「なんか、お前と話すのもう飽きた、帰るわ。」

明真はそう言うと、オーロラを出現させた。

「そうそう、今のアゲハな、あれじゃ本当の力は出せないぜ。」
明真はそう言うと、オーロラに入ってその場から消えた。

何処かの世界にある教会、その教会の中で戦っている二つの影があった。

『どうしたの？抵抗しないの？』

サーベルのような剣を構えた、目が黒く額に骸骨のような宝石をつけ、黒いマントのようなものをつけているライダー、仮面ライダー幽汽は、目の前にいる体全体が赤く、目が黄色で日本刀のようなものを握った、ガタツクにそっくりのライダーに向かって言った。

『くっ、だったら抵抗してやるよ!!』

ガタツクそっくりのライダーからは剣の音が聞こえた、剣は、幽

汽に向かって叫ぶと、握っている日本刀を振り下ろした！！

『ぐっ！！』

剣の振り下ろした日本刀は見事、幽汽の体に命中、幽汽の体から、火花が飛び散って、幽汽は後ろに下がった。

『もらったぁ！！』

剣はそう言うのと日本刀を両手で握って、幽汽めがけて縦にまっすぐ振り下ろそうとした、その時！！

『っ！！』

突然、幽汽の体が光りだし、変身が解けた、するとそこには、銀髪で髪が背中まであり、目も銀色の恵が立っていた。

『やっぱりこの姿になると反撃できないんだねっ！！』

恵の声と同時に、甲高い女性の声が聞こえ、恵は剣に向かって手に持ったサーベルを振り下ろした！！

『がはっ！！』

剣の体から、火花が散って剣は後方に吹っ飛ばされ、木でできた椅子に体をぶつけた。

『くそっ……』

剣はゆっくりと立ち上がると、恵をマスクの中で睨んだ。

『このままでも面白いけど、やっぱり変身した方が強いよねえ』

恵が笑顔で言うと、恵の体の変化し、仮面ライダー幽汽になった。

『これで終わりにしてあげる……。』

幽汽はどこからともなく、黒いパスを取り出すと腰に巻いているベルトに近づけた。

FULL CHARGE

『さようなら』

幽汽はそう言って、光輝くサーベルを剣に向かって振り下ろした
！！

『ぐはあっ！！』

剣はまずいと思い、両腕をX字に組んで幽汽の攻撃を受け止める、だが思っていたよりも自分の体力が低下していたため、防ぐことができずに両腕ははじかれ、胸にサーベルの刃が命中、それと同時にサーベルから衝撃波のようなものが飛び出して、剣は体から火花を散らしながら後方に勢いよく吹っ飛び、協会の壁を突き破って外に飛び出すと、そばにあった古いロウソクたてに激突、変身が解除され体中から血を流し、服がボロボロになっている剣が現れた。

『ふう〜ん、あれ喰らって生きてるんだ、まあいいか、これで終わるし。』

幽汽はそう言うと、剣に向かってゆつくりと歩み寄って剣の首元めがけてサーベルを突き出した！！だが

『くっ！！』

突然幽汽の動きが止まり、幽汽は後ろに下がった。

『まだ抵抗できるの……？』

幽汽が静かに呟くと、幽汽のマスクから恵の顔が虚像のように映し出された！！

『恵！！』

『剣君、ごめんね、迷惑かけて……今私がこいつ止めてるから、今の内にこいつを攻撃して……』

幽汽から恵の、一言一言、絞り出したような声が聞こえた。

『あんた馬鹿あつ！？そんなことしたらあんたも死ぬのよ！！』

幽汽は自分の体を止めている恵に向かって叫んだ。

『知ってるわよ！！でも私は戦士なのよ！！いつでも死ぬ覚悟はできている、私も剣君も！！』

恵がそう言うと幽汽の背後から恵の虚像のようなものが現れると、恵の虚像の前には顔が緑色でフードのようなものをかぶった怪人がいて、恵はその怪人は両腕で押さえていた。

『惠……すまんっ!!』

剣はそう言うと、日本刀を拾った、そして日本刀を両腕で握ると幽汽に向かって突っ込んだ。

『RIDERPOWER最大出力……マックスモード。』

剣は静かに呟くと幽汽の目の前で止まり、日本刀を大きく振り上げた!!

MAXIMUM RIDER POWER

『くらえっ、最大出力のライダースラッシュだ!!』

BURNINGRIDERSLASH

剣が叫ぶと、日本刀の刃先が炎に包まれた!!そして剣はそのまま一気に幽汽の体めがけて日本刀を振り下ろした!!

『ぐあっ!!』

『これで最後だあっ!!』

剣は日本刀をいったん引きぬくと、そのまま真横に振り、幽汽の体を十字に切り裂いた!!

『ぎゃああああああっ!!』

剣の切り裂いた切り口から炎があふれ出し、一気に幽汽の体に燃

え広がる、そして幽汽は爆発！！体から大量の砂をまき散らしながら髪黒い恵が現れ、現れた恵はゆっくりと倒れた。

『恵！！』

剣は恵が倒れるより早く、恵に近寄ると恵の体を両腕で支えた。

『大丈夫か！！恵！！』

剣は恵の体をゆすりながら叫んだ、すると恵はゆっくりと目を開けた。

『け、剣君……………』

『恵！！大丈夫か！！』

『う、うん……………ごめんね、私もう少ししたら死んじゃう……………』

恵は声を絞り出しながら、悲しい表情を隠しつつ剣に言った。

『すまん、俺のせいで、お前を戦いに巻き込んで……………』

剣は目に涙をためながら恵に向かって言った。

『コラッ！涙流すなんて剣君らしくないぞ。』

恵は笑顔で剣の頭を軽く叩いた。

『私はもう少しで死ぬ、だから剣君には笑顔でいてほしいんだ。』

笑顔で私のことを看取って。』

恵は笑顔で剣に向かって言うと、自分の服の袖で剣の涙をふいた。

『わかったよ。最後におまえのわがまま聞いてやる。』

剣は笑顔で言うと、恵を抱きしめた……ずっと、何分も……。

『剣君、ごめんね私そろそろ、お兄ちゃん達のところに行かなくちゃ……、最後に、これが本当の最後のわがまま、聞いてくれる?』

『なんだよ?言ってみろ。』

『キス、して……』

『わかった……』

剣は笑顔で言い、恵はゆっくりと目を閉じた、剣も目を閉じ、二人はゆっくりと唇を近づけていく、そして二人の唇が重なり合った。

『じゃあね、剣君。』

そしてしばらくすると二人は唇を離し、恵は剣の頬に触れて笑顔で言った、すると恵の目がゆっくりと閉じられて、剣の頬に触れていた手はゆっくりと地面に落ちた。

『……恵……さよなら……』

剣は恵を抱きしめると、静かに呟いた……………。

「……………もう朝か……………」

剣は目を開けると、ゆっくりと上体を起こした。

「いやな夢見ちまったな……………」

どうやら先ほどの光景は剣の夢だったらしい……………剣は静かに呟くと、何かが窓ガラスを叩く音がした。

「なんだ。」

剣は首をかしげ、ベットから下りると、窓に近づいた、するとそこにはアゲハゼクターがおり、アゲハゼクターが窓をたたいていた。

「……………なるほど、来いって言うわけね……………」

剣は静かに呟くと、こぶしを握りしめ、部屋から飛び出た。

「剣！もう目が覚めたのか？」

剣が部屋から出てリビングに行くとき隼人と翔が朝食を食べていた。

「どこに行く気だ？朝飯でも食ってから……。」

隼人はそう言って、パンを渡した、だが剣はそれを無視してガレージの方に向かった。

「恵の奴から決闘の申し込みがあった……行ってくる。」

剣はガレージに入ると、追いかけてきていた隼人に向かって冷たく言って、ヘルメットをかぶると、自身のバイクにまたがって、ガレージから出た。

「隼人、俺たちも行っただ方がいい。」

剣の様子がおかしいことに気がついた翔は隼人に向かって言った。

「なに？どうしてだ。」

「いやな予感がする……剣の野郎、やられる気かもしれない。」

翔は静かに言うと、自分のバイクに近寄った。

「なるほど……仕方ねえ、お義弟だよ！！」

隼人は、そばにあったヘルメットをかぶってエクステンダーに乗

った。

剣はバイクを町の工場跡まで走らせていた。

「……………ここだな。」

剣は飛び去っていく、アゲハゼクターを見ながら呟くとバイクを止めて、バイクから降りた。

「来てやったぞ！出てこい！！」

剣は上を向いて大声で叫んだ、すると、後ろにあった倉庫のシャッターから幾つもの銃弾が飛び出した！！

「……………変身。」

K A M E N R I D E D E C A D E

剣は呟くと、事前に腰につけていたデイケイドライバーにカードを装填、デイケイドに変身すると、左手を握りしめて飛んできていた、銃弾に向かって左腕を振って、左腕を振った時にできる風圧のみですべての銃弾を地面にたたき落した。

「そこにいるんだろ？出てこいよ。」

デイケイドはシャッターの方に背を向けたまま、静かに言った。

「さすがね、剣君……………」

恵は倉庫の中から出てきながら静かに言った。

「恵、どうしても俺を倒したいんだな？」

「……………ええ。私はこの世界の剣君を元に戻してあげたいの……………」

恵は視線を落としながらデイケイドに向かって言った。

「でも！あなたを倒すわけには……………私はあなたを「言うな！」」

恵はデイケイドに向かって何かを言おうとしたが、デイケイドは叫んで止めた。

「お前がこの世界の俺を救いたいというなら俺を倒せばいい、それがお前の戦う意思なんだから……………でもな？俺の命は安くはないぞ？本気でこないとやるわけにはいかない……………」

ディケイドはライドブツカー、ソードモードを構えて静かに言った。

「……剣君は覚悟決めたんだ……だったら私も……」

恵は手を上に伸ばし、アゲハゼクターを呼ぶと左手につかんで、右手に装着した!!

H E N S H I N

アゲハゼクターから電子音が響き、恵の体は、漆黒の鎧を身にまとった仮面ライダーアゲハに変身、返信が完了するとアゲハの瞳が赤く輝いた。

「……行くよ、剣君。」

「本気でこい!!」

アゲハはアゲハレイピアを引き抜くとディケイドに向かって走りディケイドはライドブツカーを構えた。

第九話 『剣対恵』（後書き）

ダークカブトはしばらく出てきません。

第十話 『悪魔』

「はあっ!」

工場跡で、アゲハはディケイドに向かってアゲハレイピアを振って、攻撃していた。対するディケイドは、アゲハレイピアの刃をライドブツカーソードモードですべて払って、攻撃を防いでいた。

「どうした恵。お前の力はこんなものか？」

ディケイドは、アゲハの攻撃を防ぎながら言うと、ライドブツカーを振りながら、カードを一枚引き抜いて、ディケイドライバーに装填した。

A T T A C K R I D E S L A S H

「はあっ!」

ライドブツカーの刃が赤くなり、ディケイドはライドブツカーを勢いよく振って、アゲハをアゲハレイピアごと吹っ飛ばした。

「きやあっ!」

アゲハは後ろに跳び、背後にあった、柱に背中をぶつけた。

「その程度の腕じゃ俺は倒せないぞ……この世界の俺を元に戻したいなら俺を殺すつもりでこい!」

ディケイドは、ライドブツカーの刃を撫でると、アゲハを見て叫

んだ。

「くっ……まだ、負けられない!!」

アゲハは立ち上がると銃とカードを取り出して、銃のマガジン部分にあるくぼみにカードを通した。

K A M E N R I D E F E M M E

アゲハは銃口をデイケイドに向けると引き金を引き、銃から白いライダー、仮面ライダーファミを召還した!!

「はああああああつ!!」

ファミはレイピアに似た召喚機、ブランバイザーを構えてデイケイドに向かって走って行く、デイケイドはライドブッカーをガンモードに変えると銃口をファミに向け、デイケイドライバーにカードを装填した。

A T T A C K R I D E B L A S T

デイケイドはライドブッカーの引き金を引き、銃口からマゼンタ色に輝く銃弾を無数に放った!!

「あうっ!!」

デイケイドの放った銃弾はすべてファミに命中、ファミの体は爆発を起こして消滅した。

「こんな雑魚で俺を倒せると思うな……そっちが来ないの

なら、こちらから行くー!!」

ディケイドはライドブッカーをブッカ モードにして腰につけると、アゲハめがけて走って行った!!

「ここだな、剣たちが戦っている場所は……。」

翔は静かに呟くとヘルメットを脱いだ。

「剣たちはもう少し先の方で戦っているだろうが、俺たちは、害虫駆除だな。」

「ああ。」

翔と隼人は、剣たちが戦っているところよりもっと手前、工場の入り口にバイクを止めていた。そして二人が言う害虫とは……

「あいつらの戦いは邪魔はさせん、俺たちがお前らの相手だ。」

二人の後ろから声が聞こえ、二人は後ろを振り返る、するとそこ

にはザビーとドレイク、サソードが立っていた。

「三度目の正直と言っちゃつです、あなた達を倒します。」

「やれるものならやってみる。」

翔はディエンドライダーにカードを装填しながら言った。

「行くぞ、翔。」

「あいよ。」

「変身!!」

K A M E N R I D E D I E N D

H E N S H N

C A S T O F F C H A N G E B E E T L E

翔はディエンドに変身、隼人はカブトに変身すると、いきなりライダーフォームに変わった。

「あとお二方ほど、召喚しますか。」

K A M E N R I D E I X A P S Y G A

ディエンドはディエンドライダーにカードを二枚、装填すると引き金を引いて、銃口より、体が白い二体のライダーを召還した。

「その命、神に返しなさい!!」

体が白く目が赤で、マスクには十字架のような角をもった仮面ライダーイクサが剣を構えながら言った。

「It's show time!!」

同じように体が白くて、青で、ギリシャ文字のを模したライダー、仮面ライダーサイガがサムズダウンをしながら言った。

「何をしても無駄だ……クロックアップ!!」

ザビーはクロックアップを発動、それと同時にカブト、ドレイク、サソードもクロックアップを発動させた。

CLOCK UP

「俺も使うか、このカードを!!」

ATTACK RIDE CLOCK UP!!

ディエンドは、ディエンドライダーにカードを装填し、引き金を引いて、クロックアップを発動させると超高速の世界に入り、一気に走った!!

「どうした？その程度か恵？」

デイケイドとアゲハは今だ戦っていた、デイケイドはドラゴンナイトに変身してアゲハを圧倒していた。

「くっ、まだよ！！ライダーパンチ！！」

アゲハはアゲハゼクターのスイッチを押して、エネルギーを一点に集中させ、漆黒の光を拳にまとわすとデイケイドに向かって急接近、右腕を突き出した。

デイケイドドラゴンナイトは無言で、デイケイドライバーにカードを装填した。

ATTACK RIDE STRIKE VENT

デイケイド
Dドラゴンナイトは右手に、ドラグクローを構えると、アゲハに向かつて一気に右腕を突き出した！！

Dドラゴンナイトの握るドラグクローとアゲハの黒い光に包まれた右腕は激突、Dドラゴンナイトの握るドラグクローから赤い炎、ドラグクローファイヤーがはなたれ、アゲハの右腕に命中、アゲハは後ろに飛ばされそうになる、だが、

「私は負けない・・・剣君を元に戻すんだ・・・そのためには・

「……デイケイドを殺す!!」

アゲハがそう言い放つとアゲハの瞳が真っ赤に輝き、体にあった紫のラインが、真っ黒になり、アゲハの体は全身が黒くなる、さらにアゲハの背中から漆黒の蝶の羽が生え、その羽から、黒や紫の光の粒子が飛び出すと、アゲハの体を持ち上げ、アゲハをドラグクローファイヤーの炎から回避させた。

「!宙に浮いた!!」

Dドラゴンナイトは上を見て叫んだ、アゲハの背中にある黒い蝶の羽は、アゲハの体を浮かせていた。

「やっべえ、ブレイドの力此処で使うわけにはいかないし。空の飛べるライダーのカード持ってねえ。」

「これで終わりよ……さようなら……。」

アゲハはそう言って、アゲハゼクターのスイッチを二回押した。

MAXIMUM RIDER POWER

「ライダーナックル……。」

RIDERKNUCKLE

アゲハの右腕、すべてが真っ黒の光に包まれる、そして、生えている羽からジェット噴射をするように一気に漆黒の粒子が飛び出した!!

「!!やばい……かけるしかない、金の紫に!!」

Dドラゴンナイトは、アゲハのパワーを見ると焦り、一枚のカードをディケイドライバーに装填した。

FORM RIDE KUUGA RISINGTITAN!

!

「ふうう……はあっ!!」

ディケイドの体の周りを電流が包み、ディケイドは体が紫の鎧に包まれたクウガ。ディケイドクウガライジンググタイタンフォームに変身、DクウガRTは両腕を前に突き出した。

「剣君……ごめんなさい!!」

アゲハは、静かに言うと、DクウガRTに向かって突撃、右腕を一気に突き出した!!

「があっ!!」

アゲハの右腕がDクウガRTに突き刺さる、それと同時にDクウガRTの体から火花が噴き出した!!

「(ゴホアツ!!……なんてパワーだ……ライジンググタイタンの装甲が削られる……やべえ!!)」

「これで最後!!」

RIDERSPEAR

アゲハは、左手でアゲハレイピアを構えると、DクウガRTに向かっ
てアゲハレイピアを突きさし、アゲハレイピアの鏢についてい
る、アゲハ蝶の羽を展開させ、DクウガRTにライダースピアーを
放って後方に吹っ飛ばした！！

「がはっ！！」

DクウガRTは工場の錆びれた壁に激突、その衝撃で、デイケイ
ドに戻った。

「ラッキー・・・変身は解除されてないみたいだな。」

デイケイドはゆっくりと起き上がりながら言った、ライジングタ
イタンフォームのおかげで、ダメージは軽減でき、クウガの変身は
解けたようだ、デイケイド事体の変身は解けてはいなかった、だ
がデイケイド自身のダメージは大きく、体から煙が立っていた。

「まだ倒れてないんだ。さすがは剣君だね。」

「だが、俺もそろそろ限界なんだよ・・・。」

デイケイドはライドブツカーソードモードを構えながら言った、
だが、力が入っていないのかライドブツカーはプルプルと震えてい
た。

「じゃあ、そろそろ終わりに・・・。」

アゲハはそう言って、アゲハゼクターを右腰に持ってきた、と、
その時！！

「うわあっ!!」

「がはっ!!」

「ごあっ!!」

ザビー、ドレイク、サソードの三人が、工場の壁を突き破り、デイクイド達がいる工場内に入ってきた。

「もう終わりか、大したことないな……。」

「そう言ってやるな、あいつらもあいつらなりに努力している……。」

ザビー達が入ってきた、穴からディエンドとカブトがゆっくりと入ってきた。

「翔!?!」

「お兄ちゃん!?!」

デイクイドとアゲハはディエンドとカブトを見ながら言った。

「あれ?どうやらお邪魔してしまったみたいだな。」

ディエンドは、マスクの中でニコニコしながら言い、デイクイドに近寄った、カブトもその後ろをゆっくりと歩いた。

「くそ、まさか召還した二体のライダーはおとりだったなんて!

「！」

「やってくれますね、あの二人。」

「ぶつ殺す、ついでにディケイドもだ!!」

三人のライダーはゆっくりと起き上がると、ディケイドを睨んだ。

「……………恵、お前も剣を倒す気なのか？」

カブトはアゲハに尋ねた。

「……………私はこの世界の剣君に戻ってほしい……………だから……………剣君を……………ディケイドを倒す。」

アゲハはそう言うと、アゲハレイピアを構えた。

「そうだ、それでいいアゲハ、お前はディケイドを倒すんだ!!
鳴滝様のためになあ!!」

ザビーはアゲハに向かって大笑いしながら叫んだ、いつもと違う、凶悪な声に、ドレイクとサソードは驚く、もとい、かなり引いていた。

「お前今、鳴滝のこと様付で……………」

「鳴滝のことはあくまでも、ディケイドを倒すまでのスポンサーじゃなかったのか……………」

ドレイクとサソードは若干、声を震わせながらザビーに尋ねた。

「ちっ、興奮して言うてはいけないことを……」

ザビーは静かに言うと、ソードとドレイクの体めがけて何かを突き刺した！！

「がっ！」

「ぐおっ！！」

二人は口籠ると、突然変身が解除され、二人の体は粒子のようになっって消えた。

「くつくつくつく……つくつわあっかつかつかつか！！」

突然、ザビーは大笑いしだした！！

「貴様自分の仲間は何をした……」

カブトは今だに大笑いしているザビーをにらみながらどすの利いた鋭い声で尋ねた。

「こいつらの生体エネルギーを吸い取った、俺がこの世界を破壊するためにな。」

ザビーは笑いを止めるとカブト達の方を見た。

「俺は、この世界をディケイドごと破壊するために鳴滝様に送り込まれたワームだ！！俺の目的は、この世界のライダーの生体エネ

ルギーを奪い、ディケイドを倒し、この世界を破壊すること、そのためにザビーになってサソード、ドレイク、カプトを仲間につけ、ディケイドを倒したあと、その3人を吸収し、最後にディケイドを倒すために改造されたガタツクのパワーをいただき、この世界を破壊する作戦だったのだ!!」

「なるほど、この世界の俺が改造されたのはそう言う理由でか・・・。」

「だが、作戦を変更する、丁度、俺が倒したいライダーはガタツク以外揃っているし、俺は鳴滝様に新しい力を授かったからな・・・。」

ザビーはそう言うと、サソードダイバーとドレイクグリップを拾い、ゆっくりとカプト達に近づいて行った、と、その時!!

「があっ!!」

突然、ザビーが何かにはじかれ、宙に浮いた。

「鳴滝のくそ野郎・・・やっぱりそんな狙いがあったか・・・。」

ザビーが地面に落下すると同時に、ディケイド達の目の前にガタツクが現れた。

「剣!!」

「はいっ!!」

「「お前じゃない!!」「」

カブトはガタツクの名前を呼ぶとディケイドの剣が反応、ディケイド剣はディエンド、カブト、そしてガタツクに突っ込まれた。

「なんでここに?」

「……恵に用があつてきた。」

カブトの言葉にガタツクは静かに答えると、後ろにいるアゲハに近寄った。

「恵、俺のこの姿はもう元には戻れないんだ、だから、お前は俺のことを忘れてくれ。ディケイドの剣と仲良く暮らしてくれ。」

「でも、私は剣君が……この世界の剣君が……。。。」

「うれしいけどね、白状すると俺はもう少ししたら死ぬんだ。だから、忘れてくれ。」

ガタツクの一言にその場の全員が凍りついた、そう彼は『もう少ししたら死ぬ』と言ったのだ。

「なんで……死んじゃうの?」

「俺は長時間、ネイティブ化の暴走と通常体、クロックアップの世界の行き来、暴走した状態での変身を繰り返していた。俺の体はもうボロボロなんだ……。。。」

ガタツクは自分の手を見ながら静かに言った、と、その時!!

「馬鹿が、やつぱり、暴走を止めるためにボロボロだったか！
まあいい！！死ぬ前にひと仕事してもらおう！！」

ザビーは立ち上がると、大声をあげて、ガタツクに向かって右腕を翳した、その時、ザビーの複眼が緑色になると同時にガタツクの目も緑色に輝くと、変身が強制的に解除され、ガタツク剣の姿がどどんスタッグビートルワームに変わっていった。

「剣君に何をしたの！！」

アゲハはザビーに向かって叫び、ディケイドやディエンド、カブトもザビーを睨んだ。

「こんなこともあるかと思って俺は鳴滝様にネイティブの力を暴走させることができる力を貰ったのだ！！」

ザビーが言い放つと、ザビーの右手のひらから緑色の光がはなたれ、スタッグビートルワームに命中、スタッグビートルワームの瞳が真っ赤に輝き、ディケイドを睨んだ。

「さあやれ！！ディケイドを殺せ！！」

ザビーはスタッグビートルワームスタッグビートルワームに向かって叫んだ！！だが………

「こ、と、わ、るう！！」

スタッグビートルワームは声を上げると、腕についでいる鉄をザビーに向かって放り投げた！！

「くっ！」

スタッグビートルワームの放り投げた鉄は、ザビーの足元に突き刺さった、それを見たザビーは軽く舌打ちをした。

「だったら、アゲハ！お前がディケイドを殺せ！！殺さないのなら、お前の彼氏で、お前を殺させる！！」

ザビーは、アゲハに向かって叫ぶが、アゲハは、ザビーの命令を鼻で笑い、

「お断りよ！あなたみたいなのは、悪魔の命令には従わない！！」

「そうか、そんなに死にたいか・・・だったら、二人まとめて死ねえ！！！」

ザビーは叫ぶと、背中から触手のようなものを出現させ、アゲハとスタッグビートルワームに向かって触手を勢いよく伸ばした！！

「くっ！！！」

「させるか！！！」

カブトとディエンドは、ザビーの伸ばした触手に向かって飛びかかった！！

「たあっ！！！」

「はあっ！！！」

カブトはカブトクナイガンを縦に振り、デイエンドはデイエンドライバーで銃弾を放ち、ザビーの出した触手を攻撃した！！だが

「ぐわっ！！」

「うおっ！！」

カブトとデイエンドの攻撃が命中した触手は一切のダメージを負うことなく、カブトとデイエンドに向かって突撃し、二人を地面にたたきつけると、アゲハとスタッグビートルワームに向かって飛んで行った！！

「使えない駒は壊れるおっ！！」

ザビーが叫ぶと、ザビーの放った触手の先が鋭くなり、蜂の針のようになる、そしてその触手はアゲハとスタッグビートルワームに向かって進んでいった、だが。

「俺を忘れんじゃねええええええっ！！」

デイケイドが二人の前に来ると、ふたつの触手からアゲハとスタッグビートルワームを庇った！！そしてデイケイドの体に二つの触手は命中、触手の針がデイケイドに突き刺さった！！

「ぐほあっ！！」

普通の状態なら大したことない攻撃だが、今のデイケイドはアゲハとの戦いで体力が限界に近かった、その状態で攻撃を受けたため、デイケイドは地面に膝をつく、変身が解除され、地面に倒れた。

「剣君!!」

アゲハは倒れた剣に駆け寄ろうとした、だが

「させるか!!」

ザビーが叫ぶと、触手が剣を勢いよく払って、剣を吹っ飛ばすと、剣はそばにあったドラム缶の束に突撃した。

「剣君!!」

「剣!!」

アゲハとカブト、ディエンドは剣の吹っ飛ばされた方を見て叫んだ!!

「くそが……やりやがったな……」

剣とスタッグビートルワームはザビーを睨んだ、そして剣はゆっくりと立ち上がるとディケイドに変身しようとした、だが

「させるか!!」

ザビーが触手を振りまわして剣の腹を殴りつけた!!

「があっ……」

剣は腹を押さえてうずくまると、地面に膝をついて倒れた、それを見たザビーは笑いながら剣に近寄って、剣の頭を勢いよく踏んだ

!!

「ふんっ、所詮はただの人間だな、あの程度の戦闘で、こんなにダメージを受けるなんて……。」

ザビーはそう言つと、剣の胸倉をつかんで、持ち上げた。

「さあて、何発で死ぬかな？」

ザビーは体から触手を出して剣の体を縛りつけると剣を宙に浮かした。

「さあて、サンドバックになつてもらおうかあっ!!」

ザビーはそう言つて剣の腹を殴った!!

「ぐおっ!!」

「まだまだ!!」

続いてザビーは垂れ下つた剣の頬を右から左に向かつて殴りつけた!!

「さあて!!……どどん行くぜえ!!」

ザビーはそう言つと剣の体を連続で殴りつけた!!

「ちめてちめてよ!!」

いつの間にか変身を解いていた恵は、目に涙をためながらザビー

に向かって叫ぶ、だが、ザビーはその声に気も止めず、剣を殴りつけて言った。

「あの、害虫野郎が……………」

「ぶっころすー!!」

完全に切れた、カブトとディエンドは立ち上がると、ザビーに向かって突っ込んだ!!

「じゃますんな……………雑魚が……………」

ザビーは静かに言うと、ドレイクゼクターを握って、ライダーシユーティングを二人に向かって放った。

「ぐはっ!!」

「があっ!!」

カブトとディエンドは後方に吹っ飛び、背中を地面にぶつける、すると二人の変身が解除されてしまった。

「ちっ、邪魔しやがって、まあいい続きだ!」

ザビーは剣の方向に向きなおすと体を勢い良くねじって、剣の脇腹をちょうど肝臓がある位置に向かって右腕を突き出した!!

「ぶぐおっ!!」

「チャンピオンのリバーブローが、挑戦者の腹に突き刺さったあ

「!!」

ザビーはステップを踏みながら、ボクシングの実況者のまねごとをした。

「さあてここらで止めの、スマッシュや!!」

「もうやめてええええええええっ!!」

ザビーは距離を置いて剣を殴ろうと構え、恵は大声で叫んだ!!
それと同時に恵の瞳から涙が流れ出た、と、その時!!

「ぶぐあっ!!」

突然ザビーが何かに弾き飛ばされた!!

「貴様あああ、いい加減にしろおおっ!!」

ザビーが立ち上がるとそこには、体全身が黒く変色したスタッグ
ビートルワームがいた。

「完全に頭に来た……ぶっ殺す!!変身!!」

CHANGE STAGBEE TLE

スタッグビートルワームは、腰のくぼみにガタックゼクターを入れ、体全身が漆黒で鋭く尖った赤い瞳、頭の顎が大きく鋭く上がった、仮面ライダーガタックに変身した。

「てめえは、絶対に殺す……覚悟しやがれ、影島あつ!!」

ガタツクはガタツクダブルカリバーを構えると、ザビーに向かっ
て走った！！

第十一話 『怒りのガタツク』

「影島あ！！てめえだけはぶつ殺す！！」

体全身が黒く、目が鋭くなり、頭の左右にある顎も鋭くとかつて
いる、仮面ライダーガタツクは、肩についてあるガタツクダブルカ
リバーを構えて、ザビーに向かって突っ込んだ！！

「図に乗るなよ・・・ワームとしても人間としても生きること
のできない、中途半端野郎があっ！！」

ザビーは触手を伸ばして、転がっているサソードヤイバーを拾う
と、自分に向かって走ってきているガタツクに向かって突っ込んだ
！！

「はあっ！！」

「だあっ！！」

R I D E R S L A S H

ガタツクは、ガタツクダブルカリバーを左右からはさむような形
で振り、ザビーはライダースラッシュを発動させ、サソードヤイバ
ーを縦に振り下ろした！！

「がっ！！」

ザビーの振り下ろしたサソードヤイバーは、ガタツクの振り下ろ
したダブルカリバーに挟まれた！！さらにサソードヤイバーの刃に

ひびが入っていった。

「だあっ!!！」

ガタツクは声を上げると同時に、腕を一気に閉じ、サソードヤイバーの刃を粉々に粉碎すると、右足をザビーの腹に伸ばし、ザビーの腹を蹴り飛ばした!!！

「ぐっ!!！」

ザビーは腹を押さえて後ろに下がると、ガタツクを睨んだ。

「まだまだ!!！」

ガタツクは飛び上がると、ガタツクダブルカリバーをザビーの体に向かって、まっすぐ縦に振り下ろす、ザビーの胸からは火花が飛び散り、ザビーを後ろに下がらせる、だが

「逃さん!!！」

ガタツクは右手に持ったガタツクダブルカリバーをザビーに向かって放り投げると、今度は左に持っている方を投げた!!！

「がっ!!ぐっ!!！」

ガタツクダブルカリバーは右、左の順番にザビーに命中、ザビーの体からは火花と同時に血も飛び散った。そしてがったくの投げたダブルカリバーはブーメランのようにガタツクの手に戻ると、ガタツクはそのまま、ザビーに向かって走り間合いをつめた。

「喰らええええええええええええええええつ!!」

ガタツクはダブルカリバーを握りしめると、怯えているザビーに向かつて右手に持ったカリバーを一気に振り下ろした!!

「ぎゃああつ!!」

「まだまだ!!」

ザビーは情けない声を上げるが、ガタツクはそのまま容赦なく左に握ったカリバーを、左から右に向いて振り、ザビーの胸のアーマ―を切り裂いた。

「これで終わりだと思ふなああああああつ!!」

ガタツクは声を上げると、ダブルカリバーを振りまわし始めた!!

「だあああああああつ!!」

「がうつ!!ごはつ!!あがつ……」

ガタツクは声を上げながらダブルカリバーを左右テンポよく振りまわす、ダブルカリバーの刃先がザビーの体に命中するたびに、ザビーの体から火花と同時に血も飛び出す、ザビーが距離を置こうとしたらガタツクはダブルカリバーのどちらかを放り投げ、地面に転ばせ、同じように乱舞切りを繰り返していた……その姿はまるで鬼のようであった……。

「やめて……剣君やめて!!」

恵はその光景を見ながら大声で叫ぶ、だが、ガタツクには聞こえていない……。変身が解かれた翔と隼人はボロボロになっている剣を二人で抱えながら恵に近寄ると、剣を地面に下ろした。

「くっ、暴走してやがる……………」

隼人は、その光景を見るとつらそうな表情でつぶやいた。

「剣……おまえもキレると、あんな風になるのは自覚してるか？」

翔は剣を横目で見ながら、呆れたように言った。どうやら、デイケイドの方の剣も怒ると、ガタツクの剣が今現在しているような戦い方をするようだ……………。

「ああ、お前らに迷惑かけたことぐらいはわかるよ。」

剣はゆっくりと立ち上がりながら言った。

「剣？」

「剣君!?!」

「あいつを止めてやる……………」

剣は静かに呟くと、腰に巻いているデイケイドライバーにカードを装填した。

K A M E N R I D E D E C A D E

剣はディケイドに変身するとゆっくりと歩き出した。

「あの馬鹿!!！」

「剣君!! 剣君の体はボロボロなんだよ!! ！どうしてそんな体で戦うの!!！」

隼人はディケイドを止めようとして立ち上がり、恵はディケイドに向かって叫んだ。

「この世界の俺を止める……あれ以上戦い続けたらあいつは……」

ディケイドは今だ戦いを続けているガタツクの方を向きながら言う、後ろを振り返り恵たちを見た。

「暴走する……闇にのまれる……」

ディケイドが静かに言った、その時!!

「がはっ!!！」

ドン! という巨大な音が聞こえ、4人は一成に、ガタツクたちのほうを見た。するとそこには壁にたたきつけられ体中から火花や煙を噴き出し、アーマーが砕け血で染まっているボロボロのザビーと胸のアーマーや、腕、手首などに、血がべっとりと付いたガタツクが立っていた。

「くそっ! 吸収してやる!!！」

ザビーはそう言って、壁から起き上がると、ガタツクに向かって右腕を突き出した！！すると右腕が怪人のような腕になり、手首の部分には針のようなものがついていた。

「ライダーカッティング！」

RIDER CUTTING

ガタツクはガタツクダブルカリバーを重ねて鋏のようにすると、ザビーの腕を挟んだ！！

「だあっ！！！」

そしてダブルカリバーの刃を勢いよく閉じて、ザビーの腕を切断した！！

「ぎゃああああああっ！！！」

ザビーの右腕は、肘から上が吹っ飛び、血があふれ出た！！

「とどめ、ライダーキック……。」

ガタツクは呟くと、ガタツクゼクターにあるスイッチを3回押し、ガタツクゼクターの角を起こしてクワガタのようにすると、再び倒して、ライダーフォームの状態に戻した。

RIDER KICK

「はっ！！！」

ガタツクはザビーの顔面に向かって、右足を軸にした回し蹴りを放った！！

「がはっ！！」

ザビーの体は勢いよく吹っ飛んで、壁に激突！！壁を突き破って外に飛び出した。

「くそ……俺は……つよいん……ぐはあっ！！」

ザビーがゆっくりと起き上がると、ザビーの体中から火花が飛び散り、大爆発！！変身が解除され、ライダーブレスについていたザビーゼクターはその爆発に巻き込まれ中破、完全に壊れてはいないが、かろうじて変身できる状態にまで壊れていた。

「くそつ……あきらめないぞ……貴様は殺す……絶対に……」

影島はガタツクを睨むと、オーロラを背後に出現させると、オーロラをくぐりその場から消えた。

「くつ、逃げたか……」

ガタツクは静かに言いつとクロックアップを発動させその場から去ろうとした、だが。

「まって！！」

恵が走ってきた、その後ろからディケイド、隼人、翔も歩いてきた。

「行かないで、剣君……………」

「……………ディケイドの俺が、体力を回復したら、俺はそいつと戦う。」

ガタツクはディケイドを見ながら、静かに言った。

「その前に、この世界にいる害虫を駆除してからだけだな。」

ディケイドはそう言って変身を解除した。

「ふっ、だったら俺もそれに協力しよう。」

ガタツクも変身を解いて剣と握手しようとした、その時！！

「ぐっ！！！」

突然、ガタツク剣が地面に膝をついた！！

「まずい、暴走の反動が……………ぐわああああああつ
！！！」

ガタツク剣が声を上げると、体がどんどん変わっていき、体全身がダークブルーで目の色がダークレッドの、巨大なクワガタの、スTAGグビートルワームに変身した。

「剣君！！！」

「剣！！！」

隼人と恵はスタッグビートルワームを呼ぶ、スタッグビートルワームは声を上げると、二人に襲いかかった!!

「ちっ！暴走か!!」

剣は舌打ちすると隼人と恵を後ろに下がらせた。

「俺が止めてやる……お前をなあっ!!」

剣は叫ぶと、いつもと絵柄の違うディケイドのカードを取り出し、ディケイドライダーに装填した!!

K A M E N R I D E D E C A D E !!

ライドブッカーが光輝き、剣を包む、そしてライドプレートの刺さっていないディケイドが姿を現し、上空からライドプレートがディケイドの頭に突き刺されると、額にある宝石が紫色に輝き、目がつり上がった状態になった。

「行くぞ!!」

「うがあっ!!」

ディケイドは、激情態と呼ばれる姿に変身し、ライドブッカーを構えるとスタッグビートルワームに向かって走り、スタッグビートルワームも一気に走った!!

第十二話 『剣対剣』

「うおおおおっ!!！」

「ぐるあああああっ!!！」

目が鋭くつり上がった、ディケイド激情態と、体全身がダークブルーで、瞳の色がダークレッドのクワガタムシを模した、スタッグビートルワームは同時に、お互いの目標に向かって走っていた!!

「はあっ!!！」

ディケイドは、スタッグビートルワームに向かって、ライドブツカーを振り下ろす、スタッグビートルワームはその攻撃を右腕についている盾のようなもので受け止めると、左腕の剣を勢いよく振りおろした!!

「がっ!!！」

スタッグビートルワームの振り下ろした剣はディケイドの胸のアーマーを切り裂いた!ディケイドの胸のアーマーからは火花が飛び散り、ディケイドはよろめきながら後ろに下がった。

「なめんな!!！」

ATTACK RIDE GIGANT

ディケイドは、ライドブツカーからを取り出して、ディケイドライバーに装填、ディケイドの右肩にマゼンタの光が現れ、その光が

消えると、長方形状の大きなミサイルポッドが姿を現した！！

「っ！」

「はあっ！！」

デイケイドに向かって突っ込もうとしていたスタッグビートルワームは足を止めた、その瞬間デイケイドは、ギガントの引き金を引き、4発のミサイルを放った！！

「ぐごがっ！！」

デイケイドの放ったミサイルは、スタッグビートルワームに命中すると同時に爆発を起こし、周囲に煙を巻き上げた。

「きゃっ！！」

「くっ！！」

二人の戦いを悲しそうな表情で見た恵は爆発で生じた風と、砂ほこりから自分の目を守るため、右腕を前に突き出し、半身になり、隼人も同じように防ぐ、だが、翔だけ無言で、立ったままの状態で二人の戦いを見ていた。

「っ、逃げたか……。」

煙が晴れると、そこにはスタッグビートルワームはおらず、デイケイドだけであった。

「……あの距離のギガントを喰らっても、無事だとは……」

・・厄介だな。」

ディケイドは周囲を見渡し、ギガントの威力で破壊された、工場を見ながら静かに呟いた、半壊していた古い廃工場とは言え、あの一瞬でディケイドの前方にある屋根や壁は、けし飛び、外の景色が見え、床には、クレーターが出来上がっていた。

「…………クロックアップで逃げたな…………。」

ディケイドは静かに言うと、ディケイドドライバーを開いてその中にカードを装填した。

ATTACK RIDE CLOCK UP

ディケイドはクロックアップを使い、その場から消えた。

「なんなのあのディケイドの姿目がとがってて、悪魔みただったけど。」

恵は先ほどまでディケイドが立っていたところを見ながら、静かに言った。

「あれはディケイドのもう一つの姿、激情態だ。」

「「激情態？」」

「ああ、その名の通り、激情に身を任せて相手を倒す姿だ。」

「暴走みたいなものか？」

翔は隼人の言葉に対して首を横に振って、『NO』と答えた。

「激情態は暴走とは違う、ディケイドが『破壊者として自分を受け入れたときに変身することができる、すべてのライダーを破壊する力』……それが本来の激情態だ……。」

「じゃあ、剣君は、ガタツクの剣君を倒すためにあの姿に!?!? ……ちよつと待って……剣君がああ姿になったってことは、破壊者としての自分を受け入れたってこと!?!?」

恵は目を丸くして、翔に尋ねた、隼人も、表情には現さなかったが恵と同じようなことを言うような雰囲気から出していた。

「いや、今の剣は破壊者としての自分を受け入れてはいない、ただ、この世界の剣の暴走を止めるには、通常のディケイドの力じゃ暴走を止めれない、体力も限界な上、変身できるライダーも限られているからな……。」

「なるほど、それで激情と言う感情の力を借りることで、変身できる姿で止めようとしているのか……。」

「ああ、その通りだよ……。」

隼人の言葉に静かに翔はうなずくが、どこか不安そうな顔をしていた。

「(すべてのライダーの世界を回っていないお前が激情態の力を使うのは体に大きな負担がかかるはずだ……“ラムダ”のときのように変身できる時間は限られてくる……早めに勝負をつける……)」

と、静かに思っていた。

「はあく、はあく、はあく……。」

影島は、足を引きずりながらどこかの施設の中を歩いていた。

「化けものか……仮面ライダーと言うのは……。」

影島は呟くようにいながら、階段を下りると、降りた先にあるドアを開いた。するとそこには、

「あいつらを倒すには……すべてのワームを吸収するしかない……こいつらの力を俺に集めれば、世界なんか簡単に破壊できる。」

影島は下を見ながら静かに呟いた、するとそこには、緑色のワームサナギ態がうようようごめいていた。

「お前ら、俺に力をよこせえっ!!--」

影島が叫ぶと、影島の姿が変化し始めた、そして変化が止まるとそこには、体の色が金で蜂のような姿をしているワームになり、体全身から触手を放ち、下の階にいるすべてのワームに突き刺してすべてのワームを吸収した！！

「まだだ、まだ力が足りない……あの男を……ガタツクを吸収するんだ！！。」

影島は人間態になるとザビーに変身、クロツクアップを発動させ、今いる部屋から飛び出した！！

その頃、剣たちは、

剣たちが戦っている場所は、変わっており、大破した工場からは外に出て、別の工場に向かう工場施設内の道路で交戦していた。

「いい加減に目を覚ませ！！。」

クロツクアップがすでに解けたデイケイドは声を上げると、右腕

ディケイドは、もとに戻った右腕をスタッグビートルワームに向けて叫んだ。すると、スタッグビートルワームが立ち上がり、背中の羽を広げ大空に舞い上がった。

「……………これでけりをつける。」

FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DE
ECADE

「グガアアアアッ!!」

スタッグビートルワームは空中で静止、そして雄たけびを上げると、右足が赤く光り輝いた。

「行くぞ……ディメンションキイイイイイイイックッ!!」

「ガアアアアアアッ!!」

ディケイドは上空に飛び上がると左足を突き出し、自分の顔を模した金色の絵柄の書かれたカードをくぐり抜け、スタッグビートルワームは右足をディケイドに向かって突き出した!そして二人の放った必殺の蹴りは激突!!大爆発を起こした!!

「がはっ!!」

「ぐっ!!」

爆発が起き、暫くすると、変身が解け、体中から血を流している剣と、皮膚の色が黒く変色し、瞳の色も真っ赤に染まっている、ボ

ロボロになったガタツク剣が上空から落ちてくると二人は地面にたたきつけられた。

「剣君!!」

恵はそれを見ると血相を抱えて一人に駆け寄ろうとした、だが

「来るなっ!!」

デイケイドの剣が恵を止めた。

「こいつはまだ、暴走している・・・絶対に俺が止めてやるう!!」

デイケイドの剣はゆっくりと立ち上がると、鋭い目つきで同じように立ち上がったガタツク剣を睨んで、一気に走った!!

ガタツク剣も、それを見ると、人間が上げるとは思えない声をあげてデイケイド剣に突っ込んだ!!

「はだっ!!」

「があっ!!」

二人は途中で足を止めるとそのまま格闘技をするかのごとく、殴り合いを始めた。

「やめてよ・・・。。。」

恵は肩を震わしながら静かに言う。

「やめてよ……。」

恵は泣くのを我慢しながら同じセリフを言う、だが二人の剣は止まることなく、殴り合いを続けており、二人の拳が命中するたびに、二人の拳からは血が流れ、口からは血なのか、それとも唾液なのか何なのか分からない液体が飛び出すが、二人は構わず殴りだした！！

「もう止めてよ……。」

恵は、アゲハゼクターをつかむとライダーブレスにはめ込んだ。

「やめてよ……！」

H E N S H I N

恵は、涙を流しながら二人に向かって走る、恵の体が光に包まれると、漆黒のアゲハに変わる、だがそのアゲハの体に変化していき、黒いボディは白く美しくなり、赤く鋭かった瞳は柔らかい桃色になった。

「やめて……！！二人とも……！！」

アゲハが叫ぶと背中に桃色と黄色のような色が輝く羽が生え、その羽から優しい色の光が飛び出し、二人の剣を包んだ。

「「恵……。」」

二人の剣は同時に言うと、アゲハのほうを見た。

「二人が戦わないで、争わないで……。」

アゲハが優しく言うと、背中が二人の剣を包んだ。

「ごめん……。」

「めぐみ……。」

二人の剣は静かに言うと、ガタツクの剣が意識を失い倒れた。

「眠っただけか……。」

剣は静かに呟くと変身を解き近づいてくる恵の方にガタツク剣をよせ、自分は少し離れた。

「……何だ今は……。」

「わからないけど……あれが本来のアゲハの力だね……。」

隼人と翔はそう言って恵に駆け寄った、その時！！

「くっ！！！」

「なっ！！！」

「きゃあっ！！！」

「うおっ！！！」

隼人、翔、恵、剣の間に突然、突風が吹き荒れた！！そしてその

突風は少し進んだところで止まった。

「!!! 剣君!!!」

恵は、そばにいるガタツク剣がないことに気がつくのと突風を巻き起こした、仮面ライダーザビーを睨んだ。

「おい、剣をどうする気だ!!!」

隼人はザビーに向かって尋ねた。

「こいつの力がいるんだよ、俺が最強のワームになるには……
……。俺が最強のワームになったあかつきには、お前も俺のえさにしてやる……。ありがたく思うんだな!!!」

ザビーは左肩にガタツク剣を乗せていた、そして隼人の言葉に大声で答えると、クロックアップを発動、どこかに走り去った。

第十三話 『ラスト・バトル』（前書き）

カプト編終了までかけたので、一日2話更新します。

第十三話 『ラスト・バトル』

「くそ……逃がさん……。」

剣は、ザビーが走り去った方を睨むと立ち上がって走り出そうとした、だが

「剣！今のお前の体力で何ができる！！」

隼人が肩をつかんで止めた。

「アゲハの力で、傷は治せたけど、体力は治ってないはず……。」

恵は泣きそうな瞳で剣に近寄りながら言った、そして

「お願い！無茶しないで……どっちの剣君も消えるのはいや……。」

恵は剣に抱きつきながら言った。

「……わかった……隼人、翔、いったん帰ろう、作戦会議だ……。」

冷静さを取り戻した剣は、隼人と翔に向かって言った。それを見た恵はゆっくりと剣から離れ、4人はバイクがあるところまで走るとバイクに跨った、恵はオーロラの移動でここに来たためバイクはなく、剣の後ろに乗ることとなり、隼人と翔はバイクシヨップへ、剣と恵は、昨日戦闘していた公園まで恵のバイクを取りに行った。

先ほど、ザビーこと、影島ソウがいた、ビルの別の階では、変身を解いた影島が鉄板でできたベットのような物の上に、剣を寝かせていた。

「お前の体からワームの力を抜いてやる……………」

「そんなことができるわけがない……………できるならやってみる……………」

意識を戻した剣は影島に向かって言った。

「確かに、普通のやり方ではできない、だが、お前の体内にあるネイティブになるための石を取り除けばどうだ？」

「そんなことをしても無駄だ、俺の石は取れない。」

「どうかな？俺の力はワームの力を吸い取り奪う能力、そういう風に改造された、お前の体から石を含めてネイティブの力のみ、綺麗に抜き取ってやる！！！」

影島はそう言って、ワームに変身、剣の着ている服を破くと、剣の胸の中央にある傷口に向かって右腕を突き出した！！

「があっ！！」

「これで、貴様は人間に戻れるぞ！！良かったなっ！！」

ワस्पワームはそう言って、剣の胸から右腕を引き抜いた！！

「がっ！！」

「これが貴様をワームに変えていた、石だ。まあ、これで命をつないでいたわけだから、あと数時間だろうなお前の命は……………」

「

ワस्पワームは影島の姿に戻ると、剣の体から引き抜いた緑色に輝く石を自分の体内に埋め込んだ。

「これで、最強のワームに俺はなった……………」

影島は剣の首をつかむと、ベットから引きずり下ろした。

「くそっ、ふざけやがって……………」

剣は、そばに飛んできたガタックゼクターをつかむと、腰のベルトにガタックゼクターを嵌めガタックに変身した。

「お前を……………倒す。」

「やってみる、お前の力じゃ俺には勝てないけどな。」

影島はそう言うと、ザビーに変身した。

「でやっ!!」

ガタツクはザビーに向かって走ると右腕を突き出した!ザビーはそれを右腕で受け止めると、左腕を勢いよくガタツクの腹に突き出した!!

「ライダーステイング!!」

R I D E R S T I N G

さらにザビーは、ガタツクの腹に突き刺したままの左腕についているザビーゼクターのスイッチを押しエネルギーを集め、ライダーステイングを放った!!

「があっ!!」

ガタツクはそのまま後方に大きく吹き飛ばされ、壁に激突、壁を突き破って外に飛び出した!!ガタツク達のところは、ビルの7階、ガタツクは空に放りだされたのだ。

「そのまま地面に激突して、死ぬのも面白いが………これも面白いな。」

ザビーは静かに言って、そばにある机の上からドレイクゼクターとグリップが一体化したままになっているドレイクゼクターを握ると、銃口をガタツクに向けた、そして

「ライダーシューティング!!」

RIDER SHOOTING

ザビーはそう言って、ドレイクゼクターの引き金を引いた!!ドレイクゼクターからは青い球体が飛び出し、ガタツクに向かって飛び出した!!

そして、その弾はガタツクに命中するかに思った、だが

「なっ!!」

突然ライダーシューティングの弾が爆発、それと同時にガタツクもその場から消えた。

「ふう〜、ギリギリセーフ。」

どこからか声が聞こえ、ザビーは声のしたほうを睨んだ、するとそこにはガタツクの肩を抱えるようにして、体が銀と金のアーマーをつけたヘラクレスオオカブトに似ており、背中には赤い6枚の羽をつけた、仮面ライダーブレイドがいた、ブレイドのベルトはディケイドライバーであるため、これはディケイドが変身した、ブレイドジャックフォームである。

「まさかこのビルがこいつらのアジトだったなんて、誤算だったね。」

ディケイドブレイドジャックフォームの背後から、羽を生やした、アゲハが飛んできた。

「貴様ら二人とも倒してやる。そしてこの世界をいただく!!」

ザビーが叫ぶとワस्पワームに変身、背中の羽を羽ばたかせると外に飛び出した。

「恵、あの虫は俺が相手する、剣は頼んだ!」

ディケイド
DブレイドJFはジャックフォームガタツクをアゲハに渡し、自分に向かって飛んでくる、ワस्पワームめがけて飛んで行った!!

「はあっ!!」

「だあっ!!」

DブレイドJFはライドブッカーを縦に振りおろし、ワस्पワームは右腕を突き出した!!

「くっ!!」

「ぬっ!!」

DブレイドJFの握るライドブッカーとワस्पワームの右腕にあるザビーゼクターを思わせる蜂の針のような棘がぶつかり合い火花を散らし、二人は距離を置いた。

「はだっ!!」

「うりゃっ!!」

そして二人は再び突っ込んで、お互いの武器を振るった!!

「がつ！」

「くっ！」

二人の体はすれ違いざまに切れ、DブレイドJFの肩とワスプワームの胸からは血が流れた。

「まだまだ！！」

「ぐおおおおっ！！」

そして二人は再び突撃、それから二人は空中で幾度もお互いの武器を振るって行き、空中戦を始めた。

「剣くん大丈夫？」

そのころ恵は、近くの公園に着地して、変身を解くと、変身が解除されているガタツク剣の肩を抱いて、ゆっくりとベンチに座らせた。

「ああ、それにしてもなんで、あそこの位置が？」

「実はこの公園に私バイク止めてて、それを取りにきたときに、あそこのビル見たら、剣君が吹き飛ばされたように出てきたから……。」

「そうか……。」

ガタツク剣はゆっくりと立ち上がるとガタツクゼクターを握りしめた。

「あいつを倒す、俺の命はあと数時間しかないからな。」

「えっ！どういふことなの！！」

「俺の中にある、ネイティブになるための石を影島あいつに抜き取られた。」

ガタツク剣は、自分の胸の中央に空いている傷を見せて言った。

「じゃあ、剣君は人間に？」

「ああ。だが俺の命は、あの石でつないでいた、あの石が俺の体内から消えたことで俺の命は、残り僅かになちまったんだ、だから恵、俺のこと忘れてディケイドの俺と仲良くやりな。」

「また、そんなこと言って……私には無理だよ！！」

「だったら、この世界の剣のことを思い出したまま、ディケイドの剣と付き合ったらいいじゃん。」

どこからか声が聞こえ、二人が振り返ると、そこには隼人と翔が

いた。

「まったく、帰るのが遅いと思ったら……こんな事態になっ
てるなんて。」

翔は呟くと、上空を見た、するとそこでは激しく火花を散らしな
がらぶつかり合っている、DブレイドJFと、ワस्पワームがいた。

「たあっ!!」

ワस्पワームはDブレイドJFに向かって右腕を突き出した!!

「今だ!!」

ATTACK RIDE METAL!!

DブレイドJFはデイケイドライバーにカードを装填、Dブレイ
ドJFの体を銀色の光が包むと同時に、ワस्पワームの右腕の針が
突き刺さった!!

だが、ゴツツと言う鈍い音がただけでDブレイドJFにはダメ
ージを与えられなかった。

「だあっ!!」

DブレイドJFは、ライドブツカーを強く握ると、そのままワスパームの腹に向かって振り下ろし、彼の体を切りつけると後ろに下がらせた!!

「もらった!!」

ATTACK RIDE MACH!!

FINAL ATTACK RIDE B B B BLAD

E

デイケイドは二枚のカードをデイケイドライバーに装填させると、マツハと呼ばれるカードの効果で一気に加速、ワスパームは羽をはばたかせ逃げようとするが、それに追いついた、そして雷の迸るライドブツカーソードモードをワスパームの背中に向かって、

「ほおおおおおあつたあああああつ!!」

一気に振り下ろした!!

「があつ!!」

ワスパームの背中から火花が散り、ワスパームは地面に向かってまっすぐ落ちて行った。

その頃、隼人たちは

「忘れられないのなら、そのことを思い出して生きて行けばいい、悲しいことも楽しいこともすべて、人のかかわりの中で無駄なことなんか何一つないのだから。」

隼人は、恵とガタツク剣に向かって言った。

「無駄なことなんて。」

「ない……。」

恵とガタツク剣が静かに呟くと、ワस्पワームが地面に激突してきた!!!

「っ!」

隼人は自分の後ろに落ちてきた、ワस्पワームの方を睨むとカプトゼクターを掴んだ、それと同時に、DブレイドJFも地面に着地、変身が解除されると、ブレイドのカードがデイケイドライバーから飛び出した。

「……………やっぱり。」

剣は飛び出したブレイドのカードを手に取ると悔しそうに見つめながらつぶやいた、ブレイドのカードが灰色に染まったからである。

「ぐう……………ふざけやがって……………」

ワस्पワームはゆっくりと手地拳がると、影島の姿に戻り、剣たちを睨んだ。

「…………お前ら全員吸収してやる……………。覚悟しろおっ
！」

「できるものなら」

「やってみる。」

K A M E N R I D E

「」
「」
「変身っ！！」
「」

D E C A D E

D I E N D

剣と翔は、前に出ると、ディケイドとディエンドに変身した。

「さて、俺も行くか、変身！！」

C H A N G E B E E T L E

隼人もカブトゼクターをベルトに入れて一気にカブトライダーフ
ォームに変身した。

「恵、俺も行く…………俺もこの世界を救ってから死んでいく…………
変身！！」

C H A N G E S T A G B E E T L E

ガタツク剣は恵に向かって笑顔で言うのと立ち上がって、ガタツクゼクターをベルトに入れ、マスクドフォームにならず、一気にライダーフォームになるとゆっくりと構えた。

「私だつて戦う、この世界を守る！！変身っ！！」

CHANGE BUTTERFLY

恵は、アゲハゼクターを呼ぶと右腕のライダーブレスに嵌めて、仮面ライダーアゲハに変身した。

「貴様らが強くとも、俺には勝てん！！」

影島は叫ぶとワスパフォームに変身、それと同時にワスパフォームの体から黒い体液のようなものが飛び出し、その体液は地面に落ちると、その三つの体液は、体が銀色でサソリを模した『スコルピオフォーム』体が青くバッタのような体に瞳をもった、『ドラゴンフライフォーム』そして最後に体がダークブルーに輝く『スタツグビートルフォーム』に変わった。

「なるほど、吸収した奴の中で一番使える奴……いや。」

「変身できるやつにしたか……。」

カブトとガタツクは静かに言った、するとワスパフォームの左腕にザビーゼクター、スコルピオフォームの右手に、サソリドヤイバーとサソリドゼクター、ドラゴンフライフォームの右手にドラ行くゼクターが現れ、3人は体がそれぞれに変身するライダーに似ているが、フォームをあわせたものに近いフォーム態に変身した。

「行くぞみんな!!」

ディケイドの声に全員うなずくとそれぞれの武器を構えて、同時に走り出した!!

「ほざくな! 貴様らすべて、吸収してくれるわあっ!!」

ザビーワーム態の声に全員うなずくと、ライダーたちのように同時に走り出し、戦闘が始まった!!

第十四話 『ディエンドの力』

町の中にある公園、その公園の中で戦闘している9つの影があった、彼らと彼女はお互いに走ると、顔やしぐさだけで、お互いが狙う相手を決めるとその相手に向かって走って行った！！

「坂本おっ！！」

体が紫色に光が焼き、顔にある6つの目が緑色に怪しく光り輝くサソリを模した仮面ライダーサソリのワーム形態は仮面ライダーカブトに向かって飛びかかった！！

「悪いが貴様の相手をしている暇ではない。」

カブトは静かに呟くと、サソドワーム態の頭にあるサソリの尻尾をつかんで地面に引きずり倒すと、体全身が金色に輝きミツバチのような頭に、模様をした仮面ライダーザビーワーム態に向かって走ると手に握ったカブトクナイガン、クナイモードと呼ばれる、クナイ状の武器を振り下ろした！！

「お前の相手はこの俺だ、影島……。」

「来ると思っていたよ、坂本おっ！！さあ楽しもうじゃないか、この世界をかけた運命のゲームを！！」

二人はそう言って距離を置くと、クロックアップを発動させ、高速の世界に入りその場から消えた！！

「宮本剣！！俺と戦ええっ！！」

「どつちと！そして邪魔だ！！」

起き上がった、サソードワーム態は大声で叫んだ、だが、『宮本 剣』と言う人物は二人いるうえに、サソードワーム態は、ガタツクとデイケイド両方見ていたため、どちらかわからなかったさらに、二人はスタッグビートルワームと交戦していたため、サソードワーム態を鬱陶しく思い二人は蹴り飛ばそうとした、だが

「あなたの相手は私がする！！」

アゲハが二人の前に出て、手に握るアゲハレイピアでサソードワーム態を切り裂いた！！

「剣君たちは、そっちをお願い！特にガタツクの剣君には、自分の醜かった姿とおさらばしてから天に行つて欲しい、だからこいつは私に任せて。」

アゲハはガタツクとデイケイドに向かって言った。

「……恵、俺が手を貸さなくてもやれるか？」

デイケイドは真剣な表情をマスクの中でして恵に尋ねた。

「当然だよ、剣君の仲間になるんだもん、やってやるよ！！」

アゲハはマスクの中で笑うと、デイケイドに向かってサムズアップした。

「そうか、じゃあ、行こうか！！ガタツクの俺！！」

「ああ！！恵、無茶はすんな！！」

「わかってるよ、剣君も頑張ってるね！！」

3人はそう言つとお互いの相手に向かって走って行った！！

「お前の相手は、俺・・・か。」

デイエンドは足を止め、デイエンドライバーを握りしめると、目の前にいる体全身が青で、瞳はトンボの羽のような形をして、藍色の仮面ライダードレイクワーム態を見ながら言った。

「あ那时的屈辱、忘れはしない・・・私が射撃の腕で負けるはずがない！！」

ドレイクワーム態はドレイクゼクターをデイエンドに向けると引き金を引いた！！

「そうですかっ！！」

デイエンドもデイエンドライバーの引き金を引いて、ドレイクワーム態の打った弾をすべて撃ち落とした。

「どうした？これで終わりか？」

「くっ、だったらこれでどうだあっ！！」

ドレイクワーム態の背中から、トンボの羽が生えて、彼は上空に飛び上がった、そして右手に持ったドレイクゼクターを空中でディエンドに向かって乱射した!!

「くっ！ちょこまかと!!」

ディエンドはドレイクワーム態の攻撃をかわしながらディエンドライバーを撃つ、だがドレイクワーム態の撃つ弾の方が威力があり、ディエンドは圧されていた。

「そつちが空から攻撃するならこつちは空のトンボライダーだ!!」

K A M E N R I D E S K Y R I D E R !!

ディエンドは、ディエンドライバーにカードを装填すると、ドレイクワーム態に向かって銃口を向けて引き金を引いた、すると光とともに体全身が黄緑で瞳の赤いトンボとバツタを足したようなライダー、スカイライダーが飛び出した!!

「さらに!!」

A T T A C K R I D E C R O S S A T T A C K

ディエンドはもう一枚カードをディエンドライバーに入れ、引き金を引いた、するとドレイクワーム態に向かって飛んで行くスカイライダーが一気に加速、ドレイクワーム態よりも高く跳ぶと、彼の後ろで一回転した、そして

「大・回・転！スカイキイイイイイイイイイイイイイイイック!!」

スカイライダーは空中で何度も回転しながらドレイクワーム態に向かつて飛んでいき、右足を突き出しドレイクワーム態の腹を殴り地面に向かつて叩き落した！！

「がふっ！！」

ドレイクワーム態は地面に勢いよく落下、ドレイクワーム態が落下した場所はコンクリートがはじけ飛び、砂ぼこりが立った、それと同時にスカイライダーは消えて行った。

「ぐほっ、まさか、昭和ライダーのカードまで持っているとは……」

ドレイクワーム態は口から血を吐きながら言つとゆっくりと立ち上がった。

「どうした？もう終わりか。」

「まだまだ、これからだ！！」

ドレイクワーム態は両腕からトンボの翼に似た、刃物のようなものを伸ばすとディエンドに向かつて突っ込んで行った！！

「くっ！！」

ディエンドは距離を置くと、ディエンドライダーをドレイクワーム態の右腕に銃口を向けると引き金を引いた！ディエンドライダーから放たれた銃弾は、ドレイクワーム態の右手とドレイクゼクターに命中、ドレイクゼクターをはじいて地面に落した。

「武器を弾こうが関係ない、お前は接近戦が苦手のはずだあっ！」

ドレイクワーム態は一瞬動きを止めるが再びディエンドに突撃した！！

「誰が、接近戦が苦手と言った？」

ATTACK RIDE SLASH!!

ディエンドは静かに呟いてディエンドライバーを左手に持ち替えると、カードを一枚装填してディエンドライバーの引き金を引いた！！するとディエンドの右腕がシアン色に光り輝き、一本の剣の柄のようなものが現れる、そしてその柄から光のようなものが伸び、シアン色の刃が現れた。

「はあっ！！」

ディエンドはドレイクワーム態に向かって現れた剣を振り下ろし体を切り裂いた！！

「くっ、なんだその武器は！！」

「これは俺の世界で、俺が変身していたライダーの武器さ、シアンエッジとも言おうかな？」

ディエンドは自分専用の武器、シアンエッジを見ながら言った。

「それがどうした、貴様が接近戦を得意としないライダーになっ

ているというのは知っている、俺はワームになり、多少なりの接近戦は使えるようになったあっ!!」

「だ〜から〜、だ・れ・が接近戦が苦手だって?」

ディエンドは一気に距離を詰めると、シアンエッジを縦に振って、ドレイクワーム態を切り裂いた!!

「くっ、早い!!」

「まだまだ!!」

さらにディエンドは、ディエンドライバーの銃口をドレイクワーム態の腹に押し付け、引き金を引いた!!

「がふっ!!」

ドレイクワーム態の体から火花が散り、後ろに吹っ飛んだ。

「くそっ、やりやがったな!!ライダーシューティング!!」

ドレイクワーム態の飛ばされた先には、先ほど落とされたドレイクゼクターがあった、ドレイクワーム態はドレイクゼクターを拾うと、ディエンドに銃口を向けてライダーシューティングを放った!!

RIDER SHOOTING

「甘い!!」

ディエンドは、シアンエッジを縦に振り下ろす、するとシアンエ

ツジからは三日月状の光が飛び出して、ライダーシユールディングを切り裂くと、ディエンドは一気にドレイクワーム態に向かって走り距離を詰め、シアンエッジを振り、ドレイクワーム態の体を切り裂いた!!

「があっ!」

「はあっ!!」

さらにディエンドは、シアンエッジを両手でつかむと、ドレイクワームの体をS時に切り裂き、腹にディエンドライバーの銃口を押しつけた!!

A T T A C K R I D E B L A S T

ディエンドはディエンドライバーにカードを装填するとの引き金を引き、銃口からシアン色に光り輝く銃弾をいくつも放ち、ドレイクワーム態を撃ち、彼を後方に勢いよく吹っ飛ばした!!

「がはっ!!」

ドレイクワーム態は腹から火花を散らしながら後方に向かって飛んでいき、そばにあった木々に背中を殴打!!地面に倒れた!!

「ぐう……ここまでやられて引き下がる俺じゃない……
・負けてたまるかあっ!!」

ドレイクワーム態は声を上げながら立ち上がると、クロックアップを発動させ、その場から姿を消した!!

「（見えないだろ・・・こいつで止めだ!!）」

RIDER SHOOTING

ドレイクワーム態はクロックアップの世界で移動しながらディエンドにドレイクゼクターの銃口を向けると、じゼクターの引き金を引き、ライダーシューティングを放った!!

ドレイクゼクターからは青色の球体状の銃弾が撃ちだされ、ディエンドに向かって向かって突き進む、そしてその球はどんどん速度を上げていき、周囲を見渡しているディエンドの背中に激突した!!

「（とつた!!）」

ドレイクワーム態はガッツポーズをとるとクロックアップを解除し、元の状態に戻り、ディエンドを見た、するとディエンドはもろにライダーシューティングを喰らって爆発していた、だが

「それはおとりだ!!」

なんと爆発したディエンドが粒子のようになって消え、どこからか声が響いた!ドレイクワーム態は声のしたほうを睨んだ、するとそこには飛び上がり、ディエンドライバーにカードを装填したディエンドがいた。

「これで止めだ!!ディメンションキック!!」

FINAL ATTACK RIDE D I D I D I D
I E N D

デイエンドライダーから、デイエンドの顔を模したシアン色の光が撃ちだされ、デイエンドは両足を突き出して、その光に飛び込んだ！！

「なめるな！！これが俺の全力全開のライダーシューティングだ！！！」

ドレイクワーム態は声を上げるとドレイクゼクターを自分に向かってきているデイエンドに銃口を向けると引き金を引き、青い光の球を、ライダーシューティングを放った！！

「うおおおおおおお！きりもみバージョンだ！！！」

デイエンドの放った蹴りと、ライダーシューティングが激突！！デイエンドは声を上げると自分の体をドリルのように回し、回転すると、ライダーシューティングの青い球をドレイクワーム態の胸に向かって弾き返した！！

「がはっ！！！」

ドレイクワーム態の体から火花が散り、緑色の炎が上がり始めた、その時！！

「ヒヨオオウツシヨオアッ！！！」

「ぐはああああああああつ！！！」

デイエンドのシアン色に輝く両足がドレイクワーム態に突き刺さり、ドレイクワーム態は体を回転させながら後方に飛ぶと、宙に浮いた状態で爆発！緑色の炎をあげて四散した。

「ふう、目が回った。」

デイエンドはそう言って地面に着地すると、体についたほこりを払った。

第十五話 『アゲハ対サソード』

「たあっ!」

「ぬっ!」

ディエンドとドレイクワーム態が戦いを始めたころ、仮面ライダーアゲハと、体が紫で目が緑色に輝いている、サソリを模した仮面ライダーとワームと呼ばれる怪人が合わさった、仮面ライダーサソードワーム態が己の武器を振るいながら戦っていた!!

「さすがは、坂本の妹だな!そこそこやれる!!」

サソードワーム態は笑いながら、アゲハの振るう、アゲハレイピアの刃をサソードヤイバーで受け止めていた。

「褒めてくれてどうも!!」

アゲハは体を勢いよく振って、サソードワーム態の握るサソードヤイバーの刃にアゲハレイピアの刃をぶつけ、弾いた!!

「くっ!」

「今だ!ライダースピア!!」

RIDER SPEAR!!

アゲハはアゲハレイピアの鍔にあるアゲハ蝶のような物の羽を展開させるとアゲハレイピアを一気に、サソードワーム態の左胸に向

かって突き出した！！だが……

「甘いな、ぜえいつ！！」

サソードワーム態は、右腕の小手のようなところから小刀を抜くと、アゲハレイピアの刃を小刀の刃の腹で受け止め、衝撃を殺した！！

「だらしゃっ！！」

さらにサソードワーム態は驚いているアゲハに向かってタツクルをくらわし、後方に吹っ飛ばした！！

「きやつ、くうつ！！」

アゲハは後ろに吹っ飛ぶが空中で回転、体制を整えると地面に着地、剣がくれた銃を取り出すとカードを二枚、銃のマガジンの底にある、窪みにカードを二枚装填した！！

K A M E N R I D E F E M M E !!

R E D !!

アゲハは、銃をサソードワーム態に向けると引き金を引いた！！すると銃口から仮面ライダーファムと、赤い銃弾が何発も放たれた！！

「ふんっ、なめるな！！」

サソードワーム態はサソードヤイバーを拾うと強く握ってファム

に向かって突っ込んだ!!

「今だ! たあっ!!」

それを見たアゲハは羽を展開し空に飛び上がる、そして空中で一回転して、サソードに向かって勢いよくアゲハレイピアを振り下ろした!!

「なっ!」

サソードワーム態は足を止めるとアゲハの振り下ろすアゲハレイピアを払った! だがそれと同じタイミングでファムがブランバイザーを振り、さらにファムの後ろを飛んでいた銃弾がサソードワーム態に命中し、サソードはファムの斬撃と赤い銃弾を喰らって地面に倒れた。

「ぐう……まさか自分の攻撃をおとりにするとは……なかなかやるな……」

サソードワーム態は切られた箇所を押さえながらゆっくりと立ち上がった。

「わたしは、変身して日も浅いし、強くないから、これくらいしないと怪人一人すら倒せないもの。」

アゲハは地面に着地すると、アゲハレイピアの先端を向けて言った。

「謙虚になる奴ほど厄介なんだが……まあい、これで終わりにしてやる。」

サソードワーム態はサソードヤイバーを左腰に収めると、柄を右手で握りしめ、腰を深く落とす構えを、居合いの構えをとった。

「何をするかはわからないけど……負けない!!」

アゲハはアゲハレイピアを両手で握ると、腰を深く落として、サソードワーム態に向かって一気に接近した!!

「かあっ!!」

アゲハがサソードワーム態に接近した瞬間、サソードワーム態はサソードヤイバーを勢いよく引き抜き、左から右に向かって薙ぎ払うようにして振った!!

サソードワーム態の振ったサソードヤイバーはアゲハに命中、アゲハの体を切り裂いた!!だが……

「なに!!」

切り裂かれたはずのアゲハの体が突然消えた、そして

「たあっ!!」

RIDERS LAS

上空から羽を展開させたアゲハが桃色と白に光り輝くアゲハレイピアを構えて迫ってきていて、アゲハは声を上げると、縦にまっすぐアゲハレイピアを振り下ろした!!

「ぐうっ!!」

サソードフォーム態はサソードヤイバーの腹で、アゲハレイピアの刃を受け止めた！！だが威力が高く、完全に防ぐことができずに後ろに吹っ飛び、尻餅をついてしまった。

「くっ、思った通りの厄介さだ。この技を使うしかないな。」

アゲハが地面に着地すると、サソードフォーム態は静かに言いながらゆっくりと立ち上がると、サソードヤイバーの鍔についているサソードゼクターの尻尾を上部にあげて、ライダースラッシュの発動準備すると、再び左腰に収め、居合いの構えをとった。

アゲハは無言で、アゲハレイピアの鍔についている蝶の羽を展開させ、再び元の状態に戻して、また羽を広げた。

「来い！！」

「言われなくても行ってやるわよっ！！」

MAXIMUM RIDER POWER

RIDERSPEAR

RIDERSLASH

アゲハは一気に前に走り、サソードフォーム態はそれを見ると、かなり深く腰を下げた、そして二人は同時に必殺技を発動させると、アゲハはアゲハレイピアをサソードフォーム態に向かって一気に突き出し、サソードフォーム態はサソードヤイバーを一気に引き抜き、アゲハの体めがけて横に薙ぎ払うようにして振った！！

「はあああああああああつ！！」

「やあああああああつ！！」

アゲハレイピアの先端とソードマイバーの刃がぶつかり合い火花を散らした！！それと同時に二人の体の周りを強烈な光が包んだ！！

二人の刃がぶつかった一瞬は、突進力で上回っていたアゲハの方が優勢であったが、徐々に力で押されていき、今ではソードワーム態が優勢であった。

「どうした！パワーが弱まったぞ！！やはりこの程度なのか女ライダーは！！」

「くっ……私は負けない！！」

C L O C K U P

アゲハは左手をアゲハレイピアの柄から離すと、ベルトの右側をたたき、クロックアップを発動させ、羽を展開、上空に飛び上がった！！

「うおっ！！」

アゲハがクロックアップを発動させて突然消えたため、前方に体重をかけていたソードワーム態はバランスを崩し、前に倒れそうになった。

「これで最後……。」

アゲハはクロックアップを解除すると、上空でサソードワーム態に向かつて言い、右腕のアゲハゼクターを右腰に取りつけた。

「いいだろう、これが俺の全身全霊を込めた、最後のライダーズラッシュだ!!」

サソードワーム態はアゲハの言葉にうなずくと、ライダーズラッシュの発動の準備をし、居合いの構えをとった。

「ライダーキック!!」

R I D E R K I C K

「ライダーズラッシュ!!」

R I D E R S L A S H !!

アゲハは、右足を突き出しサソードワーム態目掛けて一気に突撃し、サソードワーム態はサソードヤイバーを引き抜き、ライダーズラッシュを放った!!

「うっ!!」

「ぬっ!!」

アゲハの右足から放たれるライダーキックと、サソードワーム態の握るサソードヤイバーから放たれるライダーズラッシュはぶつかり合い、光を放った!

「負けない……私は自分の世界を……剣君を助けるんだ」

・・・負けられない・・・うおおおおおおおつ！！」

アゲハは声を上げると左足を伸ばし、両足を突き出す形にすると体を回転させた！！

「ぐっ！急に力が！！」

サソードワーム態はサソードヤイバーを両手で握ると、下半身に全体重を乗せ、踏ん張った。

「負けない・・・私は・・・負けない！！負けられないんだあああああああつ！！」

アゲハが声を上げた、するとアゲハの背中中の蝶の羽から金色の粒子のようなものがあふれ出て、体を回転させているアゲハの体を包み、アゲハの回転力が増し、サソードヤイバーの刃に亀裂を走らせた！！

「なっ！！」

そしてついに、サソードワーム態の握るサソードヤイバーの刃が粉々に砕け散り、サソードワーム態は後ろにのけぞった！！

「たあっ！！」

さらにアゲハの両足がサソードワーム態の腹に激突！！サソードワーム態を後方に吹っ飛ばした！！

「があっ！！」

サソードフォーム態は火花を上げながら後方に吹っ飛んでいき、背中をコンクリートの地面に殴打、ゆっくりと立ち上がるが、体全身から火花が噴き出した！！

「ぐがあああああああつ！！」

そして、サソードフォーム態は断末魔を上げ、緑色の炎と共に爆発、四散した。

「勝った。」

アゲハは静かに呟くと、左手を握りしめた。

第十六話 『剣』（前書き）

今回は剣達の対決です。ガタツクにオリジナルFFRをつけました。

第十六話 『剣』

「はあっ!!」

「やあっ!!」

ドラゴンナイトに変身したディケイドとガタツクは施設内に入り、施設内の地下で交戦していた。

「ライダーカッティング!!」

RIDER CUTTING

ガタツクはガタツクダブルカリバーを合わせてはさみ状にすると、目の前にいる体がダークブルーで間がダークレッドの、クワガタムシを模しこの世界の剣が変身していたワーム、スタッグビートルワームの右腕を挟み込んだ!!

「今だ!!ディケイド!!」

「おっしやあっ!!」

ATTACK RIDE STRIKE VENT

ディケイドドラゴンナイトはカードを装填し、近くにあったガラスから飛び出してきたドラグクローを右腕に嵌めると、右腕をゆっくりと引き、一気に前方に突き出しスタッグビートルワームめがけて火炎弾を放つ、ドラグクローファイヤーを放った!!

「がはっ!!」

スタッグビートルワームの体からに巨大な炎の塊が命中、スタッグビートルワームの体からは火花や煙が飛び散り、後ろに吹っ飛んだ!!

「ぐおおっ!!」

後ろに吹っ飛び地面に倒れた、スタッグビートルワームは唸り声を出しながら、ゆっくりと立ち上がり、一気にディケイドドラゴンナイトと、ガタツクに向かって突っ込んだ!!

「くっ、もう一発!!」

「だったら俺はこれだ!!」

Dドラゴンナイトは、もう一度ドラグクローを突き出しドラグクローファイヤーを放ち、ガタツクはガタツクダブルカリバーを自分たちに向かって走ってくるスタッグビートルワームに向かって放り投げた!!

「ぐがああああああっ!!」

スタッグビートルワームの体に炎の塊と、ガタツクカリバーが命中した、だがスタッグビートルワームは声を上げると、二人の攻撃を弾き、二人の体に向かって自分の両腕を突き出し、二人の体を勢いよく切り裂いた!!

「がはっ!!」

「うがあっ！」

切り裂かれた衝撃で、ガタツクは吹っ飛び床に背中を殴打、Dドラゴンナイトは地面に膝をついた、それを見たスタツグビートルワームはDドラゴンナイトを持ち上げると、ガタツクの後ろにある鉄パイプを並べている場所に向かって勢いよく放り投げた！

「うわあっ！！！」

「ガアッ！！！」

さらにスタツグビートルワームは吹っ飛んで行くDドラゴンナイトめがけて、頭の鋭い顎から光線のような緑色に輝く光を放ってDドラゴンナイトに攻撃した！！

「ぐわあああああああっ！！！」

スタツグビートルワームの放った緑色の光線はDドラゴンナイトの体にもろに命中し、Dドラゴンナイトの体から火花が散り、Dドラゴンナイトは叫び声を上げながら壁に激突、デイケイドに戻った！！

「デイケイド！しっかりしろ！大丈夫か！！！」

ガタツクはデイケイドに駆け寄るとデイケイドの状態を起こし、体を何度もゆすった。

「ああ、大丈夫だ……。それにしてもあいつ相当固いな……。」「

デイクイドは立ち上がりながら言った。

「ああ、生半可な攻撃じゃびくともしない。」

ガタツクはスタッグビートルワームを睨んで言った。するとスタッグビートルワームが、自分の両肩に突き刺さっているガタツクダブルカリバーを二本ともガタツクに向かって放り投げた！！

「さすがは俺に埋め込まれていた石が変化したワームだ、厄介だ。」

「

ガタツクはそう言うと、ガタツクダブルカリバーを両手で握った。

「あの固さだと、力押しで行った方がいいな。」

デイクイドは静かに言うとデイクイドライバーにカードを一枚装填した。

K A M E N R I D E K U U G A

デイクイドはクウガに変身した。

「さあて、一気に押し切るぜ、ダブルクワガタライダーの力を見せてやる。」

「おう！行くぜ！！」

デイクイドクウガとガタツクは同時にうなずくと一気にスタッグビートルワームめがけて走った。

「行くぜ、たあっ!!」

ディケイト
Dクウガは飛び上がると空中で一回転して、スタッグビートルワームの背後に着地した、そして

「あつたっ！」

「はだっ!!」

Dクウガはスタッグビートルワームの背中に向かって左腕を、ガタックは腹に向かって右腕を突き出した!!

「ぐっ!!」

腹と背中と同じ位置を殴られ、スタッグビートルワームは口籠るがガタックの頭をつかむと、後ろにいるDクウガに向かって放り投げた!!

「うおあっ！」

「ガタック!!」

Dクウガは飛び上がると、ガタックを受け止め地面に着地した。

「固いな……こうなったら、ほんとに力押ししかないな……」

Dクウガは静かに呟くとライドブッカーカードを引き抜き、ディケイドライバーに装填した!!

FORM RIDE KUUGA TITAN!!

Dクウガはタイタンフォームに変身し、そばにあった鉄パイプを拾って、タイタンソードに変化させると、ライドブッカーもソードモードにし、タイタンソードに変化させ、二刀流にした。

「行くぞーガタツク!!」

「ああ!! やってやるぜ!!」

ガタツクはガタツクダブルカリバーを構えると足が遅いディケイドクウガタイタンフォームより先に前に走り、スタッグビートルフォームに接近した!そして

「クロックアップ!!」

CLOCK UP!!

クロックアップを発動させ、駆け抜けながらガタツクダブルカリバーを振って、スタッグビートルフォームの体を切りつけた!!

「ぐおっ!!」

ガタツクに切りつけられたか所から火花と同時に血も飛び出し、スタッグビートルフォームは腹を押さえてうずくまる、その瞬間DクウガTは一気に接近し、左右に握るタイタンソードを一気に振り下ろし、スタッグビートルフォームの体を?字に切り裂くと、右手に握るタイタンソードを左から右に向かって一文字に切り裂き、左手に握るタイタンソードを、縦にまっすぐ上から下に向かって振り下ろし、十字に切り裂いた!!

「があっ!!」

スタッグビートルワームの体から一気に血が吹き出し、地面に膝をついた。

「オレハ・・・マケナイ・・・ライダーヲ・・・タオス!!」

スタッグビートルワームは立ち上がると大声で叫び、クロツクアップを発動、目の前にいるDクウガTに接近すると、右腕の鉄で、DクウガTの胸を切り裂くと、顔面を殴って吹っ飛ばした!!

「があっ!!」

クロツクアップを発動されていたためDクウガTは反応することができず、そのまま諸に攻撃を受け、体中から火花を散らして後方に吹っ飛ばされた!!

「デイケイド!!」

ガタツクは高速の世界の中でゆっくりと吹っ飛んで行くデイケイドを見ると叫んで、一気に走った!!だが

「ゲルアッ!!」

それを見た、スタッグビートルワームが、ガタツクに急接近して、ガタツクの腹に向かって右腕を勢いよく突き出し殴りつけた!!

「があっ!! (なんてパワーだ・・・だが)」

ガタツクは腹を殴られ、吹き飛ばされそうになっていたが、耐えるとガタツクダブルカリバーを銃状に合わせ、スタッグビートルワームの右肩を挟み込んだ、そして

「ライダーカッティング！」

RIDER CUTTING!!

ライダーカッティングを発動させ右肩を切断した！！

「ぐおおおおおつ！！！」

右腕を切断された、スタッグビートルワームは切り落とされた右肩に触れながら前のめりに倒れた。

「デイケイド！！！」

ガタツクはライダーカッティングを発動後、まだクロックアップが切れていないため上空に浮いていてゆっくりと落ちているDクウガTに接近すると、DクウガTをキャッチし、地面に着地、その瞬間、クロックアップが解除された。

「すまん、手間を取らせた。」

「気にするな……。」

DクウガTはタイタンフォームからマイティフォームにもどるとガタツクに向かって軽く頭を下げた。

「それよりやつは。」

DクウガMは、周囲を見渡しながらい、ガタツクが静かに指をさした、するとそこには痛みにもだえ苦しんでいるスタッグビートルワームがいて、唸り声のようなものを静かに上げていた。

「グヌオオオツ・・・マケナイ!!」

そしてスタッグビートルワームは大声を上げると一気に立ち上がった!!そしてそばに落ちている自分の右腕を切られて血が流れている右肩の切り口に合わせた、すると緑色の体系が傷口からあふれ出て、切られた右腕を右肩にひっ付け、再生したのだ!!

「化けものか・・・あいつは。」

ガタツクは静かに呟くと、ガタツクダブルカリバーを構えた。

「ウゴガアアアアアアアアッ!!」

スタッグビートルワームは声を上げながら、DクウガMとガタツクめがけて突っ込んできた!!

「なっ!!」

「速いつ!!」

スタッグビートルワームの動きが予想していたものよりも素早く、二人は反応することができなかった、そしてスタッグビートルワームはDクウガMとガタツクに向かってタツクルをくらわした!!

「ごふあっ！」

「がはあっ！」

DクウガMとガタツクは腹に衝撃を受け口から血を吐く、さらにスタッグビートルワームは二人の首をつかむと、勢いよく体を振って、二人の体を上の階に向かって投げ飛ばした！！

「うわああああっ！」

「うつくわあああっ！！！」

二人の体は地下の屋根を突き破って上の階に飛び出した！上にあつたのは部屋ではなく外で、現在戦っているビルの中庭であつた。

「くっ！」

「うおっ！」

二人は空中で一回転して体制を整えると中庭の芝生に着地、それと同時に、スタッグビートルワームも飛び上がった。

「ダブルライダーキックだ！いけるな！？」

「当たり前だ！！！」

DクウガMはガタツクに向かって言い、ガタツクは頷いた、そして二人は目の前にいるスタッグビートルワームに向かって走り出した！！

ONE・TWO・THREE

「ライダーキック!!!」

ガタツクは走りながらガタツクゼクターのスイッチを三回押し、技の名前を叫ぶと、頭の顎を前方に倒しライダーフォーム時のものから、マスクドフォーム時のものに戻すと飛び上がった!!!

DクウガMは走りながら腰にあるライドブッカーブツカ モードからカードを引き抜くと、デイクイドライダーに装填して飛び上がった!!!

RIDER KICK!!!

FINAL ATTACK RIDE KU KU KU
UGA

そして、ガタツクはガタツクゼクターの顎をライダーフォームの状態に倒し、赤い光に包まれた右足を突き出し、DクウガMは燃え盛る左足を突き出した!!!

「ダブル・スタッグビートルライダーアアアアアアキイイイイ
イイイイック!!!!!!」

二人の放った蹴りは、スタッグビートルフォームに向かって突き進み、スタッグビートルフォームの体に命中した!!!だが

「ぐがああああああつ!!」

スタッグビートルフォームは声をあげて、DクウガMとガタツクのライダーキックに耐えた、さらにスタッグビートルフォームは崩れか

かっていた上半身の態勢を整えると、DクウガMとガタツクの首をつかみ、頭に生えている鋭い顎から、緑色に輝く閃光を放った！！

「ぐわあああああああつ！！」「」

スタッグビートルワームの放った閃光はDクウガMとガタツクに命中、二人の体は電流が流れているかのように体が光りだし、声を上げた！！

「いい加減に……」

「くたばれえええつ！！」

DクウガMとガタツクは激痛に耐えながら、静かに言つと体をドリルのように回転させた！！

「うごがあああああああつ！！」

「うらあああああああつ！！」「」

DクウガMとガタツクの体は勢いよく回転していき、スタッグビートルワームの腹に刺さっている足は彼の体を削るように火花を散らす、スタッグビートルワームはその激痛に耐えながら、体中から緑色の閃光をDクウガMとガタツクの体にぶつけていった。

「負けてたまるかあああつ！！」「」

DクウガMとガタツク、二人の剣は声を上げるとDクウガMは右足を、ガタツクは左足を芝生の上につけて芝生を勢いよく蹴り、勢いをつけた！！すると、スタッグビートルワームの体が一瞬間に浮

き、そのまま後方に吹っ飛んだ！！

「はあく、はあく、はあく……」

「やつ、やったのか……？」

ボロボロになり体中から火花や煙が上がっている、クウガの変身が解けたディケイドとガタツクは肩で大きく息をしながら言った。

「ぐうう……」

目の前にある、部屋の壁から、ボロボロになったスタッグビートルワームが現れた。

「どうやら、相手もボロボロのようだな。」

「ああ、俺たちもボロボロだ。」

ディケイドとガタツクは肩で息をしながら静かに言った。

「だが、負けるわけにはいかない！！」

「ああ、この世界を守ってから俺は死ぬ、恵と過ごしたこの世界を守る！！」

二人の剣は同時に叫んだ！！その時、ディケイドのベルトに付いているライドブッカーから2枚のカードが飛び出した。

「っ！！」

ディケイドがその二枚のカードをつかむと黒かったカードに、絵柄がついた。一枚はガタツクが描かれその下に鋏のような武器が描かれたもので、もう一枚は縁が金色で中央にクワガタムシのマークが描かれたものだった。

「これは・・・おい！ガタツク！！今ここであいつを倒せる切り札使ってみるか？」

ディケイドは、マスクの中で笑みを浮かべるとガタツクに尋ねた。

「ふっ、なんだか分からんが、やってみる！」

「じゃあ、使わせてもらおう・・・ちょっとくすぐりたいけどな！！」

FINAL FORM RIDE G A G A G A G A T
ACK

ディケイドはディケイドライバーにガタツクが描かれたカードを装填、音声が鳴り終わるとガタツクの背中に手を入れて、ガタツクの背中を開くよう無しぐさをとった！！するとガタツクの体が浮いて、背中と背中が分かれ、ガタツクの体が片刃の刃が左右に二枚ある巨大な大剣になった。

『おいおい、なんだこの姿は。』

「言つたる？切り札だつてな。んじゃ、早速行くか！！」

ディケイドはガタツクの足があった部分を握ると、目の前にいるスタッグビートルワームに向かって走って行った！！

「はあぁっ!!」

そして、ガタツクが変化した、『スタッグスライサー』をまっすぐ縦に振り下ろした!!

「がはっ!!」

スタッグビートルワームは体を切り裂かれ、後ろにのけぞった!!

「止めだ!!」

FINAL ATTACK RIDE G A G A G
ATTACK

ディケイドは縁が金色のカードをディケイドライバーに装填した、するとスタッグスライサーの刃が大きく開いた、そしてディケイドはスタッグスライサーを両手で握ると、上空に飛び上がった!!

「『ほおおおおおおおあつたあああああああ
っ!!』」

ディケイドの剣とガタツクの剣は同時に声を上げながら勢いよくスタッグスライサーを縦にまっすぐ振り下ろした!!

「ぐがぁぁっ!!」

スタッグスライサーはスタッグビートルワームの体に命中!! ス
タッグビートルワームの体は赤と青二つの斬撃に切られた、その瞬
間、ディケイドはスタッグスライサーを引き抜いて、スタッグビー

トルワームの体に向かってスタッグスライサーを突き刺した！すると開いていたスタッグスライサーの刃が徐々に閉じていきスタッグビートルワームの体を挟み、体を真っ二つに切り裂いた！！

「ぐがああああっ！！」

そして断末魔を上げながら緑色の炎に包まれ、爆発した。

「これで、終わりか……。」

デイケイドは静かに呟くと、スタッグスライサーを放り投げた、その瞬間スタッグスライサーはガタツクに戻って地面に着地した。

「さて、残りはザビーだけか……。」

ガタツクは静かに呟いた。

第十六話 『剣』（後書き）

ガタツクのオリジナルFFRはクウガと被るのであえて、武器に
しました。

次回はカブトです。

第十七話 『太陽の輝き』（前書き）

今回でカブト編の戦闘は終わり。

第十七話 『太陽の輝き』

デイエンドとドレイク、アゲハとサソード、二人の剣とスタッグ
ビートルワームとの戦いが終了したころ、カブトとザビーとの戦い
も決着がつきそうであった。

「まったく、面白くないな、お前は。」

カブトはザビーワーム態がアジトとして使っていたビルの屋上で
静かに言うと、ザビーワーム態の腹を蹴り飛ばした！！

「がはっ!」

ザビーワーム態は腹を押さえ、地面に膝をついてうずくまった。

「貴様の實力はこの程度か？」

「くそが調子に乗るなああああつ!」

ザビーワーム態は声を上げると一気にカブトに接近した!!

「甘い!」

ONE

TWO

THREE

「ライダーキック!!」

RIDER KICK!!

カブトは飛び上がった、ザビーワーム態の突進を回避するとライダーキックを発動させ、青い閃光に包まれている右足をザビーワーム態の背中に向かって突き出した!!

「ぐふあああああああつ!!」

カブトがザビーワーム態の背中に右足を突き出した瞬間、ザビーワーム態は床に体を打ち付ける、そしてカブトとザビーワーム態の体重に耐えきれなくなった屋上の一角が崩落、二人はそのまま下に、このビルの中庭に向かって真つ逆さまに落ちて行った。

その頃剣たちがいる中庭、つまりザビーワーム態とカブトが落ちて行っている先では、戦闘を終え駆けつけた恵と翔がいた。

「一応、アゲハのヒーリング効果で傷は回復できたよ、あとは体力だけど・・・大丈夫?」

アゲハに変身していた恵は、変身を解除して、二人の剣に尋ねた。

「こうして座っていれば自然に回復する・・・。」

「回復でき次第隼人の援護に向かう……。」

デイケイド剣と、ガタツク剣は壁にもたれががって座っていて、二人は静かに言った、その時!!

ビルの上から、いくつかの瓦礫とザビーワーム態、そしてカブトが降ってきた!!

「!はあっ!」

カブトは、剣たちが集合しているのに気がつくと、地面に完全に着地する前にクロックアップを発動させ、がれきをいくつか蹴りながら剣たちのそばまで来ると、そこでクロックアップを解いた。

「影島は倒せたのか?」

ガタツク剣は隼人に、カブトに尋ねた。

「いや、あいつは何かを企んでる。それが分からない以上、迂闊うかつに手を出せんからな。全員でかかった方がいいと考えたから一応ここまで叩き落した……いや蹴り落とした。」

カブトが静かにうと、がれきの山が一気に崩壊、がれきの下敷きになっていたザビーワーム態が姿を現した。

「はあ、はあ……図に乗りやがって……人間のくせに……もう完全に頭にきた!!隠し技を使う!!こんなもんいるかあっ!!」

ザビーワーム態は声を上げると、ザビーゼクターをはずして芝生に叩きつけると、金色で蜂を模した、ワस्पワームに変身した。

「何をやる気かは知らんが。」

「倒させてもらおう。」

デイクイド剣とガタツク剣はそう言うのとゆっくりと立ち上がり、「変身っ！！！」と叫んで、デイクイドとガタツクに変身、変身を解いていた翔も、デイエンドに変身した。

「何をしても無駄さ……俺には勝てん！！！」

ワस्पワームは大声で叫んだ！！するとワस्पワームの体が突然消えた！クロツクアップを使ったようだ。

「クロツクアップなど……」

「無駄だ！！！」

C L O C K U P ! !

カプトとガタツクは叫んでクロツクアップを発動、アゲハもクロツクアップを発動した！！だが……

「うあっ！！！」

「ぐっ！！！」

「きゃあっ！！！」

突然3人がクロツクアップの世界からはじかれて、芝生の中に向

つぶせに倒れた!!

「!大丈夫か!!」

ディケイドは3人に駆け寄り、ディエンドはクロックアップを使ってワスプワームと戦い始めた。

「何があった!!」

ディケイドはゆっくりと立ち上がっている、3人に尋ねた。

「クロックアップより速い、スピードで動かれた……」

ガタツクは悔しそうな声で言った、その時!!

「あがつ!!」

ディエンドがディケイド達の背後にあった、ビルの壁にたたきつけられた。

「やつはクロックアップを超えたハイパークロックアップを使えるようだな……」

ディエンドは立ち上がるとクロックアップを使えないディケイドに向かって言った。

「ふっ、鳴滝様が言ったことを気にする必要はなかったな……」

「鳴滝が言ったこと?」

「ああ、この世界のカブトは『ハイパークロックアップを使える、ハイパーフォームと言う形態になれる可能性がある』と言っていな、ハイパークロックアップを使われたら俺は勝てない……だから、使うのをためらったんだが……おまえらは使えないみたいだな。」

ワस्पワームが静かに言うと、カブト達は立ち上がり

「どうかな？ハイパークロックアップができなくてもお前に勝てる方法くらいある。」

「私たちはあきらめない！！あなたを倒す！！」

カブトとアゲハが言い放つと、ガタツク、ディケイド、ディエンドが2人の隣に並んで立った。

「一瞬でも動きを止めることができれば、活路を開ける……行くぞ！！」

カブトの声に全員うなずいた、そして

ATTACK RIDE ILLUSION！！

FORM RIDE KUUGA RISINGPEGASU

S！！

ディエンドは、イリユージョンのカードを使い5体に分身、ディケイドはフォームライドのカードを使い、体が緑で、体に金色のラインの入ったクウガ、ライジングペガサスに変身、アゲハは背中

羽を展開させると宙に浮いた。

「何をしても無駄だ俺に勝てるはずがない！」

ワस्पワームは声を上げると5人、否、10人のライダーに突撃した！！

「行くぞ！チャンスは一度だけだ！！」

カブトはそう言つとクロックアップを発動、ガタツクもクロックアップを使って前に出た、それと同じタイミングでアゲハも前に飛び出すと、高度を上げて空中で静止した、そして

「アゲハのもう一つ的能力、食らいなさい！！」

アゲハが叫ぶと、アゲハのマスクにある蝶の触覚のようなものから粒子が飛び出した！

「今だ！！翔！！」

「ああ！！！」

アゲハの触覚から飛び出した粒子は、中庭にいるワस्पワームに命中すると、

「うっ、ぐっ……んがああ……」

なんとワस्पワームのハイパークロックアップが解け、ワस्पワームは芝生の上に膝をついた、その時

「はあっ!!」

「うりゃあっ!!」

クロックアップを発動していたカブトとガタックがすれ違いざまに、お互いの握っている武器をワस्पワームの体に向かって振り、腹を傷つけた!!

「こいつで!!」

「最後だ!!」

FINAL ATTACK RIDE KU KU KU
UGA!!

ATTACK RIDE BLAST!!

腹を切りつけられ、苦しみもがいているワस्पワームに向かってデイケイドクウガライジングペガサスとデイエンドは、握っている銃の引き金を引いた!!

DクウガRPの握るボウガンに金色の刃のようなものが着いた、ライジングペガサスボウガンからは3発の風の弾が連続で撃ちだされ、デイエンドたちの握るデイエンドライバーからはシアン色に輝く銃弾がいくつも撃ちだされワस्पワームに命中した!!

「ぶぐがああああああつ!!」

ワस्पワームは声を上げながら爆発した!!

「勝ったな……。」

ガタツクはカブトに向かって言った、だが

「いや……まだあいつは生きている!!」

カブトは、クナイガンを構えると、緑色の炎を睨んだ、その時!!

「ウガアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

炎の中から体全身が緑色に発光していて、コオロギに似たグラリスワームが立っていた。

「コロス!! 貴様らはコロス!!」

グラリスワームは声を上げるとカブト達に向かって一気に走った!!

「なっ!!」

「速いっ!!」

カブトとガタツクが驚いていると、グラリスワームは後ろにいた、デイエンドに突撃した!!

「があっ!!」

「ぐおおっ!!」

腹を殴られ、よろめくデイエンドに向かってグラリスワームは両腕を一気に振り下ろした!!グラリスワームの両腕に生えている鎌

のようなものがディエンドの胸を切り裂いた、そして

「だあっ!!！」

「がはっ!!！」

右腕を大きく振って、腹を切り裂いた!!ディエンドの体からは火花と同時に血も飛び散り、ディエンドは崩れ落ちながら変身が解除され、あおむけに倒れた。

「翔!!、貴様あああっ!!！」

ディケイドは声を上げるとグラリスワームに飛び掛かった!そして

ATTACK RIDE SLASH!!

カードをディケイドライバーに装填し、赤く光り輝くライドブッカーソードモードをグラリスワームの首元めがけて振り下ろした!
!だが、

「効かん!!！」

グラリスワームは右腕の鉄のような爪で、ライドブッカーソードモードの刃を受け止めると、背中から触手を出してディケイドを貫いた!!!

「がはっ!!！」

ディケイドの口からは血が流れ出てディケイドはその場に落ちると変身が解除された。

「次は・・・貴様だ坂本恵いいいつ!!」

グラリスワームはアゲハの方を見ると、アゲハめがけて一気に走った!!

「させるか!!」

ガタツクはアゲハの前に出るとガタツクダブルカリバーを構えて、一気に走った!!だが

「じゃまだ!!」

グラリスワームはガタツクの顔面を掴むと芝生にたたきつけた!!

「があっ!!」

「さて!!これで終わりだ!!坂本恵!!」

グラリスワームはガタツクをたたきつけた後、アゲハに接近するとアゲハの腹に向かって左腕を突き出そうとした、その時!

「ぐっ!がっ!!」

突然グラリスワームの体が何かに切りつけられた、グラリスワームはその何かを睨む、するとそこには先ほどたたきつけたのに、一瞬で立ち上がったガタツクがいた。そして自分を切りつけたと思われるガタツクダブルカリバーがガタツクの手に戻って行った。

「今だ!恵!!」

ガタツクはアゲ八に向かって叫ぶ、アゲ八はうなずくと右腕のアゲハゼクターのスイッチを二回押した！！

MAXIMUM RIDER POWER

「ライダーパンチ！！」

RIDER PUNCH

アゲ八は白と桃色に発光する右腕をグラリスワームの腹に向かって突き出した！！

「ぐぬう……………」

アゲ八のライダーパンチを食らったグラリスワームは腹を押さえ、後ろに下がった、すると

「やりやがったな…………この女あまあああああああああつ！！」

グラリスワームは声を上げ、アゲ八に向かって右腕を大きく振った！！すると腕に生えている鎌から三日月状の光が飛び出しアゲ八の体を切り裂いた！！

「あう……………」

アゲ八はゆっくりと崩れ落ち、変身が解除された。

「恵！！」

二人は武器を構えると、触手を切り裂こうとした、その時！！二人の目の前に2つの人影が現れた、そしてその影は、手に握った武器を勢いよく振ってグラリスワームの触手を切り裂いた！！

「すまんな・・・寝ていた。」

触手を切り裂いたのはデイケイドとデイエンドであった、そしてデイケイドはカブト達の方を見て言った。

「くそが・・・やりやがったな・・・このビルごと、貴様らを殺してやるう！！」

グラリスワームは声を上げると、ワスプワームの時の羽を広げ、ビルを破壊しながら上空に飛び上がった！！

「くっ！空から攻撃する気か！！」

カブトは上を見ながら叫んだ、すると、グラリスワームは両腕を目の前にかざしたすると手のひらがほんのりと輝き始めた。

「おいおい！！ワームにあんな能力ないぞ！！」

「体弄り過ぎだろ！！大シヨツカーは！！」

デイエンドとガタツクはグラリスワームが放とうとしている技を見ながら叫んだ！！

「くっ！恵も気を失ってる！！奴を倒すにはどうしたら・・・。」

「

ディケイドはそばに倒れている前組を見ると悔しそうに言った、するとカブトがディケイドの肩に手を置いた。

「諦めるな、お前にはこの状況を打破できる力があるはずだ。」

カブトが静かに言うと、ガタツクもそれに気が付き、

「そうだ！！俺に使った切り札だ！！カブトにも使えるんじゃないのか！！」

ガタツクの一言でディケイドもそのことを思い出し、ライドブツカーからカードを3枚引き抜いたすると黒かったカードに絵柄がついた。

「っし！これならいける！！」

ディケイドはガッツポーズをとると、3枚のうち、カブトとカブトゼクターが描かれているカードをディケイドライバーに装填した！！

FINAL FORM RIDE K A K A K A K A B
UTO

「ちよっとくすぐりたいぞ！！」

「わかった！さっさとやれ！！」

ディケイドはカブトに向かって言うと、右手をカブトの背中に押し当てた、カブトは大きくうなずき、ディケイドは右腕を下から上

に向かって振った、するとカブトの体が巨大なカブトゼクターに変わった！！

「何をするかは知らんが……無駄だあああつ！！」

グラリスワームは大声で叫ぶと、手の平に集めていた光を一気に放った！！

「行けえ！隼人おおつ」

デイケイドとガタックが同時に叫ぶとカブトが変身した、ゼクターカブトは一気に上空に向かって飛んで行くと、体を回転させ、グラリスワームの放った光線を破壊！！さらにそのままグラリスワームに突っ込んで、グラリスワームを、地面にたたき落とすと、カブトに戻り、芝生の上に着地した。

「ぐう……ゆるさね、ぶつ殺してやる！！」

グラリスワームは立ち上がると後ろにいるカブトを睨んだ！！

「貴様のことを下に見過ぎていた、本気で行く……貴様に太陽の輝きを見せてやる！！」

カブトは右腕を空に向けて伸ばした、すると、カブトの右手に銀色のカブトムシが現れた！！

「なに！！貴様ハイパーゼクターを持っていたのか！！」

カブトの手に現れた銀色のカブトムシを見た、グラリスワームは声を上げ驚いた。

「ハイパーキャストオフ」

H Y P E R C A S T O F F

カブトは銀色のカブトムシをベルトの左側につけると、角を前方に倒した。するとカブトの姿が変わっていき、角が大きくなり、瞳はエメラルドグリーンで体全身が銀色になった。

「くそがあああああっ！！手を抜いていやがったな！！こうなったら俺も本気で貴様を殺す！！ぶっ殺す！！」

グラリスワームは声を上げると翼を展開して大空を舞った！！

「まずは空を飛べない、ガタツク、デイケイド、デイエンドから殺してやる！！」

グラリスワームは叫ぶと先ほどの光を掌に集めだした、その時！！

「がはっ！！」

グラリスワームの背中が突然爆発した。

「ごめんね、少し寝過ぎたみたい！！でも大丈夫！！」

グラリスワームの背後には羽根を展開したアゲハがいてアゲハの手には剣が渡した銃が握られていた。

「くそがあっ！！図に乗るな！！」

グラリスワームは声を上げるとアゲハに接近、アゲハを爪で切り裂こうとした、だが

「甘いっ！！」

アゲハは、アゲハレイピアを真横に振り、グラリスワームの体を逆に切り裂き、地面にたたき落とすと、自分も芝生の上に着地した。

「くそおお！！俺は負けない負けないんだ！！」

グラリスワームは起き上がると雄たけびに似た声をあげた！！

「いや！お前は悪を名乗った時点ですでに負けている。」

グラリスワームの目の前から、ディケイド、カブト、ディエンド、ガタツクがゆっくりと歩いてきていた。

「何！どういう意味だ！！」

「俺の師匠が言っていた、この世にまずい飯屋と。」

「悪が。」

「栄えた試しはない……とな……。」

カブト、ガタツク、ディケイドの順番で言った、するとグラリスワームが

「貴様らいつたい何者なんだあああっ！！！」

「『『『ただの仮面ライダーだ！！覚えておけ！！』』』」

四人は、グラリスワームを人差し指で指すと言い放った！！

「決めるぞ、剣、恵、翔！！」

カブトがそう言うと、デイケイド、デイエンド、ガタツク、アゲハは同時に頷いた！！

「俺が負けるわけない・・・俺は強いんだ、強いワームなんだ・・・貴様ら何ぞに、人間如きに負けるかあああああああああああああああああああああああああああああああああつ！！」

グラリスワームは脳の血管が一斉にキレたのではないかというぐらゐの勢いで声を上げると、デイケイド達向かって走ってきた！！

「俺たちだつて負けられないんだあああああつ！！」

FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DE
ECADE

FINAL ATTACK RIDE DI DI DI
IEND

デイケイドとデイエンドはお互いのドライバーにカードを入れたするとデイケイドの前には自分の顔を模したカードが複数展開され、デイエンドの前には自分の顔を模したマークが展開された、そしてデイケイドはライドブッカーソードモードを握りしめ、デイエンドはシアンエッジを握りしめた。そして二人は向かってくるグラリスワームに向かって、

「デイメンションスラッシュュ!!」

「デイメンションカット!!」

デイクイドは左から右に向かってライドブッカーを振り、デイエンドは右から左に向かってシアンエッジを振った!!

「がはああっ!!」

二人の放った斬撃はグラリスワームの横腹を切り裂いた!! グラリスワームは声を上げると、体から煙を上げながら回転していった、そして回転していった先には、アゲハとガタツクがいた。

「決めるぞ恵!!」

「うん!!」

ガタツクはアゲハに向かって叫ぶと飛び上がった、アゲハもうなずくと飛び上がる、そして二人は空中で一回転して。

R I D E R K I C K

R I D E R K I C K

「ダブルライダーキック!!」

ガタツクとアゲハは同時にライダーキックを発動、ガタツクは左足を、アゲハは右足を同時に突き出した!!

「がはっ!!」

二人の放った蹴りはグラリスワームの腹に命中すると、グラリスワームを吹っ飛ばした!!

「お兄ちゃん!!」

「止めを刺せえっ!!」

アゲハとガタツクは、グラリスワームを吹っ飛ばした先にいるカブトに向かって叫んだ!!

「わかっている……。」

カブトは静に呟くと、ライダーキックを放とうとした、だが

「くっ! まだだ!! まだ負けん!!」

グラリスワームは羽を展開、宙に飛び上がった!!

「どこに行く気だ?」

グラリスワームの背後から声が聞こえ、グラリスワームは後ろを振り返った!するとそこには太陽を背に、虹色に輝く翼を展開し、胸のアーマーが開き、肩の装甲も上にあがり、腕と脛にある羽も展開したカブト、ハイパークロックアップ状態がいた。

「貴様に見せてやる、太陽の輝きを!!」

MAXIMUM RIDER POWER

カブトは叫ぶとベルトに付いているハイパーゼクターの角を前方に倒した!!そして

ONE

TWO

THREE

「ハイパーキック!」

RIDER KICK!!

「はあっ!!」

カブトはいつも通り、ゼクターのスイッチを1から3まで押し歩いて、ゼクターの角をマスクドフォームの状態にした後ライダーフォームの状態に戻し、エネルギーを右足に集めると、右足をグラリスワームに向かって突き出し、必殺技のハイパーキックを放った!!

「がはっ!!」

「はあっ!!」

カブトは力を入れるとグラリスワームの腹に亀裂が走り、グラリスワームの腹を貫いた!!そしてビルの上に着地すると

HYPERCLOCKOVER

ハイパークロックアップが解け、グラリスワームは緑色の炎をあげて大爆発、カブトは、人差し指を天に向けた。

第十八話 『さよなら愛しき人』 (前書き)

カブト編終了!!

第十八話 『さようなら愛しき人』

カブト、ハイパーフォームの放ったハイパーキックで影島ソウの正体、体全身をいじられたグラリスワームは爆発、この世界の脅威を倒した、そして、ディケイド、ディエンド、ガタツク、アゲハは変身を解除した。

「終わったね……。」

「ああ。」

恵とガタツク剣は静かに言った。すると

「うぐっ!」

ガタツク剣が胸を押さえ、倒れた。

「剣君!どうしたの!!ねえ!剣君!」

恵はガタツク剣の体を何度もゆすった。

「いったん病院に連れて行こう、詳しくはそれから。」

いつの間にか隼人がやってきていて、隼人は恵に向かって言うと、恵は頷いてガタツク剣を病院まで運んだ。

「これが、今の剣の容体だ。」

ガタツクの剣は今、病院の一室で寝ていた。そして隼人は医者からもらってきたレントゲンを見せて言った。

「なあ、この病院とお前の関係は？」

「この病院は俺のかかりつけ医がいるところだ、俺が変身できるのを知っているからいろいろ世話になっている。」

デイケイド剣の質問に隼人は答えるとゆっくりと椅子に座った。

「体中の機能が著しく低下している、もって明日の日没らしい……」

隼人がそう言うと恵の顔が曇った。

「死んじゃうって覚悟はしていた……でも、いざその時が来ると怖い……」

恵はそう言うと立ち上がり、病室から出た。

「恵……」

剣もそれを見ると恵を追いかけた。

「……………怖い、だつてさ……………」

隼人はガタツク剣の方に目をやって言った。

「いやあゝ、起きてるってばれてた？」

ガタツク剣はゆっくりと起き上がって言った。

「ああ、わかっていたよ。」

「俺はもうすぐ死ぬ……………だから、俺はこのままどこかに行く、そして誰もいないところで、一人さみしく死んでいく。」

ガタツク剣がそう言うのと翔がゆっくりと肩に手を置いた。

「だったら、俺もディケイドの剣も恵は連れて行かない。」

「なっ！何いつてるんだ！！恵を幸せにできるのは、ディケイドの剣しかないんだ！！」

ガタツクの剣は、翔の言葉に目を丸くして言った。

「恵の中にはお前がいる、お前と話もろくにできずに死んでしまった、そんな状態になるとどうなると思う？恵の中におまえとディケイドのお前が合成されて形成されてしまう、唯でさえお前がいなくなつた瞬間、ディケイドの剣をお前と違って恵は剣に好意を寄せていた、だがディケイドの剣ではなく、ガタツクの剣として、剣を

見ていた、つまり剣に向けられていた愛は、お前に対するものなんだ。」

隼人は静かに言った。

「それに、剣は一度恵を失ってる、剣は整理でいているが、恵はできていない、そんな状態の恵と旅をしてもお互いの心がつらくなるだけだ、話してやろうか？デイケイドの剣と恵の関係をそして何があつたか。」

翔がそう言うと隼人とガタツク剣はうなずいた。

その頃、恵とデイケイド剣は……

「辛いかな？」

病院の裏で、壁に顔をついて泣いている恵に剣は声をかけた。

「うん、でも、剣君には悪いことしちゃったね……………」

恵はデイケイド剣の方を向いて言った。

「別に俺は気にしていない……恵……何も話さないで、この世界の俺と別れるのか？」

剣は恵の顔を見ながら静かに言った。

「それは……会っちゃうつらいから……たぶん話すことなく次の世界に行くと思う……。」

「その気持ちなら、お前は这个世界に残れ、俺はお前をつれていかん。」

剣が言い放つと恵は目を見開いた。

「何も話さずに去れば、絶対におまえは心に後悔が残る……そんな気持ちじゃ俺たちの旅にはついてこれない……だからちゃんと話すんだ、自分の思いをガタツクの剣に伝えるんだ。」

剣はそう言うと、歩き出した。

「じゃあ！剣君に伝えて！！明日！思い出の場所で！！思い出の公園でいつもの時間に待ってるって！！！」

恵は大声で叫び剣は軽く手をあげて病院の中に入って行った。

「まあ、そんな事が、あつたんだ……。」

翔が言い終わると病室のドアが開いた。

「おっ、なんだ？人の過去知ってびっくりしてるのか。」

剣は笑顔で言うと、ガタツク剣に近寄った。

「お前がもし、恵と話す気があるなら、明日のいつもと同じ時間、思い出の場所で待ってるってよ。」

剣はそう言うと病室から出た。翔も剣の後を追いかけるようになり、病室から出て行った。

翌日……

ガタツク剣は、無事退院することができた。だが退院前の検査だと、やはり体の機能が著しく低下していて、今日の日没までが限界と言っことだ。

「あとちょっとだね……。」

恵は自分が指定した場所でガタツク剣を待っていた、そこは小さなリスの像がある公園で、二人はいつもそこで待ち合わせをしていた。

「おい、恵い〜!!」

そしてしばらくすると、ガタツク剣が走ってきた。

「剣君!!」

「待たせたな……んじゃ、いつものところでご飯でも食べながら話すか……。」

「うん。お弁当作ってきたから、いつもの芝生で食べようか？」

「ああ。」

ガタツク剣と恵は、ゆっくりと歩き出した。

「おい、お前達もう行っちゃうのかよ……。」

隼人は剣に尋ねた。

「ああ、恵には悪いが俺たちはもうこの世界から出て行く……。」

・、恋人が死んだらその事実を受容できるまで時間がかかる・・・俺が・・・同じ人物である俺がいたら・・・恵の心に戸惑いを与えちまう・・・」

「だから、去る。と言うことが・・・」

隼人の言葉に剣はゆっくりと頷いた。

「確かに。お前が別の人間だったら、剣が消えた後のぽっかり空いた心の空間を埋めてあげられるかもしれない。だが、お前とこの世界の剣は同じ人物。ぽっかりと空いた空白を埋めても、それは埋まったことにはならない、消えた剣がそこにいる、と感じ取ることもある。剣、お前はそのことを避けるためにはなれようとしてるんだろ？」

「ああ、宮本剣は二人いる、『自分のことを好きでいてくれたけど死んでしまった剣と一緒に旅をしている好きになった剣。』頭では理解できても心では理解できない、俺はそう思ってるだから恵の心が完全に治るまで、俺と言う存在を、別の世界の剣。として受け入れることができたなら迎えに来るわ。」

剣はそう言と、隼人に手紙を渡した。

「これを恵に渡しておいてくれ。」

「分かった。」

「じゃあな、隼人。この世界守れよ。」

「わかってる、すべての脅威、大シヨッカーが消えたわけではな

い……おまえたちが大シヨツカーを倒すまで俺はこの世界を守る。」

隼人がそう言うと剣と隼人は左腕と右腕を合わせると、剣はバイクシヨツプの中に入って行った。

「さて、次の世界に行こうぜ、翔。」

「あいよ、次の世界はどこになるのかな？」

「さあ？」

剣はそう言ってソファアに座った、すると額縁に飾っている写真が光りだした、そして光が止むと写真が変わっていた。

「ファイズの世界だな。」

「そうだな。」

剣と翔はお互いを見て言った、額縁の写真は真っ黒の背景の中に赤い光が発行する目が黄色いライダーが立っている、写真が変わっていた。

第十八話 『さようなら愛しき人』 (後書き)

次回はファイズの世界です。

第一話 『来るファイズの世界』 (前書き)

この話からファイズ編です！

第一話 『来るファイズの世界』

剣がカブトの世界を旅立ち、次に訪れたのはファイズの世界であった。だがついた時はすでに外は夜であった。

「さて、どうする。夜の散歩するか？」

「うん……ファイズは夜に出る確率が高いっぽいけど……」

「んじゃ、行くっ。」

「おう！」

剣の提案に翔はうなずくと二人は立ち上がって、バイクショップから出て行った。

「で？まずはどこに行く？ファイズが戦っていきそうな場所の見当は付いているのか？」

暗い夜道を歩きながら翔は剣に提案した。

「ああ、工事現場とかでアルバイトしてるんじゃないのかあつ！
！」

剣が全部言い終わる前に翔は剣の後頭部を殴った。

「何すんだよー！！」

「ふざけてる場合かよー！急いで探さなくちゃならないんだから
！！」

それからしばらく剣と翔は口論を続けていた、その時！！

「キヤアアアアアアアアアッ！！！」

突如、女性の悲鳴が聞こえた。

「オルフェノクか？」

「知らん！とにかく行くぞー！！！」

剣と翔はうなずくと悲鳴のしたほうに向かって走って行った。

二人が走って行ったのは廃校と化した小学校だった、そしてその
小学校の門の前で戦っている二つの影があった。

「っと！ナイスタイミング。」

剣と翔は足を止めると物陰に隠れその戦いを見た。

「はっ！ふっ！！やあっ！！」

二つの影の内、一つは黄色くて瞳が大きく、体全身が赤く輝いている戦士だった、その戦士は拳を握りしめ、目の前にいる牛のような怪人を攻撃していた。これが仮面ライダーファイズである。

そしてファイズに攻撃されているのがこの世界の怪人のオルフェノク、ファイズが戦っているのは牛を模したオックスオルフェノクである。

「・・・なあ、あのファイズの動き・・・。」

「ああ、プロの動きだな・・・。」

剣と翔は物陰に隠れ、ファイズの戦いを見ながら静かに言った。

「はあっ！」

ファイズは、オックスオルフェノクの攻撃をかわすと、右拳を強く握りオックスオルフェノクの腹を殴った！！

「がはっ！！」

オックスオルフェノクの体から火花が散り、オックスオルフェノクは後ろに下がった。

「よし、止めた。」

ファイズは静かに呟くとベルトについている携帯電話、ファイズ

フォンを開いた、そしてファイズフォンのENTERキーを押した。

EXCEED CHARGE

ファイズの腰についているベルトから赤い光がはなたれ、その光はベルトから体に伸びているラインを通り右腕にまで進むとファイズが右手につけている、ナックルのような武器、ファイズショットにエネルギーを送った。

「行くぞ!!」

ファイズは叫ぶと、オックスオルフェノクに向かって勢いよく走った!!

「ざあああああつ!!」

オックスオルフェノクは声を上げると、ファイズに向かって右腕を突き出した!!ファイズはオックスオルフェノクの攻撃を屈んでかわすと、から空きになっている右のわき腹に向かって右腕を勢いよく突き出した!!

するとオックスオルフェノクの体が爆発!!青い炎を上げながら灰と化し消滅、その後ろには赤いギリシャ文字の が浮かんでいた。

「終わりが……。」

ファイズは静かに呟き、変身を解こうとした、その時!!

「あがあつ!!」

突然ファイズの背中が爆発!煙りと同時に火花が散り、ファイ

ズは前のめりに倒れかけるが、地面に膝をつき、倒れるのだけは防いだ。

「くっ……だ、誰だ……。」

ファイズは後ろを睨んだ、するとそこにはムカデを模した灰色の『センチピードオルフェノク』とエビを模した『ロブスターオルフェノク』、そしてワニを模した『クロコダイルオルフェノク』がいた。

「ラッキークローバーが3人も……。」

ファイズはそう言うそばに落ちているファイズエッジを拾って構えた。

「おいおい、まずくないか？」

「ああ、ここは助けにいた方がいいな。」

剣と翔は戦いを始めたファイズを見ながら言うつと頷き、

K A M E N R I D E D E C A D E

K A M E N R I D E D I E N D

「変身っ！！」

剣と翔は同時に変身して、ファイズが戦っているところに向かっ

て走って行った！！

第一話 『来るファイズの世界』 (後書き)

ファイズ編は、カプト編の反動で短くなります……。

第二話 『デルタプラス』（前書き）

今回はOOOTGLSTSTPBさんが出してくださいましたオ
リジナルライダーが最後に出てきます！！

第二話 『デルタプラス』

「ぐがつ………」

ファイズの体から火花が散り、ファイズは地面に膝をついた。

「どうしました？あなたの力はこの程度なんですか？」

ムカデを模した灰色の怪人、センチピードオルフェノクは手に持った鞭を地面にたたきつけながら言った、その時！！

ATTACK RIDE BLAST!!

どこからともなく銃声と電子音が同時に響き、マゼンタ色の光弾が飛んできてその光弾はセンチピードオルフェノクに命中！彼を吹っ飛ばした！！

「何者！！！」

センチピードオルフェノクの隣にいたエビを模したロブスターオルフェノクは後ろを振り返って行った、すると暗闇の中からライドブツカー、ガンモードを構えたディケイドが現れた。

「通りすがりの仮面ライダー……さ。」

ディケイドは静かに呟くとライドブツカーの引き金を引き、ロブスターオルフェノクに向かって銃弾を放った！！

「くっ！！」

ロブスターオルフェノクの体にディケイドの放った銃弾は命中！
彼女は、腕を十字に組んで防御して後ろに下がった。

「仮面ライダーだと………？」

「し、知らないライダーですね………。まあ、我々の治安を乱す存在は排除しましょう。」

クロコダイルオルフェノクと、センチピードオルフェノクは静かに言った。

「ファイズは傷ついているため相手はあのピンク野郎一人だけだ………簡単に倒せる………。」

クロコダイルオルフェノクが静かに呟いた、その時！！

「あがつ！！」

一発の銃弾がクロコダイルオルフェノクの体を直撃、クロコダイルオルフェノクは吹っ飛んだ。

「もう一人いるぜ？」

ディエンドはディエンドライバーの銃口をオルフェノク達に向けながら言う。ディケイドの隣に立った。

「だが何人になっても所詮は2人、私たちラッキークローバーには勝てないわよ！！」

ロブスターオルフェノクは叫ぶと、右手をレイピアに変化させ、
デイケイド達に突っ込んできた！！

「3人しかいないのにラッキークローバーかよ！！」

「笑わせるな！！」

ATTACK RIDE SLASH

デイケイドとデイエンドはそう言うと、カードを装填、デイケイドは刃先が赤く輝くライドブツカーソードモードを抜刀するように右腰から左前方に向かって突き出し、デイエンドはシアンエッジをまっすぐ突き出してロブスターオルフェノクの体を切り裂いた。

「あがつ！！」

ロブスターオルフェノクは声を上げ、腹を押さえると地面に膝をついた。

「お前たちはいったん下がって社長に連絡しろ、ここは俺が行く。」

クロコダイルオルフェノクはそう言うとロブスターオルフェノクの前に出た。

「…………クロコダイルオルフェノクか…………。」

「チョイと厄介だが…………二人ならいける…………。」

デイケイドとデイエンドはうなずくとクロコダイルオルフェノク

に向かって走っていき、ロブスターオルフェノクとセンチピードオルフェノクはその場から逃げだした。

「はあっ!!！」

「だあっ!!！」

デイケイドはライドブッカーを縦にまっすぐ振り下ろし、デイエンドはシアンエッジを突き出してクロコダイルオルフェノクを攻撃した!!だが

「効かん!!！」

クロコダイルオルフェノクは叫ぶとワニの刃を模した縦に似た刃物、ファキールス・ホーンを振り下ろしてデイケイドとデイエンドの体を切り裂いた!!

「がはっ!!！」

「ぐおっ!!！」

デイエンドとデイケイドの体からは火花が散り二人は後ろに吹っ飛ぶ、だが二人は体をひねって地面に着地した。

「斬撃には弱いと思ったんだが……。」

デイエンドはシアンエッジを見ながら言った。

「だが、下手に接近するよりこっちで行った方がいいだろ、このまま押し切るぞ!!！」

デイケイドはディエンドに向かって言うと、ライドブツカーからカードを引き抜いてデイケイドライバーに装填した。

「カブトの世界で激情態になったときに手に入れたカードだ!!」

ATTACK RIDE GETTERTOMAHAWK!!

「ゲッタアアアアトマホオオオウクウツ!!」

「うおいつ!!真のかよっ!!」

デイケイドが叫ぶとライドブツカーソードモードが、一本の両刃で巨大な斧になり、ディエンドはその斧を見ると突っ込んだ!!だが、デイケイドは反応せず巨大な斧の柄を両手で握るとクロコダイルオルフェノクに向かって一気に接近した。

「ハダアツ!!」

デイケイドは一気に接近するとクロコダイルオルフェノクに向かって巨大な斧を一気に振り下ろした!!

「ぐっ!!」

「はりゃあっ!!」

さらにデイケイドは巨大な斧を右から左に向かって薙ぎ払うように振り、クロコダイルオルフェノクの横腹を切りつけ、吹っ飛ばし、

「トマホオオオオウクウツブウウウウウメラッ!!」

デイケイドは声を上げると巨大な斧をクロコダイルオルフェノクに向かつて放り投げた！！だがクロコダイルオルフェノクは体を大きく振って、体ごと腕を振りデイケイドの投げた斧を勢いよく跳ね返した！！

「ちっ、やっぱり相当強い。」

デイケイドの投げた斧は途中でライドブッカーに戻りデイケイドはそれを握った。

「何をしても無駄だ！！俺には勝てん！！」

クロコダイルオルフェノクは言い放つと、デイケイドに向かつて急接近、デイケイドの腹を殴りつけようとした、その時！！

EXCEED CHARGE！！

突然、ファイズライダーたちの必殺技を発動するときになる電子音が鳴り響くと、突然、素早い光が回転しながらディエンドの前を走り抜けた！！そしてその光はクロコダイルオルフェノクに向かつて突き進むとクロコダイルオルフェノクの周りを何度も回りながらクロコダイルオルフェノクの体を切りつけて行った！！そしてその光が止まると、両端に鋭い を模した刃のついた槍に似た武器を持った仮面ライダーが立っていた。そしてそのライダーはデイケイドの方を向いた。

「大丈夫ですか？あなたなら倒せたかもしれませんが、危ないと思っただので。」

デイケイドの方を向いたライダーはデイケイドに向かって手を差し伸べた、するとそのライダーの後ろにいたクロコダイルオルフェノクが爆発赤い炎を上げると、の文字と共に灰化した。

「いや、助かりました……あなたは。」

デイケイドは謎のライダーを手に取ると変身を解除し、剣に戻った。

「俺の名前は空条蒼太。仮面ライダーデルタプラスに変身してオルフェノクと戦っている。」

ライダーに変身していた青年は、変身を解くと剣に向かって言った。

「蒼太……。お前なんでここに!!!」

先ほどの戦いを見ていたファイズは変身を解くと茶髪の青年になって、蒼太と言う青年に近寄った。

「お前の帰りが遅いから、ファイズフォンのGPS機能使った。ここまで来たんだ、無事でよかった。」

蒼太がそう言うと変身を解いた翔が近寄り

「詳しいことを聞きたいんだが、ここで聞くのは不味いと思うんだ、どこか安全な場所で話したほうが……。」

翔は燃えているクロコダイルオルフェノクを見ながら言った。

「そうだな、よし、詳しいことは、俺たちの基地で話そう!」

「計の言う通りだ、君たち普通の人間が外を出歩くのは不味い、俺たちについてきてくれ。」

茶髪の青年と蒼太はそう言って歩き出し、剣たちも後を追った。

第二話 『デルタプラス』（後書き）

第三話 『奪われたペルト』(前書き)

ファイズ編が最後までかけたので、あと2話は連続原稿します。

第三話 『奪われたベルト』

剣たちは今、荒野の中をあるいていた、オルフェノクとの戦闘時は夜であったが、町からファイズ達の仲間がいる基地まで歩いているといつの間にか夜が明けていた。

「悪いな。バイクで行った方が早いんだろうが、俺がちょうどバイクを基地に残ってきていてな……。」

仮面ライダーファイズに変身する茶髪の青年、武田計ただけいが後ろを歩いている剣たちに向かって言った。

「昔はこの辺も町があつたんだが、人間解放戦争のときの衝撃で、この辺り一面は荒野になつちまつたんだ。」

計が言い終わると、計の横を歩いていた仮面ライダーデルタを強化したデルタプラスに変身する青年、空条蒼太が言った。

「その戦いでオルフェノク側は4割、人間側は2割の人が死んだけどな。」

「人間が二割？意外と少ないな……。」

翔は人間側の死者の数が思っていたよりも少なかつたので不思議に思つて計たちに尋ねた。

「まあな、そもそもその戦争に参加していたのが、ファイズ、カイザ、デルタの3人のライダーだけで死亡した人間の数は、避難に遅れていたたり、戦争を始める前に殺されただけだつただけけどな。」

計が言ったその時！！突然何かの光が三人の前に飛んでくるとその光は荒野の土に命中！！砂を巻き上げ砂ぼこりが立った。

「くっ！もうあいつらが！！」

計はそう言ってベルトを腰に巻いた。

「逃がしませんよ、あなた方は今日ここで、死んでもらいます。」

眼鏡をかけ辞書のようなものをもった男は静かに言うとセンチピードオルフェノクに変わる、そして、その隣にいた髪の毛の長いくせ毛の女性がロブスターオルフェノクに、体が大きい黒人がクロコダイルオルフェノクになった。

「やっぱり、ワニ野郎は生きてたか。」

剣は呟くと、腰にディケイドライバーを巻いた。

「行くしかないな……………」

翔もつぶやくと、ディエンドライバーにカードを装填した。

「あまり戦いたくないが…………やるしかないな……………」

蒼太もつぶやくと、腰にベルトを巻き懐から白と青の配色がされたiPhoneを、デルタフォンを取り出した。

「さあて、行きますか！！」

計は叫ぶと、懐からファイズフォンを取り出した、そして4人は、
並んで立つと。

「変身っ!!」

KAMEN RIDE DECADE!!

KAMEN RIDE DIEND!!

剣と翔はいつものように、デイケイドとデイエンドに変身し、計はファイズフォンを開けると、「555」とキーを入力し、最後にENTERキーを押した!蒼太はデルタフォンの液晶に出ているの文字をタッチして数字を「333」と入力しENTERキーを押した!!

STANDING BY!!

「変身!!」

二人は叫ぶと携帯を握る右腕を空に向かってかざし、ベルトに挿入、左向きに倒した!!すると

COMPLETE!!

と言う音声と共に、計の体は赤、蒼太の体は青い光に包まれ、計の体は赤い光を体から放ち目が黄色のライダー仮面ライダーファイズに、蒼太は青と銀の光を体から放っている を模した角がマスクについたライダー仮面ライダーデルタプラスに変身した。

「行くか!!」

デイケイドが叫ぶと、デイエンドはデイエンドライバーを左手に持つとカードを装填し、デルタプラスはデルタフォンの液晶に映し出された、『WEAPON』の文字をタッチした。

ATTACK RIDE SLASH!!

EDGE!!

デイエンドライバーからデイエンド専用の接近武器、シアンエッジがはなたれ、デイエンドはそれを右手で握った。

そしてデルタプラスには刃先が青白いファイズエッジやシアンエッジに似た剣が現れ、デイケイドはライドブツカーを引き抜き、ファイズはゆつくりと構えた。

「今日は私も参加します!!」

3人のオルフェノクと4人の仮面ライダーが走り出そうとした瞬間、ライダーたちの後ろからスーツを着た男性が現れた。

「仮面ライダーファイズにデルタプラス。私にベルトを渡してくれませんか？そうすれば人間解放軍には手を出しませんよ。」

その男は静かに言った、だが二人は鼻で笑うと首を横に振り。

「あんたは信用できるが、ほかのオルフェノクは信用できない。」

「あんだだつて今は眠っているが王のためには人間を殺すはずだ!!」

ファイズとデルタプラスが言い放つと、その男は目を閉じ『やれやれ』と言う感じで首を横に振った。

「仕方ありません、排除させていただきます。」

その男はそう言つて腰にベルトを巻くと携帯を取り出し、キーを『913』と入力した。

STANDING BY

「変身……。」

COMPLETE

男がベルトに携帯を挿入すると男の体は金色の光に包まれ、目が紫で、ギリシャ文字のを模したライダー、仮面ライダーカイザに変身した。

「さて、裏切り者の処刑と行きましようか……。」

カイザはそう言つて、腰についているを模した武器、カイザブレイガンを握った。

「俺たちを倒せるならな……。」

デイケイドはそうつぶやくとライドブッカーソードモードを構えた。そして、4人は一斉に走り出した！！

「ぐおおおおおっ！！」

大剣を構えた、クロコダイルオルフェノク、凶暴態は声を上げながらデイケイドに向かって走った！！

「俺とやり合おうってかあ？」

デイケイドはそう言うと、ライドブツカーの刃で、クロコダイルオルフェノクが振り下ろしてきた大剣を受け止めた！！

「オルフェノクは俺たちに任せて、お前たちはカイザの相手をするんだ！！」

ディエンドは、ファイズとデルタプラスに向かって言うと、センチピードオルフェノクとロプスターオルフェノクに向かってディエンドライバーを向けると引き金を引き、2体のオルフェノクを撃った！！

「お言葉に甘えさせてもらうか！！」

「ああ！！」

ファイズとデルタプラスはカイザに向かって走っていき、デルタプラスはデルタエッジを縦にまっすぐ振り下ろし、ファイズは右腕を突き出した！！

「っ！！」

カイザはデルタプラスの振り下ろしたデルタエッジを、手に持ったカイザブレイガンで防ぎ、ファイズの右手を左手で包み、防御していた。

「どうしたんですか？その程度の力では……私には勝てません！！」

カイザはそう言うと、体を回転させて二人を弾き飛ばした。

「どうかな？あんたを絶対倒す！！そしてアークの復活を阻止する！！！」

「すべての人を守るために！！！」

ファイズとデルタプラスはそう言ってカイザに向かって走った！！

「ふっ！！」

「たあっ！！！」

「ふんっ！！！」

「ぐおっ！！！」

デイケイドとクロコダイルオルフェノクはお互いの剣を振るって刃をぶつかり合せながら戦っていた。

「だあっ！！！」

「うっ!!」

クロコダイルオルフェノクは手に握った大剣をディケイドに向かつて振り下ろした、ディケイドはライドブツカーソードモードの刃の腹で受け止めるが、クロコダイルオルフェノクの方がパワーがあり、ディケイドは後ろに吹っ飛び、近くにあつた鉄骨に背中をぶつけた!!

「くそっ・・・パワー馬鹿には・・・こいつでどつだ!!」

FORM RIDE KUUGA RISINGTITAN!

!

ディケイドは背中をさすりながら立ち上がると、ディケイドライダーにカードを一枚装填、ディケイドの体の周りを電気が包み、ディケイドは仮面ライダークウガライジングタイタンフォームへ変身した。

「さあて、こっからが巻き返しだ!!」

ディケイドクウガライジングタイタンフォームはそう言ってライドブツカーが変化したライジングタイタンソードの刃をクロコダイルオルフェノクに向けて言った。

「どんな姿になっても。俺は倒せん!!」

クロコダイルオルフェノクは声を上げるとDクウガRT目掛けて走り、手に持つ大剣を両手で握ると、DクウガRTの肩に向かつて大剣を一気に振り下ろした!!

「その程度か？」

クロコダイルオルフェノクの振り下ろした大剣は見事DクウガRTの肩に命中、火花を散らす。DクウガRTはダメージを負っていないのか、いつも通りの少し皮肉が混じったような声で言った。

「はっ!!！」

DクウガRTはライジンググタイタンソードを両手で握ると、真下から真上に向かって振り上げ、自分の肩に刺さっている、正確には刃が肩の上に乗っている、クロコダイルオルフェノクの大剣を弾いた!!！」

「がっ!!！」

クロコダイルオルフェノクの握る大剣は宙をくると舞いながら飛んでいき、クロコダイルオルフェノクの背後に突きささった。

「止めだ……やあっ!!！」

DクウガRTは静かに言うと、ライジンググタイタンソードを左斜め上から右斜め下に向かって振り下ろした!!！」

「がはあああっ!!！」

DクウガRTの握るライジンググタイタンソードの刃からなぜか炎が迸り、クロコダイルオルフェノクは真つ二つに切り裂かれ爆発、青い炎と共に灰となったが、なぜか、灰となり崩れ落ちていくクロコダイルオルフェノクの背後に赤いギリシャ文字の が浮かんでい

た。

「っ、前の世界の暴走で、スイッチが入っちまったかあ？」

元に戻ったデイケイドは静かに呟いた、するとデイケイドの瞳が一瞬だが激情態のように鋭くなり、一瞬、黄色く輝いたが元に戻った。

「…………カイザになったのはたぶんローズだな…………まずいな…………。」

デイケイドは静かに呟くとファイズ達が戦っている方向に向かって走って行った。

その頃デイエンドは、廃墟と化した街の中で戦っていた、町と言ってもビルは崩れ鉄骨のみで勢いよくゆがんでいて、コンクリートの床だった場所にも砂が覆いかぶさっていて、先ほどまでいた街とは全く違う場所であった。

「まったく、せっかく一人で戦ってやってるんだ、本気出してくれよ。」

デイエンドはつまらなそうに言うとそばにいるセンチピードオルフェノクを切り裂くと、その奥にいた、ロブスターオルフェノクにデイエンドライバーの銃口を向け引き金を引き、銃弾を放った！！

「あうっ!!！」

「うわぁ!!！」

二人は体から火花を散らすと後ろに吹っ飛びゴロゴロと砂の上を転がった。

「さあて、止めだ。」

ディエンドはそう言ってカードを一枚ディエンドライバーに装填しようとしたその時!!！」

「うおあっ!!！」

「あがあっ!!！」

突然、変身が解除された計と蒼太がディエンドのそばに転がってきた。

「!大丈夫か!!！」

そこにディケイドも駆けつけ、ディケイドは二人に駆け寄った。

「返してもらいましたよ、ファイズギアと、大シヨツカーに届けられる途中で、開発者の家族に届けられた伝説の強化ギア、デルタプラスのギアをね。」

二人の転がって来た方から声が聞こえ、4人は一斉にそこを睨ん

だ、するとそこには、仮面ライダーカイザに変身していた男がいた、そして男の腕には、ファイズ、カイザ、デルタプラスのベルトがあり、右手のひらには、ファイズ達の携帯が握られていた。

「さて、終わりにしましょう。佐恵子くん、宅間くん、これを。」

男はそう言っつて、ファイズギアを、センチピードオルフェノクに、カイザギアをロブスターオルフェノクに放り投げた。

「さて、見せてあげましょう、上の上の戦いを。」

男がそう言っつと、センチピードオルフェノクも、ロブスターオルフェノクも人間態に戻りベルトを腰に巻き、二人にベルトを渡した男も腰にベルトを巻いた、そして

「……変身。……」

3人は静かに言っつとそれぞれの携帯をベルトのバックルに入れた。

COMPLETE

そして、ファイズ、カイザ、デルタプラスが現れた。

「ふざけんな！！それは俺のものだ！！返せ！！」

「悪いけど、父さんたちの思いが作ったデルタプラスは渡さない
！！」

計と蒼太は大声で叫んだ、すると二人の体に変化し、計はオオカミを模した灰色の怪人『ウルフォルフェノク』に、蒼太は竜を模し

た灰色の怪人『ドラゴンオルフェノク』に変身した。

第三話 『奪われたペルト』(後書き)

第四話 『逆転』

「うおおおおおおつ！！」

計は灰色の怪人、ウルフォルフェノクになると、オオカミのような咆哮を上げ、前方に向かって走った！！そして隣にいた蒼太も竜を模したドラゴンオルフェノクに変身すると声を張り上げて、ウルフォルフェノクと共に目の前にいるファイズ、カイザ、そしてデルタプラスに向かって勢いよく走った！！

「二人ともオルフェノクだとは思っていたが……。」

「まさかデルタの方はドラゴンだったとはな！！」

デイケイドとデイエンドはお互いの剣を構えると、先に走っている二人に遅れて走り出した。

「うおおおおつ！！」

ウルフォルフェノクはファイズに向かって走って行くと、メリケンサックのようになっていた右腕を突き出した！！

「あまい！」

ファイズは叫ぶと、グローブに似た武器のファイズショットを前方に突き出して、ウルフォルフェノクの攻撃を防いだ！だが

「だありゃあつ！！」

ウルフォルフェノクは力を入れ、ファイズの右腕を弾くと、左手をファイズギアに伸ばした、その時！！

「っ！！」

一発の銃弾がウルフォルフェノクの手の甲に命中、ウルフォルフェノクは後ろに下がった。

「その力をあなたに返すわけにはいかないわ……………」

カイザはカイザブレイガンを構えながらウルフォルフェノクに向かって言った、その時

「よそ見してんじゃねえっ！」

カイザに向かってデイケイドが飛びかかり、カイザの腹を手に握っている、ライドブツカー・ソードモードで切り裂いた！！

「計…………おまえはファイズの力を取り戻せ、それまで俺がカイザの相手はしてやる。」

デイケイドは静かに言うと、ライドブツカーを構えた。

「なぜ！俺はウルフェノクだぞ！！」

「オルフェノクだろうが何だろうが関係ない！俺がやりたいからやる、それだけだ……………」

デイケイドはウルフォルフェノクに向かって言うと、カイザの方を向き。

「それに、お前らは人のためにオルフェノクと戦ってるだから味方するのさ、オルフェノクであっても人と手を取り合おうとしているお前をな。」

「初めて会った人間にここまで言われるなんて、なんか、恥ずかしいが・・・やってやるかあっ!!！」

ウルフォルフェノクは叫ぶと、ファイズに変身した時のように左手首をスナップさせ、ファイズに向かって走り、デイケイドもカイザに向かって走って行った。

「たあっ!!！」

ドラゴンオルフェノクに変身した蒼太は目の前にいるデルタプラスに向かって、右腕の鋭い爪を勢いよく振り下ろした！

「あまい!!！」

デルタプラスはそう言って、右手に持ったデルタエッジを体の前に出し、ドラゴンオルフェノクの振り下ろした爪を防いだ。

「甘いですね、これで終わりです。」

デルタプラスはそう言って、左手に持っていた両端にデルタ型の刃がついた、槍、デルタハルバードを突き出そうとした、その時！！

ATTACK RIDE BLAST!!

数発のシアン色の銃弾がデルタプラスの顔面、背中、腰、膝裏、肘に命中、デルタプラスは後ろに下がった。

「悪いが邪魔させてもらった。」

ディエンドはディエンドライバーの銃口をデルタプラスに向けて、ゆっくりと歩いてきながら言った。

「君はなぜ、彼を助けたのです？彼はオルフェノクなのですよ。」

デルタプラスはディエンドに尋ねた。

「人間だ、人間だなんて関係ない。ただ俺は、こいつを助けたいと思ったから助けた、それだけだ。」

ディエンドはそう言ってディエンドライバーの引き金を引き、デルタプラスの足元を撃った。

「それに、人種差別をしているやつを見ると無性に腹が立つんだ！！同じ人間なのに、姿が少し違うだけで馬鹿にするようなやつらは俺は許さないっ！！」

「その考え、下の下以下ですねえっつ、甘すぎますっ！！」

デルタプラスはそう言って、手に持っていたデルタエッジとデル

タハルバードを消すと、デルタフォンのWEAPONのキーをタッチし、銃のような、デルタムーバー2が現れ、デルタプラスはそれを手に取ると、ディエンドとドラゴンオルフェノクを撃った！！

「くっ！！」

「よっと！！」

ドラゴンオルフェノクは腕を十字に組んで防御し、ディエンドは軽く後ろに跳び、デルタプラスの放った銃弾をかわした。

「さて、どうする。お前は戦うのか？」

「当たり前だ、俺は人として戦うんだ、オルフェノクも人間も関係ないもう一つの新しい人種としてともに寄り添っていけるために戦うんだ。」

ドラゴンオルフェノクがそう言うとディエンドはマスクの中で笑みを浮かべた。

「その考えはただの理想ですよ、オルフェノクも人間も時期に、我らが王の復活のための生贄となるのですから！！」

デルタプラスが言い放った、その時！！

「ぐああっ！！」

「くあぁあっ！！！！」

体から煙をあげながらカイザとファイズが転がってきた。

「そんなことは俺がさせない、俺が守る!!!」

そしてファイズとカイザの吹っ飛んできた方からウルフォルフェノクとデイケイドが歩いてきて、ウルフォルフェノクを手首をスナッブさせて言った。

「くっ……やってくれましたね……」

「もう容赦しないわよ……」

LADY

ファイズとカイザはゆっくりと立ち上がり、ファイズはライト型のファイズポインターにベルトのバックルについているミッションメモリーをセットし、カイザは双眼鏡型のカイザポインターにミッションメモリーセットした、そして二人は必殺技を放とうとした、その時!!

「させるかあああっ!!」

KAMEN RIDE KABUTO

ATTACK RIDE CLOCK UP

「うおおおおっ!!」

デイケイドとウルフォルフェノクは声を上げると、デイケイドはカブトに変身し、クロックアップを発動させ、カイザに向かって走

り、ウルフルフェノクは通常形態から、足が鋭く変化した疾走態に变身し、ファイズに向かって突っ込んだ！！

「はあああああつ！！！」

「だありやあああああつ！！！」

ディケイドカブトはライドブッカーを両手で持つとカイザに向かって縦にまっすぐ振り下ろすと、そのまま右から左に向かって振り、カイザの体を十字に切り裂くと、両腕を後ろに下げて、カイザの体を勢いよく突いた！！

「きやあつ！！！」

「もらった！！！」

Dカブトはそう言うその後ろに向かって飛んで行くカイザのベルトをつかむとむしり取るようにしてベルトをカイザの腰から引き離した、すると、一人の女性に戻った。

「それを返しなさい！！！」

女性は立ち上がると、ロブスターオルフェノクに变身、Dカブトめがけて走った！！

「止めだ………。」

Dカブトは静かに呟くとライドブッカーからカードを一枚引き抜き、ディケイドライバーに装填した！！

FINAL ATTACK RIDE KAKAKAK
ABUTO

「しねえっ!!」

ロブスターオルフェノクはディケイドめがけて手に持ったレイピアを突き出そうと勢いよく右腕を後ろに引いたその時!!

「はあっ!!」

ロブスターオルフェノクの右腕がつきだされる前にDカブトはロブスターオルフェノクの顔面に向かって右足を軸にして左回し蹴りを放った!!

「きやあああああっ!!」

カブトの回し蹴りが命中した瞬間、ロブスターオルフェノクは声をあげて爆発!青い炎に包まれ、灰となった。

ファイズに向かって行ったウルフォルフェノクはファイズの腹を左手で殴ると、右手をベルトに引っ掛けて一気に自分の方に向いて引っ張ってベルトをファイズの腰から外した、それと同時に、ファイズの変身が解け一人の男が現れるとその男は地面を転がった。

「くっ、返せえ、それは僕のものだああああッ!」

ファイズに変身していた男はゆっくりと立ち上がるとセンチピードオルフェノクに変身、声をあげてウルフォルフェノクに向かって

走った！

「これは俺のものだ……おまえになんか渡すかあああああああああああ！！！」

ウルフォルフェノクは右腕をセンチピードオルフェノクの顔面に向かって突き出した！そして

「うおらあああああああああああああつ！！！」

ウルフォルフェノクは声を上げると、センチピードオルフェノクの顔を連続で殴っていく、そして

「ぜいやあつ！！！」

声を上げると、センチピードオルフェノクの腹を右足でけり上げた！！！

「ぐはあつ！！！」

センチピードオルフェノクは後ろに吹っ飛ぶと青い炎に包まれ爆発、灰となった。

「あいつらはやってくれた！あとは俺たちだ！！！」

「俺が突っ込むから、お前は援護してくれ！！！」

デイエンドとドラゴンオルフェノクは、デイケイド達の戦い方を見ながらデルタプラスと交戦していた、そしてドラゴンオルフェノクの提案にデイエンドはうなずくと、カードを一枚デイエンドライバーに装填し、デルタプラスのやや斜め上に銃口を向けて引き金を引いた！！

ATTACK RIDE ILLUSION

デイエンドライバーからシアン色の光が飛び出し、その光は2つに分かれデルタプラスの背後に着弾すると、デイエンドになった。

「じゃあ、先に行くか！！」

3人のデイエンドはシアンエッジを握りしめ、デルタプラスに向かって走った！！

「はあっ！！」

デルタプラスの右斜め後ろにいた、デイエンドはシアンエッジを縦に振りおろす、デルタプラスはそれを屈んでかわす、だが左斜め後ろにいたデイエンドがデイエンドライバーから銃弾を放ち、デルタプラスの背中を撃ち抜いた！！

「くっ！！」

デルタプラスは左斜め後ろのデイエンドを睨んだ、その時！！

「よそみはいけないな！！」

正面から走っていたデイエンドの本体がシアンエッジをSの字に

振って、デルタプラスのボディを切り裂いた！！

「今だ！！」

「おお！！」

そしてディエンドが大声で叫ぶと、ドラゴンオルフェノクは一気に走りだすと、龍の顔を模した爪や体にあった重厚な鎧のような皮膚がはじけ飛び、攻撃型の魔人態から、スピード重視の龍人態に変身、ダメージを受けよめいているデルタプラスに一気に接近すると、デルタプラスの顔面を右手で殴り、左手でベルトを引っ張って外した。

「っし！」

ディエンドがガッツポーズをとると、ディケイドと計が2人のそばにやってきて、それと同時に分身した2人のディエンドは消えて行った。

「よくもやってくれましたねえ……………」

デルタプラスに変身していた男は静かに言うと立ち上がった、そしてディケイド達を睨んだ。

「あなた方の考えは下の下以下であまいものです、ですが強さは上の中と言ったところですね……………ですが私には勝てません……………見せてあげます。上の上の力と言つのを！！」

男がそう言うと、バラに包まれ、男は体全身が白く、バラに似た頭部を持った、ローズオルフェノクが現れた。

「あいつはかなり強い……。」

「今基地で待機している仲間と俺たちの同時攻撃にも耐えた上に、そいつからカイザギアを奪ったのもあいつだ。」

蒼太と計はローズオルフェノクを睨んで言った。

「……どの世界でもあの野郎は、オルフェノクで上級クラスを行ってやがんのか……。」

「愚痴る暇があるならさっさとあいつを倒すぞ!!」

デイケイドがそう言うと、3人はうなずき、計と蒼太は腰にベルトを巻きライダーに変身しようとした、その時!!

「変身はさせません!!」

ローズオルフェノクは叫ぶと、額から無数の真っ赤なバラを放った!!その場らは変身しようとしている蒼太と計に向かって飛んで行った!!だが、ディエンドとディエンドは二人の前に出て二人を庇った。

「あがつ!!」

「ごあつ!!」

デイケイドとディエンドの体から火花が散り、二人の変身が解除された!!

「ぐっ……あの程度で変身が……。」

「大シヨツカーの野郎、また改造しやがったな……。」

剣と翔はゆっくりと立ち上がりながら言った。

「さて、止めを刺しましょう。」

ローズオルフェノクはそう言ってゆっくりと4人に近寄った、その時……！

「ぬっ……！」

突然、数発の銃弾がローズオルフェノクに命中し、ローズオルフェノクは後ろに下がった、その瞬間どこからともなくサイドカーが走ってきてサイドカーはローズオルフェノクを跳ね飛ばした……！

「大丈夫か！計！蒼太……！」

サイドカーに乗っていた人物はヘルメットを脱ぐと、計たちに駆け寄った、そしてそれと共に銀色のロボットが上空から降りてきた。

「雅人！なんでここに。」

計はサイドカーに乗っていた青年に尋ねた。

「お前らの帰りを待ってたら勝手にオートバシンが動き出して、俺はそれを追ってきたんだ。」

雅人と呼ばれた青年が計の質問に答えると、剣が雅人に声をかけた。

「あんたがこの世界のカイザか？」

「ああ、そうだが、君は？」

「俺は宮本剣、仮面ライダーだ。」

剣はそう言うとカイザギアを雅人に渡した。

「こいつは俺たちに協力してくれてる、さっきもお前のギアを取り返してくれたんだ。」

若干、警戒していた雅人は計の一言で警戒を解くと、笑顔になり剣の握るカイザギアを受け取った。

「礼を言う、助かった。」

雅人は、そう言って腰にベルトを巻くと、剣を中央に剣の左側に翔と蒼太が立ち、右側に計と雅人が立った。

「さあて、行くぞみんな！！！」

剣の声に、全員「おう！！！」と応え変身しようとした、だが、ロズオルフェノクはそうはさせまいと5人に向かって行った！！しかし、

「うおっ！！！」

オートバシンがタツクルをくわわして足止めをした、それを見た
5人は一斉に

「「「「変身っ!!」「」「」「」

と叫んで変身した!!

第五話 『夢の守り人』 (前書き)

今回でファイズ編は終了します。

第五話 『夢の守り人』

廃墟と化した街の中で横一列に立っている5人の男たちがいた。そして、その男たちは自分たちがいつも行っているアクションを行った。

まず、一番右にいる黒髪の男はターン式の黒と金の携帯電話を開けると、『913』とキーを押し、最後にENTERキーを入力、携帯からは『STANDING By』と音声が生じ、彼は携帯を閉じると胸の前に携帯を持ってきた、黒髪の男がその動作をした時、その男の左隣にいた茶髪の男は銀と赤の形態を開け『555』とキーを入力しENTERキーを押し、『STANDING By』の音声と共に携帯を閉じて携帯を握る腕を上空にあげた。

さらに茶髪の男がその動作をし始めたときに、一番、左端にいた男はiPhoneのようなものを取り出して、その液晶にあるのボタンをタッチし、『333』とキーを入力、『STANDING By』の音声が生じるとiPhoneを軽く放り投げ、キャッチした、それと同時にその隣にいた青髪の男は手に持った青い銃にカードを一枚装填ポンプのように銃口を前方に押すと、銃を握った右腕を上空に上げ、一番真ん中にいた男は、ベルトのバックルを開くと、そこにカードを装填した、そして5人は一斉に

「「「「「変身っ！」「」「」「」

と叫んだ！！

携帯を持った3人の男たちはベルトのバックルに携帯を入れ、青髪の男は銃の引き金を、真ん中にいた男は開けていたベルトを閉じた！！すると

COMPLETE

KAMEN RIDE DECADE

KAMEN RIDE DIEND

音声が鳴り、5人の男たちの姿が一斉に変わった！！

黒髪の男は金色の光に包まれ、体が金と黒でギリシャ文字の模したマスクをつけ目の色が紫に輝く仮面ライダーカイザに、その隣にいた茶髪の男は、赤い光に包まれ、体が銀と赤で、ギリシャ文字の を模し、瞳が黄色に輝く仮面ライダーファイズに、その隣にいた男は、体全身がマゼンタと呼ばれる色の強いピンクのような色の戦士になると瞳が緑色に輝き仮面ライダーディケイドに、青髪の男は体全身がシアンと呼ばれる薄い水色のような色をした戦士になると、上空にある四角いカードのようなものが体に突き刺さり、仮面ライダーディエンドに変身、一番右端にいた男は、体全身が青と白に包まれた、ギリシャ文字の を模したライダー、仮面ライダーデルタプラスに変身した。

「さあて、行こうかみんな！！」

ディケイドは腰にある本のような形のアイテム、ライドブッカーをカードのように変形させ、4人に向かって言い、4人は「おう！」と言って頷いた。

そしてカイザは腰についてある、 を模した銃と剣が合わさった『カイザブレイガン』をはずすと、握り手の一番底にベルトのバックルから外した四角い板、『ミッシヨンメモリー』をセット、すると、黄色い刃が現れ、カイザはカイザブレイガンを構えた。

ディエンドはカードを一枚、銃の形をしたディエンドライバーに

装填し引き金を引くと

『ATTACK RIDE SLASH』の音声と共に、銃口から刃が青い剣が現れ、ディエンドがそれを握ると刃がシアン色に輝いた。

デルタプラスはベルトのiphone型の携帯、『デルタフォン』の液晶に写っている『weapon』のキーをタッチし『EDGE』とハルバードをタッチ、すると刃先が青いシアンエッジに似た『デルタエッジ』と両端がデルタの刃になっている槍、『デルタハルバード』が現れ、デルタプラスはエッジを右手に、ハルバードを左手に握った。

そしてすべてのライダーは、目の前で銀色のロボット、オートバシンと交戦している体全身が白く、バラの花びらのような顔をした怪人、ローズオルフェノクに向かって走って行った！！

「じゃまだ！！」

ローズオルフェノクは叫ぶとオートバシンを突き飛ばした！、オートバシンはバランスを崩し、ディケイド達の方に倒れてくるが彼らはそれを飛び越えると、ローズオルフェノクに向かって走っている、ファイズはオートバシンの胸にあるボタンを押し、バイクに変形させると、バイクのグリップを引き抜いて刃先の赤い剣、『ファイズエッジ』を構え、ローズオルフェノク目掛けて走って行った！！

「たあっ！！」

デルタプラスはローズオルフェノクに向かって走ると、ローズオルフェノクの体めがけて手に握ったデルタエッジとデルタハルバードを十字に振った！！だがローズオルフェノクには効果がなく、彼はデルタプラスの体を殴りつけ、後ろに吹っ飛ばした！！

「だったらこれでどうだ!!」

EXCEED CHARGE!!

デルタプラスは、声を上げるとデルタフォンの『FINISH』のキーをタッチ、デルタエッジにエネルギーがたまっていき、デルタは地面に着地すると、真下から振り上げるようにデルタエッジを振った、するとデルタエッジから青い閃光放たれ、その閃光は地面を突き進んでいき、ローズオルフェノクの体に命中、ローズオルフェノクは青い柱の光に体を拘束されてしまった、そしてデルタプラスは一木に近づくと、ローズオルフェノクの体を三角形に切り裂こうとした、だが!!

「うおおおおおっ!!」

デルタプラスがデルタエッジを振り下ろそうとした瞬間、ローズオルフェノクは気合いを入れて青い柱の光を破壊、それと同じタイミングでデルタエッジがローズオルフェノクに命中、ローズオルフェノクの体がバラのようになって消えると、デルタプラスの後ろに現れた、そしてローズオルフェノクがデルタプラスに向かって手をかざすとデルタプラスの体が何かに押され、デルタプラスは勢いよく後ろに吹っ飛び、柱に背中を殴打した!!

「今度はこれをくらえっ!!」

ATTACK RIDE SLASH!!

ディケイドがローズオルフェノクに向かって飛び掛かり、先端が赤く輝くライドブッカー・ソードモードを振り下ろした!!だが

「あまい!!」

ディケイドの振り下ろしたライドブッカーはローズオルフェノクの右肩に突き刺さった、だがローズオルフェノクには大したダメージがないのか、声を上げるとローズオルフェノクはディケイドの首をつかんだ!

「ぐっ!!」

そしてローズオルフェノクはディケイドをそのまま持ち上げるとディケイドを後ろにあるビルの柱に向かって投げつけると、その途中でバラの花びらを放ちディケイドを攻撃!!ディケイドの体から火花が飛び散り、ディケイドはビルの柱にたたきつけられた。

「まだ俺たちがいるぞ!!」

EXCEED CHARGE

ATTACK RIDE CROSS ATTACK

ディケイドが壁にたたきつけられた瞬間、カイザブレイガンを構えたカイザと、目が赤くてクワガタムシを模した体が青いライダー、仮面ライダーガタツクと、ガタツクとおなじ、クワガタを模した体が赤い、仮面ライダークウガがローズオルフェノクに向かって飛びかかった!!

「うりゃあっ!!」

そして、カイザは必殺技のカイザスラッシュを、クウガとガタツクは右足を伸ばし、必殺技のマイティキックとライダーキックを放

ちディエンドは、ローズオルフェノクの背後からディエンドライバ
ーを撃った！！

「連携としてはいいですが、中の下の攻撃だ！！」

ローズオルフェノクはそう言い放つと、ローズオルフェノクの体
がバラのようになり、4人の攻撃をかわした、そしてガタツクと
クウガ、そしてカイザの背後に現れると、3人に向かって右腕を、
ディエンドには左腕を突き出し4人を壁にたたきつけた！！その際
クウガとガタツクは消滅した。

「最後は俺だ！！くらえっ！グランインパクトオオツ！！」

ファイズは声を上げると、ローズオルフェノクに接近！ローズオ
ルフェノクの腹に向かって赤く発行する右腕を突き出した！！

「があっ！！」

ローズオルフェノクは回避することができずに、ファイズのグラ
ンインパクトをもろに受け、後ろに下がった！！

「なかなか・・・だがその程度では私は倒せません。」

ローズオルフェノクはそう言って腹を覆っていた両手を下ろした、
どうやら、両腕で防がれていたようである。

「これで散れ！！」

ローズオルフェノクは叫ぶと右腕を一気に突き出した！！

「くおっ!!」

突然、ファイズの体は後ろに吹っ飛び、デイケイドの倒れている柱付近まで吹っ飛び、柱のそばで、地面に激突した。

「何て野郎だ!!体がいじくられ過ぎている……。」

デイエンドは壁を叩くと叫んだ。

「どうした?もう終わりですか?あなた方の動きなど既に見切っています、いい加減にあきらめたらどうですか?」

ローズオルフェノクはライダーたちを見ながら言った、だが

「諦めるか!!」

デイケイドとファイズが声をあげて立ち上がった。

「まだこつちには切り札がある!それに動きが見切られてるなら、早く動けばいい……計、アクセルに変身できるか?」

デイケイドはゆっくりと立ち上がると、ファイズに尋ねた。

「もちろんいけるぞ!!」

「よし、超高速で駆け抜けあいつに強烈な一撃を与える……行くぞ!!」

KAMEN RIDE KABUTO!!

ディケイドは叫ぶとディケイドライバーにカブトのカードを装填してカブトに変身した。

「うっし、行くか!」

ファイズは、左腕についている、腕時計のようなアイテム、ファイズアクセルについているミッションメモリーをはずすと、ファイズフォンの中央に入れた、すると

COMPLETE

と、音声が鳴り、ファイズの体が灰色になり、瞳が赤くなる、さらに胸のアーマーが肩まで移動し、ファイズはアクセルフォームに変身した。

「行くぞ!」

「おっ!」

ATTACK RIDE CLOCK UP!!

START UP!!

ファイズの叫びにDカブトはうなずくと、カードを一枚ディケイドライバーに装填、ファイズはファイズアクセルのスイッチを押し、そして二人は超高速状態に入ると、一気にローズオルフェノクに向かつて走って行った!!そして

FINAL ATTACK RIDE KAKAKAK
ABUTO

EXCEED CHARGE

「行くぞおっ!!」

「おっっ!!」

ファイズアクセルは声を上げると上空にジャンプ、そして、右足をローズオルフェノクに向かって突き出した!!するとローズオルフェノクの周りに赤いドリルのようなものがいくつも現れ、ファイズアクセルは高速で移動しながらその赤いドリルに潜っていき、必殺技の強化型クリムゾンスマッシュを放った!!

そしてファイズが最後の蹴りを終わると、Dカブトが飛び上がって跳び蹴りタイプのライダーキックをローズオルフェノクに向かって放ち、ファイズは元に戻りDカブトもディケイドに戻った。

TIMEOUT

REFORMATION

「まだまだ、死に至るダメージではありません。」

ローズオルフェノクはまだ生きており、体かの所々が灰化しているがすぐに元に戻った。

「もう手加減する必要はありませんね・・・死になさい!!」

ローズオルフェノクは声を上げるとファイズディケイドに向かって右腕を突き出し、ディケイドとファイズを吹っ飛ばそうとした、
だが、

EXCEED CHARGE

突然、巨大な三角形の盾を構えたデルタプラスが二人の前に立ち、ローズオルフェノクの放った衝撃波のようなものを防ぐと、デルタプラスは、盾を放り投げ、ローズオルフェノクの体を切り裂いた！！

「がはっ！！」

連続で必殺技を受けたローズオルフェノクは耐えきれなくなったのか、地面に膝をついた。

「やってくれたな・・・だが！！」

ローズオルフェノクは立ち上がると体全身からバラを一気に放ち、5人のライダーを一気に吹っ飛ばした！！

「どうした？これで終わりか？」

ローズオルフェノクはライダーたちを見ながら先ほどまでとは違う、強い口調で言った。

「ふざけんなよ、この程度で終われるかよ！！」

デイクイドはそう言うと、ゆっくりと立ち上がった。

「他世界から来た、あなたがなぜ、これほどまでこの世界に肩入れするのですか？」

「気にいらねえんだよ！！自分たちよりも力劣っているものを支配するお前らの考えが、だから肩入れするんだ、こいつらを見ている。」

デイケイドは後ろを振り返り、ファイズ、デルタプラス、カイザをみると

「人間として生きている、人とオルフェノクが手を取り合って共に戦っている、それが気にいった、だからそれを邪魔するお前を倒すんだ。」

「そうですか、良いでしょう、ならばあなた方を倒し、王の器にしてあげましょう。そうすれば、この世界は我々のものです。」

ローズオルフェノクが静かに言うと、甲高い金属音が響いた。

「ふざけんな、絶対にこの世界は支配させねえ、俺はこの世界を守る、この世界の人の夢を守る！！」

ファイズは、そばにあった柱を殴りつけるとゆっくりと立ち上がった。

「俺だって、守ってやるよ、人とオルフェノクが共に歩める未来のために！！」

「あまり戦いたくはないが、俺が人として行き、オルフェノクと人間なんて関係ないそんな世界のために、俺は戦う！！」

デイケイドとファイズの叫びに全員の士気が上がり全員、立ち上がった。

「さあて、切り札を使いますか。」

デイケイドはそうつぶやくとデイケイドライバーから4枚のカードを取り出した、すると、黒いカードが光り輝き、ファイズのカードが姿を現した。

「あいつを倒すには、一成攻撃を仕掛けるしかない、全員の力を一点に集中させるんだ。」

ファイズがそう言うと、デイケイドが金色のカードを取り出し、ドライバーに装填した。

「良いか!!チャンスは一瞬だぞ!!誰も外すなよ!!」

FINAL FORM RIDE F A F A F A F A I

Z

「ちよつとくすぐつたいぞ!!」

デイケイドはファイズに向かって言うと、ファイズの背中に両手を当て、両手を開くような動作をした、するとファイズの体が宙に浮いて、巨大な銃に、ファイズのファイナルフォームライドFFR形態の、ファイズブラスタ―に変形した!!

「えっ!!」

「銃になったああっ!!」

「まじかよ……。」

デルタプラスとカイザは冷静な驚き方をし、変形されたファイズ自身は声をあげて驚いた。

「それよりもあちらさんは、待ってくれてるんだ、さっさとけりつけちまおうぜ。」

デイエンドはそう言ってデイエンドライバーを左手に持ち、シアンエッジを右手に持った。

「俺と雅人が先に突っ込んであいつの動きを止める、そのあと蒼太が攻撃して、止めは剣と計が刺せ!!!」

デイエンドの指示に全員うなずくと、カイザはカイザブレイガンを、デルタプラスはデルタムーバーVer2を構え、デイケイドはファイズプラスターを手にとった。

「行くぞ!!!」

「ああ!!!」

D
FINAL ATTACK
RIDE
DI
DI
DIEN

EXCEED CHARGE

デイエンドはカイザに向かって叫ぶと、デイエンドライバーにカードを装填、カイザもそれに頷き、カイザフォンを開けENTERキーを押した、そして

「はっ！！」

ディエンドはディエンドライバーの引き金を引き、ディエンドの顔を模したシアン色のマークを放ちカイザは、カイザブレイガンの引き金を引き、黄色い閃光を放った！！

そしてディエンドの放ったマークとカイザの放った閃光はローズオルフェノクの体に命中！！二人の放ったマークと閃光はローズオルフェノクを拘束した！！

「うおおおおおっ！！」

「はあっ！！」

そしてカイザは、金色に輝く 光に包まれ、ローズオルフェノクに向かって突っ込んでいき、ディエンドは、一気にダッシュ、そしてカイザはカイザブレイガンを背後から、正面に向かってカイザブレイガンを振る、『カイザスラッシュ』を放ち、ディエンドは、相手に一気に接近しS字に切りつける、シアンストリームを放った！！

「がはっ！！」

二人の必殺技を受けたローズオルフェノクは体から青い炎を上げつつ、後ろにのけぞる、すると二人の斬撃が命中した箇所から、灰がこぼれおちていた。

「今だ！！」

「ここを狙え！！」

カイザとデイエンドはローズオルフェノクの首元にお互いの武器の刃を突きつけると、デルタプラスの方に向かせた、デルタプラスはうなずくと、デルタフォンの『FINISH』のキーをタッチ、『EXCEED CHARGE』の音声と共にデルタプラスはデルタムーバー2をローズオルフェノクに向けると引き金を引いた！！

デルタムーバー2からは青と白を足したような光が飛びだし、ローズオルフェノクに命中すると、それはドリルのようになって、そしてデルタプラスは飛び上がった

「でやああああああああああつ！！」

ローズオルフェノクの体に突き刺さったドリルに蹴りの態勢で突撃する必殺技『ルシファーズハンマー？2』を放った！！

「ぐはあつ！！」

そしてデルタプラスがローズオルフェノクの背後に着地した瞬間、3人はローズオルフェノクから離れた！！

「っしや！！とどめ・・・行くぜっ！！」

FINAL ATTACK RIDE F A F A F A F
A I Z

そしてデイケイドは声を上げると、ファイズブラスターの銃口を体から赤と青の炎を出しながらも、耐えているローズオルフェノクに向けると、引き金を引いた！！すると、ファイズブラスターから赤いドリルのようなものが飛び出し、ローズオルフェノクの体を拘束、そのあと、真っ赤に光り輝く極太のビームがローズオルフェノ

クの体を貫いた!!

「まさか、私が負けるなんて!!あなた方の強さは上の上以上のようだ………」

極太のビームが止まるとローズオルフェノクは、赤と青の炎に包まれ、灰と化しながら言うと、最後に両腕を広げ、

「ぐわあああああああつ!!」

声を揚げ、爆発、完全に灰となった。

「終わったか。」

ディケイドはそうつぶやくとファイズブラスターを上空に放り投げた、そしてファイズブラスターの変身が解け、ファイズは着地した。

そして5人は集まると一成に変身を解いた……。

それから数時間後……。

「いいのか？レジスタンス部隊のやつらが、オルフェノクの支配する町に来ていて。」

剣たちは、バイクショップがある街まで戻ってきていたのだ、しかも計、蒼太、雅人の3人は見送りに来てくれていた。

「気にすんな、すぐに戻ったらいい。」

計は笑顔で言った。

「それにあいつらは俺たちがオルフェノクになれることを知らない、危なくなったらオルフェノクになるだけさ。」

雅人がそう言うと、剣たちは目を丸くし、

「お前ってオルフェノクだったの？」

翔が尋ねた。

「ああ、ホースオルフェノクだ、最初はちよつと癖のある性格の草加ってやつがなつてたんだが……そいつがある戦いで死んで、変わりにオルフェノクでありながら、こいつらと協力していた俺がカイザに変身したんだ。」

雅人がそう言うと、突然、計の携帯が鳴りだした。

「俺だ、桜かどうした？なに！オルフェノクの部隊が！！分かったそっちに行く！！！」

計は声を上げると、ファイズフォンの電源を切った。

「帰るぞ！！レジスタンス部隊を、ライオトルーパー部隊が襲撃しているらしい！！」

計はそう言って、ヘルメットをつけた。

「わかった、さつさと戻った方がいいな、俺がジェットストライカーで先に戻る！！」

蒼太はそう言って、デルタプラスに変身、デルタフォンのV E H I C L Eをタッチし、ロケットのような大型バイク、ジェットストライカーを呼ぶとそれに乗った。

「じゃあな、剣、翔、この世界を救ってくれてありがとう。」

デルタプラスは剣と翔に向かってサムズアップすると、ジェットストライカーを走らせた。

「俺も戻っている、あいつらを倒すには、一成放射ができる俺もいた方がいいからね。」

雅人はそう言って乗ってきていた、サイドバツシャーに跨ると、剣と翔にサムズアップして、サイドバツシャーを走らせた。

「じゃあ、俺も行くか。本当に助かったよ、ありがとな、剣、翔。」

計はそう言って剣と翔に手を差し出した。

「いや、仲間を助けるのは当然だからな。」

剣は軽く笑うと、計の手を握り、翔は二人の手に自分の手を乗せた。

「仲間か……俺たちは他人で初めて会うのに、なぜか始めてなんて感じがしないな……一緒に戦ったからか？」

計がそう言うと翔は軽く笑って

「もしかしたら別の世界で、俺たちは仲間だったのかもな。」

と言うと計も笑って頷いた。

「計、アークを絶対ぶっ飛ばせよ、お前が言っていた人々の未来を守るために。」

剣はそう言って、握っていた手をのけると、左腕を曲げ計の前に翳した。

「ああ。絶対に負けない！だからお前もこれからの世界で死ぬじゃないぞ。」

計はそう言うと右腕を曲げ剣の腕にぶつけた。

「わかってる、じゃあな。がんばれよ。」

「おう！元気でな。」

剣と計は腕を離すと、翔と一緒に拳を作って3人は拳を合わせた。

そして計はオートバシンの乗るとオートバシンを走らせた。

「さあて、俺たちも行くか、次の世界に。」

「ああ。」

剣と翔はそう言ってバイクショップの中に入った、そして剣がドアを閉めた瞬間。額縁の絵が変化。

「はあっ!?!」

「ギャグパートか? 次の世界は……………」

剣と翔は、不思議そうな顔をして、額縁の絵を見ていた。

その絵は、三日月をバックに金色の鎧を着た、ライダーが立っているものであったが、ライダーの後ろにはなぜか、通天閣があり、金色の鎧をつけたライダーの手にはタコ焼きが握られていた……………。

「キバの世界?」

「みたいだな……………」

剣と翔はため息をついた。

第五話 『夢の守り人』（後書き）

ファイズ編終了です!!

今回オリジナルライダーを提供してくださったOOTGLST
STPBさんありがとうございました!!これからもよろしくお願
いします。

さて、次回はギャグ路線のキバです。お楽しみに!!

第一話 『浪花の仮面ライダー』（前書き）

久しぶりに更新です！

キバ編は2話で終わりです。

第一話 『浪花の仮面ライダー』

剣と翔がファイズの世界を後に、次についたのはなぜか日本の大阪が舞台のキバの世界であった、だがついたその日はすでに夜で、剣たちはローズオルフェノクとの戦闘の疲れもあったため、ついた初日はすぐに寝て休んだ、そして次の日……

「朝か……。」

窓から朝日が差し込み、剣は目を開くと上体を起こした。

「くそ、ファイズの世界は冬で、キバの世界は、夏かよ、季節ぐらい統一してくれ……。」

剣は携帯を見ながらに呟いた、なぜなら、前の世界のファイズの世界は冬で、今回訪れたキバの世界は夏だったからである。

ファイズの世界は12月の中旬ぐらいで、かなり寒い時期、それに対してキバの世界は8月中旬、暑い時期である、つまり冬の服装では暑かったため、剣は上半身だけ裸になって寝ていたのだ。

「それにしても、やけに狭いな。」

剣は携帯を置くと、ベットを見渡した。すると

「うんん……あつ……剣君……おはよ。」

剣の隣で、タオルにくるまって寝ていた、人物が剣に向かってあいさつした。

「ああ、おはよう……ってあれ？」

剣はその人物に笑顔で挨拶を返すが、おかしいことに気がついた。そう、その声は女性で、しかもその女性はほぼ裸の状態で剣のベツトに潜り込んでいたからである。

「久し振りだね剣君。」

その人物、坂本恵は起き上がると剣に向かって言った、そして

「はあああああああつ!!?」

剣が大声で叫んだ、すると、剣の部屋のドアが勢いよく開き、デイトンドライバーを構えた翔が入ってきた。

「大丈夫か!!!け……ん……。。。」

「翔!!!」

「……………すまん邪魔した。ごゆっくり……………」

翔は、静かに言うと剣の部屋のドアを閉じた、そしてしばらくする

「私を置いて何勝手に別の世界に行ってるのよおおおおおおお
おおおつ!!!」

RIDER KICK

「あんぎゃあああああああああああああつ!!!」

恵の大声と、ゼクターの電子音、そしてものすごい爆発音と剣の悲鳴が響いた。

「いてえ〜……………」

顔が大きくはれている剣は静かに言うと、カップに入っているコーヒ―をすべて飲み干した。

「剣君が悪いんだから……………私を置いて勝手に別のところに行つて……………」

「それは悪かったよ……………だが、心の整理はできただろ？」

剣はそう言うと、カップを机の上に置いた。

「うん、剣君が死んで、あなたがほかの世界に行つてから、3ヶ月はたつたから……………まだ完全ではないけど、少しずつなら……………」

「そうか……………よし、じゃあ早速この世界の探索に行くかな！」

剣は立ち上がると恵の肩を叩いた。

「俺は別で調べるよ、剣と恵は一緒に行動しろ。」

剣が何かを言おうとしたその時、突然女性の声が響いた。

「っ！あつちだな・・・行くぞ！恵！！」

「えっ！ちよつと待って！！」

剣は声のしたほうに向かって走り、恵もそのあとを追った。

剣たちが走ってくるそこはテントウムシを模したレディバクファンガイアが、一人の女性を襲っていた。

「ちよつと！はなしてえな！！」

髪が黒く、背中まである、白銀のドレスを着た女性は、レディバクファンガイアの頭を何度もたたきながら言った。

「おらっ！！」

剣はそれを見るとレディバクファンガイアの後頭部を蹴り飛ばした！！

「何が人間とファンガイアは仲間だ・・・おもつくそ、人を襲ってるじゃねえか。」

剣はレディバクファンガイアをにらみながら両手をパンパンとたたいた。

「恵！この人を！！」

「わかった！！」

恵はうなずくと、女性をその場から離れた。

「くっ、貴様・・・ネオファンガイアの俺たちを攻撃しやがったな・・・。」

レディバクファンガイアはゆっくりと立ち上がりながら言った。

「ネオファンガイア？と、言うことは、ファンガイアとは別もんか・・・まあいい、人を襲ってたんだ、倒させてもらう。」

剣はそう言って、ディケイドライバーを腰に巻いた。

「変身！！」

K A M E N R I D E D E C A D E

ベルトから電子音が鳴り、剣はディケイドに変身した。

「貴様何者だ！！」

「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ！！」

デイクイドはそう言うと、ライドブッカー・ソードモードを縦に振りおろし、レディバクファンガイアの体を切り裂いた!!

「があっ!!」

レディバクファンガイアは体から火花を散らして、後ろに飛んだ。

「くそ……なめるな!!」

レディバクファンガイアは声を上げると、デイクイドに向かって手のひらから、金色の粒子のようなものを放った!!

「効くか!!」

ATTACK RIDE BARRIER

デイクイドはそう言って、カードを装填、デイクイドライバーからマゼンタ色の光が放たれ、それはドーム状に広がり、レディバクファンガイアの放った、攻撃を防いだ。

「これで終わりだ!!」

ATTACK RIDE BLAST!!

デイクイドはデイクイドライバーにカードを装填し、ライドブッカーガンモードを構えると、引き金を引いた、するとライドブッカーからマゼンタ色の銃弾がいくつも放たれ、レディバクファンガイアに命中、彼を吹っ飛ばした。

「今のは痛かったぞ……痛かったぞおおおおおっ!!」

「！」

レディバクファンガイアは声を上げると立ち上がって、ディケイドに接近、ディケイドに向かって頭突きをした！！だが

「そんなつまらん技で俺を倒せるかああっ！！」

A T T A C K R I D E S L A S H

ディケイドはライドブツカーをソードモードにすると、ディケイドライバーにカードを装填、赤く輝くライドブツカーを、十字に振りレディバクファンガイアの体を切り裂いた！！

「そ・・・そんな・・・！！！」

レディバクファンガイアの体は胴体と左腕が切り飛ばされ、地面に倒れた。

「あつけない最後だったな。」

ディケイドはライドブツカーをブツカ モードにして腰に戻した。

「た、たのむう・・・た、たすけてくれえ・・・。」

レディバクファンガイアは虫が鳴くような、小さな声でディケイドに向かって言うと、ガラスのように粉々に砕け散った。

「終わったか。」

ディケイドは静かに呟いて変身を解こうとした、その時！！

「やっと見つけたでえっ!!」

どこからともなく声が聞こえ、ディケイドは声の響いた方を睨んだ、するとそこには、赤いマントを着ていて金色の鎧をつけ、腰には同じく金色の剣をつけ、長い黒髪を括っている青年が立っていた。

「お前は？」

「俺の名前は、赤城渡、あんたディケイドやる？この世界の破壊するためにやってきた、ネオファンガイアの仲間なんやってなあ？」

「ちよつとまで！なんのことか、さっぱりだ!!」

ディケイドは渡に向かって言った。

「とぼけてもあかん!!お前の噂はいろいろ聞いてるんや、これ以上、俺の大阪で好き勝手させへん……こい！キバット!!」

渡は声を上げると右腕を上にあげた、するとどこからともなく、金色の蝙蝠に似た、キバットバット三世が飛んできた。

「あいつがディケイドだな、悪そうな感じじゃないが……倒すのか？」

キバットは渡に向かって尋ねた。

「あいつが何者かは、この戦いでわかる、まずはあのピンクの戦意を喪失させてから話を聞く!!」

「おい！誰がピンクだ！！この色はマゼンタだ！！」

「はあ？かわらへんやろ！！ともかくキバット！気張っていくで！！」

渡はキバットをつかむと叫んだ。

「変身！！」

そしてキバットに自分の左手をかます、すると腰に赤いベルトが巻かれ渡はそのままベルトにキバットを挿入、渡の体がガラスのようなにもに包まれると、それが一気に割れ、体が赤く瞳の黄色い、仮面ライダーキバに変身した。

「お前がキバだったのか・・・おもしれえ、似た能力のこれに対抗してやる！！」

K A M E N R I D E K U U G A

ディケイドは、ディケイドドライバーにカードを入れると、仮面ライダークウガに変身した。

「姿が変わりよった。」

キバはそう言って、ゆっくりと構えた。

「んじゃ、こっちから攻めるでえ！！」

キバは、ディケイドクウガに向かって走った！！

「たあっ!!」

「あだっ!!」

キバはDクウガに向かって右腕を突き出しDクウガは左腕を突き出して、キバの拳を殴った。

「っ！何っつ、馬鹿力やキバの拳はじきよった。」

キバは距離を置くと、右手を触りながら言った。

「力があるんなら、こっちもパワーでいくでえっ!!」

キバはそう言うと、ベルトの腰にある紫色の笛のようなものをキバットに噛ませ、笛を吹かせた!!

『ドツガハンマー』

キバットがそう言うところからともなく、紫色のハンマーが現れる、キバがそれを持つと、キバの体が銀色と紫色の鎧に包まれ瞳が紫に光り輝き、ドツガフォームに変身した。

「おらっ！これでぶっ叩いたる!!」

キバは叫ぶと一気にDクウガに接近、Dクウガの腹に向かってハンマーを振り、殴りつけると、同じところを3度叩いた!!

「があっ!!」

Dクウガの体から火花が散り、Dクウガは地面を転がるがゆっく

りと立ち上がった。

「やりやがったな……お返した!!」

FORM RIDE KUUGA TITAN!!

Dクウガはデイケイドライバーにカードを装填、銀色に紫のラインのある鎧をもった、タイタンフォームに変身すると、ライドブツカーソードモードをタイタンソードに変えた。

「なんや、ドツガと似たような姿になったみたいやけど……スピードでかく乱したる!!」

『ガルルセイバー』

キバはベルトにある、青い笛をキバットに吹かせた、すると青く輝く剣が、キバの前にやってきてキバがそれを持つと、キバの姿が変化、体と瞳が青くなり、右肩のみが鋭く尖った、ガルルフォームへと変身した!!

「いくで!!」

キバはそう言って一気に走った!!

「くらえっ!!」

キバは叫ぶと、Dクウガに向かって手に持ったガルルセイバーを振り下ろした、キバの振ったガルルセイバーはDクウガに命中すると火花を散らす、だが

「きくかつ!!」

Dクウガはそのままタイタンソードを振って、キバの体を切り裂いた!!

「があっ!!」

キバは後ろに吹っ飛ぶが体を回転させ、体制を整えた。

「なんちゆうパワーや……ドツガとおなじやな……」

「渡、ここはタッチちゃんを呼んだ方が……」

キバットはキバに向かって静かに言った。

「しゃないな、時間かけてもなんも良い事ないもんな。っしゃ、こい、タツロット!!」

キバは、そう言ってベルトの金色の笛をキバットに吹かせた!!

『きてくれ、タツちゃああんっ』

キバとがそう言うと、一瞬で金色の小型の龍が飛んできた、そしてその龍はキバの左腕にとりつくくと、キバの体が光り輝き、金色の鎧を身にまとい赤いマントを背中になびかせている、キバの最終形態であり、新の姿、エンペラーフォームが現れた。

「おいおい、本気かよ!!」

「そうや。時間かけてもええ事ないからな、これで終いやで。」

キバはそう言って、左腕のタツロットの背中を引っ張った、するとタツロットの中心部が回り、赤いマークがそろった。

「ちっ、こっちも、これで行く!!」

FINAL FORM RIDE KUUGA ULTIMA
TE!!

Dクウガはドライバーにカードを装填し、体全身が黒く角が4本ある、アルティメットフォームに変身した。

「そっちも本気、こっちも本気、ええ勝負になるかもなあ!!」

『ウエイクアップ・ファイバー!!』

FINAL ATTACK RIDE KUUKU
UGA

キバとDクウガは同時に必殺技を発動、二人は飛び上がると、キバは両足をDクウガは左足を突き出した!!

「うおおおおおおつ!!」

「がああああああつ!!」

二人のけりがぶつかり合うと、キバの両足からは赤い光が翼のようになり何度もDクウガの左足を突き刺していき、Dクウガは左足にまとつている炎が、より一層燃え上がった、そして

「がはっ!!」

「うがあっ!!」

一気に爆発、二人はそのまま地面に落下し、地面に体をぶつかると変身が解除された。

「くそ……」

「なんちゆう力や……やけどこれで終わるとおもつなよ。」

剣と渡がゆっくりと立ち上がった、その時!!

「何やっとなのやアホオオーツ!!」

「何やってんのよ馬鹿ああああっ!!」

突然、剣は100と書かれたハンマーに後頭部を殴られ、渡はポケエと書かれた、鉄でできたハリセンで頭を殴られた!!

「ぎゃあああっ!!」

「あだっ!!」

剣はそのまま地面に顔面をめり込ませ、渡は後ろに飛んだ。

「何すんやポケエっ!!」

渡は立ち上がるとたたかれた箇所を触れながら、ハリセンを持っている、先ほど助けた女性に向かって叫んだ。

「ボケはそつちや！その人はネオファンガイアからうちを助けてくれたんやでっ！！」

「えっ？そつちやったん……………」

「なんも見てへんのに、喧嘩仕掛けるなんて、あんた王としての自覚たらんのとちやう？」

「なんやと、もういつペン言つてみい！！！」

「何度でも言つたるわ！！王の自覚がたらん言つたんや！！！」

それから渡と、その女性は口論を始めた、一方剣は。

「悪い！！てめえ俺を殺す気かあっ！？」

顔を地面から引き抜いた剣は、ハンマーを持って立っている恵に向かつて叫んだ。

「あんな攻撃、町中で使う、剣君が悪いのよっ！！町が一つ吹っ飛ぶじゃないの！！！」

「威力は落としてはなつたから、大丈夫だよ。」

剣は立ち上がると恵に向かつて笑顔で言った。

「そつなんだ…………じゃあ、早くあの二人の喧嘩止めようよ。」

「ああ、そうするか！！！」

剣と恵はお互いにならずくと、渡達の方に向かって走り、二人の喧嘩を止めた。

「いやあ、ほんま、わるかったな。いきなり喧嘩仕掛けてしもうて。」

やっと喧嘩を止めることができ、4人は、公園のベンチに座り話をしていた。

「じゃあ、自己紹介させていただきますう、うちは赤城涼香といえますう、隣にるのが私の夫で、このキバの世界のファンガイアの王で、うちはクイーンしています。」

涼香はそう言つと軽くお辞儀をした。

「つぎは俺やな、俺は赤城渡！ファンガイアの王で、仮面ライダーキバや、まあ、よろしゅうたのんます。」

渡は笑顔で言つと、手を剣に向かって差し出した。

「俺は宮本剣、仮面ライダーディケイドだ……まあ、よろし

くな。」

剣はそう言っつて、渡と握手をした、その時！！

「渡！！大変だあつ！！」

髪を上逆立てたスーツを着た男が走ってきた。

「次郎！俺のことはキングって呼べって言つたやろお？」

渡はスーツを着た男の方を向いて言つた。

「うるせえ、そんなことより、ネオファンガイアがキャツスルドランを占領しやがつた。」

「しもた、先にそつちを狙つてきよつたか……しゃくない、行くで、次郎！！」

渡はそう言つと、次郎と共に走つて行つた。

「キャツスルドランって？」

恵は涼香に尋ねた。

「うちの城なんよ、ファンガイアの王だけが住むことを許された神聖な場所……そこを狙つてきたつてことは、ファンガイアたちを虐殺する気かもしれへん……恵ちゃん、剣君、手伝つてくれへんか？」

涼香は剣と恵に向かって言つと、二人はお互いの顔を見ると軽く

笑って、

「当たり前だ。」

「手伝うよ。」

と笑顔で言った。

「おおきに、ほな、いこかつ!!」

「おう!!」

「ええ!!」

そして3人は、キャッスルドランのある方に向かって走って行った。

その頃渡は。

「俺の家で何勝手に、居座ってんねん。」

キャッスルドラン内にある、玉座のある部屋で、渡は玉座に座り体が紫の巨大な怪物を踏みつけている、男に尋ねた。

「やつと来たか、3代目のキバであり、現在のキングよ。」

玉座に座っている男はそう言うと、立ち上がり、踏みつけている巨大な怪物を蹴り飛ばした！！

「がふっ！！」

そしてその怪物は渡のそばで倒れると、変身が解け、燕尾服を着た大男になった。

「リキ！！」

次郎は大男の名前を呼ぶと、大男に近寄った。

「次郎、リキ連れてはよう、にげえ、このアホは、俺が叩き潰す。」

渡は静かに言うと、キバットを右手につかんだ。

「変身。」

渡は呟き、キバットに左手をかませ、赤いベルトの中央にキバットをはめ込み、仮面ライダーキバとなった。

「その力を明け渡してもらおう、貴様にキバの力は似合わない、これよりキバはネオファンガイアの王となり、人間とファンガイアを支配する。」

男はそう言って体がカブトムシに似た、ビートルファンガイアに

なった。

「ファンガイアのほこりを失った雑魚がよう言うわ、絶対にこの力は渡さへん、オヤジと兄貴の思いがこもったキバの力は絶対に渡さへんぞ!!」

キバはそう言うと、王家の人間が受け継いできているキング専用の剣、ザンバット・ソードを握った。

「ほざくな糞ガキがあつ!!」

「お前こそ、じゃかあしい!!カブトムシは森に帰れつ!!」

ビートルファンガイアとキバは叫ぶと前方に向かって勢いよく走った!!

その頃剣は……

「きいつけて、門番のファンガイアが負けとるけん、かなり今回のネオファンガイアは強いと思う……」

剣たちはキャッスルドランの通路を歩いており、涼香を先頭に涼香は静かに言った、その時!!

「ふせろつ!!」

剣は叫ぶと、恵と涼香を前に向かって押した、それと同時に窓ガラスが割れ、そこから2つの影がキャッスルドラム内に侵入してきた。

「これ以上は進ません。」

「悪いけど、お前らにはここで死んでもらう。」

侵入してきた2人の男は、剣たちを見て言った。

「あんたらは、ナイトとビショップ……なんでこんなところに居てるんやっ!!」

男を見た涼香は大声で叫んだ。

「クイーン、申し訳ありませんが我々はネオファンガイア側につきことにしました。」

「悪く思っなよ、お姫様!!」

二人の男がそう言うのと左腕を上に見せた、すると突然、キバットバットのようなものが飛んできた。

「なっ!!キバットだと!!」

「なんで!?!」

剣と恵は目を丸くして驚いていた。

「あれは、ネオファンガイア用に開発したキバの量産型や……」

性能はキバより劣るけど、変身者のくせに合わせて調整できるようになった。……だから……。」

「それだけわかったら十分だ、恵、手を貸せ、あいつらをさっさとぶっ飛ばして渡の援護に行く。」

剣は恵の肩に手を置くとディケイドライバーを腰に巻いた。

「ええ!!!」

恵はうなずくと、割れている窓ガラスからアゲハゼクターが飛んできて恵は左手でキャッチした。

「うちも戦う。うちの問題やけん、うちが係わらんとあかんもん。」

涼香はそう言っって左手を翳した、すると白いキバットバットに似た、キバ―ラが現れた。

「何をしても無駄です、ファンガイアはネオファンガイアによって支配されるのです!!!」

「そう言うことだ、諦めるんだな!!!」

眼鏡をかけスーツを着たビショップと、髪をかきあげアンダーシャツのような服を着たナイトはそう言っくと、手に持った量産型キバットバットを右手にかませた。すると二人の腰にベルトが展開された。

「「変身!!!」」

「俺たちも行くぞ！変身っ！！」

「変身！！」

そして、ビショップとナイトは量産型キバットをベルトの中央に入れ、剣はディケイドライバーにカードを装填、恵はアゲハゼクタ―をライダーブレスに嵌め、涼香は、キバ―ラと同時に変身、と言った。そして

K A M E N R I D E D E C A D E

H E N S H E N C H A N G E B U T T E R F L Y

『チユ』

剣はディケイド、恵はアゲハ、涼香は白と紫の色をしたキバに似たライダー、キバ―ラに変身。ビショップとナイトは体はキバに似ているが赤い部分が藍色で、瞳がダークブルーのキバになり、ビショップが変身した方にはチェスのビショップを模した鋭い直刀が右手に握られていて、ナイトが変身した方には、盾とランスが握られていた。

「俺はナイトの方をやる、恵たちはもう一人を頼む！！」

ディケイドはそう言うのとライドブッカーを構えた、そして二人は頷いて武器を構えると3人は一気に走った！！

第一話 『浪花の仮面ライダー』（後書き）

キバ編はギャグで行こうかと考えていましたが、ギャグが書けなかった……。

それなのでいつも通りで……。

キバ編は二話で終了します、そのため文字数が少し長くなりますがよろしく願います。

それと大阪弁を間違えている危険性があるので、間違っている部分があれば指摘してください。時間はかかりますがすぐに直します。

第二話 『キング』（前書き）

キバ編終了です。

第二話 『キング』

「たあっ!」

キャツスルドラン内にある、玉座の間で、体がカブトムシに似たビートルファンガイアが仮面ライダーキバに向かって手に持った巨大な大剣を振り下ろした!だが

「むだや!」

キバはそう言って右手に持ったザンバットソードと呼ばれる剣でビートルファンガイアの振り下ろした大剣を弾くと、懐に潜り込んで、ザンバットソードを両手で握った!!

「とりゃあっ!」

キバは声を上げるとザンバットソードを勢いよく振り、ビートルファンガイアの体を切りつけた!!

「ぐあっ!」

ビートルファンガイアの体からは火花が飛び散って後ろに吹っ飛んだ。

「どしたん?もうこれで終いか?」

キバは、玉座にゆっくりと腰掛けながら言った。

「くっ、さすがはキバ、真の姿でなくても、俺を凌駕するとは・・

・仕方あるまい。」

ビートルファンガイアはゆっくりと立ち上がると右腕を上げた、すると

「なっ!！」

「なに!！」

体全身が黒いキバツトバツトが飛んできた、それを見たキバとキバツトは目を丸くして驚いた。

「変身。」

ビートルファンガイアは静かに呟くと、右手をキバツトに噛ませ漆黒に輝くベルトを出現させるとその中央にキバツトをはめ込んだ、するとビートルファンガイアは漆黒の光に包まれ、光が晴れると、体全身が黒く両肩が鋭くとがり、目が赤く、首には、藍色のマフラーを巻いた、禍々しい姿の仮面ライダーキバが現れた。

「なんや、お前、なんでキバになれるんや。」

キバは玉座から立ち上がると目の前にいるキバに尋ねた。

「これはキバの情報をもとにわれらネオファンガイアが作った、ネオファンガイアのキングの鎧だ。なずけるとしたら……ネオ仮面ライダーキバ、カオスフォームだな。」

「そのままでなんのひねりもない、つまらん名前やで!！」

キバがそう言うのとカオスキバは拳を握りしめた。

「そうか？なら力の方はどうかな？」

カオスキバはそう言うのとキバに向かって一気に走った！！

「くらえっ！！！」

『ウエイクアップ！！』

カオスキバはカオスキバットバットに黒いフェッスルを吹かせると、飛び上がった！！すると右足の脛の部分にある鎖が展開、黒い翼のようなものが展開された。

「キャッスルドランの中でなんちゅうもんうつんや！！これ使うしかないやろ！！！」

キバはそう言うのと赤いフェッスルをキバットに噛ませた。

『ウエイクアップ！！』

「はあっ！！！」

キバは右足を大きく振り上げる、するとキバットがベルトから外れ、右足の鎖を噛み砕いて破壊、赤い翼が展開された。

「これで終いやっ！！！」

キバはそう言うのと左足のバネのみで上空に飛び上がり、右足を前に伸ばし、蹴りの態勢をとった！！

そしてキバの必殺技であるダークネスムーンブレイクとカオスキバのダークネスフルムーンブレイカーが激突！！一気に爆発を起しました！！

その頃剣は……

「やあっ！！」

ライドブツカーソードモードを縦に振り、昔はキバの部下であったナイトの称号を持つファンガイアの戦士が変身したキバに似ているが色が青に近い色で、手には盾とランスが握られているキバの体を切り裂いた！！

「がはっ！！」

ナイトキバは体から火花を散らし、後ろによろめいた。

「どうした？もう終わりか？」

ディケイドはライドブツカーの刃を撫でるように言つと静かに言った。

「くっ、俺をなめやがって、ぶっ殺してやる！！」

ナイトキバはそう言って立ち上がるとキバツトバツトに藍色のフ

エッスルを吹かせた！！

『ウエクアップ！！』

「これでぶつつぶれる！！」

ナイトキバは声を上げると、先端が光り輝くランスを構えディケイドに向かって突っ込んだ！！

「あまり時間をかける気はない……これで終わりだ。」

ATTACK RIDE

ディケイドは何かのカードを装填、電子音が聞こえるが、轟音が鳴り響きその音は掻き消される、そしてその音に反応したナイトキバは足を止めた、その時！！

「うらあつ！！」

ディケイドは一瞬で走り、ナイトキバの体に向かってライドブッカーソードモードを振り下ろした！！

「ぎゃああああああああつ！！」

ナイトキバは声をあげて爆発！！ステンドガラスのようになり粉々に砕け散った。

「……………今の音、気になるな……………行ってみるか。」

ディケイドは静かに呟くとライドブッカーをブッカモードにし

て腰に収めると、目の前にある大きなドアに向かって走って行った。

恵と涼香は……………

「なんなの今の音？」

「玉座の間から聞こえたみたいやけど……………まさか!!!渡!!!」

仮面ライダーアゲハとキバーラは、ビショップと言う、キバの元部下だった男が変身した体の青いキバと戦っていたが、その途中上の階から何かが爆発するような巨大な音が聞こえ、二人は攻撃の手を休め、音のしたほうを見て言った、その時!!!

「なんの話をしているのです!!!相手はここですよ!!!」

ビショップキバはそう言って、手に持ったチェスのビショップを模したような剣を両手で構えるとアゲハとキバーラに向かって走って行った。そして

「女性の力で私に勝てますかな!!!」

ビショップキバはそう言って、二人に向かって剣を突き出した!!!

「女やからって!!!」

「なめないでよっ！！クロックアップ！！」

CLOCK UP

キバラとアゲハはそう言うと、アゲハは後ろに下がりに距離を置く。クロックアップを発動、キバラはビショップキバの剣の先端を弾いた！！

「っ！！」

キバラの握るキバラサーベルは見事ビショップキバの剣を弾き、ビショップキバは剣を後ろに飛ばされ、さらにその反動で反った、その時！！

「うおおおおおっ！！」

アゲハは声を上げながらビショップキバに向かって走ると、アゲハレイピアの鰐にあるアゲハ蝶の翼を展開した！！

RIDERSPEAR

「くらえっ！！ライダーズピア　！！」

アゲハはライダーズピアを発動させ、アゲハレイピアをビショップキバに向かって突き出した！！だが……

「くっ！！甘い」

ビショップキバは先ほど弾かれたものと同じ剣を左手に召喚すると、剣の刃の腹でアゲハのアゲハレイピアの先端を防いだ、それと同

時にクロックアップも解除された・・・いや、アゲ八が自分の意志でクロックアップを解除したのだ。

「危ないところだった、武器を弾き、よろめいているすきに攻撃をするとはなかなか考えたな、だがまだまだのようだ。」

「それはどうかしら？今よ涼香ちゃん！！」

アゲ八は後ろにいるキバーラに向かって叫んだ！！すると

「タイミングバッチし！！ソニックスタップや！！いけええええ
ー！！！」

背中から紫の翼を生やしたキバーラは技の名前を叫ぶと、ビショッ
ッピバに向かって突っ込んだ！！

「クロックアップ二回目！！」

C L O C K U P

アゲ八はキバーラが接近してくることに気がつくとクロックアップを発動、一瞬でビショッピバの背後に回るとクロックアップを解除した、そして

R I D E R S L A S H !!

「ライダースラッシュ！！てやあああつ！！」

アゲ八は閃光の迸るアゲハレイピアを振り下ろすライダースラッシュを、キバーラはキバーラサーベルを相手に向かって突き出すソ

ニックススタッフを同時に放った！！

「ぐがあっ！！」

二人の放った斬撃はビシヨップキバの体を切り裂いた！！そしてビシヨップキバは声を上げると爆発！！ステンドグラスのようになり粉々に砕け散った。

「ふう〜、なんとか倒せたね。」

アゲハはキバーラに向かって言った。

「ほんまありがとう、うち一人やったらなんもできへんかった、おおきにな。」

「そんなの良いよ、兎に角、早く渡君のところに行こ！」

「うん！！」

アゲハとキバーラは同時にうなずくと走った。

「がっ……ぐううう……。」

「どうした？これで終わりか、ファンガイアの王さまよっ！！」

キバとカオスキバが戦っていた玉座の間の中央に大きく穴があき下の階まで見えていた、さらに穴に落ちるか落ちないかのギリギリのところキバが倒れていて、キバの体から火花が散っていた、そしてカオスキバはゆっくりとキバに近寄るとキバの首をつかみ、持ち上げた！！

「ぐあっ！！」

「さて、貴様を殺してからキバとバットは頂くとしよう。」

カオスキバはそう言うと、右腕をキバの腹に向かって突き出そうとした、その時！！

「なめんな！！ラモン！！」

キバは叫ぶとキバットに緑色のフェッスルを吹かせようとした、だが……

「甘い！！」

カオスキバは叫ぶと右腕から赤い光のようなものを放ちキバの右手を撃った！！

「がっ！！」

キバの右腕から血と火花が跳び散る、するとフェッスルを握っていた指が離れ、フェッスルは穴の中に落ちて行った。

「かわいそうだな、お前達はいちいち呼ばないと武器を使えん
だから。」

カオスキバがそう言うのと、光線が飛び出した右腕には銃が握られ
ていてカオスキバはその銃を見ながら言った。

「なめんな言うてるやろ。武器なんかなくてもお前ぐらい倒した
らあつ!!！」

キバは右手を握りしめてカオスキバに向かって突き出した。だが、
カオスキバは無言でそれを受け止めると、キバの右手を勢いよく握
りしめた!!！」

「ぐああつ!!！」

「てめえつ!!! 渡を離せ!!！」

キバツトは声を上げると、ベルトから離れ、カオスキバに向かっ
て突撃した!!！」

「くつ!!！」

カオスキバはキバの右手から自分の右手を離すと自分の周りを飛
んでいるキバツトを勢いよく殴って壁にたたきつけた!!！」

「うあつ!!！」

壁に叩きつけられたキバツトは、目を回しながらそのまま気を失
った・・・そしてそれと同時にキバの変身が解けてしまい、渡は
元の姿に戻ってしまった。

「どうやらキバットバットが意識を失ったことで変身が解けたようだな……これで終わりだ。」

カオスキバは床に落ちて目を回しているキバットを見た後、渡の方を見て言った。そして右腕を握りしめ渡の顔面に向かって突き出そうと、後ろに引いた、その時！！

ATTACK RIDE BLAST!!

どこからともなくマゼンタの銃弾がカオスキバに向かって一斉に飛び出し、カオスキバの背中に命中、それと同時にカオスキバのつかんでいた渡が何かに奪われた！！

「誰だ！！！」

カオスキバは撃たれたところに触れながら、銃弾の飛んできた方を睨んだ、するとそこにはライドブツカーガンモードを構えたデイケイドと渡を肩に抱えたカプトがあり、そのカプトは光に包まれるとデイケイドに戻った。どうやらイリユージョンの効果で分身した、デイケイドがカプトに変身していたようである。

「大丈夫か？渡。」

「剣か……すまん、迷惑かけた……。」

「気にすんな、それよりもお前は休んでろ、あいつは俺が倒す。」

デイケイドはそう言つと渡を壁の方まで連れて行き壁に凭れかけるように座らせた。

「注意しろ、あいつ普通のキバやない……。」

「ああ、わかった。」

ディケイドは、静かに頷くと、カオスキバの前まで歩いて行った。するともう一人のディケイドがマゼンタの光に包まれ消えて行った。

「さて選手交代だ、俺じゃ不満かもしれんがしばらくの間相手してもらおうぜ。」

「世界の破壊者か……面白い、相手にとって不足はない！！行くぞ！！」

カオスキバはそう言ってディケイドに向かって走った！！

「ねえ、この部屋なんなの？」

キヤツスルドラン内の通路を走っていたアゲハは足を止め、そばを走っていたキバーラに尋ねた。

「ただの倉庫やけど、どしたん？」

「なんか変な音したから気になって……」

「変な音？ちよつと開けてみよか。」

キバーラはそう言うとドアを開けた、すると

「もう、出番か？意外と速かったな。」

一人の骸骨のような姿をした怪人が出てきた。

「えつ、あんた誰？」

キバーラはキバーラサーベルを構えて言った。

「しまった、作戦がばれた！！」

「なんのことが分からんけど、好きにはさせへん！！」

骸骨の姿をした怪人はキバーラを見ると部屋の方に向かって走っていき、キバーラはそれを追いかけた！！

「えつ！ちよつと待って！！」

アゲハも2人を追いかけて行った。

「どうした？息が上がってるぜ、ネオファンガイアさんよ。」

「貴様も似たようなもんだろっが……。」

デイケイドとカオスキバは肩で大きく息をしながら言った。

「時間をかけすぎたようだ、これで終わりだ。」

カオスキバはそう言うと黒と金のフェッスルを取り出した。

「！あれは……剣！！それを使わせたらあかん！！ここが吹き飛ぶ！！」

カオスキバの取り出したフェッスルを見た渡はデイケイドに向かって大声で叫んだ。

「何が何だか分からんが、わかった！！」

デイケイドはうなずくとライドブッカーをガンモードにして銃口

をカオスキバに向けると引き金を引いた！！

「遅い！！」

『カオスウエイクアップ！！』

カオスキバはフェッスルをカオスキバットに吹かせた、するとカオスキバの体が宙に浮いた。

「これで終わりだ、消えろ！仮面ライダーディケイド！！」

カオスキバは叫ぶと両足をディケイドに向かって突き出して、そのままディケイドに向かって急降下した！！

「ふざけんな！！負けてたまるかあっ！！」

FORM RIDE KUUGA RISING TITAN！
！

ディケイドは声を上げるとディケイドライダーにカードを装填してクウガライジングタイタンフォームに変身、さらにライドブッカーカードを引き抜き、ディケイドライダーに装填した。

FINAL ATTACK RIDE KU KU KU
UGA

ディケイドクウガライジングタイタンフォームの握るライドブッカーがライジングタイタンソードに変わった、そしてDクウガRTディケイドライジングタイタンはライジングタイタンソードを両手で握ると、縦に振りおろした！！

「うおおおおおっ!!」

「がああああああっ!!」

カオスキバとDクウガRTの放った必殺技は同時にぶつかりあい、激しく火花を散らした、そして『ボカン』と言う、轟音が鳴り響くと同時に周囲は一気に爆発!! DクウガRTとカオスキバは後方に勢いよく吹っ飛び、二人の変身が解除された。

「剣!大丈夫か!!」

渡は足を引きずりながら剣のそばに駆け寄った。

「ああ、何とか生きてるよ。」

剣は静かに言うつとゆっくりと立ち上がった。

「ぐううう……まさか俺の攻撃が破られるとは……」

カオスキバに変身していた男もゆっくりと立ち上がった、するとベルトの中央にあったカオスキバツトバツトに亀裂が走りそのまま真っ二つに割れ粉碎した。

「コピー如きじゃ、ライダーには勝てないみたいだな。」

剣は肩で息をしながら言った。

「仕方がない、まだ時間には早い祭りを始めさしてもらおう。」

男はそう言うとビートルファンガイアに変身した。

「祭りだと？」

「まだなんか、企んどるみたいやな、なにするきやつ!!」

渡が叫ぶと、渡の剣の後ろにあるドアが勢いよく開き、そこから一人の男が入ってきた。

「他の者に伝える、今から町へ行き、すべての人間を殺せ、と。」

ビートルファンガイアが男に向かって言うと、剣と渡は目を丸くしてビートルファンガイアを睨んだ。

「それがお前の言う祭りかぁ!!」

「俺の庭で下手な真似はさせへん!!お前をここで倒す!!」

剣と渡がそう言うと、突然二人の背後にいた男がガラスのように砕け散った!!

「何いつ!!」

ビートルファンガイアはそれを見ると声を上げ驚き、剣と渡も後ろを振り返った。

「じゃあ、下の倉庫におった人たちは、町を襲うために待機していた人たちなんやね。」

「倒しておいて正解だったね、涼香ちゃん。」

すると、ドアのそばには、キバーラとアゲハが立っていた。

「助けに来たわよ！渡！！」

「早くその人倒しましょう。」

二人は渡と剣に近寄ると肩に手を置いて言った。

「くそお！！俺の最高のパーティーを邪魔しやがって！！許さんぶっ殺す！！」

「許せへんのはこつちや！！下らん事でこの町の人々を殺そうとしやがって・・・おまえだけはお天道様が許しても、ファンガイアの王であるこの俺が許さん！！」

「それがどうした！！力のない種属は力ある種属に敗れる！！弱者と強者は一緒に生きられない！！所詮そんな考えは理想なんだよ！！」

「理想でいいじゃないか！理想があるからこそ人はその理想に向かって頑張っていけるんだ、この町だってそうだ、一人の王の理想を町の人々がかなえようとしている。夢のような理想だがそれを実現するために力を使う、努力していく、それができるのが渡だ！！お前には渡の理想は壊せん！！破壊者としてお前の理想をぶっ壊す！！」

剣は、声をあげてビートルファンガイアに向かって叫んだ！！

「ほごくな！貴様は何者だ！！」

「通りすがりの仮面ライダーだ！覚えておけっ！！」

剣はそう言ってライドブッカーからカードを一枚引き抜いた。

「行くぞ渡！！」

「ああ、いつまで寝とるんやっ！キバット！！気張っていくでっ
！！」

渡は剣の声にうなずくとキバットに向かって声を上げた、するとキバットが起き上がり渡のそばまで飛んできた。

「おう！！キバって行くぜえっ！！ギャブツ！」

キバットは渡の差し出している手の甲にかみついた、すると、渡の顔に線のようなものが浮き上がり、腰には鎖が巻きつくくとベルトに変わった、そして渡はキバットを握り、

「変身っ！！」

剣と渡は同時に叫び、剣はデイケイドライバーにカードを、渡はベルトの中央にキバットをはめ込んだ！！するとどこからともなく小さな金色の龍、タツロットが飛んできた！！

「テンション！フォルティッシモッ！！ヘンシンッ！！！」

KAMEN RIDE DECADE！！

タツロットは変身の渡の左腕に張り付く用にひつつく、すると金色の光に包まれ、キバが右腕を振って光を払うと、キバエンペラーフォームが現れ、剣はディケイドに変身、するとディケイドのライドブッカーからカードが3枚飛び出しディケイドはそれをキャッチした。

「お前らは離れてろ、ここからは危険だ。」

ディケイドはカードを見ると、アゲハに向かって言った。

「お前も離れとけよ、涼香。この部屋を吹っ飛ばすような勢いで戦う……」

キバはそう言ってザンバットソードを構えた、キバーラとアゲハの二人はゆっくりと頷くと現在いる部屋の外に行った。

「行くぞ!!」

「おう!!」

ディケイドとキバはお互いの武器を構えるとビートルファンガイアに向かって走り出し、ビートルファンガイアも声を上げて走り出した!!そして

「はあああつ!!」

「やあああつ!!」

「ぬがあああつ!!」

デイクイドはライドブツカー・ソードモードを縦に振りおろし、キバは、ザンバットソードを右から左に向かって薙ぎ払うようにして振り、ビートルファンガイアは二人の攻撃を、出現させた大剣で受け止めた!!だが……

「ぐがあっ!!」

デイクイドとキバ、二人の攻撃の威力が高く、ビートルファンガイアは後ろに吹っ飛ばされた!!

「くっ、このままでは……」

ビートルファンガイアはゆっくりと立ち上がると言って、背中の羽根を展開、上空に飛び上がり外に飛び出そうとした!!だが

「させるかっ!!」

K A M E N R I D E D R A G O N K N I G H T !!

A T T A C K R I D E S T R I K E V E N T !!

デイクイドは声を上げるとドラゴンナイトに変身、逃げようとしているビートルファンガイアに向かって飛びあがると、窓ガラスから飛び出してきた、ドラグクローを右腕に取り付けると、ビートルファンガイアに向かって勢いよく突き出し、ドラグクローファイヤーを放った!!

「ぐわあああああっ!!」

デイクイドドラゴンナイトの放ったドラグクローファイヤーはビ

「トルフアンガイアの体に命中！！トルフアンガイアは体から炎を上げながら、窓ガラスに激突しそのまま外に飛び出すと地面に落下した。」

「すまん、外に出しちゃった。」

「ディケイドドラゴンナイトからは元に戻ったディケイドは下を見ながらキバに向かって言った。」

「そんなことよりはよ追いかけてあいつ倒すで！！」

「ああ！！」

「ディケイドとキバはうなずくと、窓から飛び降りた！！」

「くそ……この俺が簡単に倒されるなんて。」

「トルフアンガイアは静かに言うどゆっくりと立ち上がった、その時、キャッスルドランのあるビルからディケイドとキバが降りてきた。」

「お前の負けだ、諦めろ！！」

「ディケイドはトルフアンガイアに向かってライドブッカー・ソードモードの先端を向けて言った。」

「諦めるだど……俺は絶対に諦めん!!お前らを倒してやる!!この力であつ!!」

ビートルファンガイアは声を上げると、どこからともなく青紫の龍の顔をした、宝玉のような物を取り出した!!

「!!なんでお前がそれをもつとんや!!」

キバはそれを見るとビートルファンガイアに向かって叫んだ!!

「何なんだあれ?」

「あれは、キャッスルドランを暴走させるもんや、いざと言うときにしが使ったらいかん切り札みたいなもんなんやけど……」

キバはデイケイドの質問に静かに答えた、するとビートルファンガイアが羽根を展開、キャッスルドランに向かって飛び、キャッスルドランの顔面に着地した!

「この宝玉は、ある人物に渡されたものだ!!そしてキャッスルドランを暴走させ。貴様らを殺す!!」

ビートルファンガイアは声を上げると、宝玉を砕いた、すると紫色の光の玉が現れビートルファンガイアはそれをつかむとキャッスルドランの頭に向かってそれを押しつけた!!すると

「ギャオオオオンツ!!」

急にキャッスルドランが声を上げた、するとキャッスルドランはデイケイドとキバの方を向き口を開いた。

「あかん！！俺らをテクやおもて攻撃する気や！」

「そんなことさせるかよ！！渡！！ちょっとくすぐりたいぞ！！」

ディケイドはライドブッカーから縁が金色のカードを取り出すとディケイドライバーに装填した！！

FINAL FORM RIDE K I K I K I K I V

A

そしてキバの背中に手を当て腕を回すとキバの体が宙に浮き、巨大なキバツトバットの顔になり、その先端にはタツロットがあるエンペラーキバアローへと変わった。

「さあて、行くかあっ！！」

FINAL ATTACK RIDE K I K I K I K I V A

ディケイドは、そう言ってディケイドライバーに金色のキバのマークがあるカードを装填すると、エンペラーキバアローを握ると弓を引いた！！

「キバって行くぜえっ」

エンペラーキバアローがそう叫ぶと、タツロットの先端から赤く光り輝く矢が飛び出した！！そしてそれと同時にキャッスルドランからも紫色の閃光が飛び出す、だがディケイドの放った、ディケイドエンペラーファンングがキャッスルドランの閃光を貫いた！！そして

て赤い矢はキャツスルドランの上に乗っていたビートルファンガイアに命中！！ビートルファンガイアを後方に勢いよくふっ飛ばし、ビートルファンガイアは宙に浮いたまま爆発！！空にはキバの紋章が浮かび上がった。

「終わったな……。」

デイクイドはそうつぶやくと、エンペラーキバアローを放り投げ、キバに戻すと、キバはそのまま着地、そして二人は変身を解いた！！

「これで何とか危機は回避したな……。すんまんかったな剣、助けてもろて。」

「いや、気にするな、それにたぶんあいつが暴走したのは俺のせいだから……。」

剣は空を見ながら静かに呟いた。

そのあと剣は恵と合流し、この世界から離れることになった。

「ほんまに助かったありがとな剣！」

渡は剣に向かって言うと、剣は軽く笑い。

「気にするなと言っただろ？ 仲間を助けるのは当然だ。」

「仲間か……そうやな、仮面ライダーは仲間やな……」
剣、これからもいろんな世界で気張れよ。」

「ああ、渡も、王として頑張って行けよ。」

二人はそう言ってお互いの腕と腕を合わせた。

「恵ちゃん、これでサヨナラしてしまうけど、家のこと忘れんといてよ。」

「忘れないよ、一緒に戦った友達だもん！」

「そっか、じゃあ、これからも頑張って!!！」

「うん涼香ちゃんもね!!！」

恵と涼香は両手をお互いに握り、別れを言うと、二人はバイクシヨップの中に入った。

「よう、いろいろお疲れさん。」

バイクシヨップに入るとそこには翔がいた、翔は何か箱のようなものを持っていたが剣たちが来るとそれをしまった。

「お前、何してたんだ？」

「この世界においてある、大事な宝物を取りに来てたんだ。」

「宝物……『あれ』のことだな？」

「ああ、『あれ』だ。」

剣は翔が手にした宝物のことを知っているようだが詳しくは聞かず、そのまま椅子に座った。

「次の世界はどこだろうな……………」

「さあな、行ってないのは、アギト、ブレイド、響鬼。」

「電王、ダブルにオーズ……………」

剣と翔は静かに言うと、悲しそうな表情をした。

「そして、『あの』世界だな。」

「ああ。」

二人は静かに言うと、そのまま黙ってしまい、静かな空気が流れた、その時！！

「あつ！見て写真が変わったよ！！！」

今の空気に耐えきれなくなった恵は、額の中の写真を見たと
中の写真が光を放ち、写真が変わり、恵はそのことを二人に向かっ
て言った。

「！次は……………」

「電王か……………」

剣と翔は写真を見ると、砂漠のようなくところを電車のようなものが走っていた……。

第二話 『キング』（後書き）

次回は電王編です。お楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7245t/>

Another Masked Rider DECADE

2011年11月13日13時59分発行